



# アルベルチーナの春愁



—青潟大学附属シリーズ—  
中学編  
第三シーズン 1

舞夜じよんぬ

お姉ちゃんと『アルベルチーナ』で会う約束をしている。さっさと教室から出たくて、紡（つむぎ）はずっと時計を眺めていた。腕時計は持ってきていない。お姉ちゃんのくれたアンティーク時計がもう壊れているし、安物なんて使いたくない。

「先生がいない時だからこそ、これから考えなくてはならないんじゃないでしょうか」

いつもながらヒステリックなお言葉。耳がぎんぎんする。周りの連中も退屈そうにあくびをしている。教壇で懸命にがなりたてているのは、教師と呼ばれる人種ではない。ただの同級生。たまたま『評議委員』といわれてのぼせ上がっている彼女ひとりだけだ。

「この前の期末試験でも、A組は学年で平均以下の点数しか取れなかったって言われました。体育大会でも、カルタ大会でも、合唱コンクールでも、いっつもそうです。これから三年になるにしたがって、私たちはあらためて、A組としてのプライドを持たなくてはならないと思うんです。違いますか！」

——振られたばかりだからって、こっちに矛先向けなくたって、いいじゃない。

嫌い、というだけの関心は持っていない。むしろ、目障りなだけだ。

紡はポケットから一作、文庫本を取り出した。名刺代わりにいつかちらっと見せつけてやろうかと思うのに、チャンスがない。フランソワーズ・サガンの「悲しみよ、こんにちは」。試してみようと思ってすぐにやめた。このクラス、学校内で、サガンなんて読んでいる奴がいるわけがない。なによりも、紡のことを「セシル」って呼ぶのはお姉ちゃんだけだ。

西月（にしづき）さんが教壇の上でわめき散らしている間は、まだ教室から出られない。もう少しで終業式。どうせ持ち上がりのクラスなのだ。わざわざクラス全員を残して、貴重な放課後を浪費させることはないだろうに。彼女言うには三年進級の前に、どうしても話しておかなくてはならないことなのだそう。

「そりゃあ、確かにA組って、他のクラスに比べて団結力弱いなあって思います。球技大会の時だって、他のクラスが自主練習始めたり、中には朝連なんかもしているところだってあったのに、どうしてでしょうか。去年だって、私たち評議委員や体育委員のみんなが頼んでやっと動き出したなんて、やっぱりみんなやる気ないんだと思います」

——やる気あるあなただけでがんばって。

紡だけではないらしい。退屈しているのは。斜め前の女子はノートを千切って、手紙を書き始めた。前の席で伸びをしている男子は、持ち込み禁止となっているゲームウォッチを取り出し、ぴこぴこボタンを押してよろこんでいる。男子って単純なゲームが好きなのだろう。あほらしい。

「近江（おうみ）さん！ちゃんと話、聞いてください！」

今度は紡に矢が放たれた。手紙やゲームウォッチは見慣れた光景だからかまわないのだろうが、文庫本……しかも大人の読むような本……をめくるなんて、めったにないことなのだろう。西月さんにもたぶん、理解不能なんだろう。誓ってもいい。西月さんはサガンの名前も「悲しみよ、こんにちは」も知らないだろう。

「聞いてます」

あまりとんがった声で返事するとさらにつけこまれる。適度に気持ちよく答えるよう勤めている。波風は面倒だし立てたくない。

「いつも思うんですけど、近江さん、もう少しクラスのことについて、真剣に考えてみようとは思わないんですか！ いつも、A組の人間は馬鹿ばかりだとか、頭悪いとか、そういわれていることくらい、わかっているんじゃないですか」

ため息を隠せないのはまだまだ未熟。自分に舌打ちしつつも紡は答えた。

「別にいいんじゃないですか」

——私には関係ないもの。

一番の本音まで言ってしまうとしゃれにならなくなる。紡は本をポケットにしまった。自衛自衛。

「よくありません！」

紡の読みは外れた。西月さん、正義に燃えると見境なくなる人だと思っていたが、まったくもってその通り。くそまじめっていうのは、決していいことじゃないと紡は思っているのだが、世の中は西月さんのようなタイプが評価高いのだからわからないものだ。

「近江さんも考えてください！ この前、私、他のクラスの人に何気なく言われました。『A組は、どうせコネ入学のクラスなんだから、ばかでも当然だよな』って。みんな、誤解されているんです。青大附中がコネなんかで生徒を集めるわけがないのに、どうしてみんな、勝手にそんなこと思い込むんでしょうか。みんな実力で入ってきたのに、いわれのない誤解と偏見で、私たちのプライドはずたずたです。みんな、A組に入ってから、みな一度は経験しているはずです。A組はコネの集団だとか、インチキ入学者だとか、さんざん悪口言われているはずですよ。ひどすぎます」

——ほんとのことだもの、しょうがないじゃない。

うんざりした。こんなくだらない議論で、お姉ちゃんと語る時間が奪われるのはうんざりだ。他の生徒たちを窓際、前、後ろと、動かない程度に観察してみる。みな、西月さんの話なんか聞いちゃいない。一部、シンパと思われる連中が頷きあっている程度だ。こういう話を、なぜ担任の前でしないのか？ たぶん、本当のことだと認められるのが怖いのだろう。コネクラス二年A組。本当のことなんだから、素直に認めれば楽なのにだ。

そんなこと、どうだっていいし、本音を言えば、だからこのクラスの奴らは頭が悪いのだと思う。紡の知っている限り、資産家のお坊ちゃんお嬢さまが五人くらい、有名なピアニストの血を引く息子さんがひとり、なんらかの事情で失脚している元政治家の子どもがひとり。その他、かなり細かいコネを使って入学していることを知っている。別に入学してしまえば同じなのだろうが、学力試験をいかにげんにしまったゆえに、どうしても学力の差が出てきてしまうのは、しかたないことだと紡は思う。唇がほころび、くしゃみを一発。悪意はない。

「近江さん！」

「すみません。もうそろそろいいですか」

耳もとのほつれ毛が乱れていた。軽く髪のを整えた。

「これから用事があるので、特に問題ないようでしたら帰ります」

「待ちなさい！ まだ話し合いは終わってません！」

「別に話し合うことないんじゃないですか？」

立ち上がると、またひとり、腰を浮かす男子がいた。同じく評議委員の天羽くんだった。かなりおちゃらけ好きの兄ちゃんだが、男子たちからの信頼は厚いらしい。真剣に討議に参加するよう求められたら、西月さんよりは交わしづらそうだ。決して紡もけんかを売りたいとこういことをしているわけではないのだから、少し迷った。でも言っておいたほうが、あとあとすっきりするだろう。

「コネの問題だったら、みな分かりきっていることだから、話し合っても無駄でしょう。私なんて究極のコネ入学だし、それはみんな知っているでしょう」

「なんで、そんな言い方するの！ そんな、誰も近江さんのことをそんな言い方してないでしょ！」

みんな知っている、堂々たるコネ。

自分が使いたくて使ったこと。責任もってやったこと。だから後悔してない。

「これから待ち合わせなので、お先に」

天羽くんと眼を合わせた。丸顔にいがぐり頭。三月にいきなり頭を丸めた時は、何か事件が起こったのかと期待したのだが、たいしたことない。付き合っていた相手と別れたらしい。責任を取ったってことらしいが、冬場にそんなことすると風邪を引くだけじゃないかと紡は感じていた。実際、一週間くらい寝込んでいたらしい。

「そうだな、俺たちも近江ちゃんの意見と同じだ。ってことで、今日の問題提議はまた、みんなが時間ある時にしよう。これは俺の意見だ」

最後の一言は、あきらかに西月さんへのあてつけだった。周りの女子たちが少しキー高めに、天羽くんと紡への悪口をささやき出していた。悪口をきにしない性格の紡は、なんでもない。でも気にしてしまうタイプの難波くんは腕を組んで立ちんぼうのままだった。

「ちょっと待ってください！ まだ話は終わってません」

「俺が二年A組の評議委員として、終了を要求する！」

——ここまできっぱり嫌いになれるってのも、すごいわね。

関係ないことを感心して、紡はありがたく教室から退出させていただいた。女子たちの悪口は、対象になる相手が消えるとその倍増えるもの。いつものことだけれども、ああいうタイプの女子たちと付き合うのってエネルギーが本当に要る。こういう時は、ほんとに好きな人と会って、気持ちよくしてもらうのが一番だった。廊下から見える梅のつぼみに目を留め、咲きかけの花ひとつ、手のひらに乗せた。

——お姉ちゃんにこれ持って行ってあげようかな。

紡に続く奴は誰もいなかった。A組の連中はまだ、西月さんの命令のもと、答えの出ない議論に突き合わされているらしい。ご愁傷様でした。

青潟大学附属中学の入試試験は、表向き筆記試験と面接のみで合否が決まるとされている。実際それは否定しない。青潟市内の優秀な小学六年生からさらに選り抜くのが当然だろう。たぶんほとんどの人はそれを信じているだろう。なにせ青大附中生というのは、無意識のうちに「優秀な生徒」という目で見られるし、親の自慢にもなる、紡も何度か、母の鼻高々な顔を見たことがある。近所の人たちには「うちの娘、青大附中に通っているんですけどね」という前置きが、かなり強烈に響くらしい。

だが、と紡は思う。

実際中に入ると、隠してきたことも簡単にばれるものなのだ。

クラス分けでこうも露骨に、縁故入学者がまとまるように構成するのはいかなものかと。きっと周りの人たちが黙っていることを期待しているんだろう。子どもだから気付かないと思っているのだろう。とんでもない、紡は入学式当日から、A組というクラスが大人たちの安易な発想で組まれたところなのだと感じてしまった。十二歳の子どもにすらそう思わせる学校側のいい加減さに、肩を竦めなくなった。

入学後すぐに行われる実力試験から始まり、他クラスと比べてレベルの低い授業。進度が遅すぎて結局終わらないことの多い教科書。自習の多さ。どれひとつとってもうんざりだ。もちろん自分で勉強している人も多だろうし、塾に通っている比率は他クラスよりも高いだろう。噂によるとD組は学年平均を少し越える程度のランクだが、ひとりひとりの科目別順位が相当高いという。B組はガリ勉主義担任の影響も大きいのだろうが、みなが必死に宿題と格闘し、四クラス中一位の学年平均点を保っている。女子のミーハー振りが目に余ると呼ばれるC組も、やる時はやる。体育大会、球技大会、その他女子の応援団が活躍する場面では圧倒的な強さを誇る。

——担任に似るのよきっと。

細面の、めがねをかけて倒れそうな顔の狩野先生は、クラス運営に関心があるのかどうかかわからない。激怒したり体罰を与えたりしたところを見たことがない。ただ最低限の注意をし、礼儀を重視する程度。こちらから質問を投げかければそれなりに返事は返ってくるが、それだけだ。数学科なのになぜ、白衣を着て行動するのか、その辺も謎だ。ただ、意外なのはクラスから弾かれた生徒たちには異様に人気があるらしい。一応、既婚者なのにだ。紡には理解できない。自分でドロップアウトしたのだから、自分で責任を持て、と言いたい。甘ったれるな、と。学年で二年の夏休み後、女子が退学したけれど、その子のクラスがA組だったというのが噂に輪をかけたのだろう。

——やっぱり「コネ組」A組だもんね。

否定はしない。西月さんが騒ぎ立てるように

「A組って、誰かの紹介で合格した奴ばかりなんですよ！」

と聞かれることが多い。悪意はないからうんと頷くことが多いが、それ以上誰も突っ込んでこないで説明しない。

——いいじゃないの。コネで結構。あとは何も考えないでエスカレーターに乗っていけばいいじゃない。

そう言ってやりたいけれども、たぶん反論が返ってくる。女子には決して言わない。

「だって、近江さんは、コネがあってもなくても成績がいいから文句言われぬのよ。他のA組の子なんて大変なんだからね。ちょっとしくじったくらいで、すぐに『やっぱりコネ組だもんな』って言われるのよ」

——だから、こういうばかげたクラス構成を行う学校側に問題があるんじゃないの。

どうでもいい。紡はただ、自分の成績をある程度よくしておいて、親に文句を言われぬ程度に勉強しておけばいいだけのこと。難しくない。青大附中に入った目的はひとつだけ。

——お姉ちゃん、もう来てるかな？

伸びかけた前髪に、ムースを塗ってつんつんにしてみせた。こうすると、お姉ちゃんの大好きな「セシル・カット」風に見える。実際どんなものか紡も見たことはないけれど、お姉ちゃんのご機嫌になるのだけは確か。駅まで自転車を漕ぎ、コインロッカーに制服を詰め込み、公衆トイレの中で黒いニットのワンピースに着換えた。シルバーのネックレス……お姉ちゃんから十四の誕生日にもらったもの……を首からかけて、白いリップを塗った。赤いよりも真珠っぽく見えるほうがいい。似合う。

手鏡の中で口角を上げてみる。切れ長のきつねっぽい瞳が、ずうっと大人っぽく見えた。お姉ちゃんはきつと、ふわふわ可愛い感じでまとめてくるだろうから、バランスも取れてちょうどいい。今日はお姉ちゃんの恋人だ。コインロッカーの鍵を定期入れの中に押し込み、紡は駅を出た。まだ寒い。

まだコートがほしい時期だった。黒の集団の中で、ひとり光っていたかった。

喫茶『アルベルチーナ』に通い詰めたのは、小学校五年の頃からだった。今ではもう常連だ。

初めて連れてこられた時、母に内緒でそろえたという黒尽くめのフリルドレスを纏った姉の異様さが怖かった。一緒にいる紡の髪型があまりにも姉の服装に似合わなさ過ぎる、という分かりやすいことにも気付いて、震え上がりそうだった。

——それがいまではこうだもんね。

ひとりで通うのも平気。下手したら補導されるかもしれない。それでも平気で放課後、紡は『アルベルチーナ』に向かった。青潟駅からちょうど離れた一軒家だった。ちょっと小じゃれた民家にしか見えない。よくよく覗き込めば、茶色いペンキの上に『アルベルチーナ』とフランス語で綴られているらしい。フランス語を読めない紡には関係ない。意味は、お姉ちゃんをはじめ、分かる人にはぴんとくるらしい。

「セシル、こっちよ」

やはり、今日も全身黒尽くめのフリルワンピース姿だった。甘ったれた口調は結婚前より変わらない。

「さ、今日は学校で何があったのか、教えてね！」

——話してほしいのは、お姉ちゃんの方よね。

襟足だけが妙に細くすんなり伸びている自分の髪の毛。下手したらいがぐり坊主の髪型になりそうなところを、前髪と耳もとの不ぞろいな伸ばし方によって「女」っぽくみせている。髪を伸

ばしても悪くはないだろう。でも、髪型を替える気はいまのところ、さらさらない。

——お姉ちゃんに似合うもの。男役だもん、今の私だったら。

身体にぴったり添ったワンピースを滑らせて、紡は姉の待つソファへと向かった。昼間のせいか、他のお客さんはいないらしい。店のお姉さん……おばさん、という言葉は部屋の中に置いて厳禁である……が、紡にジンジャエールを持ってきてくれた。もう三年近くも通っているのだから、完璧に紡の好みを覚えられていたとしても不思議はない。

「ねえ、セシル、今日も学校つまらなかったの？」

くねくねしながらお姉ちゃんは、ノンアルコールビールを口にしながら紡の右手を取った。爪の先を撫でて、

「マニキュアしてるね」

「エナメルだけ」

学校にはばれない程度に爪を磨いている。形もひっかくことができるくらいに整えたいのだが、いかんせん中学二年、これ以上は限界だ。

「高校に行ったら付け爪するから」

「OK、私が教えてあげるね」

——お姉ちゃん、うちにいたら手と足の爪、全部してもらえたのに。

紡はさらにジンジャエールをすすり、足を組んだ。男役の心意気だ。

隣りでお姉ちゃんがふわふわに膨らませた髪を後ろに結ぶようなしぐさをした。お姉ちゃんが結婚するまでは、両親がうるさくていつも大人しい髪型にしていた。それでも紡とふたりで出かける時は、ちゃんと近所のスーパーイレでおめかしし直していた。

——『あの人』も、まだ知らないんだわ。お姉ちゃんの秘密。

お姉ちゃんの結婚相手はきっと、黒いレースふりふりのドレスをお姉ちゃんが着て歩いていることを知らないのだろう。せいぜいピンクのかわいらしい格好しかしていないと思っているのだろう。騙されているのだ。馬鹿だ。今更とはいえ、紡は罵倒しまくりたかった。

「あーあ、それで、最新情報はなによ」

スタイルとしては大人っぽく決めた以上、お姉ちゃんの彼氏風に決めたい。

「ほらほら、しょうがない。あのね、セシル。今年に入ってからあの人、『E組』の担当になったって知ってる？」

「E組？」

知らない。青大附中生の自分が知らない。第一、クラスは全学年、D組までだ。四クラス。

「全学年トータルで集めた『E組』っていうのを作るんだって言ってたわよ。学級でもてあまされた困ったちゃんたちを集めて、定期授業をおこなうんだって。最近、青大附中も大変みたいだもんねえ。セシル、あんたもよおくその辺は知っているんでしょ」

「『あの人』から聞いた通りよ。お姉ちゃん」

——『あの人』とお姉ちゃん、毎日、することしてるんだろうか。

信じられない。今日の前にいる、黒尽くめの女が、『あの人』は自分の奥さんだと気付くだろうか。『アルベルチーナ』に通い詰め、ふたりでこっそりデートしているなんて、きっと知らな

いだろう。『アルベルチーナ』が喫茶店兼、女性カップルのみのデート場だなんて、きっと想像もしていないに決まっている。

「頭の悪い人ばかりだと、疲れるわ」

ほんとはいい女だったら、煙草をくゆらせるのだろう。それとも思いっきりお姉ちゃんの肩にもたれて、甘ったれた眼を向けるのもいい。「セシル」……三年前、いがぐり坊主ぎりぎりの髪型に美容院で仕立ててもらった。最初はショックだったし泣いてしまったけれども、お姉ちゃんの心には叶ったらしい。お姉ちゃんの愛読書「悲しみよ、こんにちは」の主人公から取ったものだという。紡も一応、名前の由来を知りたくて読んだけれども、フランスの生活とかやたらお金持ち風の世界が鼻についてしかたなかった。お姉ちゃんが言うには、「悲しみよ、こんにちは」が映画化された時、「セシルカット」という、紡の髪型が非常にはやっらしい。リアルタイムで見ているわけではないけれども、それを信じることにした。セシル、いい名前、気に入っている。だいぶ髪の色が伸び、セシルカットよりも女の匂いが強くなった今でも、やっぱり紡はセシルと呼ばれたかった。フランソワーズ・サガンに敬意を表して、毎日「悲しみよ、こんにちは」を持ち歩いているのはそういうところに理由あり。

「ふうん、セシル、どうしたの。なんか疲れてるわよ。もっと近寄って、ね、前みたいに」

——そんなことないと思うけど、『あの人』に、私がしゃべったことみんなばらさないでしょうね。

ふと不安になる。絶対、きっと、ありえないと信じたいけれど、お姉ちゃんの口の軽さと来たらすさまじいもの。秘密は絶対に話せない。問題の無いところ、およびばれてもかまわないところまで取り捨て選択しなくてはならないのが面倒だった。

——まあいいか。なるようになるわ。

黒いフリルをつまみ、紡はそっとお姉ちゃんの腕に掴まった。頬ずりしてくれた。お姉ちゃんと一緒に住んでいた頃は、毎朝夜、両親に隠れてこっそり、こんなことやあんなことをしていた。普通の姉妹としては、かなり濃密なことだった。おやすみのキスも欠かさなかった。たまには抱き合って眠ったこともあった。人と比べたことはないけれども、紡には自然なことであっても他の女子にとっては想像を絶することらしいので言わないだけだ。

「お姉ちゃんに前話したでしょ。最近ね、うちのクラスで騒ぎになっていることがあるのよ。なにせうちのクラスA組だから」

『A組』。力をこめた。

「ああ、あのことね」

頭を数回撫でまわし、紡は猫の気分でさらに頬を摺り寄せた。

「A組がどういうクラスか、本人以外の誰もがみんな知っているのにね。馬鹿みたいよ。大真面目に『私たちはA組の名誉を守りましょう！ 馬鹿にされないようにがんばりましょう！』って叫ぶ評議委員の女がいるの。ほんとうっとおしいっらないわ」

「嫌いななの？」

「そこまで関心持ってないわ。むしろ、視界に入れたくないからさっさと帰りたい、それだけよ。お姉ちゃんにも悪いし。知らん振りするようにしていたのよ、これでも」



三十分前の出来事を思い起こす。腹は立たなかった。ただ春の生暖かさに似たねとっとした感触ががまんできないだけだった。本当だったら、さっさとエスケープしたいところなのだけど、お姉ちゃんのためにはそれもできない。

「セシルね、そういうところがやっぱり、鋭いわ」

「でしょ、でねえ、お姉ちゃん。今日もその女が叫び始めたもんだから、私だけ黙って聞いていたのね。そうしたらいきなり、私を指名して、『近江さんはどうしていつも無関心なんですか！』って罵り出したのよ。ばかね、って言ってあげたかったけど黙ってたの」

「どうして黙ってるのよ。そんな奴、言い返せばいいじゃないの」

「だって、面倒」

——お姉ちゃんはどちらの味方なのだろう？

結婚する前だったら紡も判断できただろう。無条件で紡の味方でいてくれると信じられただろう。でも今は、『あの人』の側で眠り、食べ、抱き合っている。信じられないけれども、そうしているはずだ。

だから、これ以上のことは話さない。一緒に暮らして三年。一緒に暮らして十年。紡の方がずっと、お姉ちゃんの好みと嗜好も理解しているつもりなのだけど、どうしてもできないことがあり、それを男たる『あの人』に任せることになる。

——私が、他人で、男、ううん、女でお姉ちゃんの好みだったら。

叶うわけのない夢。三年前にあきらめたはずの幻だ。

——私、一生、お姉ちゃんと一緒に暮らすの！ 親から離れて、ふたりっきりでね。

小さい頃の幻を、ここまで引きずっているなんて。仲良し姉妹の幼い思慕と割り切っているのだろうか。

——だから、言わない。お姉ちゃんにはここまでしか言わないわ。

紡がいることを許される時間は過ぎた。

「お姉ちゃん、そろそろ家に帰らないの？」

いくら『あの人』が仕事忙しいとはいえ、夕飯時には帰らないとまずいだろう。別に帰らなくたっていいのよ、という台詞を期待してもいたけれど。

「ううん、大丈夫。セシル、今日のことお母さんには内緒よ」

「言うわけじゃない」

——共通の敵だもの。

口の軽い姉が唯一、決して秘密を漏らさなかった相手。

三年前まではいつも、どうやって親の眼をごまかすか、どうやって本当の気持ちを隠しつづけるか、ふたりで作戦を練っていた。十二歳違いの姉妹。実の母よりもずっと、お母さんらしいお姉ちゃん。初めての生理が来た時も、決して母には打ち明けずに姉に告白した。どうやって、母に隠しとおすか。知られたら「お赤飯炊きましょうね」と言い出すに決まっている。そういう恥ずかしい行為をさせないで、すべてをさらりと流し、終わらせるか。お姉ちゃんは裏道をたくさん知っていた。

三年前まではお姉ちゃんのすべてが、紡のものだった。

唇も、フリルに覆われた胸もともすべてが。

——『あの人』が、みんな奪ったんだ。

——私のお姉ちゃんを、何もかも。

紡が唯一、願いたいことは、

——お姉ちゃんの本当の秘密を、『あの人』が知らないでいること。

ふたりと入れ違いに、もう一組の女子カップルが入ってきた。近くの高校生だろう。女子商業高校の制服で、紺に白いスカーフ、似合っていた。

「あの二人、きっと、そうね」

お姉ちゃんのささやきに、紡は思いっきり耳をくっつけ、腕を絡み合わせた。誰もが男と女、くっつき会うわけじゃないのだと、教えてくれたのはお姉ちゃんだった。

——セシル、あのね。

初めて「アルベルチーナ」に連れてこられた時、紡はまだ十一才になったばかりだった。

——私、ふつうのお嫁さんにはなれないかもしれないわ。

就職したばかりで、きっと不安定だったのだろう。やさしいお姉ちゃんがいきなり、耳もとにささやいた。ちょうど今のように。春の夕暮れ時、風が時折強く吹き、黒いワンピースが膨らむのを抑えながら。

——だって、私は、男の人よりも女の子の方が好き。今だって、セシルとこうしている方がいいんだもの。

人気のない公園で、いきなり紡を抱きしめた。いつも甘えてだっこしてもらっているのとは違う、重たいだっこだった。

、 ——こうされても、セシルにだったらかまわないって思うのにね、今付き合っている人とだと、想像できないのよ。私。

当時、お姉ちゃんが付き合っていたのは『あの人』ではなかった。『あの人』とは、見合いで出会った。一緒に写真を見た段階でつき返すだろうと思っていたのに、どうしてか縁談はとんとん拍子でまとまり、紡が泣き顔で映っている結婚式親戚一同写真が残ってしまったわけだ。一生の不覚！

——ねえ、お姉ちゃん、キスするのもいやなの？

——セシルとだったら平気なのにね、どうしてだろうね。

そんな会話が交わされた後、すぐにお姉ちゃんは当時の彼氏に会って、別れを告げたらしい。詳しいことはさすがにお姉ちゃんも教えてくれなかったけれども、相当修羅場があったらしい。いつもはふわふわりんとした桜色のワンピース姿で、いかにもお姫様風のお姉ちゃんが、自分で別れ話を持ちかけたのだから、簡単には決着つかなかっただろう。

——お姉ちゃん、もしかして、レズなの？

本で読みかじった知識を総動員し、紡は尋ねた。

——うん、きっと、そうなのかもしれない。

十二歳下の妹に打ち明けるしかなかった状況、紡にも分かる。両親がそういう異端の感覚を受け入れる人でないこともわかっている。お姉ちゃんの友だちにそういう嗜好を理解してくれるような奴も、きっといなかっただろう。

たった一人、自分だけなのだ。

セシルカットで、一見、少年の姿を持つ自分。

——お姉ちゃん、私は、お姉ちゃんのことを一生好きでいるつもり。私は、お姉ちゃんと一生一緒に暮らしたっていいよ。だって、私も。

その時、時計の針みたいなものが、胸の奥でぴくんと動いた。「12」の文字盤の上。ぼんぼんと、鐘も鳴った。

「私も、男のことを好きになんて、絶対にならないから」

約束した三年前。なのに、舌の根もかわかぬうちにお姉ちゃんは、すぐにお見合いして『あの人』の妻になってしまった。お姉ちゃんがどうしても着たかったという、有名ブランド……フリルがいっぱいのドレスだった……をまとい、無表情な『あの人』の側に寄り添い、微笑んでいた姿。あれはどうみても死装束。姉への花束贈呈を意地で拒否したのに、当日になって無理やり母に説得され、花束贈答をさせられた。本当だったら『あの人』を花束でぶんなぐってやりたかった。そうするためだったら真っ赤なとげつきの薔薇を持って行ってよかった。でも結局できたのは、花束を押し付けたまま、式が終わるまで泣きつづけることだけだった。

「紡ちゃん、大切なお姉さんをもらってしまって、ごめんね」

『あの人』が何度も、細いめがねを外した顔で、頭を下げてくれた。

お姉ちゃんの好みとは全然違う、陰気な感じの男だった。

ほそこくて、太陽の陽射しの中で解けてしまいそうなミルクキャンディー。さっさと解けて、消えて掃除してしまえ！

一週間泣きつづけ、『あの人』をのろいつづけた挙句、紡はひとつ、決断した。

同じ春の嵐が吹く夜に。

「あっ！ 迎えにきてくれたんだ！ 皇人さーん」

——まさか、迎えになんて！

お姉ちゃんはやっぱり口が軽い。大好きなお姉ちゃんだけど、たった一つ許せない、もしくは信じられないのが、秘密を守れない体質だ。紡は真っ正面から、軽く手を振って近づいてくる、黒い人影を見据えた。お姉ちゃんの腕に巻きついている鎖型の時計を覗き込む。五時半過ぎだった。まだ仕事あるんじゃないのか、終業式近いっていうのに。

「じゃあね、セシル、また電話ちょうだいね」

駆け寄っていく姿は、ふつうの「男を好きな女」にしか見えなかった。一度、丁寧に礼をした。もうお姉ちゃんの腕に手を回して甘えていた、五十メートル前の自分ではない。さらに近づいてくる姿、ふたりが肩を並べている姿。紡は全身、無気力の優等生に仮面を切り替えた。

「紡ちゃん」

銀縁めがねの、ほんの少し背の高い『あの人』。

いつも白衣姿で行動している数学の教師だった。

教室でもほとんど、必要事項しか話さない、波のない口調。お姉ちゃんと紡だけがいる時、たらんと言葉がやわらかくなる。今ここにいる三人しか、知らない『あの人』の言葉遣いだった。

「今は先生です」

「いいよ、かの子といる時は僕も紡ちゃんの担任じゃない」

教壇の上から見下ろし、朝の挨拶や連絡事項をたんと述べている『あの人』。

教室の中では、周りのみな知っているぞ、という視線を無視して、窓の外を眺めていた。そんな事実ないかのように。

「ねえ、セシルったら、もう。不器用なんだから、もう、お、と、し、ご、ろ？」

打って変わって、お姉ちゃんの口調は母にそっくりになる。お姉ちゃんだって大嫌いな人。どうして『あの人』の前だと、お姉ちゃんは紡の苦手な人にはや代わりするのだろう。

「それでは失礼します」　こくともう一礼した後、紡は背を向けた。帰りの会で、全員が評議委員の号令にあわせて、礼をするのと同じ形だった。呼び止められた。

「紡ちゃん、学校では先生でもいいけれど、かの子の前ではその呼び方、考えてもらえないかな」

「わかりました」

声を背中で跳ね返し、紡は振り向かず歩きつづけた。銀縁めがねの『あの人』が、今どこまでかぎつけているのかはわからない。これから多かれ少なかれ、クラスでの大騒ぎが始まることだろう。そんな紡が知ったことではない。黙って受け流し、評議委員の騒ぎたがり女がわめきつづけるのを耳ふさぎつつ寝ていればいい。紡が青大附中に入った目的は、クラスの連中と疲れる会話を交わすことではないし、情熱的に学校行事に燃えるためでもない。目的はひとつだけ。

——『あの人』にいったいどうしてお姉ちゃんが惚れたのか、そのわけを知りたいだけ。

担任は年齢不詳だと言われている。奥さんがいるなんて信じられない。ちゃんと夫婦生活できているのだろうか？　クラスの連中が好奇心満々なことをでも紡は知っている。

青潟大学附属中学二年A組担任、狩野皇人（かりのきみと）教諭は今年もって二十九歳。

妻・かの子……旧姓近江かの子……との仲は、悔しいくらい良好だということ。

つまらない。醜い集団。特に女子の集団は。紡の好きなのは、凜としてそれでいてしたたかさを持つ、強い人。

「近江さん、待ってよ。ちょっと逃げないでよ」

全く、飽きもせずこの人は、何を言いたいのだろう。

紡は振り向き、答えずにじっと見下ろした。ぼわぼわに髪をくせっ毛のまま膨らませている西月さんは、「女性」として紡の好みではない。男子がどう思うかは想像外だが、紡からすると、食指の動かないタイプだ。

「さっきからずうっと観てたけど、近江さんってどうしていつも、クラスのことにもっと関わろうとしないわけ？ クラスの中で友だち作ろうとしないわけ？」

「別に、それは関係ないでしょう。これから用事あるの、お疲れ様」

簡単に答えておけば放っておいてくれる。いつもそうだった。一日中、授業で当てられた時以外は話をしない。休み時間はひとり、図書館か中庭で本を読む。もしくは黙って空を眺める。それで十分紡の時は埋まった。ひとりぼっちが気持ちいい、ってことにどうして気付かないのだろう。

「ちょっと待ちなさいよ。このままでいいと思ってるの？ あと一年なのよ。あと一年で卒業じゃない。せっかくクラスみんなが仲間に入れてあげようって言ってるのに」

「別に、関係ないから」

全く疲れる。この人……西月さんには、頭の悪い人たちといることの苦痛が想像もつかないのだ。成績がどうのこうのというわけではない。西月さんは成績も悪くないらしい。一緒に話していると時間が黒く染まってくるような気がして、早く吐き出したくなるのは、どうしようもない。早く、お姉ちゃんに会いたい。今日は始業式。一刻も早く学校を離れて、「アルベルチーナ」でお姉ちゃんの黒いワンピースのフリルを触りたい。

「近江さん、いろいろ事情があるのは分かるけど、A組の仲間として、最後の一年くらい一緒にがんばろうって気持ちになってもいいじゃない。そりゃあ、近江さんはいろいろ大変だっていうの、わかるつもりだけどね。でも」

「これ以上話があるのだったら、紙に書いて下さいな。それでは」

口と顔のかもしれない空気が消えるだけでも、だいぶ楽に交わせる。それに場所も場所だ。生徒玄関のすのこで靴を履き替えた。茶色のローファーは、校則違反だ。一番足にすくりとなじんでいた。

「近江さん！」

すっとんきょうな声を出すもんだから、周りの連中の視線が釘付けになる。ささやいている奴もいるし、噂話の種にするのかじいっと眺めている奴もいる。男女問わず、騒ぎの内容には並々ならぬ関心をお持ちらしい。

「萩野先生だって、心配してるのよ！ この前だって私に、近江さんのことを仲間に入れてあげてくれないかみたいなこと言ってたのよ！」

——一応、あの人も担任。義務なんだもの。評議委員さんにはそのくらい言い訳しておかないと示しつかないものね。

この辺、「あの人」に怒りは感じない。ご苦労様、それだけだ。紡は耳たぶを軽くつまむと、少し気合を入れた。黙らせよう。

「あのね、西月さん、これから忙しいの。とにかく先に帰るわ。別に私は、クラスのみなさんがコネ入学だからどうのこうのって思っているわけではないの。コネって言葉を口にするのは、西月さん、あなたが持ち出すからじゃないのかな、って思うんだけど、違う？」

丸い顔がずんずん膨らんでくる。女として、「欲情」できないタイプだ。いや。

「何、変なこと言わないでよ！ みんながコネA組って馬鹿にされているのがどんなに悔しいことか、想像つかないの！」

「自分が悔しいからといって、私も同じだと思い込まないでね。とにかく、お疲れ様」

さらりと流すのが紡の主義。もっとこてんぱんにやっつけるという手も選べないわけじゃないけれど、エネルギーがもったいない。

すのこの上で足を踏み鳴らしそうだ。両手を拳骨にして怒り心頭。西月さんを背に、紡は玄関を出た。すっかり桜も満開だった。青潟の春は遅いものだけど、今年は一週間ばかり桜の満開時期が早まったらしい。自転車置き場に向かい桜の花びらをサドルから払った。

「近江ちゃん、ごくろうさん！」

紡を「ちゃん」付けで呼ぶ男子はひとりしかいない。イントネーションもおちゃらけている。笑い声というおまけすらついている。かたくなった首をほぐすよう振った後、紡は振り返った。A組評議委員の天羽くんがにやにやして待っていた。

「こんなところに自転車つけてたの」

「そうなんでーす。今日は近江ちゃんの隣りかなと、期待してたってわけっすよおん」

「天羽くんも、ずいぶん観察力がするどいのね」

まんざらでもない。女子に対しては思いっきりチェックが厳しいつもりだけど、男子についてはお付き合いの対象外なので、許容度の幅が広い。絶対タイプじゃない、と言い切ることでできる男子もいないわけではないけれども、まあ、贅沢は言わない。馬鹿でなければ十分だ。天羽くんは今のところ、紡の基準点以上を行く男子だった。

「今週の土曜、錦町の寄席に行くつもりなんだけど、今度近江ちゃん、ご一緒にどう？」

「落語ね。悪くないわね」「おフランス好みの近江ちゃんにそうもいっていただけるとは嬉しいねえ！」

素直に喜んでいる。紡も落語に関心がないわけではない。「セシル」だからといって、必ずしも日本の伝統芸能を嫌っているわけではないのだから。「おフランス」ってところも天羽くんらしい。芸人好きのおちゃらけ好き。応援団の団長風硬派。ブレザーよりも学生服が似合うタイプだろう。それでいて普段は「いやん、ばかん、とかいっちゃってええ〜」と、紡にはよく理解できないギャグをかましているのだから世話がない。もっとも最近では考えるとこあって、おちゃらけも押さえめにしているようだった。

——まあね、ああいうことがあったらしょうがないわよね。お疲れ様。

さっき玄関でわめきちらしていた怖い顔の女子を思い出し、天羽くんには同情したくなった。「でも、天羽くんも大変よね。あのクラスであと一年、一緒に委員やっていくっていうのはね」あえて、西月さんのことを口にはしなかった。彼にとっても過去の汚点だろう。

「俺が選んだことだしなあ」

「あら、妙に真面目に返事ね」

「一度冷めると、とにかくとことん氷点下ってやつっすか」

またおちゃらけつつ、ついてこようとする天羽くん。残念ながら本日の目的地「アルベンチーナ」は男子禁制。途中でさよならだ。ちゃんと着替え用のキュロットスーツも、駅内のロッカー一内に用意済みだ。お姉ちゃんには、男子と歩いているところなんてみられたくはなかった。天羽くんもそれはわかるだろう。「そのくらいの覚悟がないと、元彼女と同じ委員なんてできないわよね」

「あ、そのことなんだけど、いいかなあ」

天羽くんは、ひょこっと話のトーンを変えた。ラジオの落語番組を真剣にエアチェックしている、今時珍しい男子生徒なのに、結局こいつも評議委員。真面目なんである。真面目なのは、放送時刻ちょうどに「今日の演芸」の録音ボタンを押す、それだけにとどめてほしい。

「明日、委員決めになると思うんだけど、俺、近江ちゃんを指名するから」

「は？」

思わず、お間抜けな一言を発してしまった。「今期の評議委員のことなんだけど、西月の代わりに、近江ちゃんにするってもう、決定してるんだ。あ、大丈夫！ ちゃんと『お兄さん』には、そのこときっちり話しているし、西月も納得済みだ。ま、しばらく女子たちがうるせえだろうが、その辺、どうせしゃべらないからいいだろ？」なぜ『お兄さん』のところを強調するのか。評議委員に選ばれるものにも、寝耳に水。水かけられてもどこぞの女子と違って、ヒステリックにわめかない、なるようになるのが紡の主義だ。

「私が、評議委員に選ばれるわけじゃないの。民主主義の時代よよ。委員を決める場合、大抵は持ち上がりでしょ。いくら西月さんが納得したからといって、他の女子がそんなこと、納得するわけじゃないの」

「ノンノン、実はだね。もう手は尽くしてあるのだよ」

今度はぎざに、腰に手を当て、まぶたの側で人差し指を揺らす天羽くん。

「うちのクラス、女子が一名少ないだろ？ 去年の夏以降、男子十五名、女子十四名」

——ああ、退学した人いたもんね。

「仮に女子が反対したとして……近江ちゃんもお付きあい上、辞退したとして……でも、男子が一名多ければ、それで民主主義は成立。多数決、一票差で近江ちゃんに決定」

「なあに考えているのよ。ばっかみたい」

怒る気にもなれない。通常的女子だったら「ふざけないでよ！ 私、そんなこと絶対認めないから！」と叫ぶところだろう。紡はそんなことしない。ちらっと、「評議委員」という役柄を当てはめてみて、どうやって化ければいいかを考えるだけだ。面倒だ、という答えだけ。お姉ちゃ

んと会う時間が減りそうなだけ。どうせ選ばれても無視して本をめぐっていただければいいだけのこと。ふうっとため息をついて、肩をすくめた。

「あら、文句言われるかと覚悟して、全身防備できたってのに、あっさり」と

気抜けした格好でまた、おちゃらけ天羽くんに戻った。

「こちらは口利く気、さらさらないから、そこまで天羽くんが手を回したのならばそうなるでしょ。私が決めることじゃないわ」

「そ、そこまでクールに言われると、俺としても困るよなあ」

「だったらやめるように、天羽くん、手を回し直したら？」

「男がすたるっての。それよか近江ちゃん、寄席に行こうよ、すっげえいいぜ。俺、今まで関西系のこてこてギャグに命かけてたけどもう人生変わった。やっぱ、日本の心は落語、漫才、漫談だっけの」

「日本に住んでいる外国人に失礼よ。日本の心って日本人の心にしかないって思われるわよ」

別に腹を立ててみたわけでもなく、紡はさっさと自転車を引き出した。桜の花びらが風とともにかばんの上に落ちた。黒に桜色。風情、というよりも奇妙だ。

「難しいこと言うよなあ」

「喧嘩を売っているわけではないの。ただ、たまたま日本という国に生まれたからとって、誰もが日本の心ってものを持っているとは限らないのよ。だったら演芸好きの外国人がいたらどうするのよってことを言いたい」

「さすが近江ちゃん、頭いいよなあ」

——分かっているんだかいらないんだか。

でもまあ、落語も、悪くはない。日本語を耳で聞き取る能力がある人間ならば、楽しめる。約束したらあっさり天羽くんは引いた。「ありがと、じゃあこれから評議委員会あるから教室もどるわ、あ、それと、『お兄さん』には寄席のこと、内緒にしるよ。せばあ」

手を振ったり、笑顔を向けたりはしない。自転車駐輪場の向かいから見える窓によじ登り、天羽くんだけがひとりしゃいでいた。ああいうところを男子の姿で見るのは悪くない。問題は、女子がやると気持ち悪く感じる、それだけのことだ。紡の好みはうるさいのだ。

「なんか、セシルが寄席に行くなんてしんじらんなあい」

もちろん、お姉ちゃんを誘うなんてことはしない。口の軽さは折り紙つき。誰と会うとかそういうことまでは決して言わない。とある組のとある男子から、デートのお誘いを受けたとだけ報告をしておいた。でないと、お姉ちゃんとうっかり顔を合わせた時、に誤解されてしまう。やきもち妬かせるのも悪くないけれど、「あの人」に報告されたら別の問題が生じるじゃないか。

「でも、悪くないでしょ」

紡はがら空きの店内で、コーヒーフロートの上に乗ったアイスクリームをすくった。自分の口に入れようと思ったが、考え直しお姉ちゃんの口元に差し出した。もちろんぺろんと口の中。

「冷たい。気持ちいい」



「でしょ、人がなめさせてあげると何倍もおいしいのよ」

今日のお姉ちゃんは珍しく真っ赤なエプロンドレス姿だった。

「私も、まんざらでないってことよ、お姉ちゃん」

「あら、でもなんだか意外。青大附中では女子にお姉さまって追っかけられるのがセシルの将来だと思っていたのにね」

お姉ちゃんの言いたいことは想像がつく。つまり、少女歌劇の男役スターをイメージしていたのだろう。髪型だけだったらそうだろうが、運悪く紡の顔立ちは少し猫っぽい。女の匂いが目だけで漂ってしまう。ひらきなおっているからその辺は、自分らしくメイクしてみたりしているけれども、女子たちからは憧れの対象にならない。

「ま、私は女子しか興味ないけど」「ねえ、セシル。じゃああんたが最近気に入っている子ってどんな子なの？」

少し考えた、男子よりも女子に対する要求が高い。側において、お姉ちゃんとしたようにべとつとしたい相手……いないわけじゃなかった。しかし好みの子に限って、早めにばかな男子とくっついてしまうのはどういうことなのだろう。紡は決して女子同士で……お姉ちゃん除く……べたべたするのを快いと思わない。その点非常に好みがうるさいことを自覚している。気に入った子以外とはお付き合いをしたくない。しかし、紡の美的概念と合致した少女については、できれば鑑賞するか適度なお友だち関係でありたいと思う。残念ながら、その相手がひとりしかいなくて、それもよりによって……ってというのが許せない。

「すばすばと返事して、言いたいことすっきり気持ちよく言うタイプの子だったんだけど。世の中、男と女の世界だから不利よね」

個人の名前は決して出さない。

——お姉ちゃんに言うもんなら、一瞬のうちに情報伝わっちゃうじゃないの。

お姉ちゃんは大好きだ。ただ、その口だけは信用できない。もし紡の生死がかかっていることだったら別だろうが、恋愛感情なんてものはきっとそのうちに入らないにきまっている。

「同じ組の子？」

「まさか、別よ別。A組なんかにいるわけじゃないのよ」

長めに切りそろえたボブショート、D組評議委員の子を思い出した。入学式の頃から目をつけていた。残念ながらすでにお手つき。他クラスというがネックだった。

——よりによって、なんでああいう相手を選んだんだろうな、ずっとレベル高いって自覚持てばいいのにね。彼女の付き合っている相手は、ふさわしくない。教えてあげたいが残念、やっぱり話す機会がない。

「それよりお姉ちゃん、この前言ってた『E組』のこと教えてほしいんだけど、いい？」

「もう、勝手にパフェ頼んだりしないでよ。どうせ私がおごらされるんだから」

「うわ、自分の分は自分で払うつもりだったのに、わあいよかった」

わざと子どもっぽく、肩にもたれて甘えてみる。苦いコーヒーではなく、甘いパフェ。このあたりがお姉ちゃんにアピールする、微妙なコツだ。

「私たちの方には『放課後二時間ずつ補習する教室』としか情報が流れてこないのよ。今はそれほどでもないけれど、またコネコンプレックス持っている子が騒ぎ立てるたら、うっとおしいっ  
たらないんだから。大変なのよ。私もかまってられないし。もし、ある程度知っていたら、いい  
子ちゃんぶってたしなめるって手もあるでしょ。私、これでも、担任の妹、なんだもの」 そんなことほんとはちっとも思っていない。聞いたところでばらすつもりもない。紡が知りたいの  
はただ、「あの人」の本年度行動予定だった。どこでしっぽを出すか、どこでしくじるか、その  
辺をしっかりと見極めてやりたい。それだけだ。

「そうね、セシルはその辺、立場があるかあ」

コーヒーゼリーがかかった原色系のパフェが運ばれてきた。お姉ちゃんと一緒にパフェスプーン  
ですくいあい、食べあった。こういうことをうちでもしていたけれど、やっぱりおおっぴら  
に「あーんして」と言い合うのは気持ちいい。気持ちいいことが一番好き。

「あの人、もともと理系学部で教員免許も持っていたけど、本当は養護教諭の資格もほしいと思  
っていたみたいなの。ひとり、その関係で詳しい人がいるそうね。暇さえあれば話を聞きに行っ  
ていたみたいなの。ええっとだれだったっけ、お年を召しているらしい人よ。今年定年退職で、  
今はなぜか講師で残っているって言う、ほら」

「駒方先生しか今年退職した先生いないけど」

あまり詳しいことは知らない。終業式の挨拶で見た時は頭が真っ白で、きれいに七・三に分け  
ていた先生だった。評議委員会の顧問をずっとしていたとか。あれだけ歳いっていると、学校内  
での力関係も相当なものだろう。もっとも授業が美術ということもあって、紡には週二回程度顔  
を合わせる程度の人だった。関心はない。

「そう、その人だったはずよ。あの人、いつもそういう問題については語ってくれるんだもの。  
好きよね、物好きっていうのかしら」

——クラスでは、当り障りのないことばかりしゃべっているくせにね。「あの人」は。 教壇  
の上で白衣姿、一問ずつ前日に問題を当てておく。みんなは答えをそのまま写し、当日を待つ。  
当てられた生徒は問題をさらさらと黒板に書いた後、解答と説明を待つ。忘れてきた人、間違え  
た人、やる気ない人、特段責めるわけでもなく、「あの人」はただ分かりやすく説明を続ける。  
二次方程式、因数分解、空間図形、確率統計、無駄話もせず、ただ数値がどうしてこのような  
道にたどり着くのかを、簡潔に伝えようとする。

——教師としては馬鹿じゃないと思うわ。

いくら「あの人」のことを悪く評価しようと思っても、教師としての能力を低く見積もるこ  
とはできなかった。実際、紡も決して数学が得意な方ではなかったし、「あの人」のおかげでだ  
いぶ理解度が高まったことも否定できない。満点続きの数学テスト、決して自分のために手加減し  
てもらっているのではなく、授業のノートを読み返して「あの人」の説明を思い起こせば頭  
に入る、それだけのことだ。

お姉ちゃんのひとり語りに耳を傾けながら、紡は自分のパフェを口に入れた。冷たくてちょ  
っと苦い。コーヒーゼリーの成分がきつと濃いのだろう。

「セシルの学年って、確か筆記よりも面接の点数が高く評価されて合否が決まった年だったみた

いね。それで一部の受験生の親からクレームが来て、次の年からは筆記最優先に切り替えたいのよ。それはこの前話したわよね」

「聞いた。コネ入学は露骨に出来なくなっちゃったのね」

「セシルだったら普通に受けても受かっていたわよ。だからレベルの高い生徒は一学年下にたくさん集まっている。けど、その分情緒的に問題があるかなって子もたくさん入ってきちゃったのが問題となっているみたいなのよね。授業中騒ぐとか、泣くとか、文句言うとか。早い話、親のしつけがなっていない子が多すぎるらしいわ」

——ああ、そうね。そういう子、いるって聞いたわ。

「成績とそういうところは比例しないものなんだってことよ。青大附中の『紳士であれ、淑女であれ』とはなかなか重ならないわね。そこで、全学年でそういう困ったちゃんを集めたクラス『E組』をこしらえて、クラスでもてあまして問題児を全部集めてしまおうという案が出たんだって」

——問題児？

同じクラスに似たような連中を集めてなんになるのか、という疑問はある。現在の三年A組なんてその対象そのものではないか。と紡は思う。縁故入学者中心のクラスにおいて、何かいいことがあったのだろうか。お互い、どういう繋がり入学してきたかを必死に隠しあい、西月さんのように「そんなことない！」と言い張り、かえってどつぼにはまる。そんなことの繰り返しではないだろうか。「問題児ってどういう人たちのことなの？」

「さっき言った、授業妨害はなはだしい子ども、授業についていけない子、精神的に不安定すぎて他の生徒に迷惑をかける子、それと、まあおおっぴらには言えないけれど、コネ入学であまりにも相性が合わない子、とかとか、そういう感じよ。春休み中にあの人と、ええっと駒方先生？

と相談して、保護者に連絡を取ろうとしたのよ」

なんだか途中で問題が生じたのだろうか。はっきり聞きたい。紡はパフェスプーンに、すっかり溶けたアイスクリームをすくい上げた。のっかっているさくらんぼはお姉ちゃんにあげよう。

「ところがね、連絡の仕方がまずかったらしいわ。私も笑っちゃったんだけど、保護者の人たちがそんなやり方、はいそうですかって受け入れるわけじゃないのよって。猛反発食らってしまって、結局『E組』で受け入れることをOKしてもらったのは二人だけ。一年の男の子と女の子、各ひとりずつよ。名前までは聞かなかったけれどもね。学校で電話するのはまずいということで、あの人、うちからこっそり連絡取ってたわよ。私が耳澄ませているの気付かなかったみたい」

——お姉ちゃんの地獄耳！

もし、結婚していまだにお姉ちゃんの得意技「盗み聞き」に気付かないでいるのだったら、「あの人」本当におめでたい人だ。

「しかたないので方向転換。露骨に『E組』とはつけないで、他の課外授業関連のサポートをするための常設教室、ということにしたの。ほら、他の能力が優れている生徒を、青大附中の場合、附属高校とか、大学とかで授業受けさせるじゃない？ そういう生徒たちのサポートを『E組』で行うということにすれば、妙なこと勘ぐられないでも済むし。カモフラージュってところが

しらん、あ、セシル、私にも一口ちょうだい」

わかっている。さくらんぼの柄のところをつまんで、お姉ちゃんの口にぽとんと落とした。十二歳下の自分が言うのもなんだけど、尖らせた唇が赤くて、可愛い。

紡が家に帰ったのは夕暮れ間際だった。染みだらけのエプロンで手をぬぐう母に「お姉ちゃんと会ってきたから」

とだけ伝え、部屋にこもろうとした。

お姉ちゃんがいなくなってから二年間、家の中の空気がどすんと重くなったような気がする。一刻も早く抜け出したい、本当だったら一人暮らししたい。でもだめだろう。親が許してくれるわけがない。呼び止められた。

「紡、今日始業式なのに、なに荷物抱えているの」

「関係ないでしょ」

「なくないわよ、親なんだから。ほら見せなさい、見せられないものあるの」

きびすを返して荷物を背に回した。さっき着替えてきたワンピース。あれはお姉ちゃんに見立ててもらってこっそり手に入れたものだ。母の好みなんかではない。トレーナーにジーンズのスカート、もしくはTシャツにカーデガン。いかにも中学生らしい格好をするようにうるさく言う母と、会話するのは意味がない。

「関係ない。実力試験の勉強しないといけないから、食事、部屋の外に置いておいて」

「紡、待ちなさい！」

背を向けた時、取り上げられたバックの中をぱららと床にぶちまけられた。

「あんた、なんなのこの、いやらしい服！」

やっぱりそうだ。母にとっては、中学生らしいという基準にそぐわない服はみな、「いやらしい」のだ。お姉ちゃんがこういう格好を好んでいるなんて、想像すらしていないに違いない。

「関係ないでしょ。返して」

「いけません！ あんたには服ちゃんとしたのあるでしょう！それになんでそんな格好を」

「だって、お姉ちゃんからもらったんだもの」

「かの子が？」

あまり使いたくない。お姉ちゃんに迷惑がかかるのがかわいそうだから。でも、この家に一人ぼっちで置いておかれているわが身を考えれば、そのくらい言い訳しても許されるだろう。紡は母の手が緩んだ隙に、すばやくワンピースを拾い上げた。

「もっと子どもらしい格好しないとだめだって言ってるでしょう！ かの子とあんたとは違うんだからね。ほら、何着ているの」

「全部お姉ちゃんからのもらい物だから、触らないで」

お姉ちゃん、という言葉。いい子ちゃんの振りをしつづけ、「あの人」を初めての人だと思い込ませて結婚してしまった、かの子お姉ちゃん。陰でどんな悪いことをしてきたか、紡だけが知っている。夜中に抜け出して、アバンチュールを楽しんできたことも、数え切れないほど。あとで寝物語に教えてもらった、あれやこれや。

母はきっと気付かないままだろう。「いやらしいこと」なんて、お姉ちゃんにはかかわりのないことなんだと思っていたに違いない。

別に今はいやらしい現実を母に突きつける気もないので、いつものようにわかりやすく、言い訳することにした。

「お姉ちゃん、もらい物が多いみたいよ。友だちの服がちょうど私に合うからってことで、くれただけ」

「本当に？」

「本当よ」

嘘はつきなれている。いまさら罪悪感感じる暇もない。

紡はしっかり目と目を合わせて、頷いた。

「しょうがないわねえ、あとでかの子に聞いておくけれどもね、あんたももう少し、中学生らしい格好をなささいよ。皇人さんが観ているから大丈夫だろうけれども」

勘違いもはなはだしい。母は、娘の旦那がしっかり義理の妹を監視していると思っ込んでいるのだ。当たっていないとは言わないが、監視カメラの外し方くらい学んでいないわけがない。

「じゃあ、勉強しなくちゃ」

青大附中生の特権、「勉強しないと授業についていけない」という理由ををちらつかせ、紡はやっと部屋に戻ることができた。母から押し付けられた、スーパー1000円均一で手に入れたらしいトレーナーとジーンズが衣装ケースの中に詰まっていた。今時、小学生だって恥ずかしくて着ないような、ハート型のやすっぽい絵柄。「すぐに着られなくなるのはもったいない」という理由でもって、サイズはぶかぶか。気に入らないものを身に付けると気持ちが落ち込むので、母の前以外では決して着やしなかった。駅前のロッカーが紡にとってはベスト洋服ダンスだった。

赤、白、青。トリコロールカラーにまとめたスケジュール手帳を取り出した。ノートが白、そして赤いボールペン。紡なりのこだわりだった。今週の土曜は授業が終わった後特段予定もない。白いノートの空き地に書き込もうとした。どんなかっこうで行くつもりなんだろうか。ひそかに楽しくなってきた。肩を回して軽く体操した。

——天羽くんが、もし女子だったならば付き合いを考えないこともないんだけどな。

決して嫌いなタイプではない。男子の範疇、という点で行けば、いい奴だと思っし、親友でもいいかな、という気はする。女子たちにももてるだろう。二学期までのキャラクターを保っていられれば、もっと人気ものでいられたらろうに。かわいそうな奴だ。今は西月さんとのごたごたがからんで、女子たちからも無視こかれている。評議委員の立場で、クラスから総スカンというのはかなり立場悪いだろう。別に女子たちとつるむつもりもないし、天羽くんが悪いとも思っえないので、紡は平気で話をしていたに過ぎない。向こうは多少、スケベ意識が覗いているかもしれないけれど、前々から「私は男子より女子好みだから、その辺忘れないでね」と釘をさしてある。誤解はされないだろう。

本当に惜しい。もし紡が男子好みだったら一発でOKしてあげるのに。天羽くんくらい男子と

していい奴はいないと思うのだが。やっぱり紡は、お姉ちゃんとの誓いを破れないわけである。

天羽くんといえば一年、二年の頃はひたすら関西系のしょうもないギャグをかまして、周りから響感を買っていた。黙っていたら、ガクランの似合う応援団風の顔に見えるのに、しょっちゅう受けを狙うものだからしまりがなくなってきた。

「はちまき締めて学生服借りてくれば、下手なギャグを飛ばすよりも受けるわよ」と言ってやったことがある。

「卒業式後には必ず、近江ちゃんのリクエスト、受けつけませ」というのが返事だった。二年の二月末のことだった。

もっとも紡には、天羽くんが投げかけるギャグのほとんどが理解不能だった。もともとバラエティ番組を面白いと思えない感覚の持ち主だ。いきなり身体をくねらせて、「あ、ああっ、感じる、感じるう〜」とポーズを取られても、よくわからない。たぶん流行しているネタなのだろう。周りの女子たち……特に西月さんあたり……が懸命に手をたたいて

「天羽くん、やるう！ かっこいい！」

と叫んでいるのが理解不能だった。話し掛けられればそれなりに返事もする。でもそれだけというのが、今までのつきあいだった。

いつからだろう。

——天羽くんが関西ギャグを卒業したのは。三学期に入ってからだわ。

冬休みに何か転機が訪れたのだろう。大体理由は想像がつく。天羽くんは一切、こてこてのギャグを飛ばさなくなった。もともと評議委員という真面目な側面がありながら、本質芸人だった天羽くん。いきなり関心が「落語・演芸」に切り替わったらしい。

落語や演芸ならまだ、紡の理解範疇だった。しょっちゅう紡の席に寄ってきて、「昨日のラジオ寄席聞いたんだけどさあ、『子別れ』泣けるよなあ」とか、話し掛けられても、西月さんよりは冷静に対処できた。妙に気に入られてしまったのは予想外だったが、悪くはない。お馬鹿な女子よりも、男子連中の頭のいい子の方が話していて楽しい。

だからといって、別に女子を無視したわけではなかった。話し掛けられたらそれなりの返事をする。でもそれだけだ。西月さんがやたらとつかかってくるようになったのは、三学期に入ってから。天羽くんのごたつき出してからのはずだ。

——振られたからって言って、私に八つ当たりするのは、やめた方がいいんじゃないの。

お姉ちゃんがいた頃よく聞いていた、古い洋楽のテープを引っ張り出して聞いた。もちろんラジオカセでヘッドホンで。フランス映画の主題歌集らしい。カセットケースそのものが行方不明のため、どういう題名かはわからない。たゆたゆとした、鼻ごもりの柔らかいリズムが耳に流れてきた。

天羽くんが紡に話し掛けるようになった時期。三学期。

西月さんがしつこく紡をつつくようになった時期。三学期。

A組評議委員がふたり、形を変えてしつこく迫ってくる理由って。

想像つかないわけではない。ただ面倒なことには関わりたくないから、今日も目を閉じるだけのことだ。

——いくら私が女子好きだって言っても、頭の悪い女子よりまともな男子の方がましよ。

他の人には黙っていよう。決めて、紡は手帳に予定を入れた。「錦町・寄席」とだけ書いておいた。

寄席と言うのは正確ではない。天羽くんと待ち合わせ夕暮れの通りを急いでたどり着いたのは、若い落語家さんの独演会だった。

学校の体育館に段差をつけて、パイプ椅子をずらっと並べただけの席だった。席の後ろに紙で番号が振ってある。木戸銭……チケット代のことらしいを払い、あてがわれた番号の席に座った。後ろの方だった。当日券だったのでしかたないだろう、と天羽くんは言ったけれども別にかまわなかった。

「本当はさ、ちゃんと指定席として置けば、真中の席に入れたんだけどなあ。窮屈でごめん」

「別に、それほど熱心に聞くわけでもないわ。この席の周り、人もいないし、煙草すう人もいないし、いいじゃない。寝てたっていいもの」

ジーンズにデニムシャツ、それに白いトレーナーという膨張色で、天羽くんはにやっと笑った。

「近江ちゃん、落語初めてか」

「ええ、いわゆる日本伝統芸能とは縁がないの」

「まあこれからゆっくり、レクチャーして差し上げますさ、さてさて始まるよん」

周りの客層を見ると、ほとんどが紡の母と同じくらいの年代で、少し身なりをきちんとした感じの人が多かった。

「出囃子」と呼ばれる笛、三味線のメロディーが、ラジカセから流れる中、着物一枚ひっかけた若い男の人が出てきた。自分で案内用の題名が書かれた紙をめくった後、正座してしゃべり始めた。「噺」を始めた、といえはいいのだろうか。よくわからないが、天羽くん言うには、「その筋では知らぬものなし」の古典落語らしい。声が聴きずらくて、さほど面白いと思わなかった。周りのお客さんはそれなりに受けていたけれど。紡はつまらないものに笑う気なんてさらさらなかった。笑いに甘えはいけない。

天羽くんの判断はどんなものなんだろう。

「これからでしょ。まだまだ前座さん。ゆっくり見守りましょうって」

ずいぶんおうようなことを言う。

「甘いのね」

「若いっていいねえ」

若いことを自慢下に語るのを聞いていると、うんざりしてくる。大抵の男子は紡の本音を知らないままだろうが、天羽くんにはアホなままでいられるのは惜しい。だからちゃんと伝えた。

「きついなあ、近江ちゃんは」

天羽くんは馬鹿じゃなかった。笑いながら頬をぼりぼり搔いた。

「私は完成されているものが好き。中途半端なものにはうんざりするわ。本物至上主義よ」

「だからクラスの奴としゃべるのがいやなんだ」



「決めつけられるのはいやだから、答えないでおくわ」

「決めつけられるって」

「私と話すとは担任に筒抜けだとか、裏事情しっているとか」

別に嘘ではなかった。お姉ちゃんからクラス全員の縁故先および裏事情を、みんな小耳に挟んでいるのは本当だ。

「天羽くんは気にならないみたいね。今日のこと、クラスの人たちから西月さんにちくられたらどうしようとか思わなかったの？」

天羽くんはバイブスの背もたれによっかかりながら、紡に横顔で笑った。

「そのために評議委員やっているんだって。相棒と相談するためにて、こっそり会ってどこが悪い」

きっと、西月さんとつきあっていた時も同じこと言っていたのだろう。結構、天羽くんってたらしなのではなからうか。

紡は、入るときにもらったプログラムを読み返した。前座一席の後にご当人が一番、次に休憩、色物として紙切り芸人の登場、最後に大物を独演会の噺家さんが。流れとしてはそんな感じで進むらしい。

天羽くんは特別説明してくれるでもなかった。下手にうんちく語られるよりはましだけど、その分、クラスのごたごたについて何度もあやまるのはやめてほしかった。まあ、天羽くんにとっては罪悪感あふれる委員選考だったろう。紡がもしふつうの女子だったらつらからうが、全く気にならない。かえて悪いことをした気がする。

「これ以上、『ごめん』を言ったら、その場で帰るからね」

「ほら、次の演目ははずさないと思うよ。この人、古典がめっぼううまいんだ」

頭をぼりぼりかきながら、やっと天羽くんは落語の話に切り替えてくれた。

紡が評議委員に選出されるにはそれなりに手回ししてくれたせいか、それほど問題は起こらなかった。

「あの人」が静かに紡を見つめていたくらいだろうか。

あえて紡が義理の妹だということを隠さないようにしている。と春休み、話していた。お姉ちゃん経由ではなく、直接に。

「紡ちゃんにとっても、それの方が楽だろう」

別に、いてもいなくてもいい生徒であれば、関係ない。紡は優等生顔して頷いた。

「普通にしていればいいということでしょう」

困った顔で「あの人」は微笑んだ。一部の女子からは人気だと聞く。骨と皮だけの顔。今思えば、紡が評議委員にならざるを得ないことを知っていたのだろう。天羽くんの手回しにはそのことも加味されていたに違いない。

だが、男子には見えないやっかみもあるわけで、放課後、これみよがしにクラスの女子数人からささやかれた。

「小春ちゃんに譲ってあげれば近江さんも、女子からおおって言ってもらえたのにね」

いや、西月さんが何も意志表示しなかったから、紡が選ばれただけのことだ。ずっと黙りこくっていたのに疑問一つあげなかったのは、女子一同ではないか。西月さんだって振られたばかりの相手と一緒に委員やりたいもんだらうか。

友達に戻ることすら、西月さんは拒絶されているのだ。

かわいそうだが、しょうがないだろう。

天羽くんがなぜ西月さんを振ったのか、紡はまだ聞いていない。個人的好みからなら納得だが男子の好みは謎なところがある。

天羽くんもあれだけ熱をあげていた相手を見捨てるにはそれなりの理由があるだろう。一、二年当時、天羽くんは「小春ちゃん」と呼んでいたし、西月さんもいつも笑顔でくっついていて。同じ委員同士、男女仲良くなりカップル化するのは、青大附中においてそう珍しいことではなかった。

厳密に言えば冬休み明けまで、見るのも目に毒な甘い状態が続いていたはずだ。

自分が巻き込まれていなければ、ただの好奇心で眺めるのも乙だろう。今まで紡は観覧席から眺めることに徹していた。

でも、天羽くんとだんだん公認になりそうな今、面倒なことに巻き込まれてしまわないよう、自衛しておきたい。

「とりあえず言っとくけど」

銀色っぽい羽織りの着物姿で、本日メインの落語家さんが現れた。髪の毛は上手に七・三分け。てかてかに光らせている。激しく拍手している天羽くんは気付かないようだった。

「私、女子しかその手の関心ないから、覚えておいて」

聞こえたかどうかわからない。紡も慌てて、拍手に乗ったから。

さすが、大将。お見事だった。さすが真打だけある。太鼓持ち、いわゆる「幫間」のおじさんが、わがままいっぱい若旦那にせつつかれて「鍼」の実験台にさせられての大騒ぎ、しかもまあ、しゃれのきつい若旦那はほとんど経験の浅い「鍼治療」の真似事をしようとするのだから、身の危険を感じる「幫間」さんが逃げるのも分かる。残念ながら紡には、話のオチが理解できなかったものの、途中で思いっきり笑ったり、前の人パイプ椅子に顔をぶつけそうになったりと、徐々に声を出してしまった。当然、隣りの天羽くんは鼻の穴を膨らませて爆笑しまくっていた。

「さてと、これから色物があるけど、どうする？ シャベリながら、あっという間に影絵芝居みたいな絵を切り抜いちゃうんだぜ。うまくすれば、リクエストもしてもらえるぜ。ほら、相合傘、とか頼むと、ほいほいっとさささって色紙を切り抜いて、透明ビニールの板にはさみこんで出来上がり。もらえるかもしれないぞ」

「どうするって、観にいくでしょ」

「けどさ、近江ちゃん、家ここからだと遠いだろ」

——何気に気にしてくれているってわけね。

この辺は、優等生面した評議委員の気配りか。なんだかむっときて、紡も答えた。

「いいわ、最後まで聴いていく」

「俺はいいけど、近江ちゃん、このままだと夜九時くらいになっちまうよ」

「別に、私が怒られるだけだもの」

本当は途中で抜けるつもりだった。天羽くんには悪いけれども、やはり親に文句を言われるのはうざったい。学校に友だちがいない紡の生活を、親は義兄からすべて聞きだしているはずだ。なのにいきなり、お姉ちゃん以外の人と出かけているなんてことに気付かれたらたまったものではない。今日の予定については一言も伝えていないので、たぶん八時過ぎに帰っただけでも雷が落ちるだろう。お姉ちゃんに行ったことにしておこう。

「やっぱさあ、まずいよ。今日のところは俺も、これを聴ければ大満足だからさ、とりあえず出ようぜ。また、今度もあるしさあ」

——今度？

天羽くんに釣られて立ち上がり、紡はそっと首をかしげた。

「今、何て言ったのよ」

「だからさ、また次も、予定入れてほしいから、ここで一発終りにはしたくないってこと、それと」

戸口に向かう。後ろの席だから、ひとりふたり欠けても迷惑にはならないだろう。入り口のエスカレーター前で、着物姿の女性が二人ほど、花束の山を解いて、新聞紙に分割して分けて包んでいた。紡たちの方を覩て、ばつの悪そうな顔で「ありがとうございます」と声をかけてきた。

「今から俺も、近江ちゃんのこと『お兄さん』に、目、つけられたくもないしな」

——あんた評議委員だからね。

「なにせ俺も、今のところ前科者扱いされているし、たぶん先生からもにらまれている可能性大。俺、今回は、本気なんだ」

——何もエスカレーター下っている間にそんなこと言わないでも。全く、面倒だったらないわ

紡は無表情を装った。簡単だった。鼻でかすかに笑った後、

「別にかまわないけれど、私の好みは知っているわよね」

落ち着いて答えた天羽くん。そっちの方が衝撃だった。

「ああ、知ってるよ。女子しか関心ないんだろ？ ってことは、俺もよその男に現抜かされる心配しないですむしな」

なんというかおめでたい人だ。

女子たちからすれば「近江さんは天羽くんとデートして、いきなり告白されてしまった」という解釈になるんだろう。否定はできないし、紡も答えをあいまいにしまったきらいはある。露骨に「ええいいわよ」とか「いやよ」とかこたえるのは無粋だし、別に男嫌いというわけでもない。恋愛対象にならないだけで、友だちだったら男子はオールOKだ。どうでもよかつただけ

のこと。

——これから面倒になるなあ。

すっかり受け入れられたと勘違いしている天羽くん。プログラムをしまい込むと、そっと時計を覗いた。ちょうど七時半。塾に通っている連中だったら別だろうが、あまりこの時間帯に街をふら付いていると補導されやすいとも言える。天羽くんも、四月評議になったばかりということで、できれば汚点をつけたくなかったのだろう。紡からすれば、夕方からの落語独演会に誘った段階で、十分、やましいことありありのような気がするが。

「天羽くん、もし私が付き合いをOKした場合なんだけど、何すればいいわけ」

「何って、ええと」

いきなり赤くなったのは、やましいこと想像していたんだらう。面白い。紡は続けた。

「あなたの事情はわかっているつもりよ。西月さんのこと、ほんっとうに大変なんだなって思うわ。教室内では何にもないことにしておけば面倒も起こらないですむんじゃないの。西月さんにも文句言われないうすむし、私も楽」

「それはやだね」

いきなりがつつと返事が返る。

「俺ははっきり、近江ちゃんと付き合っているって言いたい。なんも俺たち悪いことしてるわけじゃねえんだから」

「私の事情も知ってるでしょ。先生にばれたら今度は、うちの親に即、通告よ。担任はとにかく、親がうるさいのはもううんざりよ」

「狩野先生ってそこまで近江ちゃんに関心持ってるか？」

「私には持たないかもしれないけれど、お姉ちゃんには持っている人よ。そりゃあもう」

ちりちり、ひりひり。言葉が千切れる。

「あのさ、そんなに狩野先生って、夫婦仲、いいのか？」

あまり話したことはないけれど、付き合う以上しかたあるまい。

「いいわよ、めちゃくちゃに。そりゃあべたべたしているわ。一度ふたりで座っているところ見てごらんさい。次の日からあの人の仇名、『桃色教師』よ」

まじまじと、紡を眺めた後、天羽くんは頭をかいた。

「生徒に無関心きわまりない、狩野先生がかよ」

「そうね。たぶん、クラスの人ほとんどは思い込んでいるわね。でも、去年の夏に退学した子を連れて、あの人の実家に泊めたりしていたこともあるし。影でいろいろ家庭訪問しまくったりしているのもあるのよ。一応、一般的な教師としては、いいことしているはずよ。私にはちっとも嬉しいこととは思えないけれど、喜ぶ人も、中にはいるのよね」

やはり立ち話するのもなんなので、近くのコーヒーショップに入った。百五十円で一杯、煙草の煙漂う中でお茶が飲めるスペースだった。高校生らしい集団が奥の席でたむろい、おしゃべりに燃えていた。うるさいけれどもどうせ、天羽くんとしゃべるだけのことだ。紡にとっては一番心休まる空間。知り合いがいなかどうか確認したけれどいない。天羽くんはコーヒーを、紡は

アイステイーを注文した。お互い支払いを済ませた後、入り口のカウンター席に座りこんだ。腰の高さがかなりある椅子。足が地に付かない。ぶらつかせた。

「それ、俺も不思議だったんだ。なんでだろうなあ。何気なく、面倒見てるんだよな」

「そうそう。私もお姉ちゃんから」

しまった、と思う間もなく、天羽くんがぐいと紡の方に向きを変え、

「お姉ちゃん？」

そう繰り返した。皇人さんのことは「あの人」と言い習わしてきた。お姉ちゃんのことを話さないようにしてきた。女子たちとはコミュニケーション取らないからかまわないからいいけれども、中学三年初めになんと口走ってしまうとは！しかも天羽くんの前でだ。

「そういうことになるわよね、あの人のお奥さんってことになるよね」

仕方ない。紡はストローを加えて、目をそらした。

「そうだよなあ、近江ちゃんのお姉ちゃんが、狩野先生のお奥さんなんだなあ」

「有名でしょ」

「じゃあ、近江ちゃんに似てるんだ？」

「誰がよ」

「もちろん、お姉ちゃんがさ」

「興味ある？」

似ているかどうかはわからない。雰囲気もろにフリルたっぷりの、時代錯誤したお姫様ドレスをまとった人。はたして見た目ボーイッシュ、かろうじて黒い飾り気のないワンピースで現れる紡と重なるとは思えない。

「ということは、狩野先生の子供が女の子だったら、近江ちゃんに似ている可能性もあるってわけだ」

「冗談言わないでよ」

ああ、まったくうんざりだ。天羽くんって、話してみると意外と古臭いことを考えているようだ。お姉ちゃんも愚痴っていたっけ。

「結婚三年目、そろそろ孫の顔を見せてちょうだい」

と母がうるさいと。

「結婚したからって言って、必ずしも子どもを産みたいとは思わないものよ。天羽くん、その辺、覚えておいた方がいいわよ。落語に出てくるような、面倒みのいいおかみさんを求めるのは男の身勝手よ。借金して、ろくに仕事もなくて、ただ飲んだくれていて、おかみさんに小遣いもらって買物に行くけど、おつかいひとつできやしない旦那。ああ、あんなの私、だめね」

「俺は近江ちゃんにそんなこと求めてねえよ」

お、きたきた、とうとう本音のお言葉だ。ごまかすにも要領が必要だ。

「じゃあ何を求めているわけ？ ちゃんと天羽くんのご希望通り、評議委員になってあげたでしょ」

怒っていないことを伝えるために、少し目に力を入れて、微笑んで見せた。わかってくれているのか、天羽くんも照れくさそうに鼻の下をひとさし指でこすった。

「まだまだこれからさ。先は長いつてことだ。でさ、来週なんだけど、今度は」

「また落語？ それとも漫才？」

「いや、今度は」

一気にすすった後、真っ正面に向かい合った。

「このままいわゆる普通のデートってことで、一気にクラスで交際発表記者会見してもらえませんかね、近江ちゃん。天羽忠文（ただふみ）ただいまフリーだし、お買い得っすよ、なあ、よろすおますかいな」

関西ギャグは詳しくないが、たぶん有名な芸人のものまねなのだろう。また腰をくねらせている。受けるのってめんどうだ。

「もう関西のネタは卒業したんじゃないの？」

「あ、そっか、しっつれいいたしやした！」

全く、どこが受けるんだか。紡には理解できない。でも、天羽くんの顔としゃべりは、さっきの大将たる噺家さんと同じく、押し付けがましさを感じさせなかった。たぶん、前座の噺家さんとの違いはそこだったのではないかと紡は思い起こした。わかれ、理解しろ、とナイフを突きつけるような感覚が前座さんの甲高い声には含まれていたような気がした。

何も、男嫌いというわけではない。まともな男と、頭のいい女は、どちらも同じくらい好き。だったら、天羽くんレベルの男子と演芸レクチャーを受けるのは、なかなか楽しいものがある。

「いいわ、記者会見くらいなら。どうせ面倒なことだったら早いうちにすませておいた方がいいわ」

——何も親指立てて、「よしっ！」とガッツポーズとらなくてもいいのに。天羽くん。

単純な男子が嫌いなわけではないが、たいしたこと言っただけでもないのに、おめでたい奴だと紡は思った。まあいい、これから面倒なことに巻き込まれる可能性大だが、いつものようにクールに済ませれば、なんとかなるだろう。

「まかせとけ！ 近江ちゃんに手を出す奴は、俺がただじゃあおかねえぜ！ ってことよ」

「男子は大丈夫よ。一応ね、私これでも、『コネ』の威力堪能しているから」

何気なく紡は、自分の後ろ盾をアピールしてやった。担任が義兄とあれば、どんなにむかついたって表から文句をつけてくる奴はいない。いや、もともと男子とは話し掛けられればそれなりに会話を返していたから、あまり嫌われていないような気がする。問題は女子だ。女子は表から勝負をかけないかわり、陰からじわじわと責めてくる。特に、元評議委員女子の西月さんからみがうざったい。

「男子はって、じゃあ問題は女子ってことかよ」

気付いてないのか。こいつ、本当に評議委員なのだろうか。紡はこめかみをわざとつつくようなしぐさをしてみせた。

「そうよ、女子よ。想像つくでしょ。天羽くんならばね。すねに傷ある身のくせに」

「ああそうだな」

つくづく思った。天羽くんにとって、西月さんという存在の重たさを。げっそりしそうなほど、ため息を吐いた。

「いやになると、どうしてもとことんいやになっちまうって、罪だよなあ」

独り言意識してか早口だった。紡は聞き取っていた。グラスの氷がかしゃかしゃ言い出したところを合図に立ち上がった。今度こそ、帰らないと親に何言われるかわからない。天羽くんがふっとため息をついて出口に向かおうとし、自動ドアの前で立ち止まった。まぬけにドアが開いて、すぐに閉まった。

「あ、あの、先生」

——なにどもっているんだか。

少し遅れて天羽くんの背に追いついた紡は、見覚えある深紅のジャンパースカートに派手なフリルブラウス、髪にはおそろいの赤レースゴムカチューシャ姿のど派手な格好の女性を認めた。ついでに、向かい合っている銀縁めがねの細面、アイスクャンディー野郎もセットで見つけた。

「遅くなったね。まず出ようか」

「あの人」は、お姉ちゃんとふたり、目と目で合図した後立ち上がった。

肩に手を乗せて、紡にほおずりしようとしたのは、お姉ちゃんだ。

「ごめんねセシル。母さんから電話があって、今日うちにセシルが泊るってことにしておいたのよ。だから、今日は泊ってってね」

「泊るって、いきなり言われても、お姉ちゃん」

男子ふたりに聞かれるのは恥ずかしい。店を出た後、おおっぴらに紡のほっぺたを指先ですりすりしながら、お姉ちゃんは笑顔でささやいた。夜道はまだ明るかった。目の前に坊主頭ながらもなかなか男前の天羽くんがいるというのにだ。しかも、一種の契約を結んだあとだっていうのに。

「ほら、この前、落語を聞きにいくって言ってたでしょ。母さんがヒステリー起こして、またセシルがふらふらしているからもう外に出さないってわめいてたのよ。だから、それは私がこれから迎えに行くからいいでしょってことにしておいたのよ。で、今ね、皇人さんと一緒にあちらこちらの寄席関係全部当たってもらって、ここじゃないかってことで待ち伏せしてたの。早かったのね。もっと早く声かければ、お食事おごってあげた、の、に！」

しっかりメイクも夜用に濃い目。髪もたっぷりカールしている。一緒にいる「あの人」は、生成りのスーツにノーネクタイ。カフスだけがぴかぴか銀に光っていた。紡とお姉ちゃんの三歩くらい前で、なにやら男同士の話をしている。さっきの落語の噺ではなさそうだ。

「じゃあ、セシル連れて行くからね！ 皇人さーん、お先に帰りまーす！」

——なにが皇人さんよ。

こう言う時、殺意ってものが芽生えるんだと思う。振り返り、夜道、「あの人」と天羽くんが内側から顔を覗かせた。立ち止まった紡に近づいてきた。

「紡ちゃん、そういうわけだ。今日はこちらに泊っていきなさい。僕は天羽くんを自宅まで送って

いくよ」

——今度は何吹き込まれるんだろう。いったい。

天羽くんが頭をかきながらも、悪びれることなく、

「じゃあ、今日のこと、俺、OKだってことで」

しっかりと紡の顔をにらみつけるようにして、つぶやいた。うつむかなかった。

「わかったわ。じゃあ月曜日」

唇左端のえくぼだけ、奥歯をかみ締めてつくり、耳もとで手をふるポーズをした。振りはず、指を思いっきりひらいたまま、頬の側に寄せた。

「せば、先生、なにとぞよろしく、おねがいしまーあーすう！」

どうやら天羽くんの守備範囲は、落語、漫才、演芸にとどまらず、歌舞伎も含んでいるらしい。口上か。空恐ろしい男だ。

紡の隣りでお姉ちゃんが、天羽くんの隣りで「あの人」が、やわらかく微笑んでいた。お姉ちゃんはきっと、ふたりっきりになったとたん、腹を抱えてもだえ爆笑するだろうけれども、それは紡しか知らないことだ。

お姉ちゃんの家は、六畳の和室が二部屋、それにダイニングキッチン。ここまでプライバシーが保たれなくていいんだろうか、と思うのだけど、全くその点は問題がないらしかった。「あの人」が出張でお出かけしている時だけ、泊めてもらったことはあるけれど今日はちゃんと戻ってくるみたいだ。気が重い。ただでさえ担任のうちだっていうのに。

「ねえセシル、この前私が買ってあげた服、母さんに見られたんだって？」

聴かれたくない、うんざりだ。玄関で靴を脱ぎ捨てて、お姉ちゃん側の部屋に入った。ベットじゃないのが意外だった。大きなたんすだけがどんと居座っている。トリコロールカラーでまとめられているけれども、やっぱりところどころフリルがカーテンや枕、ベットシーツにあしらわれていていかにもお姉ちゃんらしかった。

三つ折りに畳んだままの敷布団に座り込んだ。ポシェットを投げ捨てた。

「もううんざり」

「あの人に日本語通じることを期待しちゃだめよ。セシル、あの人たちとは違う人種なんだと思って割り切るしかないわよ。母さんたちの前では、ださい中学生のままでいて、私とか彼氏の前でのみ見せつける、って割り切らないとだめよ。ほんっと、私も思ったわよ。結婚式当日まで、ぐちぐち引き出物について文句言うんだもの」

最後まで和装の花嫁衣裳にこだわった両親を振り切り、お姉ちゃんはお気に入りブランド特注のドレス一枚で通した。「あの人」も「あの人」のご両親もその辺はかまわない、と言ってくれたらしい。本当だったらレストランウイディングをしたかったらしいけれど、親戚筋に申しわけがたたないということで古臭い結婚式場で、つまらない進行のもと、執り行われた。センス良く、しゃれたこだわりのあるお姉ちゃんにとって、引き出物の中に鯛とお赤飯が入ってしまったことは、恥、以外の何ものでもなかったらしい。最後の最後までお姉ちゃんは両親のやり方を許せなかったようだ。



「わかってる」

「そしてお金だけもらっとくのよ。自分の言うことさえ聞いてくれれば、いくらでもお金出してくれる人たちなんだから、利用できるところは利用しなくちゃ」

紡の頭をそのまま、抱くようにして。

「世の中、頭のいい人が勝ちなんだからね。うまあく、逃げなくちゃ」

——わかってるってば。

心地よい感触にとろとろしそうで、猫感覚でころんと横たわった。お姉ちゃんはちゃんと畳を掃除しているらしい。痒くない。

「もう、猫みたいなんだからあ、セシルのこと、猫にしてうちに置いときたい」

「あの人おっぱらってくれないの」

どうしてかわからない。おなか为空いたのと、身体が冷えて落ち着かないのか。ごろごろと転がった。お姉ちゃんがしゃがみこみ、「ほらほら」とおなかをくすぐった。

「セシルだって、好きな人がいるくせに」

「お姉ちゃん答えになってない！」

「じゃああの男の子だあれ？」

——よりに寄って、天羽くん見られちゃったのはまずかった。

デートはするけれども、所詮友だち。気まぐれ。そのつもりだった。なのに、よりによってこの二人に見られてしまったとは不覚。さらに言うなら、「あの人」の中に教師・担任としてのスイッチが入ってしまったらしい。最大の誤算。

「結構、がっちりしていて、たくましそうじゃない？」

「悪くはないかもね」

「あら、セシル、お気に入り？」

「まさか。私、お姉ちゃんと一緒だって言ったでしょ」

背中をつけたままさらにごろんごろん。

「私は、男子を好きになんてならないわ」

お姉ちゃんは笑って部屋を出て行った。

「ジュース持ってくるね。なんかお菓子食べる？」

「おなか空いちゃった。ご飯の方がいいな」

古い畳のかすかな匂いをかぎながら、しばらく紡は横たわったままでいた。天井の染みも、洋服とバック以外、ほとんど何も置いていない部屋と。たぶん、夫婦生活は「あの人」の部屋で営んでいるのだろう。お姉ちゃんの空気を「あの人」も崩すことはできないらしい。慰めになって、眠くなった。

——それにしてもどうしようかなあ。

天羽くんのことだ。

落語会に誘われた段階でこういう展開になるという予想はしていた。もともと、紡を評議委員として選出したい、と言い出す前から気にはなっていた。男子の中で頭のいい奴は嫌いじゃなか

ったし、話の面白い天羽くんはかなり上位ランクに位置していたから。紡がもし、女子好みでなかったらOKしていた可能性はある。

一緒にしゃべる程度の付き合いだったら、こちらの方こそ望むところだ。学校外限定。

しかし、話をしてみると天羽くんの望みは、「学校内での公認カップル」になりたいということらしい。もちろん「付き合い」というものがそういうこと中心である以上、ごもつともだ。どうせ女子たちとの付き合いなんてする気ないし、適当に流しておけばいい。

簡単に済む、女子たちの嫉妬心。やっかみ、それはかまわない。問題なのは西月さんひとりだけだろう。

——頭の悪い子は嫌いなのよ。

つぶやいてみた。お姉ちゃんと自分の口癖だった。

評議委員会というのが、妙に団結力強く、部活のようなねちっこい付き合いのある場所だとは聞いていた。評議に限らず、他の委員会すべてそうらしい。だからできるだけ関係持たないようにしてきた。一度委員に選出されたら、よっぽどのことがない限り同じ面子で三年間まっとうする。もし替えたい場合は、今回の天羽くんがしたように、徹底して裏工作をしたり、手を回したり、担任に頼み込んだりしなくてはならない。

まあ、一度付き合っただけ泥沼の破局を迎えた相手と、同じ委員になりたくない気持ちもわからなくはない。その点相手の子も納得してはいたのだろう。

——ま、西月さんもその点は、納得しているみたいね。

一年から二年冬休みまで、天羽・西月コンビの評議委員は仲良しだった。いや、仲が良すぎるくらいだった。いつも

「ねえ、小春ちゃん、今度の宿泊研修なんやけど、どないしようかいなあ」

「なあに、下手な関西弁使ってるのよお！ 全く、困った相方やねえ」

「やんやんやんやん、そんなこといわんといてやねん」

くっついてはひそひそおしゃべりしていたものだった。いつから付き合い始めたのかはふたりしか知らないだろうから突っ込みはしない。が、冬休みが終わった頃から、呼び方が「小春ちゃん」から「西月」と呼び捨てになり、全くといっていいほど話し掛けることもなくなり、それどころか敵意をあらわにするような態度を取り始めた。もともと西月さんは

「コネクラスと言われないようにがんばろう！」

と掛け声ばかりかけていて、クラスの男子たちからはうざったがられていた。西月さん本人が、とある有名な大学教授の孫娘とかで、成績とにかく無試験で入ってきたことは、紡がしゃべらなくても自然と広まっていた暗黙の了解だった。他に、男女どちらからも嫌われている、ある男子のことをいい子ぶってかばったりするところなんかも、「偽善者」っぽくてうっとおしいとよく思われていたようだ。

「そんなかばいたいなら付き合えよ。守ってやれば？」

付き合う気もなかったのは明白だ。天羽くんが仲良くしてくれていたから、うまくいっていた

ようなものであり、その庇護がなくなってしまった以上、三学期以降の評価下落は必然といえるだろう。

しかしまあ、それも紡には関係ない。女子たちにも直接迷惑がかからなければ……女子の多くは「同情・慰め」のどちらかを振りまいておけば西月さんとの交流に問題は生じない、と知っている。だから適度に付き合いを続けておいて、無視しておこう。頭のいい行動だった。

——評議の仕事は適当にやっておくにしても、天羽くんと堂々と付き合いとなると、西月さんの出かたが見ものだわ。

怖い、とは思わない。弱い犬ほどほえるもの。お姉ちゃんと紡の経験で分かっている。

適当にあしらって、たまに一言、

「どうして天羽くんとうまくいかないの」

っぼいことを伝えておけば、すぐに泣くか黙るかするだろう。どうして天羽くんが西月さんを一気に嫌ってしまったのか、なんとなく感覚として分かるので、女子特有の同情をするつもりはさらさらない。ああいう行動取られたら、紡が男だったとしても、そりゃあ逃げたくなるだろう。同士としてそう感じる。

——男としては当然、そう感じるんじゃないかと思うわ。

きっとライバルとして見据えているに違いない。もしかしたら天羽くんの気持ちが元に戻るかもしれないと思っているに違いない。クラスの女子たちも味方なんだし、気まぐれもきっと時間が立てば、と思っているに違いない。

——そういうもんじゃないわ。西月さん。

お姉ちゃんが電子レンジになにかものを入れている音が聞こえる。

——私だったら、天羽くんと同じことするわ。あんなべったりされたら、あんなにしつこくしがみつかれたら、ね。

「紡ちゃん、今日は十時に一緒に来てもらいたいところがあります」

義理の妹にも関わらず、あさりの味噌汁をすすりながら敬語を遣って語りかけるのは「あの人」だ。結局帰ったのは午前様だったらしい。まさか天羽くんのうちで食事をご馳走になっていたのではないだろうか。その辺、確認したいところだったけれども、十二時以降おきてられない紡にはわからない。お姉ちゃんがいそいそとご飯をよそっていた。なんと、しっかり二杯おかわりしている。

「別に私関係ないし」

「関係あることです。天羽くんと話をする予定です」

「天羽くん？」

お姉ちゃんがすっとんきょうな声を上げた。

「セシルの彼氏のこと？」

「決め付けるのは早いわよそれは」

たしなめるように無表情に言い返した。

「紡ちゃんと同じ委員ということもあって、いろいろクラス運営について話したいことがあるそうですよ。紡ちゃん。今日は僕も付き合います。ゆっくり、今まで言いたかったことを話してくればいいですよ」

「別に話すことはないです」

緑色の丸っこい箸をかみながら、紡は目を伏せたまま答えた。

「天羽くんも昨日話したし、学校で間に合うことではないんですか」

「いや、天羽くんの方からぜひに、とのご指名ですよ」

そっと上目遣いで様子をうかがってみる。お姉ちゃんの向かって左隣、学校に行くまではめがねをかけないのが習慣らしい。ずいぶん、なまっちょろくて細おもて。誰かに似ているような気がした。まゆ毛も薄い。ちゃんとまゆ墨つけてあげないとまずいじゃないだろうか、お姉ちゃん。運勢悪くなるって言っているし。教師面なのか、それとも義理兄なのか。

——どうやら、後者の意識と見た。

唇にかすかな笑みを浮かべ、目が合った後こっくりと頷いた。

「終わったら、僕がお家までついていきます。ちゃんとかの子とも話のつじつま合わせておきますので、怒られないですむようにしますから、安心してください」

この人はもともと、べたべたした付き合いを好む人ではなさそうだった。お姉ちゃんの話聞いていてもそう思う。親戚関連の付き合い……冠婚葬祭……ではあたりさわりのない言葉で挨拶をする程度。お酒を飲んでも全く乱れない。いつも話は聞き役に回り、要領よく途中で席を立っているという。つまりはクラスに対して取っている態度とみな同じということだろう。こういう地味で影の薄い人をなぜ、お見合いとはいえお姉ちゃんは選んでしまったのだろう。派手に遊んでも怒られないと踏んだからだろうか。そうとしか思えない。

「わかりました」

一言だけ答えると、紡は茶碗を台所に下げた。お姉ちゃんに任せておいたらきっと、洗物なんていつまでたってもしないだろうから、自分で洗剤つけてきゅっきゅと洗っておいた。

——いったい何考えてるんだらう。

天羽くんとどんな話をしたかによる。あのおちゃらけ少年は、はたして紡に付き合いをかけて旨、白状したのだろうか。一応は評議委員三年目だし、西月さんの問題もからんでいるから、普通の先生にだったら相談してもおかしくない。そう、D組の菱本先生のように、熱血漢で生徒のことばかり考えているうっとおしい男だったら、きっと。

でも、「あの人」は「あの人」のままだ。

三年目、紡も目を凝らしてしっぽを捕まえようとしているけれども、全く見つからない。可もなく不可もなく、おだやかに話をし、将来について尋ね、たまに校則違反について諭す。その程度だ。球技大会で応援するわけでもない、ジャージも着ないで、いつも通りの白衣姿で結果報告をした後、

「よくがんばったね、ご苦労様」

とねぎらうにとどまる。

——クラスをこれからどうまとめるか、そして、どうごまかすか。

紡からしたら、西月さんが評議から降ろされた以上、暗黙の了解たる「A組縁故クラス」ということを無理に隠さないでもすむから、楽になるのではという気がした。天羽くんだって、確か遠縁に有名な書道家さんがいらして、その人が多額の寄付を行ったとかで……それ以前に書道って儲かるのか？と紡は疑問に思ったのだが……かなり入試時優遇してもらったはずである。「寄付金」これは縁故の中で一番利く。他にも音楽家、会社社長、作家、大学教授、医師、などなどいわゆる「エリート」と思われている層が両親のどちらかにいるということも聞いている。肩書きプラス、寄付金の額。

——みんなわかりきっていることじゃないの。

だったら無理に隠さないで開き直すことをお勧めしたい。

せっかく「エリート」の集まりと思われているのなら立場をとことん利用すればいい。紡としてはは どうでもい いけれど、必死に「コネじゃないって証明してください」と騒がなくなつていい。どうせコネクラスとばれているのだったら、適度に手抜きして、適度に努力したふりをして通せばいい。ある程度の点数と、従順さ、それさえきっちりしておけば、高校、うまくすれば大学までエスカレーター式で進めるだろう。逃げではなく、チャンスをつかんだだけのこと。

ただし「コネ」問題は氷山の一角に過ぎないということも、紡にはよくわかっている。

問題は女子たちだ。自分たちが他のB～D組連中と違うランク付けにあることを受け入れようとしないうんざりだ。面倒だ。紡のようにいいかげんでいいじゃないの、と笑う人間がどうも目障りらしい。きっと西月さんは、評議降ろされた段階で懸命に訴えるだろう。コネクラスと呼ばせない、努力しなくちゃ！と。

——コネでいいじゃないの。そういう後ろ盾があるのは本当のこと。

昨夜、天羽くんと話をしていると思った。つくづく彼もうんざりしているのだという匂いがぷんぷんしていた。二年間も仲良くしていた女子に対してあそこまで嫌悪の情を催すとは、よっぽどべったりされるのががまんでできなかったのだろう。けど男ってそういうものだ。

——となると、月曜以降、天羽くんがクラスで交際記者会見を行うってわけか。どうでもいい。どうせ女子たちがまた文句をいいにやってくる程度。

これこそ、兄が担任という「後ろ盾」を使ってさらっと流せばいい。幸い紡は、多少女子たちにかみつかれようが、悪口言われようが、全然感じない性格なのだ。時間を浪費されるのと噛み付かれることが面倒なだけだ。

昨日と同じワンピースで行こうとしたら、お姉ちゃんに止められた。いなかっぽい、ピンクニットのアンサンブルと茶色のフレアスカートを手渡された。

「お母さんがぶち切れないように、最善の努力をしなくちゃだめよ。セシル」

ごもつとも。お姉ちゃん、やっぱり賢い。

黒い楕円形のポシェットだけ斜めかけした格好を鏡に映すと、なんだか中学生そのものだった。西月さんとかクラスの女子がしていても変でないように見えて、一気に重くなった。似合わないさすぎる。服の柔らかい感じと、頭のさっぱり加減。バラエティ番組で大人が小学生の役をやるためにランドセルを背負っている、そんな感じだった。

「紡ちゃん、では、行こうか」

隣の部屋で身支度した「あの人」は、めがねをしっかりとかけていた。日曜なのに、やはりこの人はスーツが好きなのだろうか。少し黄土色がかかったスーツに、白いワイシャツ、ネクタイはさすがにしていない。

「私もついていっちゃだめ？」

「だめだよ。今日はうちにいなさい」

柔らかい口調だが、うむを言わせない。お姉ちゃんがむくれて、自分の部屋に入ってしまった。戸が閉まる直前にもう一度顔を出し、

「私の顔、もっかい見たかったら、いつもの買ってきてよ！」

ばたんと今度こそ、きっちり閉めた。

——何買ってもらうんだろう。

痴話げんかなのか、それとも勝手にむくれたんだろうか。その辺、紡にはわからない。ただ、どう考えても「あの人」は怒っている風に見えなかった。苦笑いしつつ靴べらで艶やかな靴をはき、財布の所持を確認した。中身もちらっと覗いていた。お姉ちゃんの顔を見たいから、それを買ってくるつもりなのだろう。

朝十時過ぎると、近所の商店街も大型スーパーも店開きする。流行のメロディーをもこもこのBGMにして、街全体に流れた。時折きゅうっと雑音が空に響き渡った。春の青空の下、空気はほこりっぽかった。パンジーの鉢植えや、チューリップの花、時折曲がり角のところには花束が積み上げられた場所もあり。街路樹の周りはずいぶんと華やいでいた。

「どこで待ち合わせしているんですか」

「ほら、もう来ている。やはり早いな」

静かに微笑み、「あの人」は手を挙げた。合図をしたところ、馬がにんじん見つけた格好でダッシュして、坊主頭の誰かさんが駆けてきた。笑顔でいっぱい。天羽くんと「あの人」同士で、笑顔の交換をしているのが笑えた。

「昨日は、すんませんっした！」

「いや、こちらこそ、わざわざご馳走してくれてありがとう」

——ごちそう？

紡のことを忘れたような顔をして、しばし「あの人」と話続けている。昨夜はあれだけしつこくアプローチしてきたのを忘れたような顔してだった。どことなく、おなかのあたりがむずむずした。生理が近いせいかもしれない。

「では、今日はゆっくりできるところがいいですね。まだ十時で食事には早いから、ファミリーレストランあたりでゆっくり腰を据えましょうか」

——もう少しカッコいいとこの方がいいのに。

お姉ちゃんと一緒にいたら「アルベンチーヌ」を断固お勧めしていたのに、残念なことである。大きく頷いて舌なめずりした天羽くんは、グリーンスタジャンに手をつっこみ、ジーンズから小銭入れを出した。やっと紡の視線に気付いたらしい。

「あ、近江ちゃん、昨日、ごめんな」

「別にどうでもいいんだけど」

「ううんっと、うん、やっぱ、ごめんな」

——昨日盛り上がりすぎたから後悔してるんかしら。　まあそんなもんだろうと思っていたから、紡は顔色変えずに答えた。

「まあ夜は、思わぬ言葉を発する時だってあるものよ」

「思わぬ言葉って、え、俺なんか悪いこと言ったっけ？」

「覚えてないのね」

ほんの少しでも、天羽くんより多く考えていたとしたら、そっちの方が悔しい。紡はあまり話題をひっぱらず、顎で「あの人」をさした。

「今日、私に話したいことがあるって何？ 昨日の落語のネタについてだったら、私まだ勉強中の身の上だから、話してもどうしようもないわよ」

「いや、あの、そういうわけじゃ」

「それになんで、『先生』付き添いなわけ」

「近江ちゃん、怒ってる？」

「別に怒ってなんかないけど」

——あんたがどういうことを「あの人」に話したかによるわね。

まあ、もし紡の想像していたことを話していたとしても、それほど腹を立てたりはしない。どうでもいい。さらりと流せばそれでいい。

天羽くんは小銭入れの中をなんとか覗き込むとため息を吐いた。

「ああ、金欠病」

「昨日使いすぎたからでしょ」

「それもこれも近江ちゃんのせいですって、おねえさん」

「木戸銭千二百円というのはなかなかね。ご招待いただきありがとうございます」

「違う、違うって」

先頭を歩いているのは「あの人」いつのまにかふたりっきりで語り合える環境を提供してくれているらしい。どうせファミリーレストランに到着したら、いやおうなしに三つ巴になるのだからありがたいことだ。

「これ、合うかなあ、ほいな」

何かを指でちょいちょい探している。小銭ではなさそうだ。

「あー、めっけ。はい、これでざんす」

——どこのネタだろうかしら。

紡の腕をつつき、手を出すようなしぐさをし、もう一度背広の背中が振り向かないのを確認した後、

「これ、ささやかながら、気持ちでございます。どうぞお納めくださいませ、おねーさん」

——だからどこがおねえさんなのよ。

天羽くんが紡の手の平に乗せたのは、白い透明ビーズと真珠風の大きめビーズが組み合わさった指輪だった。いわゆる「ビーズ細工」。クラスの女子たちの間ではやっているものだった。真珠に見立てたつやのあるビーズが二重の丸で包まれていて、一重のビーズで指をつつむ。色ビーズは一切使っていないので、遠めから観ると本物に見えるかもしれない。きゃあ、可愛いとは意地でも言わない。紡は摘み上げ、左薬指にはめてみた。少しゆるめだけど手を振っても落ちるようなことはなさそうだ。細い針金を千切った後、少しちくっとするのが難だけど、なかなかいい。

「天羽くん、感謝。やろうと思えば一儲けできるわね」

「そうっすか？ なかなかっすか？」

「女子こういうの好きよね。私もまんざらじゃないわ」

「近江ちゃんはあまりがちゃがちゃした派手目なもの好きじゃねえだろうな、って思ってたして」

へらへらと軽い雰囲気をかもし出そうとしているのが受ける。

「で、まさかと思うけれど、それでただ今金欠って奴？」

「いや、あの、厳密にいうと近江ちゃんのせいではないってことがいま判明した」

「はあ？」

よくわからないことを言う天羽くんである。

「いろいろな事情で、俺、ビーズ細工のキットを買わされてたんだなあ。これが」

「キットってことは、これ自作品？」

てっきり、近くの雑貨屋で三百円くらいのを買ったんだと思っていた。天羽くんは短い髪をかきながらにやにやした。



「そ、俺ってなかなか器用だろ？」

「ちゃんと粒も揃っているし、さすがよね」

風が足下を吹き抜け、スカートがめくれそうになった。押えて思わず、

「モンローウオークしそうだわ」

つぶやいた。

「あ、俺見たい」

——馬鹿か。

紡は肩をすくめて後、ファミリーレストランに到着するまで口を利かなかった。見せるんだっ  
たらこちらだって、代金取るってもんだ。

どうやら「あの人」……狩野皇人先生……はふたりを隅っこの一番落ち着ける席に誘い、とこ  
とんおしゃべりさせる心持らしい。

「三名様ですか？」

と、ウエートレスに尋ねられた時、

「できれば、あまり人気のないところがいいのですが。それと、禁煙で」

午前だとまだ、昼食を食べに来る連中もいない。いい席が空いている。というのが理由だ  
という。

「さすがあ、先生、あったまい！」

それには答えず、「あの人」は紡を奥の窓際に座るよう指示し、真向かいに天羽くん、その隣  
りに自分が位置するように席を取った。

「とりあえずは飲み物を、好きなものを」

「あ、俺今日、金欠なんで」

「天羽くん、今日はね」

教室での表情と変わらず静かな笑みでもって、「あの人」は紡を見た後答えた。

「担任というよりも、紡ちゃんのお兄さんだと考えてほしい。だから、今日は僕がきちんとご馳  
走します。安心してください」

——あんたなんかと兄妹になんてなりたくない！

吐き出したいが、さすがにお姉ちゃんと二人きりでもない限り言えない。

「それでは、オレンジジュースと、レモンスカッシュと、あとウーロン茶を」

目と目を合わせ、天羽くんと紡は目を合わせずに窓べを眺めた。下の駐車場には、黒い車がた  
くさん入っている。なんだか結構いい車ばかりだ。

「この辺、慢性的にベンツが走っているのよね」

ひとりごとつぶやくと、やっぱり反応するのがひとり。

「ひええ、金持ち」

「天羽くんちも、ベンツかメルセゼス、持ってないの？」

「ただいま父ちゃん、免停中」

「ご愁傷様」

人には言いたくないことだっているいろいろあるはずなのである。

ジュースが到着し、それなりに味わった後、男ふたりがいきなり目と目で意志疎通し始めた。こいつらテレパシー持っているんだろうか。妙ににやついている天羽くんと、相変わらず静かに頷くだけの「あの人」と。意味不明のテレパシー交換を終わらせた後、天羽くんはいきなり姿勢を正した。両手を膝の置いた。少し前かがみになった。

「さて」

「はあ」

「今日の本題と、入らせていただきやす」

「なんなりとどうぞ」

紡はまだストローをくわえたままでいた。

「つまりですな」

「はあ」

「なんだよ近江ちゃんその気のない返事。俺だって今日は」

「だって私、本題もなにも、今日なぜ天羽くんと二日連続して会わなければならないのか、話聞いていないわよ。そうですよね、先生」

いやみかもしれないが、実際そうなのだからしかたない。

「その本題は、これから天羽くんが話してくれますよ」

コーヒーを一口くらいしかすすっていない「あの人」は、これから天羽くんが何を話そうとしているか知っているのだろう。落ち着きはらっている。

「ということなら、話してくださいな」

「うっわー、このたるたる感、いったいなんだよお、近江ちゃん、これから一応は俺と評議委員をやっていくわけだからさ。三年A組の、いわゆる『コネ』の悲劇を背負った運命共同体として、がんばらなくっちゃ！ってな」「別に、『コネ』の悲劇運命共同体ってこともないだろうけど」

——やっぱり、西月さんとの決裂はこの辺にあるのかな。

だんだんおもしろくなってきた。悪いがやはり、他人の不幸は蜜の味、なのである。

「いいわ、私、一度話聞いたら、たぶん忘れないと思うから、天羽くんの抱えてきた歴史の数々、教えてちょうだいよ」

咽に通るレモンスカッシュのすっぱさと炭酸のぴりぴり感。悪いけど、ストローはほとんど口から離さないまま、紡は頬杖をついた。礼儀知らず？ そんなの知らない。お姉ちゃんと一緒の時は、いつもこうやっていたんだから。

「紡ちゃん、頬杖だけは止めた方がいいよ」

——ああ、わかってるってば。

返事をせず、意地でも口からストローを話さず、肘だけ下ろした。

天羽くんのお言葉はお笑いを意識しつつも、ゆっくり始まった。

「狩野先生もいることだから、この際ぶっちゃけたこと言っちゃまうとですねえ。一部において言われている『コネ』もとい『縁故』クラスであるわがA組、やたらといじいじしていることは認めなくちゃあなんないと、俺は思うわけっす。すみませんなあ」

何も言わず、笑顔で頷く目の前の人、ひとり。

「けど、仕込みの問題はもう問題なんで、どうでもいいっしょ、ってのが俺の見解でもあるわけです。とある人のおっしゃるように、コネ疑惑を晴らそうと騒げば騒ぐほど、俺たちのすねの傷がしくしく痛んでしまって、悪循環に陥らんとも限りません。で、俺としてはですねえ、近江ちゃん。相棒としてお願いしたいわけです」

「何を？」

軽く答えたのを了解と取ったらしく、天羽くんはにやにやしなながらテーブルに近づいてきた。「一緒に、『ほんとのことなんだからそんなのどうでもいいやん、ねえ、あんた』と夫婦漫才してほしいんですわ。まあ俺としてはぼけを、近江ちゃんには突っ込みを担当していただきたいんですが、如何でしょう」

「別に、ぼけもつつこみもできないけど、天羽くんの言うのはもっともよね」

もごもご口の中でレモン味をなめながら答えた。やる気なさげでも返事はちゃんとした。

「おお、賛成っすか！ さっすがあ、近江ちゃん、あったまいい」

ナンバーワンの誉め言葉だ。紡はストローから唇を離した。

「今までの二年間というものの、俺も必死に、『うんこ』もとい『えんこ』入学って部分を隠しあってここまで来たわけですが、よく考えりゃあ、みな多かれ少なかれ、そういう部分持ってますしなあ。今更隠したってどうすることもできねえし、近江ちゃんみたいにちゃんと努力して『ネコ』もとい『コネ』返上している人もいる。A組も、まんざら恥のクラスではないんでないかなあと俺は思うんですよね、先生」

困ったときにはコーヒーを飲んでごまかそうとするのか。「あの人」は。

「なんであの学校、露骨にそういうのが分かるようなクラス分けしたのか、謎よね」

——しかも、担任まで、義理の兄妹。組み合わせにするなんてね。

「先生、今の二年からはそうじゃないんでしょお」

返事をしたくないだろうが、コーヒーも無限にあるわけではない。

「いろいろ、事情を持っている人たちはいるけれども、ひとくくりに『コネ』というのは違うのではという気がしますよ、天羽くん」

「ってか、それしか言いようねえもん」

「天羽くんには、もっと、重要な相談があるのではないですか」 コーヒーカップの中を空にして、狩野先生……。「あの人」はゆっくりと紡に視線を置いた。「クラスメイトに、自分のプライドを持つように促すのは悪いことではありません。ただ、誰もがそれを望んでいるわけでもないし、入学時の出来事を思い出す ことによってさらに傷つく人も中にはいるのだ、ということをお忘れしないでほしいと思うのですが、いかがですか。すみません、コーヒーのお代わりをお願いします」

——これから今日何倍くらいコーヒー飲むつもりなんだろう。

紡は氷の部分がまるみえになったグラスを手から離した。

「重要な相談、やだなあ、先生ったら、もう、エッチ」

——理解できない。　とはいえわからなくても面白ければいい。女子でそういうところに達した子は、残念ながら、誰もいない。

「でですね、近江ちゃん、お兄さんからお許しも出たことだし、一席口上をつかまつりて候！」

「元ネタはどこから」

それには答えず、天羽くんは両手をテーブルに載せ、頭を下げ、ゆっくり上げた。真っ正面から見つめた。

「正々堂々、お付き合いさせていただきます、よろしゅうお願いもうしあげます！」

——昨日の続きかしら。

左手の薬指をちらりと見た。ビーズのにせ真珠がうすい影を持って光っていた。

「先生、これでいいですか？　満足っすか？」

何度も言われていると、耳が麻痺してくる。赤くなるでもない、ドキドキするでもない、ただため息ばかりだ。

「だから何度も言ってるでしょ。私の好みはアブノーマルなんだから」

「それは承知のすけ。何度も俺も言ってるとおりっすよん」

「天羽くんも物好きよねえ」

「あの人」は顔がほころぶのを隠そうとしなかった。やっぱり、何か飲み物がほしくてメニューを手に取った。

「ジュースよりも、そろそろ何か食べようか」

——え、これも奢り？

顔を合わせてふたりで合図しあった。あらら、あっさりと目と目の意思疎通、できるもんじゃないか。やっぱり天羽くんは悪くない。

しかしながら、自分の……義理とはいえ……妹と、自分の教え子がいわゆるふつうの「お付き合い」をするということだ。冷静に眺め、しかも応援するっていうのは、どういう神経しているんだろうか。あらためて紡は目の前の「あの人」の底知れなさを感じた。お姉ちゃんもお見合いの時、こんな気持ちになったんだろうか。今まだ、どうしてお姉ちゃんが「あの人」を選んだのか、メンタルの理由について全く聞き出していない。単なる「お見合いでしかたなく。自由がききそうな相手だったから」が表向きの声明だが、なんだかそれだけではなさそうな気がする。

。

「でも、担任の先生がいる以上、清く正しく美しいお付き合いよね」

しばらくは雑談にふけていた。なんだか同じことばかり聞かされて、紡もいいかげん飽きてきた。まだ一時間くらいしか経っていないのに。メニューを決めるのも面倒なので、「あの人」に任せるところ、なんとハンバーグステーキのセットが出てきた。まだ朝ご飯も腹にもたれているのに、重たいったらない。少しずつ切り分けて食べた。

「清く正しいかどうかはわかりませんが、男子と女子が親しい友だちとなって話をするのはいい

ことですよ。紡ちゃん」

学校内では「近江さん」と呼ぶのが普通なのだが、「あの人」はそういうところが意外といいかげんだ。お姉ちゃんと一緒に、もしくはこうやって「紡ちゃんのお兄さん」というのをアピールする時はおおっぴらに「紡ちゃん」なんだから、この人はどのへんで意識わけしているのだろうか。

「先生、中学の時ってこういうこと、してた？」

天羽くんの質問にも、笑って答えない。同じハンバーグステーキだが、消化が早い早い。あっという間に黒い皿がからっぽだ。残りのフライドポテトをわびしくフォークでつついている。途中でギブアップし、紡は皿を半分残したまま通路側にずらした。

「少しおなかがこなれたら、今度はデザートを考えておいてくださいね」

——ふとらせるつもりかしら。

全く、わからない。二年間観察してきて、ちっとも見えない「あの人」の本性が。

お姉ちゃんを結婚に踏み切らせた理由が。

「俺も腹いっぱい、うわー、食べた食べた」

「おなかがいっぱいになったら、もうひとつ話すことを考えてください、天羽くん」

まだ何かあるのだろうか、なんだかおなかが張って苦しくて、紡は斜めに体を流した。

続ける「あの人」の言葉は、なんだか三年A組の担任に戻ってきているようだった。

「今、紡ちゃんは『清く正しく』と言いました。いわゆる『清く正しく』とはいろいろあるでしょうが今はそういうことを考えなくてもいいです。天羽くん、今、自分の中で、もし、迷いがあるのだったら今のうちに話をしておいた方がいいでしょう。もちろん今すぐではなくてもいいというのだったら、またあとでもいい。ただ、学校の中ではいろいろ差し障りのあることもあるだろうから、もしよければどうですか」

ゆっくり、染みるような言い方をした。

「学校で、かあ」

意味ありげな視線を送る天羽くん。また目と目で見詰め合っている。男同士、気持ち悪い。

「そうです。天羽くんにはもうひとつ、この前話してくれたことをしなくてはならないはずですよ。そうでないといつまでたっても、気持ちに陰が落ちたままですよ」——なによ、気持ちに陰って。いったい帰り道、何話してたんだか。

こういうとこだけ教師面されてもたまったもんじゃない。紡はもういちど頬杖をつきなおした。

「近江ちゃん、あのさ」

ゆっくりと、でもまっすぐに。

「俺、知っての通り、西月……さんと、付き合ってた別れた。で、その問題、まだ片付いてねえんだ」

「大変よね」

今までおちゃらけていた天羽くんとは思えないまなざしだった。紡の方から中和剤を混ぜてやりたくなるくらい、硬かった。

「これから、俺としてはきちんと、西月……さんにもちゃんと納得してもらえるような方法で、きちんと方をつける。俺なりに、人間らしく、きちんとまとめる。だから、近江ちゃん、俺」  
——こういうことをそそのかしてたってわけか、「あの人」は。

「あの人」は三杯目のコーヒーを注文している。

「天羽忠文という男を、じっくりと見てやってください。コネもなんもない、ただの男として、どんな人間かってこと、判断して、それからOKなりばいばいなり、決めてもらえればいいです」

「別に、そんな大げさなこと言わなくて」

なんだか自分まで本気にならなくちゃいけない強制力が働きそう。いやだ、だから「あの人」が一緒にいるのはいやだったんだ。紡はついた肘をぐりぐりと回した。

「西月さんと、きれいに決着つける自信、あるの？」

やっぱり肘をついたまま話すのが苦痛だった。両手を絡めて紡も真っ正面で尋ねた。

「わかんねえ」

「無理に約束なんてしない方がいいわよ」

「けど、今、やり方は考えてるし、近江ちゃんにも迷惑かからないですみ、西月……さんもうまくいって方法、計画してるんだ。だから、それまで待ってください」

「要は、私、いつも通り話していればいってことよね。たまに落語聞きに行くくらいで」

「あ、そりゃあもう！」

かすかに鼻でふんふん息を吐いている「あの人」は、きりっと一目、紡に教師らしい一言を告げた。

「行く時は必ず、僕かお姉さんにひとこと、どこの独演会なのか、誰の勉強会なのか、それとも市民会館でたまにやる寄席なのか、それを告げてから行くようにしてください。でないと昨日のように大騒ぎになりますよ。紡ちゃんが言わなくても、できれば天羽くん、君からも」

——やっぱりこの人、変、わかんない。

コーヒーゼリーが三人分運ばれてくるのと同時だった。いつのまにか、勝手に注文終わっていた。

三時半過ぎにファミリーレストランを出た。あまり遅くなるのもまずいし、紡もこれから母の雷が落ちるのを覚悟しなくてはならないし、ということで、店の前で別れた。

「じゃあ、今度学校で詳しく。あ、それと、今日のこの記者会見は、俺ひとりでやっつくから安心な」

「別にいいのに」

さっぱりと手を振った後、紡は今度、「あの人」に向き直った。

「今日をご馳走様でした。あの、私ひとりで帰れます」

「いや、僕もこれから紡ちゃんのうちに用事があるんだ」

「なんですか」

いつものかすかな笑みと一緒に、ゆっくりと。

「『アルベルチーナ』という喫茶店があるんだって？ そのチーズケーキが絶品なんだとかの子が話していた。買っていかなくてはならないんだ」

——なんで？ この人ってば、『アルベルチーナ』の存在、知ってたってわけ？

確かにケーキはどれもおいしい。女主人の手作りで、よくお姉ちゃんからフォークで食べさせてもらった。が、しかし。なぜ。『アルベルチーナ』は、女性のための恋語る場所のはず。なぜ、男である『あの人』が。

「わかりました。私、ひとりで帰ります！」 さっき天羽くんと話していた時の、たるたるした楽な気分が一気に抜けて、しらけた。

「紡ちゃん、じゃあこれからゆっくり行くよ」

追ってこず、「あの人」は微笑みながら歩き始めたようだった。何にも考えずに、ただお姉ちゃんに頼まれたケーキのことだけ考えて。街路樹が揺れるくらいまた風が吹きぬけた。モンローウオークしながら紡はおなかの中で怒鳴り散らした。

——お姉ちゃんの裏切り者！

——やっぱり、可愛い子を見るのは目の保養だわ。

教壇の上では、評議委員長がひたすら静かに説明をしつづけている。六月以降予定されている、他中学との合同交流会についてだった。三年なんだから修学旅行の準備もしなくてはならないだろうし、準備で忙しいはずなのに、この学校どこか抜けている。もちろん修学旅行のしおりづくりとか、バスの席順決めとか、その他各クラスそれぞれの事情を鑑みた指令などなど……その辺はみな天羽くんにかかせている……やるべきことはたくさんある。なのにだ。

——どうして、清坂さんみたいに可愛い子が、あんな彼氏選んだんだか。

三年A組となると、窓際の一番端っこに席がある。隣りの天羽くんは、両腕くんで、たまに汗をハンカチで拭いている。ゴールデンウィークが終わったばかりだっていうのに、おかしな話である。汗っかきなんだろうか。嘶家さんみたいに、手ぬぐい常備の方がよくないか？

紡は、使っていないポケットティッシュをまるのままぼんと置いた。

「なにそれ」

「見ている私も暑苦しくなってくるから、第三者の迷惑にならないうちに」

「サンキュ」

鼻で軽く笑い、頬杖をついた。

窓際の席には、てんとうむしが這っていた。真っ赤な背中に白い斑点。いかにも代表的な小さな虫。シャープの先でつついてひっくり返して遊んだ。

「と、いうことで、六月以降の合同交流会は、生徒から希望者を募り、ひと教室借りて行うというのはどうでしょうか」

天羽くんの追加情報、「あの人」……狩野先生から聞きだした情報、などなどをあわせてみると、この「合同交流会」というのは以下のことらしい。

公立の水鳥中学生徒会と青大附属中学評議委員会とは、去年の学校祭あたりから交流をはじめていたという。もちろん正式な交流ではないけれども、今年に入ってから活発に互いの学校を行き来し、六月の正式始動について準備を行ってきたという。

「立村が意地になって計画立てたからなあ」

——あの人も、ミルクキャンディーの血統ね。

顔色の冴えない、制服がだいぶぶかぶかしている肩の細さ。なんだか背中だけ見ると女子そのものだ。顔も、女子だったらきっと美少女だったんだろうが、男としてのよけいなあくが浮かんでいてすべて台無しだった。細い唇なんだけど、顔の骨が露骨に出すぎている。眼が細いのか大きいかわからないのは、二重なのに一重に見える顔だからだろうか。とにかく、評議委員長の顔を見るたび、「あの人」を連想するのは自分だけだろうか。

「なんでそんなことする必要あったわけなの」

「俺が原因」

ぽそっとつぶやく天羽くん。あまり聞かないでほしいのだろう。

「だけど、私、知ってるんだわ」



ちらっとヒントだけ残しておいた。もっと聞き足そうな天羽くんの顔だけど、この辺は他人様にも影響を与える言葉ばかりだから、口には出せない。

「なんだよ、思わせぶりな」

「ヒントは、E組」

「E組？」

——ははん、知らないな。

側にいる評議委員会顧問の先生はパイプ椅子に腰掛けて、足組んだまま居眠り中だ。永年評議委員会を守ってきた駒方先生が退職した後任だという。なりゆきでなっちゃったって感じだ。駒方先生は評議委員会に関して、何もしていないように見えて細かい仕事を全部引き受けてくれたらしい。天羽くんの言い方によるとそうだが、よくわからない。

「まあ、見てなさいよ。明日あたり衝撃的な発表があるはずよ」

立村評議委員長が二年の新井林くんを指名して、教壇の側に呼び出した。聞こえないように小声で話をしている。素直に頷いて、何かしゃべっている新井林くん、ずいぶん踏んぞりがえっているように見えた。後輩の取る態度じゃない。

「じゃねえよなあ」

天羽くん、少々ご機嫌斜め。唇への字口。

「堂々としていていいじゃないの」

「近江ちゃんはああいうタイプ好みかよ」

「別に」

紡はさっきのてんとうむしを探した。机の上に転がっていたのに、いつのまにか飛んでいってしまった。太陽のある方が虫は好きなのだ。

『かの子放送局』によれば、評議委員会における合同交流会関連重大発表は、今日明日中に行われるはずだという。

「あのね、あの人の日記読んでたら書いていたのよ」

二十九にもなって男のくせに、こまごま日記をつけるのもどうかと思う。机の引き出しに鍵をかけてしまってあるらしいが、お姉ちゃんの性格を知らないおめでたい人だとだけ言ってあげよう。お姉ちゃんは針金を鍵穴につっこんで、あっという間に開けてしまう。天才だ。職業間違えなくてよかった。

「なんかねえ、青大附属のE組構想なんだけど、いろいろ悶着あったらしいのよ。けど、ゴールデンウィーク明けにはひとまず形もついたということで、始動しようということになったみたい」

「へえ、さすが直情報」

——厳密にはそうでもないけどね。

「E組」……いわゆる「特別補習クラス」という表現が正しいだろう。青大附中では、試験選抜でもって「大学」もしくは「高校」の授業をいくつか受けることができる。大抵は英語や数学、その他芸術科目が中心だ。今、教壇の上で「交流会」について語っていた立村評議委員長も、

二年の頃から大学の英文科授業を取りに通っていると聞く。なぜかD組の生徒が多いのは、やたらと個性的な感性の持ち主が多いからではないかということである。

今までは各生徒の担任がまとめて面倒を見ていたのだが、近年、かなりその数が増えてきてひとりひとりにきめ細かな指導やアドバイスが出来ない状況になりつつある、のだそうだ。そのため、特別授業を受けている生徒たちをサポートするためのクラスを常時用意しようというのが、表向きの理由だ。さすがに現役の教師だと、自分のクラス関係や事務作業などで手一杯だということで、退職したばかりの駒方先生に講師として入ってもらい、教室をひとつ分けてもらって、そこで面倒を見てもらおうということになったらしい。以上、お姉ちゃんのお言葉だ。

「でもね、本当のことは知ってるわよねえ」

「困ったちゃんのはきだめ」

「ぴんぽーん」

お姉ちゃんも笑った。紡も笑った。まさにその通り。

さすがに今は、天羽くんには言わないで置いた。どうも天羽くんは、同学年の男子評議たちとかなり仲良しで、かなり打ち解けた話もしているらしい。立村評議委員長がどういう扱いをされているか、本当のことを聞かされたらきっと驚くだろう。別に紡としてはどうでもいいけれども、評議委員会で無理に波風立てる気はない。

「それでは、今日はこのあたりで終りにしたいのですが、よろしいですか」

顧問の先生がめんどくさそうに頷いた。気持ちはわかる。暑苦しい人がいるとうんざりだ。ミルクキャンディーのくせにだらだら溶けている。

「では、明日に三年の評議委員は、昼休み図書館に集まってください。一、二年は新井林の指示にしたがってください。以上です」

教壇から降り、軽く三年の男子連中……当然天羽くんも入っている……に目礼しながら、立村くんは前から四番目の席に戻った。隣りで麗しの美少女・清坂美里さんになにか話しかけている。美少女という称号はこの子のためにあるもの。別に紡は手を出す気、さらさらないけれども、ミルクキャンディーな彼にはもったいないをつくづく思う。

——ほんと、惜しいよなあ。性格もしゃきしゃきしているし、顔もすっきりしていて気持ちいい感じ。ねちっこさがないよね。ああいう子と一緒にクラスだったら、私もかなり、クラスでふつうの女子になっていたかもなあ。環境だわ。

肩に少したれるくらいの髪を、今日はきちんとそろえている。おかつぱ髪くらいしか見たことないけれども、もう少しみつ編みにするとか、前髪をわけて額を出したりすると、もっと響くものがあるだろうに。いや、思いっきり紡と同じくらいのベリーショートにしてみたら、思わぬ発見があるかも。できれば美容院に連れ込んで、紡好みのスタイルに変身させてあげたい。

評議委員に選ばれると聞かされた後、さっそく妄想させていただいたのはD組の女子評議委員、清坂さんのことだった。いっちゃあなんだが、紡にとっては青大附属に入学して唯一の目の保養だった。頭のいい可愛い子は貴重だ。他の三年女子評議ふたりが紡に対してつとんげんなのに対して、やっぱり清坂さんは親切に教えてくれる。天羽くんも驚いていた。

「なんかなあ、近江ちゃんほんと女子好みなんだよなあ。清坂見ている時の眼怖いもん」

「そういう趣味なんだからしょうがないじゃない」

ちゃんと最初から釘をさしてあるのでその点、楽だ。

——やっぱり天羽くんはあたりだったかもな。

紡はノートを閉じた。天羽くんが他の男子たちに二言三言交わした後、

「ほんじゃま、おさきに失礼いたしやす」

とおどけて挨拶をした。男子と女子、何となく分かれて集まっている中、D組の評議委員カップルだけが、

「お疲れ様」

と声をかけてくれた。やはり評議委員長とその彼女。紡についていろいろ考えることはあるのだろうが、礼儀は守ってくれている。

廊下を出て、天羽くんは時計をちらっと見た。デジタルの、やたらとごてごてしたものがくっついていてのものだった。きっと高い。男子ってこういうのがやたらと好きだ。

「重そうねえ」

「これ、計算機もついてるし、世界の時間もわかるんだぜ」

「ふうん、使ってるんだ」

「時差の計算とかもやれるしさあ」

なんの必要があるのか紡にはわからないので、聞き流しておいた。でも何も言わないのも悪いんで、

「修学旅行を海外にすれば、天羽くんが全部仕切るってことになるわけね。なかなかじゃないの」

さらっと答えてやった。

「あっそっか。修学旅行かあ。準備だなあそろそろ」

「悪いけど私、ほとんどわかんないからね」

「そりゃ困るぜおねえさん。相方なんだからその辺はお手伝いたのんまっせ！」

——やらないとまずいだろうなあ。まあいいわ。天羽くん、この調子だと自分でどんどんやってくれそうだしいいかな。

紡はやっぱりやる気なかった。

三年A組の教室に寄ってみた。誰かいたらさっさと素通りするつもりだったけれど、誰もいなかった。修学旅行の前にはまず中間試験があったり、高校進学時の選抜試験準備などもからんでたりして、いろいろと忙しい。さっさと帰ったのだろう。青大附中は入試がないから気楽で良いと言われるけれども、結構面倒なことは多いのだ。

「ちなみに、普通科？ それとも英語科？」

「英語科なんて地獄行きたくねえよ。あそこは立村くらいだろ、ストレートで受かるのってば」

「ああそうか、選抜試験の場合、英語の内申と配点が高いんだよね」

コネがどうのこうのなんて、些細なことに思えてくる。立村評議委員長は語学関連の能力がただもんではなく、たぶん現在五ヶ国語くらいはマスターしているのではと噂されている。その能

力をどこに使っているかという、主に洋楽のライナーノート翻訳だという。もったいない話である。

「まあいいですよ。どうせ近江ちゃんもそうだろう」

「どうせコネ頭なんだから、贅沢言わないで置くわ」

ある程度の点数さえ稼いでおけば、すんなり受かるだろう。そのくらいの目星はついている。かなりいいかげんな言い方だけどそういう学校なんだから仕方ない。

「ところでさ、近江ちゃん、さっきのことなんだけどなんだよ」

「なに？」

「言いかけたこと」

なんだろう、忘れている。

「ほら、E組がどうのこうのってな。なんだよ。それと立村がどうのこうのってのも」

——意外と覚えてるものね。この人も。

紡は肩をすくめて、西洋人のように両手を挙げて見せた。

「だめ、こればかりは発表されてからのお楽しみよ。きっと来週あたり、委員長、青ざめてるわよ」

「E組と立村とってどう繋がるんだよ」

「天羽くん、今度は推理小説マニアになることをお勧めするわ」

「やあだね。俺に推理ものは鬼門なんだ」

「思い出したくない過去、ね」

「ちくしょう」

軽く流し合う中にも、きりきりと天羽くんへの過去を突っ込みたくなる自分に気付く。紡も意識して言ったわけではない。無意識って怖い。

「まあいいわ。私には関係ないもの」

生暖かい風が吹いて来た。かばんを、男子みたいに背中に背負う格好でポーズをつけ、紡は教室から出た。いつも紡の方から動くことにしている。後を追うのが天羽くんだ。

「近江ちゃん待てよ」

「気分を変えて、ちょっと別方向から帰ってみる？」

さっき天羽くんが尋ねた謎は、直接眼で確かめてもらった方がいいだろう。時間もそろそろちょうどいいころだろうし。一階に下りて、生徒玄関から反対方向にある家庭科室、技術室の並びを通ることにした。以前は教師用の研修室とかいうことであつらえられていた教室が今、がら空きのはずだ。そして今、誰かいるはずだ。

——お姉ちゃんの情報間違いじゃなければね。

廊下から、教師用研修室と呼ばれる教室の前に立った。技術室の次。職員室の手前だった。学校祭の時にたまに展示室として使用される程度で、臨時の食堂コーナーとしてPTA関係の人たちがラーメン、カレーライスなどを出していたくらいだろうか。

「ここに誰かいるのかよ」

「いるわよ。天羽くんが会いたくないかもしれない人が」

思いっきり顔をしかめている。だいたい見当ついたのでろう。

「なんだよ、近江ちゃん俺なんか悪いことしたかよ」

「してないわよ。質問されたから、答えてあげるだけ」

人差し指を立てて、しーっと合図してみた。

「さっき言ったでしょ。E組というのができるってこと。そのとぼっちりがこの部屋に来ているのよ」

「この部屋にとぼっちりってなんだよ。あの、なんだよ俺と関係あるのか？」

「あるといえばあるけれどないといったらないわね」

扉に耳をつけて盗み聞きなんて面倒なことはしない。ひそひそとした気配だけで、生徒たち同士でいろいろ話をしていることだけは窺い知れた。たぶん男子、女子、半々で三、四人程度だろう。勘違いだったらごまかせばいいだろう。

「ちょ、ちょっと近江ちゃんまずいんじゃないかね」

「いいから」

一秒だけサービスで笑顔。すぐに冷却した。金色のノブをひねった。

——やっぱり、あたり。

真っ白い顔で教壇に腰掛けているのは立村評議委員長。真ん前の席で仲良く並んで座っているのは西月さんと二年の女子。やたらとバストだけがふくよか過ぎて、あどけない顔とほそっこい手足とが不釣り合いな、着せ替え人形みたいな女の子だった。

「あらら、悪い」

後ろの方で天羽くんが頭をかきかき、いきなりアホネタをかましたそうにしている。

紡は振り返って、めつとにらんだ後、評議委員長に近づいた。顔を上げて、何か言い足そうに口を開けている。紡たちが入ってくるまで三人で密談していた様子だった。邪魔されたかっこの西月さんは、紡の後ろにいる天羽くんを申しわけなさそうに見ていた。紡のことは視界に入っていないらしい。

「委員長、少し差しいったこと聞くようなんだけど、いい？」

「差しいったこと？」

ちょうどその話題で暗い顔していたんだろうに。みんなお見通しだったけれども紡は黙っていた。あくまでも親切心でやってきたというスタンスを崩したくない。

「昨日うちの兄が話していたのを聞いてしまって、なんだか悪くて」

——厳密にいうと、お姉ちゃんからなんだけどね。

「きっと委員長たちもショック受けてるんじゃないかなと思って探してたのよ」

この辺はフランクに。三年編入評議委員ということで、立場としては紡、弱いはず。でもそのあたりをうまく仲取り持とうとしてくれている。まあ中身はアイスクャンディーなんだろうが、彼氏にするわけでもないんだから関係ない。ビジネスでひきたててもらえるのならばありがたいことだ。

「ショックって何かな」

まだ様子をうかがおうとしている立村評議委員長。無理やり笑顔を作っているが、片方の頬が引きつっている。

「言い方悪かったわ。単刀直入に言うとね、E組のことなんだけど」

「E組？」

委員長よりも早く尋ね返したのは西月さんだった。紡に首をかしげて、

「どうして近江さん、それ知ってるの？」

全く、頭の悪い女子だ。ちょうど今話していたことだってばらすようなもの。隣りの「バスト限定ナイスバディー」な二年がじっとにらみすえている。なんだかねめっちい。

「一応、兄だから」

西月さんは黙った。去年だったらもっと噛み付いてきたのだろうが、三年に入り、正式に評議から降ろされた段階で見事に大人しくなった。ある種の男子たちにはそれが好ましく思われたらしく、フリーの彼女を狙っているらしいという声も聞く。紡からしたら、世の中好みっていろいろあるのね、と思うにとどまるが。扉を背にちらちら眺めている天羽くんをまた眼で追っていた。

立村評議委員長はこくと頷き、天羽くんにも身振りで閉めるよう合図した。

「わりい、内密だもんな」

「ま、そういうことだ」

男子同士で話す会話は、紡の時よりも疲れが色濃く出ていた。ストレス溜まるだろう。紡は伸びかけた前髪をつまんで細くねじった。閉まる音と同時に天羽くんと並んで机に腰掛けた。西月さんの視線は相変わらず控えめだった。

「他校との交流グループを解散しろって話を出されたんでしょう。たぶん、顧問に」

面倒なのは嫌いなので、まずは単刀直入に切り出した。動かない三人に、わかったことと決め付けて話を進めた。

「いきなりのことで、たぶん驚いたんじゃないかとは思うけど、私は早い段階で噂として聞いてはいたのよ。ただその頃は、評議委員会ともあまり付き合う気なかったし、関係ないしってことで、話さなかっただけ。その点は申しわけなかったわ」

「いや、それは当然のことだからいいよ。でも、この話、狩野先生から聞いたのか？」

慎重な姿勢を崩さない。立村評議委員長は背筋を伸ばして、げんこで膝を何度か打った。

「そう。知ってるよね。私の姉があの人の結婚相手だって」

「一応は」

唇かんで、頷いている。有名な事実なのだから当然だ。

「やはりこれから先のことを考えて、委員長に報告しておいたほうがいいかなと思ったわけ。もちろん悪い情報ではないし、信じる信じないは委員長の判断だけど、どうします？」

天羽くんと男子同士の視線交差。足をぶらつかせている天羽くんは鼻の下を一本指でこすった。

「もし、かまわないようだったら教えてほしいな」

なるほどこうきたか。取引を持ち出されるかと思ったのだけれども、委員長はあっさりOK

を出してきた。

「じゃあ、一応私の知っている範囲で言うとね」

紡は西月さんと一年の女子、ふたりに視線を送った。

「西月さんたちにも関係あることだから、聞いてもらっていい？」

こっくりと頷いた。やはり評議委員落選というのは、プライドもあっさり放棄してしまうものらしい。えへんと咳をしたのは天羽くんだった。

「四月前から水鳥中学と交流を行うことは決まっていたらしいし、その辺は学校側も納得していたんでしょ」

「ああ、去年の十月から少しずつ話を進めていたしな」

「それで、委員長としては学校内の人たちにも交流を深めてほしいからという理由で、評議委員会から分離した『交流組織』をこしらえたわけよね」

「天羽から聞いているんだ。すごいな」

皮肉っぽいけれどもその辺は無視だ。

「そのこと、四月前に、誰か先生たちに話さなかった？ たとえぼうちの担任とかに、何かの拍子で口走ったりしなかった？」

うつむき加減で思い当たる節を探すべく、指を折っている。はたと思いついた、とばかりに手の甲で膝を打った。

「狩野先生には話したかもしれないけれど、もう交流そのものが決まった時期だったからそれほど隠す必要もないと思ったしさ」

——やっぱり。そこが甘いのよ。

立村委員長が諸般の事情で、「あの人」の特別補習授業を受けているのは知っていた。その辺は触れられたくないだろうから内緒にしておいた。天羽くんにも、西月さんにも、そしてナイスバディーの彼女にも聞かれたくないだろう。

「あと、駒方先生にもしゃべらなかった？」

「そりゃあ、もと評議委員会の顧問だから報告はしているよ」

——抜けてるわ。

思いっきりみえみえのため息を吐いてみせた。

「このふたりだけよね。あとは誰にも話してないわよね」

「ああ、うちの担任なんかにはひとつことだってしゃべってない」

立村評議委員長はD組である。熱血青年教師・菱本先生のクラスだ。ちなみに「あの人」と菱本先生が同年代だとは、信じがたい。

「よりによってってとこよ。あのふたりがE組の中心となる予定だったんだから。きっと委員長から得た情報と、どっからかわからないけれど聞きつけた噂と混ぜ合わせてこういうことにしたのね。大体見当がついたわ」

「ちょっと待ってくれないか。近江さん」

表面上は落ち着いたまま、立村評議委員長は静かに尋ねた。

「俺の聞いている限りだと、E組とは一年から三年の、特別授業に出る連中のフォローをする場

所だって話だけど。違うのか？」

「それは表向きよ」

全く分かっていない。やっぱりこいつは清坂さんにはもったいない。

「もちろん大学の講義などを取る人の手伝いをしてくれたりとかもするだろうけれど、本当のところは違うのよ。つまり、授業についていけなかったり、教室に入れなかったりする生徒たちの溜まり場みたいな形になるのよ。駒方先生、退職したのになんでこの学校にいるかっていうと、その生徒たちの面倒を見るためなのよ」

視線が痛い。ホルスタインな彼女がじっと紡の顔を見据えている。

「いわゆる、行き場の無い人たちを集めるための場所よ。ほら、うちのクラスA組、去年退学者だしちゃったでしょう。それがうちの兄もかなり心に響いているらしいの。自分が結局悪かったんだって落ち込んでいるらしいのよ」

この辺の事情も知っているが、あえて口にしない。立村評議委員長が、苦笑いしている理由もよくわかる。天羽くんも大体見当ついているらしく、くすっと笑った。

「先輩がばかなことをしたあれですね」

口に出すなよ、と言いたい。抑揚のないまっすぐなしゃべり方の二年女子。委員長もその子に対してだけはなぜか柔らかい笑顔で頷いている。

「忘れたい過去はいろいろあるね。それで？」

「それにA組は、いわゆるコネクラスだし」

反応を西月さんで確認する。二ヶ月前だったらひっぱたかれただろうが、黙っている。いいことだ。うつろな目でうつむいている。

「いろいろ学力なんかで問題あるらしいのよ。それ、一年、二年でも同じ人がたくさんいるということで、駒方先生がその子たちの面倒を見るために走り回り始めたってわけ。担任だって忙しいし、手も回らないしってことで、放課後に補習がしやすくなるように教室を確保して、いつでも相談にきたり勉強したりするようになってことにしたみたいなのよ」

委員長、だんだん眼光が鋭くなってきている。なにやら思い当たる節があったらしい。

「そうか。そういうことか」

「ただ、露骨にそういう生徒に声をかけるといろいろ問題が起こるでしょ。プライド傷つけられたとか何とか言われて。父母にも文句言われたらしくってしかたなく、学校側としてはこっそり人を集めようとしたらしいのよ。問題ある人、ない人、純粹に高校・大学授業の補習が必要な人、いっぱい集めて、生徒たちが自由に入出りできる場所にしようとしたらしいのよ。だから、E組に通ってくれと頼まれた生徒がかならずしも問題児であるとは限らないのよ。先生たちもそういうことは明らかにするつもりはないらしいしね」

「なるほどな。だからか。杉本、そういうことだよ。よかったな」

杉本、と呼ばれたナイスバディーの二年女子は、当然と言った顔で答えた。

「当たり前です。私、変じゃないですから」

——この子が杉本さんなんだ。

吹き出したくなるのをこらえつつ、本題に入った。



「これからさらに話がややこやしくなるんだけど覚悟してね。このE組企画の関係で、おそらく他の生徒たちにはしわ寄せが来るだろうし、時期的に修学旅行とかも重なっていて、一般生徒はきっと忙しいって判断になったらしいのよ。それで、現在の『交流サークル』は一度解散してもらい、評議委員会のみ活動ということで持って行って結論になったらしいのよ」

「ちょっと待て。なんで『交流サークル』と関連あるんだ？」

「それは、委員長、あなたがしゃべったことに関連があるのよ」

とどめをゆっくり刺すことにした。

「つまりね、委員長がいろいろと『交流サークル』について話をしている間に、うちの兄、あと駒方先生は相談したらしいの。他の中学校と交流するよりも、むしろ学内で交流してもらう方が先決じゃないかということね。もちろん来年以降、水鳥中学との交流会を他の生徒集めてやるのもありだとは思いますが、とりあえずはE組をきっちりやって、それからでも遅くはないんじゃないかとね。また、評議委員会内部でもどんどんやりたがっている層がたくさんいるはずだから、今年一年は委員会のみで交流活動を行ってほしい、そういう結論になったらしいの。これは本当よ。兄が話していたわ」

「兄」だなんて、よくもまあしゃあしゃあと言えちゃうものだ。自分でも感心してしまう。もし「あの人」が聞いていたら喜ぶだろうか。紡のことをなんとしても懐かせようとしている行為がなんともいえず、もちよこいだ。

「評議のみで交流か」

「そう。どうせ委員長ひとりでこの件を進めてきたようなものでしょ。天羽くんからも聞いたけれど、水鳥中学の生徒会副会長とも連絡個人的に取っているって聞いたしね。だったら、あまり中間組織を使わないで、じきじきに進めたほうがいいんじゃないかってふたりで思ったらしいのよ。むしろあれは、善意じゃないかな」

唇をかみ締め、立村委員長はゆっくりと天井を仰いだ。だいぶ外も黄金色に染まりつつある。誰かが覗き込みにこないだろうか。職員室も近い。

「近江さん、ありがとう。だいたい話が見えてきた」

立村評議委員長は両手をついて教壇から立ち上がった。かくんとうなだれたかっこうで、目の前の女子ふたりに告げた。

「と、ということで原因はつかめたよ。俺が口軽すぎて、駒方先生によけいな気を遣わせてしまったってだけなんだ。決して、交流サークルをつぶしたいとか、杉本のことを追い出したいとか、そういう意図じゃないってことだけははっきりしたよ。西月さん、ごめんな。なんか俺のせいだよな」

「そうですね、先輩が悪いんじゃないですか」

また抑揚のない跳ね返し。杉本さんは目がぶっこわれるのではと思うくらい強い視線でにらみつけている。やはり噂は本当だったのだと、紡は思った。

「ごめんな、杉本。でもまあ、こっそり手伝いなどお願いすることは必ずあると思うから、その時は頼むな」

隣りで肩をすくめる天羽くん。杉本さんのことをあまりよく思っていないらしい。下手なギャ

グをテレビ番組で見ている、「けっ」と笑いたくなる時にするようなポーズだった。

「私は当日あのお方に会わせていただければいいんです」

「それはそれでまた考えような」

なんでこの委員長、杉本さんにだけはへらへらしているのだろう。妙に段差を感じる。清坂さんとふたりでくっちゃべっている時はごくごく普通の同級生顔だということに。付き合っているという雰囲気を感じられないカップルということでも有名な清坂・立村D組コンビ。それに比べて自然すぎる笑顔とあふれんばかりの甘い視線はなんだろう。気持ち悪すぎる。

——まあ、別に私には関係ないし、それはそれでいいけど。

ふと、西月さんの遠慮がちなしぐさが気になり、ちらと見た。

おずおずと、両手をからめて肘を付いた。神に祈りを捧げるポーズに似ていた。ちょっとうつむき、紡に向かい、

「近江さん」

とささやいた。

「何か？」

「あの、もしね、評議委員のことで、何かわからないことがあったら、私、手伝うから言ってね」

——あらら、ずいぶん下手に出たじゃないの。

ほんと、三ヶ月前の偉そうな態度はどこいったんだろう。別にそれで困ることはない。こっちの方が助かるけれども、かえって不気味という感じもする。

「別に私、手伝ってもらうことないと思うけど」

さらりと返した。

「でも、あの、修学旅行のしおりとか、そういうのあるでしょう。いろいろ面倒だって去年の宿泊研修旅行の時も思ったし、だから」

——うっとおしいなあ。だからなんで、関係ない話している時に持ち出すんだろう。やっぱり頭の悪い人はいやよね。

紡が一言、きっぱり拒否してやろうと口を開いた、その時だった。

「評議委員同士でそういうことは決めることだ。関係ない奴は口出しするな」

凍った声だった。天羽くんが紡の傍らに立っていた。ブレザーのポケットに手を突っ込み、いかにも憎憎しげに繰り返した。

「もう評議委員は俺と近江ちゃんだ。あんたとやった二年間よりはるかにいい出来のもの作るから、よけいなこと考えるなよ」

「あの、邪魔する気ないの。ただ、私にできることがあれば」

食い下がろうとする西月さん。でもかつての覇気はなかった。か細く、一言「喝！」と怒鳴ればしぼんでしまいそうな気力状態だった。こんなだったら紡の言葉だけで十分だっただろうに。少し哀れだった。止めておいた。

「やめとけば、天羽くんも大人げないよ」

残念、やっぱり天羽くんも男だった。紡の止めを無視してさらに続けた。

「今の話で『交流サークル』がなくなっちゃって、残念しごくつつうのはわかるぜ。立村があれだけ情熱燃やしていたんだから、俺もかわいそうだなとは思う。けどな、だからといって関係ない奴にまた、評議の仕事が邪魔されるのだけは迷惑なんだ。やめてくれよ」

「私邪魔する気なんてない」

声が震えてきた。まずい、このままだと泣いちゃうだろう。本気で止めないとまずい。首を除けぞらし、もう一度、

「やめなよ」

と繰り返した。

「あんたには杉本の世話をするっていう仕事があるんだから、それだけに専念しろよ。そうした方が評議委員会の、それとA組のためになるんだ」

——杉本さんって、あの少しおかしい子だよな。

なんとなく話が紡にも繋がってきた。でもまずはやめさせようと、今度こそ紡がきっぱり叱ろうとした時、先手を取られた。立村評議委員長が一言、

「天羽、これ以上言うな。後で電話するから今日のところは帰れ」

「けどさ、立村お前だって」

「A組と杉本とは関係ないだろ。早く行け」

有無を言わせぬ口調だった。これからE組に押し込まれるであろう女子ふたりを、なんとかして守りたいらしい。

噂に聞いていた、「立村委員長巨乳好み説」は本当らしい。

くだんの杉本さんとはいうと、ぷいと反対方向を眺めていた。どうやら、自分に都合の悪いことは聞き流すことができる才能を持っているらしい。涙をためてぐぐっと天羽くんを見つめている西月さんとは違い、かなり図太い。

——やっぱり、そうなんだ。お姉ちゃんの言った通りだわ。

今の二年に、情緒不安定な女子生徒がひとりいて、E組をこしらえるにあたって対象生徒として選ばれたというのが、杉本さんという子だと聞いていた。学年トップの成績だが、人間とのコミュニケーション能力が欠落していて、すでに青大附中卒業後は公立高校へ進学しろとのご沙汰がでているとかいないとか。また、西月さんと同じく、一年時は評議委員だったが担任桧山先生の判断により降ろされたという逸話も持つ。専門の病院で検査を勧められたという噂も、お姉ちゃんを通じて聞いている。なんで「あの人」がそんなことまで知っているのか不思議だが、教師なのでその辺はいろいろあるんだろう。もちろんそんなこと言いふらしても、紡にはなんの得にもならないので言わないけれども。

天羽くんが、

「立村は杉本のことめちゃくちゃ猫可愛がりしてるからなあ」

とぐちっていたのを聞いたことがある。たぶん、立村委員長の甘い視線はその辺に理由があるのだろう。

「それでは今日のことなんだけど、内緒にしておいてくれる、委員長」

「わかった、どうもありがとう」

要は天羽くんこれ以上杉本さんについての悪口を言ってほしくないのだろう。

紡は天羽くんこれ以上西月さんを興奮させるようなことを言ってほしくなかった。

——だって、うっとおしいじゃない。今日こんな面倒なことしてわざわざ立村委員長に教えてやった理由ってなんだと思ってるのよ。

廊下を出て、いきなり「ちくしょう！」と怒鳴る……聞こえない程度にだが……はちょっと大人気ないと思う。やっぱりそこんところが中学男子の弱さなんだろうか。全くもうと思いつつ、紡はポケットからのどあめを一つ取り出した。

「すうっとするよ」

無言、じいっと顔をにらんでいる。やれやれ。

「ほんとはケーキとお茶がベストなんだけどね、さ、行こ」

まだ腹の虫納まらない天羽くんをなだめるなんて無駄なこととはしない。放っておくに限る。背中を向けてそのまま手を振った。あわてて追っかけてくるのが足音で分かる。紡の手から、緑色のあめをひったくった。乱暴に小袋を開けた。口に放り込んだ。飲み込んだ。

「薄荷がきついからあとで咽ひりひりするんじゃないの？」

しばらく咽を両手でさすり咳き込んでいたが、やがておさまったらしくほおっとため息をついた。

「近江ちゃん、お前さあなんで」

あんなことしたの？と聞かれるかと思って答えようとしたら、

「胃薬みたいに腹のなかすうっとさせてくれるんだろうなあ。女子のくせに」

「あらら、女子だからでしょ。失礼な」

——西月さんとはすうっとしなかったのね、ずうっと。

「今度はちゃんと口の中でなめれば」

「ありがとうございます」

ちゃんと両手で押し頂くように、天羽くんはのどあめを受け取った。

生徒玄関に出て、すのこから降りて外に出た。

「あれ、今ごろ学校に来る奴いるね」

「どれどれ」

逆光を浴び、黒い影がずんずん玄関に近づいてきた。ブレザー制服だから、青大附中の生徒だ。ジャージでないところみると運動部系ではないらしい。

「ははあ、片岡か」

すれ違う時やっと顔を識別できた。同じA組の男子・片岡司（かたおかつかさ）くんだった。

天羽くんの唇が微妙にゆがんだような気がした。

「片岡あのな」

ひよろひよろともやし体型の片岡くんが、おびえたように振り返った。光りのあるところを求め、それこそもやしのようだった。

「まだ、西月、教師研修室にいるぜ」

片手になにか、銀色のアルミホイルで包んだ針金みたいなものが見えた。よく観察すると、花一輪か。赤い花であることはわかったが種類なんて見当つかない。紡が見つめているのに気付いて慌てて隠している。別に取ったりしないのに。

「じゃあな」

返事もしないで片岡くんは、生徒玄関に吸い込まれていった。

「あいつ、きっと西月を迎えに行ったんだぜ」

「別にいいんじゃないの」

めんどろで返事をするのもかったるい。口の中に自分の分の飴玉を入れた。

「そうだな、いいよな！」

妙に明るい口調に、紡は思わず天羽くんの顔を覗き込んだ。

「そうならば完璧だよな！」

嫌味でもなんでもない、素直に喜んでいるのが見て取れた。紡の目に狂いさえなければ、天羽くん、強くそれを願っているとしか思えなかった。

——下着ドロの片岡くんは、ねえ。

二年前の騒ぎを思い出し、紡は天羽くんの真似をして肩をすくめた。

正式発表になる前に、立村評議委員長はすべてを「あの人」……狩野先生……と、駒方先生から説明を受けていたらしい。ショックを押えつつも、紡たちが押し入った教師用研修室の中で先立って「交流サークル」の主要メンバー西月さん・杉本さんに告知を行っていたということだったらしい。後で詳しく天羽くんが教えてくれた。

「立村の奴、すげえ落ち込んでたなあ。そりゃそうだなあ」

——そりゃそうでしょうよ。

女子を通じた噂によると、水鳥中学生徒会との交流会は、立村評議委員長が後輩の杉本さんのために計画したものだという。評議委員を降ろされて行き場を失った杉本さんと、同じ立場の西月さんをセットにして「交流サークル」の主要メンバーとして置こう。それが目的だったという。なるほど、それは頷ける。見た目にたがわず、意外と頭はいい奴だ。

——だったら、どうしてあの棒読みナイスバディーの彼女と付き合わないのかしら。なんで、清坂さんと。

非常にいらだたしい。清坂さんに変なことをしたいと妄想しているわけではない。清坂さんくらいレベルの高い女子には、もう少しランクアップした相手と付き合ってほしだけだった。

「でもさ、話聞いたら、E組って掃き溜めクラスじゃないって説明を受けてて、とにかく手伝いとか補習とか、そういう細かいことをいろんなクラスの奴が集まってやるほらほら、『学童保育』ってやつっすか。そういう感じらしいよな。近江ちゃんが思っているよりももっとやわらかい内容かなと」

「何言ってるの。表向きに決まってるでしょ」

紡は切り捨てた。きちんと説明しておきたかった。

「E組を学校内の保育所だって割り切っているんだったらいいのよ。本当のところは、少し問題ありの生徒を集めるために、カモフラージュとしてふつうの生徒を蒔き餌にしているだけ。いくら問題児だからって『あなたは情緒不安定です。E組で勉強しましょう』なんてね、いきなり言われて冷静に受け止められると思う？」

「俺違うもんな」

「私もそうよ」

思わず笑った。

「まあ委員長も予定が狂って大変だろうけれど、そういう運命だったと思えばいいのよ」

「運命なのはいいけど、今度は三年の俺たちに仕事が回ってくるってことでもあるんだぜ。どうしますかいな、おねーさん」

いきなりくねくねし始めるのはまずいんじゃないだろうか。放課後、たまたま玄関で顔を合わせ、すのこに上がったまま話をしていた。評議委員の場合、いつも授業が終わると適当に空き教室を占拠してだべりあっていただけというが、三学期以降三年同士ではそういうほのぼのした付き合いがなくなってしまったと聞く。もちろん男子、女子に分かれてつるむのは今まで通りらしい。たぶん天羽くんと西月さんとの間に起こった出来事のからみだろう。

頭の悪い女子同士でたむろするのをこよなく嫌う紡は、用事が無い限りさっさと帰らせてもらっている。清坂さんとだけ、話をするのだったらまた話は違いうだろう。でもいやなものはいやだ。それだったら天羽くんや他の男子たちと気兼ねないおしゃべりをしていた方が楽。

「とりあえず、私は何していればいいわけ？」

「修学旅行のしおり準備と、バスの中の席順、その他いろいろ、俺が頼んだことだけでいいです」

全部天羽くんがやってくれるはずだ。女子だからといって甘えるのはいやだが、天羽くんがそういうのは好きらしいので任せることにしていた。せっかくの西月さんの申し出をあっさり断った以上、知らんぷりしているわけにもいかない。

「でも、大丈夫。俺これでも評議委員三年目」

「私三ヶ月目」

学校を出て、しばらく学校周りの学生街をうろついていた。古い木造の建物がぎっしりと詰まっていて、猫しか通れそうにない小道の狭さがうっとおしい。天羽くんの家は学区がふたつ離れた、近いんだか遠いんだか微妙な距離のところにあった。いわゆる、「お屋敷街」。刑務所かと思わんばかりの高い塀とか、何世紀前かのヨーロッパにタイムスリップしたような建物とかがゆったり並んでいる。お姉ちゃんがどふりふりのファッションで決めて歩いても違和感のない街だ。

「それはそうと、最近気になることってあるかなあ、近江ちゃん困ったことねえか」

「ないわよ別に」

「別になって、本当か？」

天羽くんはブレザーを体育着と一緒にボストンバックの中に詰め込んでいた。ゴールデン・ウィークが終わっていきなり気温が上がって、男子のほとんどは授業中ブレザーを脱ぎワイシャツの袖をまくっていた。ネクタイを外すか、もしくは一切つけないか。ひとりきちんとブレザー姿を保っている「あの人」と評議委員長様にはご苦労さんと一言言ってやりたいものだった。

「女子、うるさくねえか」

——やはりね。

ここぞとばかり、あっさり答えてやった。

「それがね、意外なのよほんつとに。なんもない」

「女子同士ってねちっこいだろ」

「ううん、私もしつこく絡まれたらかったるいなあと思ってたんだけどね、全くもって、静か」

肩をすくめて、外人さんの「お手上げ」ポーズを試みせた。天羽くんも真似をする。なんだかお笑い芸人のお間抜けな顔で口を開けると笑える。本物の落語よりも、天羽くんの瞬間芸の方が爆笑もんだと感じるのは、紡の笑いに対する感覚がずれているからだろうか。

「これはたぶん、なんだけど」

ひとつ、気になっていた事実を告げておいた。

「どうやら陰で、西月さんが女子たちを止めているらしい」

「はあ？ それまたびっくりだあ」

自分で問題の種をまいておいて、驚くのもなんだと思う。

「天羽くん、てっきり西月さんが私に嫌がらせすると思っていたんでしょう」

「いや、まあその」

「だから、結局交際記者会見もやらなかったんでしょう」

公約違反。ファミレスで担任の「あの人」の前で誓った「三年A組内評議委員同士交際会見」は、一切行わなかった。

一晩考えて、天羽くんなりに身の危険を感じたのかどうかわからないけれども、とりあえず一緒に帰るということで証明することにしようとしておいた。まあ見え見えのばればれで、最初のうちこそひそひそ攻撃はなはだしかったけれども、いつのまにか収まった。

「いや、やっぱさあ、テレビで昔のスケバンドラマ観てて、こえーっと思った次第」

「なあんだ」

「けど、何たくらんでるんだろなあ。そっちの方が危険だ。近江ちゃん、気、つけろよ」

たぶん天羽くんの性格上、一度熱が冷めたらすぐにさよならだろうと見積もっていたので、あまりべたべたしないようにしていた。功をなしたのか、天羽くんは自分の方から懸命に時間を作ろうとしてくれた。別に無理にしなくてもいいのだが、ネタも飽きないし落語の知識も豊富だしてことで、一緒に帰るのを楽しみにはするようになってきた。

「いつも思うんだけど、天羽くんなんでそんなに、昔の彼女を嫌うわけ？」

黙った。男っていつもそうだ。都合悪くなると黙ってごまかす。

「別に私には関係ないけれどね、天羽くんって他の女子にはふつうに話をして平気でしょ。なのになんで、西月さんにだけ親のかたきみたいな態度を取るんだろなあって不思議に思ってたわけよ。今の私には西月さん何も文句言ってこないし、それに」

言っちゃっていいのだろうか。迷ったけれど言うておいた。

「彼女、暗くなったみたいね。三年で評議から降ろされてから一気に」

「そんなの知ったことじゃねえよ」

「そうね、どうでもいいことよ。ただね、私も今後評議委員として意識しなくちゃいけないわけでもあるでしょ。うちの『お兄さん』にも、二人目のクラス退学者、出させたくないからね」

「ああ、退学者出しているクラスってうちだけなんだよなあ。さすがコネA組ってとこだ」

紡があえて西月さんの話題を振ったのには訳がある。

決して天羽くんの嫉妬心をあおりたかったからではない。そんな非効果的なことして何が楽しいというのだ。紡はこれでも男心の扱い方をお姉ちゃんから教えてもらっている。

「ひとまず昨日、立村委員長になんで私が、E組の裏事情暴露したかわかる？」

「単に同情したからじゃねえのか」

——同情、か。

「委員長、数学関連の学習障害抱えてるからね」

「あいつも開き直ってるから、俺たちも結構ネタにしちまうけど」

「見た目に比べてたくましいわね」

放課後の補習が必要なのは立村評議委員長だということを、紡はすでに早い段階で聞いていた



。もちろんかの子放送局からの情報でもあるけれども、何度か生徒指導室に委員長が呼び出されて、「あの人」と一緒に閉じこもっているのを目にしていた。

「明らかに科目別についていけない場合は、生徒ひとりに、担任以外の先生がついて、ワンツーマン指導するらしいのよ。立村委員長、菱本先生と折り合い悪いでしょ」

「ああ、もう修羅場らしいぜ。去年の夏、宿泊研修ではタイマン勝負張ったしな」

「けど、うちの担任とはうまく行っているらしいので、三年から個人指導するようになったみたいよ」

立村委員長からも話を聞いているらしい。天羽くん、頷く。

「歳の割に奴も苦労してるからなあ」

「別にそんなのどうでもいいけど」

結局はごまかされてしまったような気がした。無理やり新作落語についての話題……どうも現代の風潮を扱った落語のことらしいが、その辺よくわからない……を一気にまくし立てられ、半分流していた。

「とにかくしばらくは何も考えないでいいから。じゃあ」

別れ際に二本指で投げキッスをするのもどうかと思う。

紡はまっすぐうちの方へ歩き出した。

お姉ちゃんとも最近は会っていない。なんだか天羽くんと帰るようになってから、お姉ちゃんも気を遣ってくれているみたいだった。やきもちを妬かれるかと思ったけれどそんなでもなかったし。なによりも「アルベルチーナ」の存在を「あの人」が知っていることに失望を感じたからかもしれない。

——しかし、やっぱり気持ち悪いわ。

ぽちゃぽちゃの愛らしいといわれる顔の持ち主たる西月さんに対して、二年二学期までの熱の上げようたらもう、天羽くんすごかった。紡もクラスの恋愛沙汰は見るともなしに見て楽しんでいた。天羽くんと西月さんのカップルは三年間決して壊れることないだろうとみな思っていたはずだった。実際付き合ったのは二週間くらいだったらしいが、それまで限りなく両思いに近い行動たるや、そりゃあもう、シングルには目の毒としか思えなかった。

評議委員どうしがくっつくというのは珍しいことではない。

言うまでもなく、D組の立村委員長と清坂さんがいい例だ。

たぶんその線を狙ったに違いない。しかし世の中うまくいく例ばかりではない。

何かのきっかけで二人の間に亀裂が走り、一方的に……この辺は天羽くんのわがままだと言われているらしいが……縁を切られ、必死に西月さんがご機嫌を取ろうとして玉砕中というのが現在の状況だった。

三学期始まってから現在までだから、五ヶ月近く経っているというわけだ。

——見苦しいわ。

「けなげ」にも「いじらしく」も映るのだろう。

女子たちの多くは意見をひとつとして、

「小春ちゃんかわいそうすぎる！ あんなに尽くしているのに、あんなに謝っているのに、ちょっと小春ちゃんが悪くないのに、なんであんなひどい態度取るの？」

だった。残念ながらその意見に与しない紡は口を閉ざしてきた。いくら未練が残るとはいえ、された相手だったら当然逃げる。

無理に「おはよう！」と笑顔で話し掛ける。

天羽くんが露骨に無視するにも関わらず、無理に給食を多く盛り付けてやる。それも天羽くんの好物肉じゃがとか、カレーとか、いかにも自分はわかっているのよと言わんばかりの顔をしてだ。

一言でも「ありがとう」とか「悪い」とか返事をしたら最後、とことんくっついてきて、話を引き出そうとする。結局「近づくなよ！」と怒鳴られて退散する。「いじらしげ」な目でじいっと見つめながら。

どんなに嫌がられようが、どんなに疎ましがられようがめげずに、文句一つ言わずにアプローチする根性。それには素直に感嘆する。上に挙げたのはすべて天羽くんに対しての行為だが、もともと分け隔てなく西月さんは、気持ち悪いくらい笑顔で接するよう心がけている人だった。八方美人で誰にでもいい顔する性格らしいが、天羽くんに振られて以来それが一層強まった。評議委員だった頃は、紡に対して「コネ」についてつかかってくるし、無理にクラスになじませようとするし、とにかくうざったかった。

周りの男子からも何気なく意見を頂戴していた。評議委員としての情報収集の一環だ。

とにかく「うるさい女子は嫌い」なのが男子の多くだろう。愛嬌のある顔が好みという奴はいないわけでもないらしい。天羽くんとくっつくのは時間の問題だとみな思っていたみたいだった。他人様のこと、どうでもいいみたいなあきらめだろうか。

「いやなあ、西月さんも真面目でがんばりやで評議の鏡ってのはいいんだけどなあ」

「あそこまではりきられると、俺、逃げたくなるんだよなあ」

本音だ本音。女子たちとは意見が違ふかもしれない。紡は逃げたくなった天羽くんの気持ちがよおくわかった。と同時に、三年になってからとうとう評議を降ろされ、一気に地味になってしまった西月さんが、一気に受けよくなったらしいことに溜飲を下げたりもした。男子は単純だ。うるさい女子が大人しくなり、男子にひれ伏すと妙に満足感を覚えるものらしい。そして、同情と恋心をドレッシング化して、サラダにして食べるらしい。

——ああやだやだ。結局、演歌に出てくる女って感じじゃないの。

生理的にああいうタイプはだめだ。そそられない。

制服のブレザーはどうも紡にとって子どもっぽ過ぎた。だから本当は駅のロッカーで着替えていきたい。「アルベルチーナ」に寄りたいたいとは思わなかったが、駅前あたりの商店街で服を見ていきたい気はあるのでまずは変身するためロッカーに向かった。

色つきリップとチークをちょっとだけ頬の斜めに入れ、いざ出陣。デパートから本屋から、適当にいろいろ入って物色していった。大人っぽく見えるせいか、周りの視線がなぜか鋭い。中学生とは思えない格好だろう。やっぱり今日も体にぴったり添った、ロングのクリーム色ジャンバ

ースカートに半そでのカットソーを羽織ることで決めた。

花屋に寄ってみた。お姉ちゃんが好きそうな薔薇が店の奥にたっぷり飾ってあった。高そうだ。刺が怖いし、さわりはしなかったけれども。黄色い薔薇、黒っぽい薔薇、白い薔薇、ピンクの薔薇、いろいろだ。お姉ちゃんは実家にいた頃、一度もこういう派手な花を部屋に飾ったことがなかったという。いつもお母さんに、

「仏壇にお供えできる花にきなさい」

といわれていた。紡も、自宅に花を買うという習慣を持ったことがない。

——今度、お姉ちゃんの誕生日に買ってあげようかな。

やっぱり、薔薇を贈る相手は、お姉ちゃんしかいない。紡が何気なく薔薇の列から離れた。出たとたん入れ違いに、青大附属の制服姿の男子がひとり、入って行った。違法駐車している。路肩に少し乗り上げる格好で、黒い車が停まっていた。やたらと角張った長い丈の車だった。たぶん外車だろう。

——うちのクラスの男子かな。コネ入学関係かもな。

車でランクを測るのもなんかとは思う。でも直感でやはりぴんとくるものがある。青湊という街は広いようで案外狭い。特に、コネA組に集まるような家庭の人たちは、同じ階級に属していることが多いらしい。紡なんかは全くの別世界としか思えないような集まりが結構あると聞く。

車の中にはめがねをかけた黒い服の男性が座っている。いかにも、「おぼっちゃまを護衛するガードマン」の図である。繰り返すが、A組においては珍しい光景ではない。

隣の佐川書店前で様子を伺っていると、やがてブレザー制服の男子が一輪、赤い花を片手に出てくるのが見えた。紡の存在には気がつかない様子だった。うつむき加減で、花を包んだビニールシートと、おっぽのところを来るんだ銀色のアルミホイールがきらきら光っていた。

——片岡くんか。

助手席にもぐりこむと同時に車は発進した。後ろから観ると、他の車と比べて格段金のかかっている代物だということがよくわかった。

片岡司。近隣では有名な高級婦人服チェーン店の社長子息と聞いている。それだけだったら決して珍しいことではない。ああ、コネ組だからそういう奴も集まるのね、とため息をつくだけのことだった。金持ちの息子といっても特段、目立つような金の遣い方をするわけでもないし、他のクラス連中とほとんど同じ振る舞いをしているから、言われぬ限りわからないだろう。医者の子、娘、作家の子、娘、いろいろいるけれども、A組ではあえてお互いの家庭について口を開かないように心がけているようだった。紡からするとこっけいに見えるのだけれども。

ルックスも悪くない。多少じめじめした雰囲気はあるけれども、よけいな事件さえ起こさなければもう少し明るい未来が開けていただろう。なのに他の女子たちにとってはどうも、肩からのぞいたブラジャーの紐みたいな存在としてうざったく思われていた。紡もできればかわりをもちたくないと思う男子のひとりだった。天羽くんじゃなくて片岡くんだったら、瞬時に交際申し込みを断っていたに違いない。彼は「下着ドロ」なんだから。

一年の夏休み入る直前の、体育の授業後だった。A組とB組合同で男女別れて授業が行われ

ていた。たまたまその日はプール開きということもあって、みな紺色のスクール水着姿で、まだ冷たい塩素水の中に飛び込んだものだった。かったるい授業だが、ひとりで泳いでいられるのが好きで、紡はのんびりとクロールを楽しんだ。

プールから上がり着替えようとした時だった。女子更衣室のあちらこちらから、やたらと着替えを入れたかばんをかきむしる音が響きわたった。ひとりふたりではなく、ほぼ全員と言っても過言ではなかつたろう。「ない?」「え? ないの?」「どうしよう……」声がだんだん泣き声に変わるのを聞きつつ、紡は着替え用に用意してきた下着をつけたことを覚えている。まだ小学校から卒業して三ヶ月の女子たちは、身に付けてきたものをそのまま使用しようと思っていた子が圧倒的に多かった。必然、女子更衣室がパニックに陥ったのも無理はないだろう。

女子体育クラス三十人弱の中で、二十人前後の女子生徒たちが、パニック状態に陥り女子更衣室から出られなくなり、当時の評議委員西月さんが先生に助けを求めにいった。無視して紡はひとり教室に戻った。静かな教室の中、男子たちの興味しんしんたるまなざしに答えたっけ。

「女子更衣室にね、下着ドロが入ったのよ」と。

最初は警察に届けようという話も出ていたのだが、次の日いつのまにか立ち消えとなってしまった。どうやら犯人は捕まったらしい。学内の男子生徒。しかし男子生徒の将来のことも考えて、あえてもみ消す形を取ったという。紡たちに公式発表されているのはここまでだ。

悪事とは一瞬にしてばれるものだった。

数日後、

「犯人はA組の片岡くんだ」

という噂が広まった。単なる噂ではなく裏付け調査の上での情報だった。

情報は紡が流したものではない。「あの人」……狩野先生……がその件でひたすら走り回っていたのと、なぜか車で片岡くんのうちにでかけてその夜家に帰ってこなかったらしいとか、そういう話はかの子お姉ちゃんから聞いていた。七割方本当だろうとは思っていた。入学当初から女子たちをねめちい目でじろじろ見ていたことはよく覚えているし、状況証拠も残っていたという。すでにこの頃から紡は女子たちから距離を取っていたので、どうでもいいことは口にしていない。

片岡くんが女子たちの下着類をかばんに入れて持ち出そうとしていたところを、他クラスの誰かが見咎めてすぐ、現行犯で先生に捕まったという。すぐに生徒指導室に連れて行かれすわ退学か?と大騒ぎになったらしい。

——そんな足のつくようなことしでかしてばかみたい。

紡の本音はその程度だった。関係ないのだからどうでもいい。しかし、被害にあった女子たちにとっては、いろいろな意味で屈辱だったし、何よりもそういう下劣な欲望を持っている男子がクラスにいること事態許せなかったという。それゆえに取ったA組、B組の女子たちの手段とは、「徹底無視」だった。

女子だけだったらそれで済んだだろう。男子たちの制裁はさらに上をいった。

天羽くんもその辺については口を濁している。たぶん男子全員を残した状態で、弾劾裁判なるものが行われたのだろう。青大附中でこれは珍しいことではない。先生には内緒で評議委員、もしくは規律委員が裁判官となり、罪を犯した同級生を裁く。決して学校では許される行為ではないけれども、わりと日常的に行われている。

はたして片岡くんがその事実を認めたのか、そこで一発二発鉄拳制裁が行われたのか、その辺は定かではない。ただそれ以来、男子たちからも片岡くんが「いていないような存在」として扱われるようになったのも、仕方ないことだろう。「下着ドロ」でかつ、プラスアルファの問題が絡んでいるとかいないとか。紡は関心がなかったのも、その辺口にも出さずにいたのだが。

クラスの連中がしている「無視」という制裁は陰険だと思う。二年間経ってもこの状態というのは情けないものがあると思う。中でも不快だったのは、当時クラスで絶大なる権力を誇っていた西月さんのいい子ぶった行動だった。クラスで「無視」イコール「いじめ」に近い行動が行われていたら、正義感の強い彼女の事だ。腹も立つだろう。女子たち、男子たち、特にいとこの天羽くんに対して懸命に、

「本当のことかわからないうちに、勝手に犯人扱いすることはよくないわよ！　なんでみんなそんなことを無理やり文句言うわけ？　男子も男子よ！　せめて女子からかばうようなことしなさいよ！」

担任たる「あの人」も、西月さんと同じ考えだったらしい。陰で懸命に片岡くんを面倒みたり、いろいろしていたらしいけれど、それは当然だ。だって担任なんだから。青大附中の教師として給料もらっているのだ。そのお金でお姉ちゃんの洋服だって買ってやっているのだ。どんどん働いてもらいたい。

しかしながらだ。

片岡くんが「下着ドロ」の犯人ではない、という頑ななまでの思い込みはなにを根拠に言っているものなんだろうか。本当に西月さんは、片岡くんがそういう奴でないと信じているのだろうか。証拠も揃っていると聞く。下着ドロ現行犯の片岡くんが青大附中に在籍してられる理由は、会社社長のお父さんが多額の寄付金を奮発して頭を下げたかららしい。他クラスならともかく、A組において「寄付金」という言葉はもはや自然に受け止められていた。

男子たちが憤ったのは「下着ドロ」という行為ではなく、「金」でもって自分の罪を打ち消そうとした姑息な性格にあったのではないか。

悪いが、片岡くんに同情する気はさらさらない。　これみよがしに「下着ドロ」とつぶやく気もないが、かばってやりたいとも思わない。

——かばう振りして、そうしている自分に酔う方がもっと醜いわ。

片岡くんを嫌いつつも、評議委員としての義務と正義感でもって、しらじらしく行動している西月さんを見るたび、鼻で笑いたくなる。

——そんなにかばいたかったら、もっと接近すればいいのにね。天羽くんが今まではいたから、何しても「まあ、天羽の彼女だし」と言われてきたけれど、今じゃあフリー。天羽くんにも一切無視されている現状だもの。本当に片岡くんをかわいそうだと思うのだったら、付き合っただけであげたら？　そんな気さらさらないんでしょ。自分が安全なところでいて、せっかくだから同情し

てあげてるだけ。ああ、やだやだ。そそられない。

片岡くんを見ただけでなんだかじっとり気持ち悪くなってきた。そこんところ、やっぱり自分も女の子だと感じた。

西月さんとは正反対に、自分の好きな相手が受け悪いにも関わらず、想いを貫いている女子だっている。D組評議の清坂さんがそうだ。あれだけ可愛い顔とさっぱりした性格だったら、男子なんて……もちろん女子も……よりどりみどりだろうに。何もより好んでアイスキャンディー面の立村委員長なんて選ぶことないだろうに。誰もがそれは感じているはずだ。語学こそトップクラスだがそれ以外は可もなく不可もなく単純計算すら電卓がないと生きていけないような男を合えて選んだ気持ちを、正直理解できるとは思えない。しかし、周りの雑音を一切無視して、自分の惚れた相手一筋に生きようとする性格は、ぐんと紡の気持ちをそそらせる、そそらせる。

——私も花買って帰ろう。

自分の部屋の中だけだったら、一輪挿しで十分。白い百合を選んだ。

「紡、ちょっと来て」

部屋にこもっていつものようにヘッドホンで雑音をシャットアウトしていた。母が耳からヘッドホンを外そうとするまでは気付かなかった。

「うるさい、何か用なの？」

「ほら、これね、紡に似合うかと思って」

——またなの？

下手に洋裁が好きだと、うっとおしいものを押し付けられることが多くなる。紡が思うに、手作りの良さとかアットホームとかいうものは、相手からしたらうざったいことこのうえないのではないかと感じる。いかにも小学生向けの春っぽいワンピース。ピンクのストライプだった。おなかのあたりに切り替えががついている。襟も丸く、ところどころミシン糸のつった後が残っている。

「最近あんたも、地味な服ばかり着て、陰気に見えてしかたないからねえ。もう少し明るい色目のものなんてどうかなと思ったのよ」

「いらない。こういうの好きじゃないから。お姉ちゃんのお下がりで十分」

一瞥して、すぐに階段を昇ろうとした。がしっと肩を捕まれた。

「ね、着るだけ着てみてよ。お母さん昨日徹夜してこしらえたんだから」

——好きでやってるんでしょ。関係ないわよ。

「お母さんあんたのために、眠い目こすって作ったのよ。お父さんもこれだと喜ぶわ」

——別にお父さんのこと喜ばせたくて着ているわけじゃないし。

「紡にはきっと、こういうタイプのお嬢様っぽいのが似合うと思うわ」

——たわし頭のどこがこういうの似合うっていうんだろう。黒くシックな方の着こなしが私は好きだけど。

会話がかみ合わないのは昔から。無理にけんかをしたくないので、紡は少しだけ妥協することにした。着るだけ着てみた。袖が長すぎる、スカートが中途半端なラインで留まっている。ふく

らはぎの一番足太く見えるラインだった。しかもウエストの切り替えがちょうどお臍のあたりにぴたっとくっついていて、妊婦のようだった。うまく言えないけれど、幼稚園のスモッグを無理して今着てみたような印象だった。首だけちょんぎって、体だけ子どもにしたらぴったり合ったのかもしれないが、十四才の身体にはそぐわなかった。

「あらら、ほんっと似合ってる！ 可愛い！ お母さんはやっぱり見る目あるのよ。いつも着ている陰気臭い、葬式に行くような格好よりも、こういう華やいだ感じの方が向いているのよねえ。これから着るものそういうのにしなさいよ。ねえ」

白々しくも母は、懸命にピンクのワンピースのよさについて語っておられる。聞き流すのは簡単だけど、この機会にきっぱりと言っておいた方がいいような気もした。

「私は嫌いなの」

紡はその場で脱ぎ捨てて、シュミーズ姿のまま部屋に戻った。いつものように鍵をかけ、鏡に下着姿の自分を映してみた。まだまだ身のついていない身体で、お姉ちゃんのやわらかさには程遠いけれども、意に染まぬ服を身につけている時よりははるかにきれいだと感じた。

「紡、なんでそんなあだになるようなことするの！ お母さん一生懸命縫ったのよ！ お母さん一生懸命あんなのために作ってあげたのよ、なのになんで、なんで」

——いつものことだわ。

泣き落としにかかる母。もちろん縫うに当たって、さぞや苦勞したことだろう。もともと洋裁のような細かいことは苦手な母だ。娘を思う心さえあれば、きっと多少の手作りの粗などは関係ない、きっと喜んでくれると勘違いしていたのだろう。紡に対しても、お姉ちゃんに対しても、同じだった。伝わらないと泣いて説得しようとする。泣いて脅してだめだったら今度は、若干譲歩して機嫌を取ろうとする。思わずOKを出してしまうと、つけこむように自分の要求を押し付けようとする。お姉ちゃんの結婚式だってそうだった。あれだけ、レストランウエディングをしたがったお姉ちゃんがなぜ、いかにも旧式な結婚式会場を選ばねばならなかったのか。しかも白々しい花束贈呈なんてやらねばならなかったのか。銀のシャープペンシルとボールペンのセットを引き出物にしよう決めていたのに、なぜ金の七福神置物に代わってしまったのか。すべてはお姉ちゃんのドレスを理想のものにしたゆえの妥協点だった。お姉ちゃんはどうしても、お気に入りブランドの可愛いドレスを着たかった。和装なんてしたくなかった。たったひとつの条件を通すためにお母さんの要求をすべて飲まねばならなかった。招待客のほとんどが父の知人関係だったため、お姉ちゃんの友だちは二次会にしか呼べなかったことだってそうだ。

自分のしたいことを押し通すためには、その倍、条件を飲まねばならない。

この家で生き延びるにはそれしかなかった。

「あんなのために思って」「あんなに似合うから」その言葉を妥協して、その隙間から自分のほしいものを手に入れるため努力しなくてはならないこの家。親だから嫌いになるなんてこと、あるわけないというけれど大嘘だ。紡も、お姉ちゃんも、生まれ育ったこの家と両親を憎んでいた。

——心を込めて作った不細工な代物よりも、機械で大量生産された完成品の方が私は好き。

白い百合をさした一輪挿しに微笑みかけ、紡はもういちど、ヘッドホンを耳に当てた。



あれから一週間、知らん振りを通した。答えは彼女の机、薔薇にあり。

みながあくすくす笑いをこらえている。腹を押えている奴もいる。けげんに思い覗き込んでみると、数人の取り巻きが西月さんの机の上を指差して笑っているのが見えた。男女それぞれ混じっているけれども、ほとんどが女子。

放課後は委員会や部活の兼ね合いもあって、残っている人が多い。以前の紡だったらさっさと退散していたのだろうが、天羽くんひとりに修学旅行のしおりを押し付けるわけにもいかない。一瞥した後、さっさと席に戻った。教室でひとり、「悲しみよ、こんにちは」の文庫本をめくっていた。

みな、紡の性格を知っているから一切話しかけることもない。紡のコネも知っているから露骨に悪口言うこともない。

「いやあ、なんていうかさあ。笑っちゃうよねえ」

本人、西月さんはまだ戻ってきていなかった。「青大附中・他校交流サークル」消滅に伴い、西月さんの居場所がなくなりつつあるそうだが、その点担任がうまく手配してくれたらしかった。水鳥中学との交流会に参加はできないけれども、E組の手伝いはしてもらえるからとのことだった。名誉ある評議委員から一転、ただの困ったちゃん扱いされているのを哀れに思ってE組の手伝いをさせているのか、それとも当の本人がE組扱いされているのかその辺の事情はわからない。あまり追わない方がよさそうだ。地獄耳お姉ちゃんに聞けば一発なのだろうが、面倒なことに巻き込まれたくはなかった。

「これで一週間連続薔薇の花、よねえ」

「よく買ってくるよねえ、『彼』も」

「彼」の言葉にじっとりと意味を塗りつけて発音する女子たち。机の上には、一本の薔薇が薄いビニールに包まれて真横に寝せてあった。触れないようにして、指差した。

「小春ちゃんもいいかげん気付けばいいのにねえ。まだ信じ込んでいるみたいよ」

やはり銀色のアルミホイルで下を細く包んでいる。しわが少なめに見える。特徴ある包み方だった。

「けど、きっと小春ちゃん、天羽くんがくれたんだって信じてると思うよ。かわいそうだよ」

「いいかげん本当のこと、教えてあげたらどうかなあ。なんかこれだと、知ってる私たちもうそつきになっちゃうよ」

——本当のことってなんなのさ。

ついでにまた紡の方を見るのはやめてほしい。疲れた。ほんと。

噂の種となった天羽くんは用事があるとかで、一步お先に教室を出た。紡とはあとで落ち合う約束をしていた。無理に一緒に帰らなくても困りはしないのだけど。天羽くんがいやなのだ

ろう。合わせておいたほうが無難だ。

「きっとさあ、小春ちゃんは元の彼がくれたんだって信じてるんだよ。一年の頃言ってたもん。

『好きな人に真っ赤な薔薇を貰うのが夢なの。それも一本ずつ、小野小町みたいな感じで、百日間通い詰めてもらうの。でも私、小野小町のように最後まで無視なんてしない。ちゃんと途中でOKすると思うわ』とか言ってたでしょ」

——うわあ、天羽くん露骨にいやな顔をしそうだわ。迷惑千番。しつこい奴がだめな性格だったこと、気付かなかっただろうか。二年間も。

「そうだねえ。だから昨日も喜んでたよ。きっと天羽くんが、こっそりよりを戻してくれるんじゃないかってずっとお祈りしてたって話してたからね」

「でもでも、それはありえないよだって」

そこでなぜ紡の方を見るのか。うっとおしいので教室を出ようかとも思ったが、天羽くんと待ち合わせている以上しかたない。黙って無視こいていればいい。

「あれだけ純粋に思ってるのになんで、天羽くんってばさあ」

「やめなよ聞こえちゃうよ」

——別にいいけど。

「あんなに性格いいのにな。小春ちゃん可哀想だよ」

——彼女のいい子ちゃん演技を読めないほどあなたたちは馬鹿なのね。

一応は聞こえていることをアピールしておいた方がいいだろう。次のページをめくると同時に、軽く咳払いをしておいた。

薔薇の花が連日、西月さんの机に置かれるようになり、まだ一週間しか経っていない。深草少将にはまだ早い。

朝、教室に入るなり、前から三番目、廊下から二列目の席に女子たちが集まっているのを毎日目にしていた。竹箆のように包まれている中には、西月さんがいた。座ったまま、小首をかしげて、銀色のアルミホイル部分を持ち、じっと見つめていた。周囲の女子たちがしゃべるのは、たった今紡が聞いていたことと同じだけ若干異なるのは、西月さんをかばおうとしていることくらいだろうか。目の前に張本人がいる以上本音は話せないだろう。

朝、西月さんが教室に入るや否や、ギャラリーから

「わあ、小春ちゃん、また薔薇の花だよ！」

とからかいの聲がかかる。真っ赤になり首を振りながら西月さんは言い訳する。

「ち、違うってばあ。もう、誰かわかんないけど、きっとなんかのあまりよなんかの」

と意味不明な言葉でごまかす。

——なんで気付かないのかしら。

西月さんに想いをかけている男子あたりが、朝一番置いていったのではないかと女子たちは推理しあっていた。他のクラスか、他学年か。真相は闇の中だった。気になるのだったらこっそり朝一番で教室を張って犯人捕まえればいいのに、そういう手間のかかることをやりたがらない無関心さが、A組の特徴でもあった。

さっきの女子たちの口調によると薔薇の贈り主は尻尾を捕まれたらしい。

西月さんの思い込んでいる「元彼氏」ではないと、勘付いたらしい。

——あたりまえでしょうが。ばかみたい。

とっくの昔に紡は気付いていたことだけど、他の女子たち、男子たちの目は節穴だったってことだ。A組の連中は他人に無関心な奴が多いと感じてはいたが、なぜ気付かないのだろう。無関心というよりも、まぬけだ。

「でもさ、今のところは内緒にしとこうよね」

「男子がばらすよね、きっと。それまでほっとしておいたほうがいいよ。小春ちゃん、事実を知ったらショック、大きいだろうなあ」

「そうよね。あとで、慰めてあげようね、そうだ、小春ちゃんってチョコパフェ好きだよ。みんなでお金出しあっておごってあげようよ！」

真っ赤な薔薇の花に目を留めつつ女子たちは連れ立って教室を出て行った。

居なくなったのを見て取って、男子のひとりが紡に近づいてきた。やはり評議委員を勤めるようになってからは、紡もとっつきやすい感じに映っているようだ。女子よりは楽だ。悪くはない。

「近江、お前本当のこと、知っていたりする？」

「本当かどうかわからないけれど、推理はしているわよ」

「そうなんだ、じゃあ、しばらくは黙っておいた方がいいってことか」

男子に秘密を守らせるのは難しい。けど、不利益だってことがわかれば素直に口をつぐむ。面倒に巻き込まれたくはなからう？と意味をこめて答える。

「めんどろじゃない。またうるさいことになったら。静かなのが一番よ」

もう一ページ、ぱらりとめくった。

「天羽も知ってるんだらう？」

「さあ、私あまりそういう色っぽい話、しないから。私の好み知ってるからね」

意味ありげに笑ってみせると、男子も鼻を鳴らす。

「男子も女子も、どっちもOKかよ」

「選択範囲が広がっていいわよ。もてるかもよ」

やれやれとばかり首を大きく振って教室のドアを思いっきり開いて出て行った。評議委員に就任するにあたり、男子たちの前ではっきりと「私は男女どっちでもOKよ」と言い放って後、かえって紡に関心を持つ男子たちが増えてきたような気がした。天羽くんとなんとなく、付き合っていることが公認となって以来そうだった。全く無視されるよりは居心地よく、ぐちぐちくつつかれるよりは気が楽な関係。そういうのが増えるなら大歓迎だった。

まだ何人か男子たちがたむろしている。委員会活動のからみもあるのだろうか。修学旅行用のパンフレットを広げては、あれやこれやとしゃべっている。面倒な行事だし、いやおうなく女子たちと合同で行動しなくてはならないが、自分で決められる分、西月さんと一緒にならないよう組めるのがうれしい。できれば他クラスの頭のいい子たちと一緒にだったらベストなのだけど、そ

ういうわけにもいかないらしい。清坂さん誘えればラッキーなのに。残念だ。

西月さんの机周りから人がだんだん減っていった。最後までうろついていた男子たちも、たむろう理由がなくなったらしく、

「じゃあ、女子を襲うんじゃねえよ」

と明るく一声かけて出て行った。勘違いもいいとこだ。誰だってOKってわけじゃない。

——私だって変態じゃないわよ。

本を閉じた。むやみに女子たちから話し掛けられないようにするための防御策であって、何度も読み返すのが楽しい本ではなかった。ハッピーエンドではない作品は、時間をかけてゆっくり読むものであって、時間つぶしに効果的ではない。かばんにしまいこみ、あらためて西月さんの机に近づいてみた。新品のつるつるした透明セロファンに包まれて、形のよい赤い薔薇が横たわっていた。

——朝に持ってきているんじゃないのね。これは、夕方教室に誰もいなくなってから、持ち込んでいるってわけね。なあんだ、そういうことか。

今日は五時間目の体育授業中を使い、こっそり「彼」が置いていったらしい。この辺、一週間の不気味な行動へのけりをつけたい、という答えのような気もする。勘違いしている西月さんに、正真正銘の答えを出すようにするための。

——天羽くん遅いなあ。

教室を黙って一周した。廊下側に向いた耳の鼓膜を、敏感に震わせてみた。廊下を通る気配はほとんど感じられなかった。

小さく、ドアのノブをひねる音が聞こえた。

じっと扉の向こうから来る気配をこめかみで感じた。

片目で斜めに見上げると、戸口の隙間から男子の顔がのぞきこんでいた。三白眼のまなざしとぶつかり合った。

——やっぱり。

じっとりした雰囲気のまま現れたのは、片岡くんだった。すぐに目をそらして紡は窓のてかりを眺めた。目のぬめりをぬぐいたい、そんな気持ちだった。想像していた通りだった。

周りの女子たちがあえて口にしなかった名前。

西月さんが想像していなかった名前。

紡だけは勘付いていた名前。

何も話す気なんてなかった。紡は自分の席へ戻った。もう一度文庫本を取り出した。

片岡くんも戸口側の席で手持ちぶたさに腰掛け、ぴくりともせず、机の上に目を落としていた。紡には一瞥だにしない。少しは観察する余裕を持つことができた。

——片岡くんもあんな事件を起こさなければ、もっと女子受けしただろうに。

ルックスも背格好もあのミルクキャンディー的評議委員長に瓜二つだった。顔かたちが似て

いる、というよりも、かもし出す雰囲気はどこことなく、昔のお公卿様風だった。あくが抜けているのが立村評議委員長だとするならば、片岡くんの場合はほんのわずか、くせのあるにおいがする。柑橘系オーデコロンをつけているかいないかの差だろう。

立村評議委員長には

「なんだかあいつぼーっとしているよね。男か女かわかんない」

ですむことが、片岡くんには

「コロンを男のくせにつけて気持ち悪い」

と遠ざけられる。もっとも今の片岡くんは「下着ドロ」という汚名により、イメージにも容姿にも、どぶ臭さが漂っている。紡の好みではないけれども、片岡くんタイプを応援したがる女子だったはずだろう。立村委員長を思い続ける清坂さんのように。

片岡くんについては身から出た錆だし、同情する気はない。

さっさと紡に教室から出ていってもらいたいのだろうが、こちらだって都合がある。天羽くんと約束してしまったのが失敗だをつくづく思った。面倒だ。こう言う時、付き合ったことを後悔したくなる。せめて「寄席限定お付き合い」に契約を書きかえられないだろうか。

めったにない、真っ赤な夕暮れが空に満ちている。火事が起こりそうな、毒々しいくらい紫色の空だった。

「おーまったせいたしやした！ 近江ちゃん」

待ち人、天羽くんだった。ふたりっきりの緊迫感ある空気をあえて壊してくれるのが天羽くんのいいところだ。紡は軽く頷いてみせた。唇を一瞬だけゆがめ、遅い、と伝えてやった。

「もしかして待ちくたびれてた？」

「別に」

目で、片岡くんを見て、合図した。

「さっきからああよ」

「あっそか」

天羽くんの声にぴくりと反応した。振り返らなかったが、背筋をぴんと伸ばした。肩が四角くしまって見えた。ビタミン注入されたのか、と言いたいくらい、背がぴんと伸びていた。最後に天羽くんは西月さんの机を、紡の隣りから見下ろした。

「近江ちゃん、花好き？」

「嫌いじゃないわよ。私は百合が一番」

「あぶねえこと言うよなあ。せめてもっと激しく燃えろグラジオラスとか」

「なんでグラジオラスが激しいのよ」

やっぱり天羽くんのギャグ感覚はよくわからない。ただ、言葉が身体になじみつつある。いやではなくなる。燃えろグラジオラスってことだったら、あとで一輪、グラジオラスを買って帰ってもいい。

「じゃあ、がんばれよ。待ち人、そろそろ来るぜ」

片岡くんの肩に手をぽんと置き、床を軽く飛び上がるしぐさをした。

「早く行こうぜ」の合図をした。後、教室を出て行こうとした。扉を開けた。とたん立ち止まらざるを得なかった。

西月さんが瞳を見開き、口をまあるく開けてで立っていた。

向かい合った天羽くんも、しっかり硬直していた。

確かに何かを口走ろうとしていたはずだ。だが言葉にならないのだろう。唇が震えていた。向かい合った二人はかつての恋人同士だったはず。再会の喜びとは遠い、ねばねばした動きが、遠目からもくっきりと映った。紡はスカートのポケットに、深く手をつっこみ、唇から息を吐いた。

近く为天羽くんには聞こえたらしい。ねばついたものが取れたように、さわやかに話し掛けた。

「ほら、待ってるぜ。薔薇の相手が」

——薔薇の相手？

二年三学期以降の憎憎しげな口調とは違う。二学期当時の、「小春ちゃん小春ちゃん」と声をかけていた頃に似ている、やわらかい響きが混じっていた。でもよそいきの部分は消えていない。そこだけ確認している自分に、ちょっと自分でも驚いた。

西月さんの顔には、天羽くんと紡を交互に見比べた時の奇妙な表情が入れ替わり、立ち代りしていた。天羽くんには餌欲しげに呼ぶ猫の眼を、紡には強い猫ににらまれてびくびくして伏せ耳しているような困った顔を。紡だけが冷静に眺めていると、さらにおどおどきよときよとしはじめた。最後にじっと見返している片岡くんを視線に向けた。最初にそっちを向け、と首根っこつかんで顔を向けてやりたかった。

「私を呼び出したの、天羽くんじゃなかったの？」

あえて紡の前で尋ねるということは、おどつきながらもそれなりに勝負をかけようとしていることだろうか。ばかばかしい。相変わらず紡は変わらぬ視線で西月さんを見据えていた。にらまないけれども、全然びびっていないのだから、その辺は伝えておかねばならない。三人の顔に何度も視線をぶつけ、とうとう天羽くんの顔正面に向かった。目をそらそうとする天羽くんを追いかけるように、声を出した。

「天羽くん、どういうこと。説明して」

力のない、か弱い口調だった。自信をすっかり失った女子の、ひよひよした言い方だ。どこかで見たことのあるこの言い方。うんざりしそうだ。

それにしてもなぜ逃げるのだろう。むしろ天羽くんの態度が目障りだった。もったきちんとしろ、と気合を入れてやりたいところだが、別にそこまでしたい相手でもない。

天羽くんを横目でにらんでやった。効果ありだ。うしろずさりして、観念したようにうなだれた。片岡くんにはっきりと顎で頷いてみせた。片岡くんは黙っている。一呼吸置いた後、天羽くんは西月さんに告げた。

「まあ、入れ。それからだ」

——あららん、どうしたのよ、この状態。

天羽くんの脇に立ち、血の気を失っていく西月さんの歩く様を眺めていた。机に薔薇が一輪、透明セロファンに包まれているのを確かめ、立ち止まった。背を向けたままうつむいている片岡くんの姿を目で追った。

「片岡、くん？」

かすかに声が聞こえる。

「まさか、これ、一週間、ずっと片岡くん、だったの？」

答えはなかった。片岡くんが立ち上がり、ゆっくりと振り返った。紡や天羽くんの方を見はしなかった。西月さんにじっと、ものいたげに見つめ返した。

「どうして？」

ゆっくりと片岡くんは近づいてきた。教室の一番後ろに立っている西月さんに訴えるように、薔薇の花が置いてある机の脇に立ちつくした。その視線は薔薇の花へと落ち、片手で銀色のアルミホイール部分を握り締めた。あの持ち方、包丁もしくは体罰用の大きな三角定規を握るような手つきだった。ゆっくり、ゆっくり、薄紫の陽射しを背中に浴びるようにして近づいてきた。

「ほら、言いたかったんだろ。お前の、『女神さま』にさ」

不気味なほど、「彼氏彼女」の頃だった頃の響きに似ていた。

片岡くんはかすかに不快げな視線を天羽くんに投げた。心の動きを整えるように一度うつむき、ゆっくりと西月さんの顔を見上げた。

「これ、あげたかったんだ」

ようやく、搾り出すような声が聞こえた。片岡くんの生声を聴いたことはほとんどない。声変わりがとっくに終わっていたんだと、初めて知った。

「受け取ってほしいんだ」

首をかすかに振る西月さん。

「盗んだんじゃない、自分で買ったものだから」

「そ、そんなんじゃないの。私、これ、受け取れないよ。そんな高価なもの。私、薔薇、大好きよ。でもね」

「聞いた。薔薇の花、毎日、プレゼントしてほしいって、天羽から聞いた」

——天羽くん、いったい片岡くんは何吹き込んだ。

時と場合によっては面白い落語を聞いた時のように腹抱えて笑いこけたい。ああ、全くの茶番劇だ。

完全におびえきっていた。後ろに紡や天羽くんがいるからまだ立っているけれど本当は崩れ落ちて泣き喚きたいだろう。怪しいまなざしの片岡くんが薔薇の花を差し出されても、困るだけだろう。本当に差し出してほしかった相手は、今、紡の隣りで面白そうに眺めているのだから。

西月さんは自分でやらかしていたとんでもない勘違いを、どう受け止めているんだろうか。

ずっと本気で、天羽くんが持ってきてくれると信じきっていたなんて。深草少将が小野小町に通い詰めた九十九日の夜を、本気で夢見ていたおめでたい人だ。どこがどう繋がればそういう妄

想に浸れるのだろう。一度振られた相手が、また気まぐれおこして再び告白してくるなんて、そんなことがまずあるだろうか。しかもクラスに付き合いをかけた相手がいるというのにだ。愚かもいいところ。現実を見て目を覚ませばいい。

——助け舟、ほしいよね。

ちよいと天羽くんの腕をひっぱってみた。ぎよっとするのはなんでだろう。ワイシャツのそこだけなのに。でも言いたいことは伝わったようだ。天羽くんはえへんと咳払いをした。片岡くんと西月さんが振り返った。

「わりい、つまりだなあ、そういうわけなんだ」

「そういうわけってどういうことなの。私、わからない。だって、なんで片岡くんがそんなことしなくちゃいけないの？ ね、誰かに頼まれたの？ 私、怒らないから」

しゃれにしようと思命に言葉を尽くす西月さん。見ていていらいらしてきた。気持ち悪い汗がじんわりとにじんだ。

「素直に受け止めるよ。お前、前から片岡に優しくしてやってただろ？」

「優しくって」

怒りがほんの少し、こしょうひとふり、振りかけた程度か。必死に押えているのがびんびんと感じられる。天羽くんはすっかり落ち着きを取り戻していた。

「西月、受け止めてやれや。ほら片岡、お前も西月のことどうして好きか、言ってやれよ。一年の、あの時からだろ？ 男子からもみなばればれだったんだって、わかってるだろ。この機会だ。誰もライバルいないんだ。安心して言っちゃえ」

明らかに西月さんへの拒絶をこめた証拠に、紡の手を天羽くんは軽く触れてきた。別にそんなつもりでやったのではないのだけれども、紡はだまってされるままにしてきた。

「片岡はずっと、お前に惚れてたんだ。俺なんかよりも何千倍もな」

「そんな勝手に決め付けないでよ。片岡くんだって迷惑するよ。私なんかに」

遮ったのは片岡くんの、男になりきった声だった。

「迷惑なんか、しない。天羽の言う通り」

「片岡くん、なんでなの、だって私、片岡くんになにもしてないよ？」

指パッチンをしたのは天羽くん。片岡くんの言葉がさらに続いた。

「西月さんがいたから、僕はこの学校にいられた」

震えはなかった。嘘ではない証拠に、片岡くんは両手で銀色の部分を捧げ持つようにして、もう一度差し出した。

「ちゃんと俺のできることを、するから、お願いします。付き合ってください」

「下着ドロ」の汚名さえなければ、ごくごく普通のお付き合い申し込み者の行動だろう。

もし天羽くんだったらきっと大喜びして受け取っていただろう。

西月さんは、ふかぶかと頭を下げた天羽くんの顔を覗き込もうとした。花は意地でも受け取りたくないそぶりをしていた。手を下げたまま何度も繰り返した。

「私、クラスの評議として当然のことしただけだよ。片岡くん、濡れ衣着せられただけなのに、



そんなこと言われたって困るからって。それだけなのよ。そんな大げさに受け取らなくたって、いいじゃない。誰にそんなこと吹き込まれたの？ 私、ちゃんと文句いうから」

評議委員時代の噛み付くようなうるささが感じられない。

西月さんは、息を整えもう一度尋ねた。

「片岡くん、今のことみんな嘘でしょう。嘘と言ってもいいのよ」

片岡くんは天羽くんを思いっきりにらみつけた。脈略のない視線に戸惑うかと思いきや、全く同様な天羽くん。計算が働いているのではないだろうか。 やさしい瞳に戻り、片岡くんはきっぱりと答えた。

「本当。今のこと、嘘はひとつもない」

西月さんの逃げ場は完全に失われた。紡の目の前で、静かに天羽くんととの絆が断ち切れた瞬間だった。

紡の片手にはもうひとつの絆になりそうな指の温かみが届いている。お姉ちゃんとのキスとは違うけれども、気持ちはいい。指先を動かして、拒否していない証拠にそっと近づいた。

「近江ちゃんけっこう大胆？」

「別に、それより早く帰ろうよ」

修羅場に付き合う気ないし、巻き込まれるつもりもない。紡は立ち上がると天羽くんの肩を指先でつつき、さっさと廊下に出た。西月さんは止めなかった。ただじっと片岡くんの、真剣でいてどこか執念深そうなまなざしに凍り漬けされていた。

「どうでもいいんだけど、あれ、どういうことなの？ まあ、天羽くんが話したくないなら別にいいんだけど、私も面倒なことに巻き込まれるのはごめんだから。身を守る程度には教えてほしいのよね」

とんでもない展開ではあったけれども、片岡くんが薔薇の花の贈り主であることくらいは気付いていたし、それなりに西月さん宛ての想いも見え隠れしているのであろうと予測はしていた。

もともと「下着ドロ」事件の犯人たる片岡くんをかばっているのがA組評議委員だった西月さんだけだったと考えれば、自然、想いを寄せるようになるのもおかしくないだろう。紡なりに先は読めた。

が、しかしだ。今の時代、好きな人へ花を捧げるなんてこっぴどかしいことをことを、中学三年の男子がするだろうか？

一週間も、見せつけるような格好で花を机の上に置くなんてだ。

天羽くんがグラジオラスを紡にくれることはありうるかもしれないが、薔薇である。真っ赤な薔薇である。しかも一週間こっそり、机の上に残してきたわけである。

尋常じゃ考えられない。しかも相手は薔薇の花よりもその辺のタンポポがお似合いの西月さんではないか。お姉ちゃんに捧げるのならばまだわかるが、薔薇の方が受け取られたとたん絶望のあまり一気に散ってしまいそうではないか。

「近江ちゃん、俺も花買ってあげようかなあ」「またまた話を逸らすんだから」

天羽くんは花屋をあちらこちら探すようなそぶりをした後、指差した。

「よっしと、リクエストは、白い百合だな」

「百合って知ってる？ レズビアン陰語だったりするのよ」

「じゃあ白じゃねえや、ピンクの百合だ！」

——まったく天羽くんのセンスって変だわ。

駆け出していった天羽くんを追わなかった。向こうはきっと期待しているんだろうが、あれだけ教室で待たせて、とんでもない茶番劇を見せ付けられた紡の立場も考えて欲しい。少し反省すればいいんだ。

ゆっくり歩きながら、紡は頭の中を整理してみた。

軽い口調で喋り捲る天羽くんだけ、聞かれないことにはギャグネタでごまかすテクニックを持っている。さすがの紡もそこまで割り込むことはできないだろう。自分と関係のないことだったらそれでもいい。天羽くんも自分で処理をしたいから、ファミレスでの交際申し込み時に話したのだろう。きっとそうなんだと思う

。紡の見た限り、西月さんはかなりショックを受けているようすだ。

薔薇の送り主を天羽くんだと思い込んでいたらしいからなおさらだろう。かなり舞い上がっていたという。よりを戻してくれるのではないかと、ささやかな夢を抱きしめていたのだという。

それを、当の天羽くんにぶっこわされ、しかも、贈り主が「下着ドロ」の片岡くんときた。紡からしたらそれでもいいじゃない、お似合いよ、と言ってやりたい。執念深い同士、くつつきあえば幸せじゃないかとも思う。しかし、やっとなかないような夢に心ときめかせてきて、あっさり打ち消された後、西月さんはどう壊れるだろうか。女子の場合……自分の場合もそうだが……あまりにも強い衝撃だと、相手か、もしくはその相手の恋人を憎んでしまうものだ。自分の経験からもそれはかなりの可能性として言えるだろう。となると、もしかしたらだ。天羽くん憎しと思いつつ、とばっちり自分がこないとも限らないではないか。もちろん、西月さんは女子として頭が悪いけれども、性格が腐っているわけではない。恨み心頭であろう紡にすら、他の女子たちの嫌がらせを押えるような行動を取っている。知らないわけではない。

「一度、近江さんに言ってやんなよ。人の彼氏としてしゃあしゃあとするんじゃないよって！もしあれだったら私が言ってやろうか！」

と。周りの単純な女子どもがわめいているのを知っている。でも、この一ヶ月一切、そういうことがなかったのは、元評議委員であるプライドで押えてくれたからに違いない。評議から降ろされたたん、あっさり身を引いて、一年の女子を面倒みる係として小さくまとまってくれているのもも評議委員の紡としては助かる。

一、二年のようにうるさくわめきたてなければ、西月さんは人畜無害だということが、この三ヶ月間身にしみた。好きにはなれないけれども、それなりにやっていくことはできるタイプの女子だった。

が、しかし。

今回、もしこのことが元の彼氏天羽くんの計画だとわかったら、恐ろしいことになるような気

がしてならない。今の展開からすると、天羽くんはかなり手を変え品を変え、片岡くんに何かを吹き込んだらしい。もちろん西月さんと別れたことは、A組全員が知っているだろうし、片岡くんが西月さんへ片想いしていたのも確かなことだろう。まさか、天羽くんが昔の彼女を、せっかくだからということで片岡くんを斡旋した、ってことだろうか？

入らない本やテープなどを好意でプレゼント、というのならわかるけれども、相手は女子だ。人間だ。紡が同じことされたら即座に席を立って縁を切る。西月さんもいまだに天羽くんへ未練ありありだってことを考えると、同じことを感じていてもおかしくはない。

別に紡にとってはどうでもいいことだ。ただ天羽くんとこれから一緒に「寄席」や「漫談」を楽しみに出かけた方がいい気持ちがある以上、あまり足かせになるようなことは避けておきたい。天羽くんは事情を聞き出すことはできないにしても、紡が自分の情報ルートを使って確認しておいた方がいいのではないだろうか。わが身を守ることができるのは、親でも彼氏でもお姉ちゃんでもない。自分だけだ。

やっと追いついた。天羽くんがさっさと百合の花を三本、ピンク色のものを包んでくれるよう頼んでいた。この前片岡くんが買っていた花屋と違って、新聞でざくっとくるんで渡してくれた。

「どう？ 俺なりのプレゼントは」

「センス、いいねえ、天羽くん。この前の指輪といい」

「大切にしてくれてるかなあ。学校にはしてこないけれど」「ばかね。学校でうっかりしてきたら、修羅場よ修羅場」

「じゃあ修学旅行で」

「悪くないわね」

無理に話を持ち出すのもつまらない。まずはできることから始めよう。紡はネクタイを緩めた天羽くんに、ひょいと百合の花とキスさせてやろうとたくらんだ。受け取った百合の花を、パンチ代わりに鼻先へ突き出してやった。ぐえっとむせる天羽くんの背中を片手でさすりつつ、紡は決めた。

——明日、清坂さんに会おう。

——「アルベルチーナ」に連れて行きたいよう。

待ち合わせ場所は視聴覚教室だった。よく、英語の発音練習関連で自習をしたい時とかに使用許可を貰い、使わせてもらう。二人席で、机にはテープ用カセットとヘッドホンが備え付けられている。一応間は板で聞こえないよう区切られているけれども、横顔すべて隠れる程ではない。密談するにはいい場所だった。清坂さんにも了解を得て、この日、ふたりっきりのデートもとい、相談を持ちかけることができた。めでたいことである。ケーキやお茶が出ないのが残念だ。紡も本当だったら「アルベルチーナ」にお誘いして、ふたりでゆっくり語らいたい。しかしながらあの店の正体がばれてしまった時のリスクも計算しなくてはならない。なにせ清坂さんには彼氏がいる。レズビアンというものに対して免疫があるのかもわからない。ただやたらと女子の多い喫茶店ねと思われるならまだしも、たまに見かける口移しのお食事とか。そういうのを見られようもんなら速攻、縁を切られる可能性がある。最初はまず、無難なところでしめたかった。

「お待たせ！ 近江さん」

先に席について、ヘッドホンをかけて考え事していた紡の肩を清坂さんはぽんと叩いた。

「やっぱり、人がいるところだとまずいもんね。声かけてくれてありがと」

——全く疑ってないわね。紡は曖昧に笑った。清坂さんの髪型が可愛いとか、しゃべりかたが甘えてないのにやわらかくて心地いいとか、いろんな言葉が頭の中に思い浮かぶ。でも半分以上は内緒にしなくてはならないものばかり。男子では……もちろん天羽くんにだってこんな気持ちにはならないのに。かろうじて自分の中で許可の下りた言葉だけを使った。

「清坂さんって、いかにも少女って感じだよ」

「しょうじょ？」

ぴんとこなかったみたいだ。小学校時代の友だちにもいなかったタイプだ。同世代の女子が持つ、チーズを焼いた時のようなねばっこさがないし、においもない。なのに話しているところのあるうまみがある。不思議な味わいだ。

清坂さんはかばんを机の上に置き、椅子に腰掛け、それごと紡の向かいに移動した。

「私も、近江さん大変だろうなあって思ってたの。だから、こうやって話せてよかった」

——私と話せてよかったって、ほんとに言ってくれてるのかな。

たぶん若干、紡の望んでいることとは異なるだろうけれどもしかたないと思いつつ、紡は素早く話を進めることにした。外は曇っていた。徐々に冷えた空気が漂っていた。

「私も、評議委員会の内部事情あまり他の人に聞けないし、本当だったら聞く気もないんだけど、ただ自分が巻き込まれてしまった以上、しょうがないのよね」

高揚気分をごまかしたくて、髪の毛の先をつんつんしごきながら紡は切りだした。

「けど、事情が事情だし、他の人たちも私のこと嫌っているみたいだし、なかなかね」

「そんなことないよ。近江さんカッコいいって、うちのクラスの人たちみんな言ってるよ」

——カッコいいって言ってくれるのは、清坂さんだけでいいのに。

本音が人差し指の痙攣でばれないように、紡は同じしぐさを繰り返した。

「それに担任との関係もいろいろあるし、なかなか聞けないのが歯がゆくもあったわけ」

「うん、わかる、わかるなあ」

こくこく頷くのが、なぜ清坂さんだと嫌味に感じないんだろう。大きな瞳を覗き込むたび、巨峰のおいしい奴と同じく一気に口に放り込んでしまいたくなる。

「だから言うんだけど、私が入る前に、うちのA組評議同士の間で何があったのか、清坂さんが分かる範囲内でいいんで教えてほしいのよ」

簡単には返事をしないかもしれない。もし教えてくれないのだったら別の方法を考えるのみ。答えに期待はしていなかった。目をそらさないで清坂さんが考えこんでいるのを紡は、楽しみつつ待った。

「あの、すっごく言い方難しいんだけど、近江さん、いつから天羽くんと、なの？」

——やはりね。

今の三年女子評議に嫌われている理由がそれだ。一、二年と仲良し同士だった西月さんのことを考えるとそりゃあそうだと思えなくもない。無難に答えておこう。

「付き合いかけられたのは四月頭。でも、周りの人が騒ぐほど付き合いらしいことしてないわよ。うちの担任も公認だし」

「えっ、狩野先生も！」

なぜそこで驚くのか。意外なところですよとんきょうな声を上げ、口を押える清坂さん。

「そう。たぶん、評議の天羽くんと付き合えば、私もクラスに溶け込むんじゃないかと計算していたんじゃないの？ まあ、男子とはしゃべること多くなったから、お得だと思えないこともないけれどもね」

「近江さんって、なんというか、面白い考え方、するよね？」

可愛い。ほんっと、食べてしまいたいくらい可愛い。艶やかな髪の毛を思いっきりなでなでしてあげたい。男子たちの性衝動というものがもし自分と重なるのだったら、きっとこれこそ「そそれられた」状態だろう。つばを飲み込みつつ紡は話を逸らした。でないと、教室に今ふたりきり。

「たまに寄席に行ったり、落語の話、したり。ちっとも、清坂さんたちが委員長としているようなこと、してないけどね」

最後の一言は少々、ジェラシーが混じっていた嫌いもあり。

すぐに清坂さんの頬が、熟れる直前の林檎と同じ、淡い赤に変わっていくのを、紡は面白く眺めた。さて、あのうすのろ評議委員長は清坂さんにどんな悪いことしているんだろうか。

「あ、あのね、近江さん。それでもうひとつ聞いていい？」

今度は清坂さんが話を逸らした。やはり、あまりふれられたくないことらしい。

「小春ちゃんとは、あまり話、することないの？」 「あるわけじゃない。私が天羽くんを、たらしこんだって思い込んでいるんだからね。こちらとしては迷惑なんだけどね」

この辺は本音だ。女子評議たちにはさんざん悪口を言っていることだろう。クラスの女子たち

にはいい子ちゃんぶって、紡に手を出さないように言い募っているらしいけれども、どこまでその演技が通用するのだろうか。衝撃的事実「片岡くんが深草少将だった」事件も公にされつつあり、さらに西月さんの立場は悪化しつつある。これ以上落ちるところのない片岡くんに比べ、まだ元評議委員のプライドの残る西月さんにはしんどいところだろう。

「でもそれはしょうがないことよね。近江さん、小春ちゃんを傷つけたくて言ったわけじゃないんだもの」

「今後のA組のこと考えると、私も大人になってうまくやっているとまずいかな、とは思うのよ。だから聞いたかったの。冬休みに、西月さん、何をやらかしたのかなあって。私の見たところだと、二年二学期まではほんと、あの二人目に毒な程いちゃいちゃしていたのに、冬休みが終わったとたん、ああでしょう。人に迷惑をかけないのだったらそれでもいいんだけど、こちらも当事者になってしまった以上、なんとかしなくちゃいけないし。それに」

言葉を切って、ささやいた。別に聞かれて困る人がいるわけでもないけれど。

「天羽くんは、言ってくれないし。男子って変だよね。こういう聞かなくちゃいけないことに限って、口にしてくれないよね」

どうやら思い当たる節があるらしい。清坂さんは大きく頷いた。

——あの委員長、いったい清坂さんを泣かせること平気でしているのかしら。

また、ちりちりと、痛いところが出てきた。それが何なのか判断できないうちに、清坂さんは語り始めた。評議委員会と、天羽くんと、西月さんとのことを。

「評議委員会では、毎年冬休みに『ビデオ演劇』ってものをこしらえるのが慣わしになっているの。これは知ってるよね。たまに教室で観たりすることもあるしね」

——ああ、あれね。立村委員長がシャーロック・ホームズになったって奴。

「去年は『忠臣蔵』で、今年は『奇岩城』。毎年そうなんだけど、二年が中心になって、全クラスの評議委員と一緒にこしらえるのよ。今年は違うけれども、大抵の年、評議委員って入れ替わりがないから、ほとんどツーカーで話が通じるのよね。いわば、演劇部の代わりって感じかなあ」

噂には聞いたことがある。やたらと演劇好きな先輩がいて、その人の命により、自宅のビデオカメラやらデッキやらを用意して、学内でビデオ撮影を行っていたらしい。しかも、わざわざダビングを繰り返して画像を劣化させつつ、一本の物語を構成するという。それだったらもっと本格的に自主映画をこしらえるよう、学校側に相談すればいいのに。なんだか中途半端でばかっていると紡は感じていた。

「確か、アルセーヌ・ルパンのものよね」

大体見当がついた。このあたりの事情は前々から聞いていた。クラスの女子たちと、西月さんがしゃべっていた言葉でぴんときた。

「そうなの。ルパンが天羽くんで、恋人役が、小春ちゃんだったの」

——なるほどね。やっぱりそこなのね。

クラスでも、また委員会でも公認のカップルだったら、そういうキャスティングもしゃれの一

つとして楽しめただろう。いきなりの大崩壊がなければ、楽しく打ち上げを行ってお仕舞いになっただろうに。知りたいのはその先だ。

「私も『奇岩城』読んだことあるけれど、確かルパンの恋人って、レイモンドとか言ってたような気、するんだけど」

「そうなのそうなの。レイモンドがね、ラスト、ホームズに撃たれそうになったルパンを守るために飛び出して、殺されてしまうの」

「ホームズ」という言葉を口にしたとたん、また頬がほんのり赤らんだのは、くだんのシャーロック・ホームズ役が立村委員長だったことにも関係あるだろう。確か「名探偵ホームズ」と「怪盗ルパン」の作者は全く別で、国もイギリスとフランス、ということで違うはずなのだけれど、なぜいきなり出てくるのかわからない。面白いともなんとも思わない本だった。

「ふうん、ということは」

紡は指先で机の上をなぞった。丸く、小さく。

「そのキャスティングをしたってことは、まだ天羽くんと西月さんは仲たがい、してなかったってわけ」

「もちろん！ だって、私たちもそんなことになるなんて、考えてもみなかったんだもん！」

少し背中を丸めるようにして、清坂さんは紡を見上げた。チワワみたいだ。可愛い。

「近江さんは知らなかったと思うんだけど。私たち評議委員の中では暗黙の了解っていうのかな、小春ちゃんと天羽くんはもう公認のカップルで、くつつくのも時間の問題なんだって思い込んでいたところがあったの。小春ちゃんも、やっぱり意識していたみたいだし、天羽くんだって」

言葉を切った。少しだけ目つきが厳しくなった。

「そうよ、どう考えたって、小春ちゃんのこと好きだって行動、してたわよ」

「まあね、私もそう思うわ」

共感した。

「今の彼女になっちゃった近江さんには、ほんっとにごめんなさい、って感じなんだけど、でもそうなのよね。天羽くんもいつも小春ちゃんに話し掛けて、にこにこしながら受けないギャグを飛ばしていたのよね」

「ああ、今は忘れ去られた関西系のギャグね」

小首をかしげて清坂さんは尋ねた。

「近江さんには、白々しいギャグ飛ばしたりしないの？」

「ぜんぜん。全く関心なくなった見たいで、今は日本伝統の落語とか演芸を愛しているみたい」

すっかり言葉に詰まってしまったらしい。清坂さんが黙ってしまうのは淋しいので、紡は促すことにした。

「それで、『奇岩城』では何があったの？」

「うーん、撮影している時は何もなかったような気、するのよね」

「西月さんははしゃいだりしていなかったの？ 見苦しいくらい騒いでいたとか、うっとおしいくらい天羽くんにくっついてたとか」

思い当たるとすればこのあたりだろう。振られた今でも、しつこく天羽くんに尽くしているの

だから、もし両思いだったならばその倍、数千倍はパワーアップしていたはずだ。言葉を濁したところを見ると、清坂さんから見てもそれは感じられたのだろう。両手をこぶしにして顎の下に置き、また上目遣いに紡を見つめた。

「くっついてたかどうかは別だけど、小春ちゃんは嬉しかったと思うよ。だから、その、私たちも応援してたし。できるだけふたりっきりになれるようになって努力していたしね」

——清坂さんたちも、応援？

ひっかかった。顔に出たのだろう。清坂さんの顔に緊張が走った。

「応援って、何を？」

わかっている癖に、聞いてしまった。後悔しているのかもしれない。うつむいていた。

「私たち、ううん、私が、小春ちゃんのことを応援してしまったの。だからきっと、それがまずかったのかもしれないって、思ったの」

——後悔しているなら、私のことだけを応援して！

これはさすがに言えなかった。かわりに紡はため息をついて見せた。清坂さんのざんげをもう少し聞くことにした。

「最後の場面は、最後の最後に撮ることに決めてたの。ルパンとホームズの一騎打ち、というか、ホームズがルパンの乳母を……それ私だったんだけど……人質に撮ってピストルを向けて、その時レイモンドが飛び出してきてホームズに撃たれるって場面。ルパンだった天羽くんが、レイモンドだった小春ちゃんを抱きかかえてアップになって終りになったんだけど、ふつう終わった後みんな舞い上がるじゃない？ 盛り上がるじゃない？ ばんざあいとか、終わったあー！とか言うじゃない？ 天羽くんだけがしらけたままだったの。主役なのに、なんでかしらっとした顔して、小春ちゃんをおっぽっというて出て行こうとしたの。ルパンのシルクハット被ったまま」

よくわからないが、どうやら天羽くんはクランクアップするまで、西月さんと公認カップルのままでいたかったらしい。

「あの派手な帽子どうやって仕入れたの？」

「衣装係、私だったから全部作ったのよ」

——じゃあ私の服とかも作ってよ！

関係ないことに気が取られるのが悪いような気がする。

「じゃあ天羽くんはずっとしらけっぱなしだったの？」

「そう。いつもだったらもっとくだらないギャグ飛ばしたり騒いだりするじゃない？ しかも主役よ？ みんな気を遣っている話し掛けたりするのに上の空っていうのかな。小春ちゃんがいつものように『天羽くん、もっといつもののりで盛り上がりようよ！』って声をかけたとたん、いきなり怒鳴り始めたの。あんな天羽くん、見たことなかったからみんなびっくりしちゃって」

「怒鳴ったって、一体何を？」

想像つかない。

「『お前の顔を見るとむかむかしてくるんだよ、半径三メートル以内に近づくな』って。最初、私たちもきついギャグをかましていたのって思ったのよ。最近そういう毒舌がはやってるの」



かなって。でもすぐにそんな問題じゃないって、あの、その、立村くんが気付いたみたいで」

「立村くん」と発音した時にまた赤くなる。あのなよなよした男にどこを捕まれているのだろうか。紡は時々いらだった。

「委員長が割って入ったのね」

「そうなの。天羽くんかなり荒れてて、小春ちゃんも泣いちゃって、しばらく修羅場になっちゃって。その後、ビデオが完成するまでは天羽くんもあまり噛み付かなかっただけで、ずっと小春ちゃんのこと無視。小春ちゃん、何がなんだかわからなくてすっかりおろおろしちゃってて、女子たちがかばってて。ちょうどね、三学期から水鳥中学との交流会準備なんかもあって、ばたばたしてて私もよくわからないんだけどね」

「理由はなに？」

「そうよね、理由よね」

改めて考え込むしぐさをするってことは、清坂さんもよくわからないのだろう。今の話からすると、天羽くんが西月さんに愛想を尽かしたのはかなり早い段階だったってことだろう。ただ、「奇岩城」のビデオ撮影が終わるまでは義務としてうまくやるよう努力していたのか。評議委員としての自覚はしっかり持っている。でも、義務を果たしたとたん何かはずれたかのようになくなってしまったということか？

理由だ、何よりもそのわけを紡は知りたい。

清坂さんはしばらく無言で唇をへの字型にしていた。

「それがわからないのよ。小春ちゃんも悩んでいたのよ。『私が直せることはなんでも直すから、そのわけを教えて』って一生懸命天羽くん聞いていたの。でも、全然話を聞いてくれなかったって。評議委員会よりもクラスのことをもっと一生懸命にやれば、見直してくれるんじゃないかって思って、小春ちゃん、クラスの問題についてどうすればよい方向に進むかどうかを、狩野先生に聞いていたみたいよ。駒方先生にも相談していたし。女子って、男子のことで悩んだらクラスの運営のことなんて全然考えないよね？ 小春ちゃんは違ったの。もしかしたら天羽くんは評議委員会のことばかりに熱中していた自分にうんざりしたんじゃないかなって思って、小春ちゃん、できるだけクラスに貢献しようって思ってみたいなの」

——逆効果、って奴よね。

大体読めた。そういうことか。

紡はそっと、ポケットに隠し持っていたコーヒーキャンディーを取り出した。

「これ、あげる」

「わあ、嬉しい、近江さんも、話わかるのね！」

——そりゃあ、清坂さんだもの。

冬休み中に何が起こったのかが分かれば、三学期以降のふたりがどうして険悪となったのか、さらに言うならなぜA組の縁故問題についてあそこまで西月さんがやっきになったのか、おのずと見えてくる。

天羽くんがどうして西月さんを露骨に嫌うようになったのかはさておくとする。見捨てられて

慌てた西月さんが、自分の勝手な解釈により、クラスへ滅私奉公すればきっと振り向いてくれるかも、と考えたのも納得だ。あの人らしい考え方だ。素直に引いて、もう少しほとぼりが冷めるまで待てばよかったのに。天羽くんだって感情にかまけて叫んだだけかもしれないし、少し大人しくなってくればその時に、また考え直したかもしれない。

「クラスのために」何かすればきっと天羽くんは見直してくれる。

そんなわけがないのに、と紡なら思うだろう。自分を見捨てるなんて、悪いけれども男として見る目ないただそれだけの奴なのだと、軽蔑してやればよかったのだ。クラスで目立たないようにしてくれれば、西月さんにふさわしい奴が出てきて、その人と恋に落ちたかもしれない。いくらなんでも、下着ドロの片岡くんレベルまで、男子ランクが下がるなんてことはなかっただろう。引き際が要は悪かったってことだ。

二年間、天羽くんの側について、その辺の好みも気付かなかったのだろうか。

紡だったら一日寄席をご一緒ただけですぐに気付いたけれども。

鈍い女子なのだろう。

「そういうことなのね。わかったわ」

キャンディーを口に放り込んだまま、もごもごと紡はつぶやいた。

「三学期以降やたらと、西月さんがA組のことを、コネクラスじゃないってわめき散らす理由がぴんどこなかったのよ。清坂さんもすでに知っていると思うけれど、A組は自他ともに認める、コネクラスよ。私はその代表だもの。みんな暗黙の了解で隠しているのをどうして、ああもひっぱりだそうとするのかしらねって」

「この機会だから聞いていい？」

どうぞどうぞ、清坂さんの質問だったらなんでも答える準備有り。

「近江さんって、どうして青大附中に入ろうって思ったのかなあ？ ううん、今の話じゃないけど、まさか自分のお兄さんが三年間担任になるなんて、思ってもみなかったでしょ。私だったらやだなあって思うわよ。それに、近江さんなら普通の試験を受けても簡単に受かったんじゃないかって思うけどなあ」

もともと。紡としては、成績順位をちゃんとチェックしてくれていた清坂さんに感謝したかった。「たぶん、お姉ちゃんが『あの人』と結婚しなかったら、私も青大附中に入ろうとは思わなかった」

言い切り、もう一度葡萄の房のような黒い瞳を見つめた。おいしそう。

「お姉ちゃんが結婚したのは三年前なのよ。私が小学五年の時。私、お姉ちゃんのことを大好きで、赤ちゃんみたいだけど思いっきり泣いてしまったのよ。お姉ちゃんを取らないでって。お見合い結婚だったから親の反対はなかったけれども私がいかに強引に反対するから、お姉ちゃんも一時期結婚をあきらめようとしてたのよね」

他人事のように言う。

「みんなが私の周りで説得に回って、そりゃあもう大変だったのよ。まあ私も、あれだけわがまま言った後だし、もういっかって思ってね。何十回目かの説得にあらわれた『あの人』に言った

のよ」

「なんって？」

「お姉ちゃんの旦那さんにふさわしい人かどうか、三年間見極めるため、お兄さんのクラスに入れてほしいって、わがまま言っちゃったってわけ。まさか本気で青大附中に入れてもらえるなんて思ってなかったから言えたことだけだね。うちの母親がそれを本気に取って、青大附中の縁故入学の伝を捜し始めたの。ここだけの話だけど『あの人』、お姉ちゃんに骨のずいまで惚れぬいているから、私ひとり押し込むことなんて悪いなんて思わなかったんだろうね。きっと。それに もともと青大附中はコネ入学にそれなりの基準があるらしいし」

「それなりの基準ってなあに？」

あまり話したことはないことだ。清坂さんにだけは何でも話してあげたい。

「寄付金よ。それも宝くじとかで一時的に寄付するんじゃないくて、毎年、こつこつと学校に寄付金を入れる人とか、大きな会社の社長さんとか。大学の教授さんとか。試験だけは普通に受けさせるけれども、面接とかで確認して、ある程度下駄を履かせてあげたりとか、あと受験させなくても推薦入学という建前でもって入れるとか、いろいろ裏があるらしいわ。私は『あの人』が義理の兄にならない限りまず無理だったと思うけれどもね」

「でも、狩野先生って、学校の先生だってだけでしょ？ それで入れてくれるようなことするの？」

「学校の先生の場合、特別枠っていうのがあるんですってよ。なんでも、教師の親戚とか子どもとか、そういう人の場合だとまず身元が安心だというのが一つでしょ。それに加えて学力もそれなりに把握できているでしょ。いくらなんでも、九九もろくに言えない奴をそのまま入れるわけにはいかないから。その中でもって、安心だと思える人を入学させられるわけだから、かえってメリット大きいのよ」

九九の話題はまずかった。清坂さんの顔をうかがうがそれほどでもないので安心した。

「そうなんだあ、やっぱり本当に、コネってあるんだあ」

「私の場合だと、それに加えて、『あの人』の実家が黄葉町の方にある旅館だっていうのもあるみたい。あの辺では有名な老舗旅館らしくって、顔も利くしね」

「黄葉町の方って、わあ、私、去年の宿泊研修で行った」

いろいろあったらしい宿泊研修のことはあえて触れないで置いた。

「じゃあ、ひそかに狩野先生ってお金持ちなのね」

「そうね。お姉ちゃんは一応、玉の輿よ。青大附中の教師としての給料がどのくらい出ているのかはわからないけれど、たぶん、『あの人』の親がかりで生活しているんじゃないかって、うちの親も言ってるわ」

この辺は母親からの情報だ。お姉ちゃんのように金遣いの荒い女を嫁さんにしてしているのだから、いくらお金があっても足りないだろう。所詮彼も金持ちのぼんぼんなのだと思う。

「なんだか、狩野先生のイメージ、変わりそう」

「変わっていいわよ。どうせ『あの人』、学校では味もそっけもないミルクキャンディーの顔を替える気ないんだから。白衣着て歩いている姿って地味よね。お姉ちゃんの前ではケーキをお土

産にして、ご機嫌とっているんだものね、しょうがないわ」

紡がひたすら知っていることをしゃべり続けているうちに、いきなり天井の蛍光灯がぱたぱたと消えた。

もともと視聴覚教室は、暗闇で映像を見ることも多いので、暗幕型のカーテンが圧倒的に多い。カーテンを開けたままでも、黒の要素があちらこちらに散らばっていることもあって、すぐに暗くなる。

「やだなあ、誰だろ、近江さんちょっと待っててね」

照明スイッチは、教室の中にあるはずなのに、変だ。清坂さんが立ち上がって、戸口のスイッチをなでるようにした後、扉を開けた。

「貴史、あんたなんているのよ！」

——貴史って、誰よ誰。

悪いことしているわけじゃない。でも隠れたくなくなってしまった。首を机ついたての陰にうずめて声だけ聞き取ろうとした。

「何って、お前立村が血相変えて探してたぞ。こんなところで何してるんだよ！」

「ちょっと友だちと話していただけよ」

「立村と先に約束してただろ？ あいつ、ずっとロビーで待ちぼうけしてるぜ。たぶんくるだろうって思ってるみたいだぜ」

「別に立村くんと、待ち合わせの時間決めたわけじゃないもん！ 帰っててもいいって言ったもん！」

「お前、それって非常識って奴だろ。あいつあの調子だとずっと、分厚い本読んでロビーに座ってるぜ。一言、声かけてくるくらいのことしろよ」

「じゃあなんであんた、私がこんなところにいるなんて思ったのよ」

「知らねえよ。なんとなくドア開けてみたらお前が景気良くしゃべりまくってたから、近づいて呼ぶのやべえなって思って」

「だからって回りくどい呼び方することないじゃない！ 人がいるのよ！」

「うるせえな。早く話し合い終わらせて、立村のところ行ってやれよ。それともなにか？ あいつに聞かせられないこと、しゃべってるのかよ！」

「うるさいのはあんたよ！」

しばらくやりあいが続いた後、

「じゃあ、あとで行くから。あんた先に帰いなさいよ、もう、ばか」

思いっきりドアを閉めた。しまり際に、

「ばかなのは美里だろ！ ったくもう世話かけさせるなや！」

非常にテンションの高い会話が途切れた。

清坂さんは腕時計と、教壇上の掛け時計を交互に見上げ、ちょっぴりすねた顔でもって戻って

きた。

「ごめん、近江さん。ほんとはもっと話聞きたかったんだけど。また今度でいい？」

「いいけど、どうしたのよあの男子」

「うん、うちのクラスの奴なんだけどね、おせっかいなのよ。あいつ」

——もしかして、噂の羽飛くんって奴？

紡もその辺は若干、耳にしていた。会話の間に気付かなかった方がまぬけだ。清坂さんの彼氏が立村評議委員長というのは公認の事実。でもそれはカモフラージュで本当の彼氏は、幼なじみの羽飛くんではないかというのが噂として流れていた。他クラスのことなのでよくわからなかった。運動関連の行事では花形の羽飛くん、というのは知っているけれども、それ以上の関心はもてなかった。

でも、清坂さんのことを「美里」と呼び捨てにするとところからして、何かがある。

彼氏たる立村委員長ですら、「清坂氏」とよくわけのわからない言い方をするだけだし。

清坂さんは、紡が黙っているのを機嫌損ねたせいだと思ったらしくさらに続けた。

「あいつね、委員長と仲がいいからやたらと私につっかかってくるのよ。なによ、今日は近江さんと約束があるから、立村くんにも帰っていいって言うておいただけよ。なのになんで貴史がくちばし突っ込むのかしら。よけいなお世話よね。ごめんね」

どうやら清坂さん、紡との約束を最優先してくれたということらしい。立村委員長との待ち合わせをキャンセルしてまで、というのが非常に嬉しい。紡は笑顔で首を振った。

「いいわよ。私も変なこと、聞いちゃって。また、こうやって逢ってくれる？」

「逢う」という漢字を使ったつもりだったが、清坂さんにはまだ「会う」としか伝わっていないだろう。ニュアンスが通じあえない、悔しい。

「いいわよ、今度は女子同士、ゆっくりできるところにしようね！」

「いいお店知ってるのよ。『アルベルチーナ』って喫茶店、知ってる？ ケーキがおいしいのよ。今度、ぜひに」

「うん、ケーキおいしいとこならどこでも行く！」

紡がすっかりにんまりしたくなった瞬間、ドアが再び開き、じろっとにらみつける奴がいた。目と目が合った。噂の羽飛くんの姿がはっきり見えた。紡は指を差した。

「なあに？ え、まだいたの、貴史ってば！」

ちらっと姿を見せただけで、羽飛くん本人は入ってこなかった。怒鳴る清坂さんが、いきなり後ずさりしたのは次に立村委員長の姿を認めたからだだろう。立村委員長がすっかり戸惑い加減で、おずおずと入ってきた。すぐに紡の姿を見つけて軽く一礼した。相変わらず溶けそうな白い顔をしている。

「あ、り、立村くん、ごめんね。いいのに、帰ってても」

「うん、そのつもりだったんだけど、羽飛がさ。ああ、でも近江さんと話していたんだったら、そうだよな。邪魔してごめん」

いつもながらあっさりした、それでいて人の顔色を覗き込むようなしぐさをする委員長。向かい合わせに立っている清坂さんも少し不満げに口を尖らせている。

「もう、貴史に何言われたか知らないけど、こっちだって困るんだから」

「うん、わかった。じゃあこれから帰る」

さっさと帰って欲しい。さすがよくわかっている。そう思いきや、

「いいよ、せっかくここまで待ってくれたんだから。一緒に帰ろ」

いったいどうしたのだろう。この切り返し。清坂さんの顔はまだむくれていたけれども、かばんを机から降ろすと紡に振り返りながら、

「じゃあごめんね。今日のことは内緒にしとくから。今度こそ、おいしいケーキのお店でね！」

立村委員長の肩に寄り添うようにして視聴覚教室を出て行った。申しわけなさそうに振り返り、斜めに首を下げるのは立村委員長だ。握りこぶしふたつくらい背が高いけれども、あの調子だと清坂さんに追い抜かれるかもしれない。ご用心、とつぶやいてみた。

最後に扉を閉める時、また色黒のスポーツ刈りに前髪だけやたらと長い奴の顔がちらついた。目が合った。どことなくきつくにらまれたように感じた。どうも、羽飛くんという奴には嫌われてしまったようだ。

——とりあえず、わかるところはわかったってことかしらん。

紡はポケットに残っていたコーヒークャンディーをもうひとつ、口の中に放り込んだ。解けてかりかりと噛み砕くまではここにしようと思った。

清坂さんも紡に関してはかなり高い関心を持ってくれていたようだった。他の評議委員女子が冷たい態度で接するのに、清坂さんだけは一生懸命声をかけてくれたから。でも、評議委員同士の付き合いもいろいろあるだろうから、表立って話をすることはできなかった。こうやってこっそりと語り合うのが関の山だった。収穫はどっさりだ。最後の最後で委員長が出てきたのは誤算だが、内緒にしてくれると清坂さんも言ってくれたし、それはそれでよしとしようと思う。

——けど、なんなの、あの、「美里」って呼び捨てにする奴。

立村委員長が来た時にはさほど心配もしなかったのだけど、名前をいきなり呼び捨てにしてぼんぼんリズムよくかけあい漫才をやらかした相手には、どうしようもなくびりびりと来てしまった。よく顔を覗き込んだわけではないし、紡の直感に過ぎないのだけれども、明らかに羽飛くんという「幼なじみ」、ただものではない。

——まあいいわ。誤算は誤算で。なんとかなるわ。

苦味ばしったキャンディーを、早めに奥歯で噛み砕いた。

西月さんが二年の三学期以降、評議委員としての活動を活発化させ、「A組はコネクラスじゃない！」ことをかなり力強く訴えはじめたのは気付いていた。たぶん他の連中もそれは感じていただろう。反面。天羽くんは全くといっていいほど協力をしていなかったように思う。評議委員会内で行われている例の、「他 中学との交流準備」関連で外部との交流活動には積極的だったらしいが、その辺の情報がクラスには降りてきていないので、紡は知らないままだった。クラスは西月さんによって牛耳られていたかのように見えた。

たぶん、そのあたり、うざったく感じていたに違いない。天羽くんはお笑いネタが好きであけ

っぴろげに見えるけれども、隠すべきところは隠すし、しつこく迫られると露骨にいやな顔をするタイプだと思う。紡もその辺を察知してうまく交わすように心がけている。骨ではない。紡と同じ感覚の持ち主だと理解すればいい。西月さんにそれは難しい問題だったらしい。

それにもうひとつ。紡に対して西月さんは懸命に、「協力してください！」と訴え、ホームルームにおいても懸命にわめき散らしていた。本人からすると、「訴え」ていたのだろうが、紡には騒音にしか聞こえなかった。もしかしたら、三学期末あたりで、自分が評議委員から降ろされることを覚悟していたのかもしれない。

西月さんのおめでたくねばっこい性格からすると、後釜が紡になることも、勘付いていたのかもしれない。三学期以降現在にいたるまで、天羽くんの行動からすると、ありそうなことだ。

いや、天羽くんの心がすでに、紡の元へ先走っていることも、勘付いていたのかもしれない。やたらと紡に絡んできたのは嫌がらせだろうか、それとも、自分の跡を継ぐ次期評議委員に対しての「教育」を施すつもりだったのだろうか？

——わかんない。そんなこと。どっちにしろ、こっちには迷惑にならないようにしてよね。

こくん、と噛み砕いたキャンディーをつばと一緒に飲み込んだ。

紡は駅前近隣のおいしいケーキの出る喫茶店をお姉ちゃんに教えてもらおうと決めた。

逃げたいだろう。本当だったら一刻も早く離れたいだろう。でもできない。自業自得の西月さんはひたすら、笑顔と裏腹のかしいだ格好で片岡くんに接していた。

——そうよ、最初から嫌いだったらはっきり言えばよかったのよ。

今のところとぼっちは飛んでこないので無視していた。

天羽くんがちらちらと西月さんと片岡くんの様子をうかがっているのが気になる程度だが、見てないことにしておけば大丈夫だ。今の自分にとって最優先の出来事といえば、昨日のデート... 紡自身の解釈によればだが.....以来、清坂さんとなかなか話ができないことくらいだった。

いや、彼女が無視するわけではない。むしろ笑顔で挨拶だけは返してくれる。しかし

、「清坂さん、おはよう、あのね」

と声をかけたとたん、清坂さんの背後から例の幼馴染くんが登場して、

「おい、美里、早く教室に入れってんだろ！」

と文句を言う。決して紡には話し掛けない。とぼっちは来ないのでいいといえいいのだろうが、紡としてはこの辺納得行かない。戦う気は、ある。

——なによ。人の恋路を邪魔する奴なんて。

憎まれ口を自分の中にこっそり叩いてみたけれども、むなしくなるのでやめておいた。どうせ高校に入ったらクラス分けが行われるはずだ。清坂さんもちゃんと青大附高に進学してくれれば、大丈夫、紡も接近するチャンスがくる。あのうすのろ評議委員長がいつまで清坂さんの彼氏でいるかはわからないが、元気はつらつ少年羽飛貴史くんの視界から離れることが、今の彼女には必要なはずだ。ちょっと過保護すぎる。

——清坂さんはね、おとななのよ。

大人じゃないのは、廊下脇の席で片岡くんと向かい合って話をしている、あの女子だ。

「だから、うん、ありがとう。でも私、これからやらなくちゃいけないことあるの」

——だからはっきりと、「近寄るな下着ドロ！」って怒鳴ればいいのよ。

紡には簡単な答えだった。

片岡くんの返事はぼそぼそしていて聞こえてこない。聞きたくもない。

「じゃあね、私、これから、行かなくちゃ」

頷いて見送っている片岡くん。想う相手が露骨に「近寄るな」とサインを送っていることに気が付かないのだろうか。男子はいつもそうだ。天羽くんも最初、紡の気のない態度にさっさとあきらめるかと想像していたんだが、ねばっこかった。脈がありそうだったらなんとかなるさ、と攻めるのが天羽流なのだろう。でも、片岡くんも同じことしているとすれば、一括して「男子ってねばっこい」と言い換えねばならなくなる。

ノートとカンペンケースを揃えて持ち、明らかな作り笑顔でもって、スカートを翻した西月さん。今日の髪型はずいぶん地味だった。ただでさえぼっちゃり型の顔に、さらにボリュームを



増すような髪型は似合わない。天然パーマがかかった感じのおかっぱだった。あれを可愛いという男子もいたらしい……かつての天羽くんのごとく……が、紡の美意識では耐え難い、湿気を感じる。ああいう子は割烹着を着ている方がお似合いなのだ。

——ああいう女子が大人になって、うちの親みたいに、みっともないデザインの服を縫ったり、引き出物にお赤飯を押し付けたりするのよ。

たぶん、母もああいう女子中学生だったのだろう。

昼休みも終り、今日は五時間目がロングホームルームに割り当てられていた。特別に何をするというわけでもない。ただ担任が評議委員ふたりに任せて、それなりの議題を提出し、話し合ってもらおうという奴だ。そろそろ修学旅行の準備もしなくてはならないのだけれども、天羽くんには任せきりのため、紡は何にも把握していない。あとで清坂さんに教えてもらうつもりではいる。それなりに、評議委員としての自覚はあるのだ。自分に必要な部分だけ。

「天羽くん、どうするの」

今日のテーマなんて知らないよ、とつぶやいた。

「やることなんて私、面倒見られないから」

「近江ちゃんに手間は取らせねえよ。今日は俺が仕切る」

「仕切るって、まったくかっこつけちゃって。ま、いいけどね」

天羽くんはいつもそうだった、一年の時も、二年の時も。やることなさそうな顔をしながら、くだらないギャグをかましながら、きっちりと時間たっぷり、クラス運営にまつわるお話を盛り上げてくれた。団結力および若人特有の情熱に欠けるA組が、曲がりなりにも反発せず奴ここまでこれたのは、天羽くんのリーダーシップの賜物だろう。西月さんといちゃついていた頃は、女子の部を……紡を除く……無理やり盛り上げようと笑顔いっぱい、意見を出させていたこともあった。うざったくて紡は窓の外を眺めていた。いつも指名されては

「別に、いいんじゃないですか」

と繰り返していたことを思い出した。

「きりつつ、れい、ちゃくせーき」

明るい声で号令をかける天羽くん。

号令も評議の仕事だが、この辺はみな天羽くんが代行してくれる。

咽が痛くなるようなことを無理にわりかんでやる必要もないので、そのままにしておいた。

「あの人」の表情は少しうつろだった。銀縁のめがねを取り、いきなりポケットからめがね拭きを取り出し、軽くレンズをぬぐった。素顔の担任。狩野皇人に戻る瞬間を、めったに見ることのない生徒連中が、軽くわっとざわめいた。めがねを長時間かけている人独特の、少し目が内に寄った顔。やぶにらみ。すぐにめがねをかけ直し、静かに顔を上げた。

「それでは、今日のロングホームルームは、一学期半ばに入ってから議題としてあげたいことをそれぞれが出してってください。評議委員にあとはお任せします」

——このやる気のなさは何？

おちゃらけ評議・天羽忠文でなければずっと沈黙が続いたのであろうこの教室。誰が好き好んで発言するものか。同じくまかせっきり評議・近江紡は、背中斜め向こうにいる天羽くんに頷いてみせた。一緒に立って並ぶ。議題が決まったら適当に黒板に書き込む。それだけだ。次に担任の「あの人」をじっと見つめた。最近はお姉ちゃんを通して私生活情報を仕入れるだけにとどまっているが、たまに呼び止められて、「いつもありがとう」と声をかけられることがある。もちろん学校内では「近江さん」と呼ばれている。

「おまたせしやした！ では本日の議題と参りましょうか、レディー・アンド・ジェントルマン！」

相変わらず軽く切り出す天羽くん。げんこつでこんこんと教卓を叩いた。いきなり担任の方に首を回し、敬礼のポーズを取り、こっくりとうなづいた。担任も分かっているのだろう、無言で二回、目礼した。修学旅行を控えてなにかするんだろう。

「では、本日はちょっと特別バージョンA組篇ということで、司会・天羽忠文が仕切らせていただきやす。ほら、拍手が足りんぞ拍手が！」

——ここ演芸場じゃないんだから。

意味のないくだらなさが楽しいと感じるのは、紡もだんだん付き合いに慣れてきた証拠なのだろうか。笑いはしないけれども気持ちよく、長いチョークをつかんで斜に振り返った。クラスの連中もいつもの乗りだとわかっているのか、無理に盛り上がりとうはしない。男子連中の一部が、まばらな拍手をするだけだ。これも慣れの証拠である。

「よそのクラスはたぶん、修学旅行、なんだろうなあ。でも、うちで決めることったら、せいぜいしおり作りとグループ決めでしようがってことで。まずはA組としての土台をきっちりと築きたいと思った次第でがんす。みなさん、本日は評議の俺がどんどん仕切らせていただきますんで、狩野先生、その点よろしく」

打ち合わせてあったのかどうかは謎だ。やはり静かに狩野先生……「あの人」は、天羽くんに合図し、座っている他の生徒たちに目を走らせていた。感情のない、凧いだまなざしだった。

ひとりだけ、うつむいたまま机を見つめている女子。

紡は教壇の上から一瞬だけ見下ろした。西月さんは顔を上げようとしなかった。

無関心なのはみな、自分たちに火の粉が飛んでくることを恐れているから。

男子たちが陰でなにやら話をしているのを紡は、見ない振りしてしっかと見ていた。

天羽くんがまたひとつ手を打ったに違いない。女子サイドからすれば、天羽くんの行動は汚いことこの上ないだろうが、紡には本音、当然、私も一緒、そう言いたいものばかりだった。

雨が降ったのに気温が妙に高い。湿気のひどい教室でブラウスの襟からかすかに汗が匂う。ひとり、ふたりではない。休み時間中体育館でバレーボールをやっていた男子たち、給食のカレーを二杯おかわりして、食後に歯磨きもしない女子たちの口臭と。入り交じり、思わずむかつきそうになる。つばを無理に飲み込んだ。

「今だから言えることだが、男子諸君」

いきなり口調がぎざっぽく切り替わった。へらへらしているように見えて、いきなり氷の表情

を浮かべる天羽くんは紡は慣れていた。面白いところでもある。

「一年、六月末の出来事を、覚えているかな」

ぽぽんと片手で教卓を叩く。ハリセン持たせて漫談風にやっていただきたいところだった。派手な動作にも女子たちは期待したほどの反応はない。相変わらず西月さんがうなだれているのが目立つだけだ。男子たちがいきなり、わざとらしい咳をしているのは、声よりもしぐさでわかる。天羽波動はちゃんと伝わっているのだろう。

「女子諸君には返す返すも悪夢のあの事件、命名『一年A組下着ドロ事件』。結局犯人は曖昧なまま、俺たちもよくわけのわかんないまま、幕を閉じたわけである。いろいろ噂が飛び交う中、A組の内部では激しく荒れに荒れた。入学後しばらく、他のクラスのように『友情』なんてロマンチックなお言葉が似合わないA組になってしまったのも、また事実である」

「ある」のところを、少し間延び加減で唱えた。なんか変だが、天羽くんのアホ演技好きは三年間知れ渡っているのでA組連中にはそう受けない。天羽くんは狩野先生にちらっと視線を走らせ、もう一度礼をした。すみません、と聞こえてきそうだった。「あの人」も無表情ながら、天羽くんを静かに見上げた。おまかせ、って返事だろうか。

「もう過去だぜ過去、って片付けるつもりでいたし、俺もほんとはそれが一番だと思ってた。評議委員として、いろいろ噂やらなんやらを聞きつけてきたけれども、無理に煙を立てる必要もねえなとかんがえてきたからで、あーる」

——あんまりやりすぎるとギャグじゃなくなるよ。しつこい男のは受けないのにね。

紡はぼんやりと突っ立って、手をぶら下げたまま振り返った。チョークを置いた。

「今回、そろそろ修学旅行が迫ってきているこの頃であります、諸君」

目が合って、感じるものがあつたのだろう。気取り口調からいつものおちゃらけに変わる。

「この際、思い切って腹を割って、話しましょうや。修学旅行ともなれば、いやおうなしにお互い嫌いな奴好きな奴、いろいろな奴と三泊四日、顔をつき合わせるし、そうなればバトルも繰り広げられること確実。旅行が始まる前にある程度、わだかまりって奴をお掃除しちゃいましょうってやつです。ということで、昨日、狩野先生に許可を貰って、天羽忠文一世一代のトークショーとなったわけでございます」

——二年までは毎日トークショーやってたくせに。

つつこみはしない。かすかに笑いを押える声が聞こえた。女子の方からだった。

「あの人」は何も言わず、顔かす、他の生徒たちに視線をさまよわせていた。きっとどうでもいいんだろう。評議委員に全てをまかせっきりにしてるところからして、いつもの無責任癖が出たに違いない。

天羽くんのトークは、おちゃらけモードと気取り屋モード、両方を取り混ぜさらに盛り上がっていった。ついていけないクラスの連中たちを無視していた。

「でです、諸君。A組において、どうしても人を信頼できなくなってしまった事件っていうのがさっき言った、『下着ドロ事件』です。今思えば俺もうらやまし、いや、やっぱりまずいよと思わなくもないのですがね、ですが、人間は反省する動物ってどっかの偉い先生も言ってます。罪を悔い改めれば、人生、大抵のことはやり直せます。女子も結局はパンツやブラジャーを買い

替えることができただろうし」

ひそひそ、「サイテー、センスなさすぎ」と合いの手が。そりゃそうだ。天羽くんは最近女子受けが、諸般の事情で猛烈に悪くなっていることを自覚していない。明るい下ネタが受けない自分の立場をもっと認識してほしい。

「とにかく、この機会に一度すべてをご破算にしましょうってことで、今回こういう場を設けさせていただいたと、ま、そういうわけですが。ゆえに本日の内容はA組一同の秘密として、お口にチャックしてくださることを。諸君。よろしいですか。よろしいですね。OKですか、OKですね」

——誰も返事してないじゃない。どうせホームルーム終わったら一発ではれるわよ。

片岡くんの方を横目でちらりと見やった。紡だけではなく、教室中の連中がみな、かみそりの刃に近いまなざしで、ちょり、ちょりと眺めている。

「下着ドロ」という言葉が天羽くんから発せられた段階で、火がついた。

——西月さんと同じじゃないの。かっこうが。両手を膝に乗せて、こぶしにして、ぐっとうつむいている。二人並べれば、お似合い一対だ。一番後ろの窓際で、目立たないように机を離しているのがよくわかった。女子たちもみな、片岡くんからは身を逸らすように机を斜めに配置しているのが、高いところから見下ろすと一目瞭然だった。

背をぴんと伸ばし、天羽くんは片手を腰にやった。

「さあ、立て、片岡。勝負だぞ」

意外だったのは、片岡くんがうつむきながらもしっかりと、天羽くんの言葉に答えて立ち上がったことだった。女子はもちろん、男子連中からも無視されている片岡くんだが、露骨にいじめられていないのは、意地でも媚びようとしなからだろう。パシリとしてこき使われてもしかたない「下着ドロ」だというのに、妙なところでプライドが高いらしい。当然、天羽くんの言葉にも素直に従うとは思えなかった。なのに、立った。ぐいと顎を引いて、黒板を見据えた。ついでに紡を射た。とどめに天羽くんと見詰め合った。西月さんでないのが悔しいだろうがそれはそれだ。

担任たる「あの人」が、言葉を発した。

「片岡くん、本当に、いいのですか」

——敬語使う相手かしらね。

答えが返ってくるとは思わなかったが、ちゃんと返事していた。

「はい」

かすかにひび割れた声だった。

「先生、俺に任せてくれって言っただろ、頼みませ」

それには答えず「あの人」はもう一度、椅子に腰掛け直した。白衣が相変わらず汚れていない、無機質な雰囲気だった。

「あとは片岡、お前の好きなように言えよ。俺は男だ、約束は守る。守らせる」

女子たちが無意識のうちに身体を斜めに傾ける。片岡くんが唇を結んだまま、まっすぐ正面を見据えたまま、前に進んできた。両手のこぶしを握り締めたままだった。真っ正面から片岡くん

を観察すると、決して不細工ではないし、もっと女子受けしてもおかしくない感じの男子だと思った。道さえ誤らなければ。下着ドロなんかしてなければ。もしかしたら西月さんもあっさり乗り換えてくれたかもしれないのに。紡は近づいてくる片岡くんの邪魔にならないよう、教壇を降りた。一緒に隣り合った天羽くんは何も言わず、両腕を組んだまま、登る片岡くんを見つめていた。ところどころ声をかけた。

「片岡、これが最後のチャンスだぞ」

——なんだか、天羽くんも妙に湿気がこもる言い方するのね。

天気のせいだろう。きっとそうだ。片岡くんは返事をしなかった。最初はうつむいていた。やがて意を決したのか、首を激しく振った。教室後ろの写生画一覧を眺めつつ、両手を平のまま教卓に置いた。

「すみません」

一言を発した後、唇をゆがませるようにしてもう一度、

「ごめんなさい」

紡は隣りの天羽くんを覗き込んだ。小さく、

「何、仕掛けたのよ」

「しっ！」

身動きせず、静止するだけ。

天羽くんの頬に、かなり膿んだにきびが増えているのを見つけた。くらべて片岡くんのつるんとした顔との差に驚いた。片岡くんは誰に話し掛けるでもなく、何度か唇をかみ締め、時折鼻を詰まらせるようにして、言葉を発し続けた。

「一年の、六月、あの時盗んだのは、僕です」

——なあにわかりきったこと今更。

「あの人」だけが妙にひきつった表情で片岡くんを見つめているだけだった。他の女子たちの中に広がった、ぐにゅとした口元のゆがみを紡は見逃さなかった。男子たちの視線だけがなぜか、うつむき加減だった。誰もからかう奴はいなかった。

「なんで、あんなことしてしまったのか、僕は、今でもわかりません。けど、やってしまったことは、もう取り戻せない。それに」

突然、ブレザーの袖で目をぬぐった。

「僕は、人間として、最低なことまでしてしまいました」

——ああ、お金包んで事件をもみ消してもらったことね。

クラスの連中には初耳のことを、語り出した。知っている紡はただ無言だ。

「捕まって、それで。ちゃんと、やったことを認めて、謝ればよかったって、今は思う。けど、できなかった。そんなことしたら、死ぬしかないって、思ってた。だから」

——自殺する度胸もないくせに、そう軽々と死ぬ死ぬいうのはおかしいわよ。

時折心でつつこみを入れながら紡は、斜め視線で眺めた。

「だから、ずっと今まで先生や、周りの人たちが隠してくれたことに甘えてました。クラスの人

「たちもみな、僕がしたこと、知っていることはわかっていたけど、ばれない限り、大丈夫だって、そう思っていました」

——安易よ。悪事千里を駆け抜けるって言うでしょうが。

また鼻をすすり上げて、今度は頬につたう涙をそのままにしていた。せっかく整っていた顔が台無しだ。不細工きわまりない「いじめられなかつただけましかって思ってたし、もうこの学校に居る価値なんてない、って思ってたし。だから、あきらめていたけど。けど、僕のことを、ひとりだけかばってくれる人がいたから、今は、その人のために」

空気に漂う湿った空気が水滴に変化し、背中に落ちた感触だった。

片岡くんはすっかり自分の言葉に酔っている。涙を流しながら、顔を崩しながら、全身をさらけ出しながら、この場で言うべきではない言葉を撒き散らしている。逆流したバキュームカーの吸い取りホースのようだった。

——天羽くん、ちょっとこれは何が目的よ。

女子たちがさらに口角をきゅっとあげては含み笑いをしている。ひとりだけ西月さんがうつむきながら、目を閉じている。男子たちの微妙な空気の揺らしあい、この行動、計画的なものだったことを表している。紡に火の粉がかからなければ別にそれでもいいのだが、二日前に例の現場へ立ち合ったことがひっかかる。足下にゴム飛びの紐がひっかかってきたようだった。

「昨日、天羽から、これが最後のチャンスだって言われて、僕もそう思ったから、だから、ここではっきりと言います。僕は、あの時の犯人で、親に頼んで、もみ消してもらったし、僕のことをかばってくれた人を裏切ってしまったってことです。僕は、最低な奴です。許して、許してください」

人前憚らずぐすぐす音を立てながら、教卓に突っ伏した。紡と天羽くんの立ち位置から見ると、足は少し蟹股にした格好で、バランスを取っているようだ。腰を落としてただひたすら泣きじゃくる片岡くんの姿を、はたして西月さんはどう見ているのだろうか。多くの女子たちの反応ならば、すぐに答えが出る紡だが、西月さんについてはまだ想像がつかなかった。観察してみると、薄めを開けた風に、ちろっと覗き込んでいるようだが、顔は挙げていない。

「片岡、泣く前にもう一つ、言うべきこと、あるだろう」

さらにぬくもりがあった口調の天羽くん。すでに気分は「おとつあん」だ。どことなく紡にはなじめない雰囲気をもし出し、ちょっと離れたくなる。

答えようとしたのか、片岡くんはゆっくりと天羽くんに振り返り、また顔をゆがめてうなだれた。真向かい側で、腰を浮かしかけている「あの人」の白衣姿が意外で、紡はそちらにも気を取られた。

「ほら、先生呼んでるよ」

「これからだこれからだ」

一切無視された。むかついた。

片岡くんが、もう一度両袖で顔をぬぐった。猫みたいだった。

「あんなに、あんなに、西月さんが僕のことを、濡れ衣だってかばってくれたのに、信じてく

れたっていうのに、僕は、僕は……西月さん、すみません、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

あとはもう言葉にならなかった。本当だったら外人みたく肩をすくめて、

「さ、早く目障りじゃないところに行ってよ」

とささやくところだろう。でも教室でそれはできない。名指しされた西月さんも、同じくおじぎ草状態でうなだれたままだった。「下着ドロ」に感謝され、それでもせっかくかばったのは意味がなかったのだと言われているんだから、言葉がないのも当然だろう。まったく、男子は勘違いをするものだ。誰がこんな茶番劇に感動なんてするものか。

——天羽くんなんてそんなに感動してるわけ。

隣りで肩を震わせているのは、腹抱えて笑いたいのをこらえているのではない。天羽くんも涙ぐんでいるってことが許せなかった。瞬間、思いっきりハリセンで頭をぶんぐってやりたくなった。いきなりひくと、酔っ払いのしゃっくりみたいなことしなくたっていいだろうに。しかも感動の漣は、なぜか席に付いている男子ほとんどに伝わっていたらしかった。下準備どのくらいしたのかは紡も知らない。ただ、

「片岡、良く言った！ 男だぞ！」

「もう泣くな、もういい」

と掛け声が入るのはなぜなのか。あれも天羽くんの下ごしらえだろうか。もしかして、天羽くん泣き真似しているだけなんじゃないだろうか。そうであってほしかった。けど紡の目から見ても天羽くんは、本気で感動の涙をこぼしている。

「片岡、偉い、お前、ほんと偉いよ。つらかったよな。みじめだったよな。もういい、降りろ、戻れよ席に」

紡のことは全く無視したまま、天羽くんは教壇にもう一度あがり、片岡くんの肩を抱いた。身体を引き起こすようにして、少しだけ無理強いする感じで教卓から引き離れた。もてあましていた様子だったが、ポケットから真っ赤なハンカチを取り出して、

「ほら、鼻かめ」

と差し出した。首を振る片岡くんに、

「じゃあ、こっちだな」

とポケットティッシュを取り出した。男子なのに用意がいい。やっぱりこれ、仕掛けられた罠だ。女子たちのしらけた表情と、さらに斜めにかしいだ格好を気にしていない。天羽くんは片岡くんの身体を抱くように席へ連れて行った。一番後ろの窓際へ連れて行った。

「あの人」の表情がこわばり、一瞬だけ天羽くんの背中を鋭いまなざしで見つめたのを、紡は読み取った。

——なによ、いきなりきつい目するなんて。

すぐに白衣の無機質な空気をまとって座りなおしたので、他の人には気付かれなかったかもしれない。

「以上だ、ってわけで、本日のロングホームルームは終わるってことで諸君。いいな。今日のこ

とで片岡のことを叩いたり馬鹿にしたり、無視したりするのはやめにするんだ。俺たちは俺たちのやり方で片岡の罪を受け入れたし、あいつも二年間ずっと、苦しんできたってことがよくわかったって奴だ。さってと、修学旅行も近いことだし、これでひとつのわだかまりってものは消えたってわけですぜ。諸君、いいですか。女子諸君にも告げる！」

——ああそっか。天羽くんのやたらかっこつけた口調ってどこから来たか、やっとわかったわ。

顔を真っ赤にして動かずにうつむいている西月さんは全く反応しなかった。

——これ、「奇岩城」の怪盗ルパンよ。おしゃれでロマンチストなルパンよ。

レイモンドだった西月さんも、かつての恋人の変調に気付いただろうか。

「あの人」だけがどうも納得行かないという顔でもって、天羽くんを側に呼び、何かを説明していたのは見た。しかし、いつもの元気でかつ滑らかな口調で言い訳をしゃべりつづけているらしい。和やかに、

「じゃあ、先生、お疲れ様でした！」

と高らかに響かせ、教室を出ようとした。紡にも、

「じゃ、行こうぜ、近江ちゃん、これから評議委員会あるぜ」

——とりあえず言うておかなかちゃね。

哀れなレイモンドをちらっとあごでしゃくった後、紡も後ろに続いた。レイモンド西月さんの周りには、女子たちの身体で出来た柵が出来上がっていた。入っていけない「哀れみ」の連呼。紡には関係ないけれど、お付き合いで巻き込まれるのは大変だ。

とにかく、天羽くんには言うておかなかてはならないことがある。

脳天気天羽くんは、評議委員会の教室、三年D組を目指し、両手を振って歩き出した。かなりご機嫌だった。

「どうしたのよ、天羽くんてば」「これで、先生にも、俺の本気が伝わったらうれしいんだけどな」

「なによ、『俺の本気』って」 にんまりしながら立ち止まり、紡を指差し、

「狩野先生にも言っただろ、俺、ちゃんと片をつけるってな。どうでしょう近江ちゃん、試用期間のご感想は」

どうやら天羽くんは、紡に自分がいかなる方法で、西月さんとの関係にけりをつけたかを証明したかったらしい。けりをつけた、と思い込んでいるらしい。紡はため息をついた。

「片をつけるためにずいぶん大変なことしているよねえ」

「そりゃあ、愛ですよ、愛」

「けど、その『愛』が逆効果ってことも考えたことある？」

紡はブレザーの襟をつまみ、しばらくじった。

「今日の片岡くんのことだけど」

「あ、それはここでは内緒だぜ」

「じゃあKくんのこと、でもいいわ。男子同士で口裏合わせて、感動ドラマをこしらえるのはいい



いのよ。どうせばればれなんだから。Kくんの過去がここではっきりするのはいいことだと思うし、私も天羽くんと同じ立場だったら、同じことしたわよ」

この辺りまでは笑顔で言う。

「そんなあ、近江ちゃあん、怒らんといてえ」

「別にいいのよ、私はどうでも。天羽くんってば、本当はKくんと西月さんを結ぶ『愛のキューピット』やるつもりだったんだろうなと思ったし。けどね」

一呼吸置いた。たぶん紡の読みは当たっているだろうと思いつつ。

「Kくんイメージアップ大作戦は男子に大受けだったかもしれないけど、女子は壊滅状態よ。悪いけど女子たちの流れは今、Kくんにも天羽くんにも険悪ムードよ」

「え、それはなんでざんしょ」

おちゃらけ口調のままでも、やっぱり納得行かない表情を続ける天羽くん。

「片岡くんと西月さんをくっつけたかったのはわかるわよ。私も応援したわよ。邪魔な人いなくなるし。でもね、女子たちにとって同じクラスに『下着ドロ』がいるなんてことは、耐え難いものよ。噂だと思われていた時ですら、そうだったのにね。犯人が堂々と認めちゃったわけでしょう。どうするの、もう女子、片岡くんに絶対近づかないと誓うわよ」

「それはないだろう！ だってなあ、あいつ、自分のプライドを捨てて、懸命に謝ったんだぞ！」

怒号に近い。珍しく熱い。でも紡は慌てなかった。三年D組がまだ、ロングホームルームを長々とやっている……担任菱本先生のお説教が続いているらしい。声が響く……ので他の評議委員が続々と廊下に集まってきている。小声で窓際へ天羽くんを誘った。自然に指先が触れるように横並びになった。

「男子にとっては、自分の罪を認めてざんげすることがいいと思うんのもわからなくはないわよ。女子は違うのよ。女子は、気持ち悪い奴は永遠に気持ち悪い奴なの。嫌いな奴は永遠に嫌いな奴。下着ドロは永遠に下着ドロなの。十年後にKくんが青濁で有名な社長になっていたとしても、女子の中では『中一の六月に下着ドロしたKくん』でしかないの。しかも人前で大泣きなんてしちゃったでしょう。男として情けない奴、ということでもう烙印押されてるわよ。ふんだりけったり。まず、女子だったらKくんに近づこうとは思わないでしょうね。きっと、あの人も」

「一度も悪いことやらかしたことない奴、いるわけないってのに。なんでそんな偉そうな態度取れるんだよ、女子の奴ら」

「仕方ないわよ。いわゆる、男女の差よ」

紡は軽く流してもうひとつ付け加えた。

「私はどうでもいいのよ。ただね、せっかくKくんと西月さんをくっつけたかったのだとしたら、見事にそれは失敗してしまったわよ。西月さんずっと、顔をあげなかったじゃない。Kくんのこっぴどかしい告白にも」

なおも食い下がる天羽くん。すでにおちゃらけ評議の色はない。

「けど、それでもさ、わかるよなあ。本気であやまってるのに」

「関係ないの、好きなものは好き、嫌いなものは嫌い。それが女子のお約束よ」

言うか言わぬか、一瞬迷ってしまったのが、紡としては不本意だった。

「それにね、天羽くん」

紡も小指で天羽くんを指差した。

「私も、飽きられたら西月さんみたいな扱いされるの、迷惑よ」

「な、そんなことどうしてだよ！」

怒鳴ったので、他の評議連中が振り返った。

「だってそうでしょ。二年間仲良くしていた相手からいきなり、友だち以下の扱いされたら、プライドずたずたよ。天羽くん、ずっと思っていたんだけど、私のどこがよくて、そんなにくっつきたがるわけ？」

「くっつきたがるって、いや、ほら、相性だよ相性」

言い訳しても心には響かない。紡は続けた。

「じゃあどうして、西月さんと二年間も付き合ってたわけ？ 厳密にいうと二週間らしいけど、二年間友だちだったのがいきなり、憎しみ合う関係になるなんて、理由言える？」

静かに笑みを絶やさぬよう心がけた。

「それは、そういう長い理由があつてさ、けど近江ちゃんには話す必要、ねえだろ」

「話す必要はないわよ。ただ、私も一年後か一週間後、西月さんと同じ扱いをされないって保証がない限り、私は試用期間満了で終りにしたいのよ」

付け加えた。

「あ、でもね、それは付き合うかどうかってことであって、たまに演芸観にいったりするのはお付き合いするわよ。最近、天羽くんのおかげでテレビの演芸とか落語とか観るのが楽しくってね。そういう話をするのはOK、でも、それ以上はだめよ」

第三者に聞かれてもわからないように、軽い話題で色をつける。紡の言葉が流れるに従い、天羽くんの顔色がだんだん漂白されていくのを、面白く眺めた。ここまでまだ、西月さんには言われたことないんだらうか。罵られたことないんだらうか。そうだろう、罵るくらい根性のある女子に天羽くんだって、あくどいこと、できるわけがない。

「近江ちゃん、それ本気で言ってるのかよ！」

「そうよ、手っ取り早いのは、なんで西月さんとかこういう闘いをする仲になっちゃったのかを教えてくれることじゃないかと思うけど。でも私に話す必要はないわよね。さ、教室開いたわよ、入りましょう」

天羽くんを引き連れ、紡は教壇近くに座っていた清坂さんに笑顔で手を振った。相変わらず、男子よりも女子の方が可愛く見えた。

教室に入って天羽くんの席、すぐ側をを通った。

「おはよ、天羽くん」

微笑みかけた。

「近江ちゃん、あの、あのさ」

いきなりどもる。

「今度、お勧めの演芸雑誌、教えてよ。もっと読みたいわ」

口をぽかんと開けたまま、天羽くんは頬のにきびをぼりぼりと搔いた。

「じゃあね、またあとで」

斜め前の西月さんと、窓際一番後ろの片岡くんの様子も気になるのでチェックしてみた。朝自習のプリントに専念しているのが片岡くん、西月さんは仲のいい女子たちに囲まれて、昨日のテレビアニメの話で盛り上がっていた。傷の跡はなし。

紡は席について、頬杖ついたまま朝自習プリント問題をさらっと解いた。

振った紡よりも振られた天羽くんの方が暗かったのは当然だろう。ホームルームでの片岡くんざんげ事件の前から、「試用期間終了」を切り出すことについては考えていなくもなかった。西月さんのしつこい行動……人はそれを一途とも言う……は、天羽くんや紡にとってこそ不快に感じるけれども、もっと頭良く振ることはできたのではないだろうか。なんであそこまで、露骨に振ろうとするのだろうか。救いようのない恥をかかせて、「下着ドロ」の証明をされた男子とくっつけて、どん底まで落とそうとする真意はどこにあるのか？

——冗談じゃないわよね。まあ、私が男子だったら同じこと思ったかもしれないけどね。

前の日の評議委員会後も、軽く声かけて「おつかれさま！」と手を振った。

「お付き合い」には向かないと思ったから言っただけ。友だちとしてだったら、これほど感覚の合う男子もいない。一緒に可愛い女子のこととか話すのも楽しいし、漫才……いろいろ天羽くんから教えてもらって、自分の好みが古典的漫才なのではと思いつつあるこの頃……の話ももっとしたいと思う。ただ、天羽くんの望む「お付き合い」をすると西月さんのような立場に落とされないと限らない。

可能性としては低いだろう。

直感レーダーでは、「違う、大丈夫」と信号をキャッチしている。

——でも、保険には入っておかないとまずいわやっぱり。

納得行く理由を話してくれたら、もしかしたら紡もころっと態度を変えて、腕に手くらい回して、「いいわよ、正式契約で」と言ったかもしれない。でも天羽くんは「言えない」と言い切ったではないか。自分の行動を説明できない男子だとしたら、紡もこれ以上深入りする気はない。

——西月さんが当然嫌われることをしているのはわかるわ。その理由が小学生の男子たちみたいに「好きな子をいじめる」程度のことなのか、とことん深い部分のことなのかによって、事情

が変わるはず。

紙をひっくり返し、少しだけ眠りをむさぼろうと机にひたいをつけた時だった。

「近江さん、ちょっと聞きたいんだけど」

顔を上げた。女子がひとり、でくのぼう状態で立っていた。態度とは裏腹なささやき声だった

。

「何か用？」

「昨日のことといい、薔薇の花のことといい、あれ、近江さんがやったって本当なの？」

——ああ、やっぱりきたか。

近くの席にいる連中には勘付かれたらしいが、西月さんと片岡くんの耳には届かないらしい。面倒なのでさっさと片付けたかった。

「まさか、そんな自分の得にならないこと、するわけないでしょう。誰かそんなガセネタ流したの」

きっと西月さんあたりだろう。あそこまでプライドをずたずたにされたら、紡を逆恨みしても不思議ではない。

「小春ちゃんが言いふらしたと思ってるわけ」

「わからないわ。そんなこと。それより用ってそれだけなの。少し寝たいんだけど」

眠くなったまぶたの上を軽く叩きながら、紡は続けた。尖り顔で何か言いたげな目の前の女子を追っ払うため、さっさと答えた。

「あのね、私、天羽くんとは友だちだけど、それ以上お付き合いする気はないのよ。その点安心してちょうだい。友だちだったら一緒に落語聴きに言ってもおかしくないでしょ。それ以上のこと別にする気、ないし」

「どういうことよ。それって天羽くんにも失礼でしょうが」

「昨日ちゃんと話してあるから大丈夫よ、ね、天羽くん」

振り返り、斜め向こうにいる天羽くんに声をかける。実は聞こえていなかったらしい。

「あ、ああ？」

と寝ぼけた返事を返したが、慌てて口を閉ざした。むすっとしているのは当然か。

「西月さんのしたいようにすればいいんじゃないの。他人が横槍入れるのは本人もうっとおしいし、巻き込まれる人たちも迷惑だと思うけど」

「近江さんって、何考えてるわけ？」

きりりと臨戦体制に入りそうだ。まずい、この女子、お父上が青湊警察の警部か警視か、かなりのお偉方と聞いている。やはりきっちりしていないと気に食わない育ちなのだろう。先入観ありありだが、彼女に関していえばぴったり当てはまる性格だ。

「別に、何も考えていないけど。ただ、あまり不必要なことにはくちばし挟みたくないの」

——いきなり尋問されるのは迷惑なことよ。

髪に油とふけの浮いている彼女は、くっきり縦線の入った頭を軽く振って、自分の席に戻っていった。人のおせっかいする余裕があるのだったら、前の日に髪の毛洗うだけのエチケツト

を守ってほしい。ふけが落ちる。

天羽くんにもう一度振り返って、両手を合わせて、「ごめん」と一声かけておいた。

真剣な瞳にちょっとびびった。天羽くんらしくない一文字の唇が気になった。

——第一、変よね。私のどこが気に入ったんだか、考えてみるとわかんないわよね。西月さんよりましってのだったらわかるけど、それ以外、女子しか興味ない私とつるんで、なあにが楽しいってんだろなあ。

一時間目の美術の授業に向かおうとした。五月は必ず二時間連続で、写生の授業が行われる。学校裏の林の中、もしくは大学内、どこでもいい。かならず三人以上がグループ行動するという約束でもって、それぞれが学校内に散っていく。二時間目終了十五分前までに教室に戻ればいい。一応スケッチのみ。色をつけた奴は水彩絵の具セットをもっていけばいい。そこまでしたくなければクレヨンや色鉛筆、油絵の具、なんでも使用可だ。紡は当然面倒なので、色鉛筆にした。

スケッチノートと色鉛筆十二色セット、あとは2Bのえんぴつと消しゴム。集団で騒ぎ出て行く生徒たちを見送り、ひとりきりになるまで待った。群れたがる女子たちに、無理に「近江さんかわいそうだから」とグループに入れられるのだけはごめんだった。うつむいた西月さんを守るようにして集団が出ていくと、午前中特有の痛い光が窓辺から刺さってきた。この光りを写生するだけでもいいのに、と思う。さすがに教室から出ないで写生というのはあとあとまずいだろう……貴重品盗難騒ぎなんてあったらたいへんだ。一発で犯人扱いされてしまう……紡はうんと伸びをして立ち上がった。扉を閉めた。

「近江ちゃん」

玄関に向かおうと向きを変えた瞬間、呼び止める奴がいた。振り向かなくても呼びかけで分かる。ごつい体格のおちゃらけ野郎に、背中で返事した。

「なあに」

「グループなんだけど、一緒に来てもらえねえかなあ」

無理してばっく語尾を透明にしているところからして、何かたくらんでいそうだ。

「私と天羽くんとだと、ふたりじゃないの。私はどうせひとりだから、どこ入ったっていいんだけどね」

どうせ最初から、女子たちに混ぜてもらおうとは思っていない。適当に混じった振りをして、ひとりで木陰を見つけて適当に描いた後、大学内のカフェテリアで時間つぶそうと決めていた。天羽くんとああいうことになってなければいっしょにばっくれてもいいのだが、そういう気持ちには。

「いっしょにばっくれねえかなあ」

吹き出した。天羽くんってばやっぱり紡と感覚が似ている。

「今私もそう思ったとこなのよ。でも評議委員が二人で脱走なんてしたら、あとあと大変じゃないの？」

「知ってるか？ 二年の時、立村と清坂が茶道の授業前にとんずらして、いちゃいちゃしていた

ってこと。あれがきっかけでふたりハッピーになったらしいざんすよ」

ジェラシーをかきたてさせようとするのだろうか。憎い奴だ。

「人の恋路は知らないわよ」

「てかさ、どうしても今日、近江ちゃんに立ち会ってほしいんだよなあ。もうひとりとの会話をさ」

「もうひとりって誰よ」

天羽くんは返事をしなかった。両手を組み合わせて関節をぼきぼき折っていた。

「別に、昨日のことだったら気にしないでよ。言ったでしょ。天羽くんと漫才聴きに行くことをやめたいなんてちっとも思っていないのよ」

「俺に、聞きたいことあるって言ってただろう」 背をぴんとのばし、腕を組んだ。真っ正面から見据えてきた。

「一世一代、大演説、聞く気ないのかなあ」

——大演説か。

そっと並んだ。ここヶ月いつもしていたように、首をのけぞらせてOKのマークを指で作った。

「大演説を聞かせたい相手って、さっき集団と一緒に出ていったんじゃないの？ あえて名前はイニシャルで言うと、Nさんは」

「さっき、『俺と組になろう』って誘っておいた。近江ちゃんもいるって言うておいた」

「女子たちの前で？」

「それの方があとあと楽だろ？」

——楽なわけじゃないの。だから男子って単純なんだから。

大演説の響きには心惹かれた。あとで警察関連のお偉いさんお嬢様に文句を言われるかもしれないがそれはその時だ。西月さんと天羽くん、最悪カップルにおまけとしてくっついていくのも、スリル満点だ。手伝うことってなんだろう。

——やっぱり、言うだけ言うておけば、男子は反応するっていい例よ。

実はほんの少し、家で言い過ぎを反省していたなんて、口には絶対出さない。

「向こうは先に行ってる。ちょっと人気のないところだから、近江ちゃんだけだったらあぶない。一緒に行きましょう！お姫様！」

黒い水彩画用絵の具入れに、天羽くんは小さなカセットレコーダーを一台忍び込ませ、もう一台のマイクロレコーダーを紡に持たせた。ポケットに入れるようなしぐさをした。

スカートのポケットは深いので、すると落ちた。

「録音するの？ あんたの演説を。将来映画化する予定？」

「俺はこっちで、近江ちゃんはそれで。二本テープ作りたいんだ。ここだけの話だけどな、俺授業で死ぬほど眠い時、書道ケースかかばんかどっかにレコーダー仕掛けておいて、そのまんま授業録音するんだ」

「まさかテープ溜まり放題なんて言わないわよね」

「あたり」

軽口を叩けば、気になることも忘れていられる。紡は天羽くんと肩を並べてもう一度、窓辺の陽射しに目を細めた。

——西月さんはひとりで行かせても平気なのね。

写生で散らばった女子連中は露骨に紡と天羽くんの二人を見て、顔をしかめた。

昨日の片岡くん激白事件の余韻も残っているのだろうし、西月さんとこれから三者対談をする  
と知っている子も多いのだから当然と言えば当然だろう。一部、男子たちの中で、  
「近江、天羽、今度は上方漫才ツア一付き合わせろよ！」

と突っ込みをいれる奴もいる。だんだん紡が正統派上方漫才に惹かれているのがばれているらしい。軽くピースサインを送っておいた。

スケッチブックを開き、一応はこれから描くような顔をして裏の林へ足を踏み入れた。幹の白い細っこい木々が半径二メートルくらいの間隔で並んでいた。その他、樹齢200年以上は余裕で経っているであろう、枝のうねった松の大木、一度も花の咲いたことのない桜の木、通るのに頭を打ち付けない程度の枝があちらこちら伸びていた。

学校側でも「できるだけ通り抜けしないように」とのご通達が出ていた。夜、痴漢に襲われる若い女性が続出していると聞く。確かに天羽くんが心配するのも無理はない。レディー・ファースト。

「真ん中にさ、スケールが小さめなオンコの木が生えているんだけどなあ。そこ、赤い実がついてて、食うとうまいんだ。そこの下なんだわ」

——西月さんがひとりで行けるってことは、天羽くん、お付き合い当時、かなり通っていたってわけね。

かつて西月さんと甘い時を過ごした、思い出の場所に連れて行くらしい。男子ってデリカシーがない。元彼女と完全に切れたとはいえ、ちょっとまずいのではないだろうか。

——別に、私はどうでもいいけど。

紡はブレザーのポケットに片手を突っ込んで、薄荷飴を自分の分だけ口に放りこんだ。振り仰いだ木漏れ日がまぶしくて、ぎしぎしした。

両膝をかかえるようにして、遠めでも小太りに見える女子がしゃがみこんでいるのを見つけた。天羽くんは一度立ち止まった後、絵の具入れを器用に開けてレコーダーの録音ボタンを押し、しっかりと閉めた。空いた手で紡の腕をちよいとつかんだ。

「なによなによ」

いきなりだと驚く。わざわざ写生道具一式を持ち替えてまですることじゃないだろう。

「今だけ。あとは近江ちゃんの判断に任せる」

——ああ、西月さんに見せつけるのね。

やっぱり、何度考えても天羽くんがこうまでして西月さんをいたぶるのか、理由がつかめなかった。真夜中、眠れずにいたなんて言えない。思い当たるとすれば、

一、天羽くんは飽きっぽいので、一度別の女子に熱を上げたら一刻も早く、元彼女から縁を切りたい性格である。

二、天羽くんは西月さんが、「奇岩城」撮影の時にとんでもない要求をして、怒らせてしまった。

三、心が冷めた天羽くんが、自分を悪者にして、あっさり振られることを期待して演じている罫。

このくらいだろうか。天羽くんという人の性格からすると、どれも正しいような気がするし、ぴんとこないところもある。一番天羽くんを弁護する形で考えると、三が近いのではとも思う。でも、下手して逆恨みされて嫌がらせされてもいいのだろうか。そうされてもかまわないくらいの勝算があるのだろうか。わからない。膝の上にスケッチブックと水彩セットを抱え、空を見つめていた。西月さんがふたりに気がついたのか、笑顔を見せかけ、隣の紡にはっと口を押えた。

「私もセットだってことちゃんと話してなかったんじゃないの」

「いいんだ。どうせ三人だ」

わけのわからないことを天羽くんは言う。つかんでいた紡の腕から手を離し、さりげなくポケットを叩いた。録音ボタンを押せ、との合図だろう。目立たないようにポケットに手を入れた。取り出し、背中を向けて赤い録音ボタンを押し、もう一度しまった。

一步一步、夜中の雨でぬかるんだ雑草の中を踏みしめ、天羽くんはそっとハンカチを取り出し、オンコの木の下へさっと敷いた。

「いいよ別に」

「ここで何も言わないでいればいいんで、よろしく、近江ちゃん」

——録音、よろしくってことね。真っ白いハンカチというのがらしくない、そう思った。膝をかかえるようにしてぺたっと座りこんだ。スカートの上からも土が湿っていて冷たかった。ちらっと視線を走らせた西月さんが微妙な表情で、もう一度しゃがみ直した。天羽くんだけが立っていた。ふたりを見下ろすようにして、紡がお尻に敷いて座るまで、何も言わなかった。

「どうせ、写生なんて三十分もあれば描けるだろ。おたがいさ」

「話って、何なの」

天羽くんと西月さん、しゃべるのが同時だった。思いっきり天羽くんは顔をしかめ、紡にだけ「うんざり」の合図を送ってきた。どうして目の前でそこまで嫌がらせするのかわからず、紡はシカトを決め込んだ。

「あのな、西月……さん」

薄暗いオンコの木の下、女子ふたりだけ、天羽くんが両手をポケットに入れうろうろし始めるのを見守っていた。西月さんにいたってはまさにかたずを飲む、といった風だった。

「なあに」

小さい声で返事をする西月さん。立ち止まって真っ正面、天羽くんは彼女の前に立った。半径二十センチ程度の再接近距離だった。



「今から話すこと、全部聞いたら、俺のことをとことん憎め」

「どうして？」

「俺のことを、『頭の悪いバカ評議』でも『白いギャグしか飛ばせないバカ男』でもなんでもいい。ありとあらゆる罵詈雑言、ぶつけてもらっていい。それだけのことを俺はしているし、当然そうされるべきだと思うんだ」

ずいぶん今日は腰が低いではないか。隣りで首を振っている、大体距離三十センチ離れているところに座っている西月さん。器用にしゃがんでいる。

「けど、ひとつだけ頼む」

一度、大きく礼をした。天羽くんの髪の毛、つんつんと天辺が立っていると初めて気付いた。下からのぞいてみると、真面目一本。

「このことで、近江ちゃんだけはいじめないでほしいんだ。俺、西月……さんのことを受け入れられたとこって、そこだから。近江ちゃんをかばってくれた、それだけで俺はたまらなく嬉しいんだ」

——別に、私頼んだわけじゃないし。

くちばしを突っ込むと天羽くんがひねて、大演説を中断される恐れがある。肩をすくめて紡は見守ることにした。西月さんが小さく首を振っている。何かを言おうとしている。気付いたのか、天羽くんは断ち切るよう語り出した。

「俺のうちな、じっちゃんが書道の殴り書きで有名人だったのは話したことあるよな。俺書道なんて、墨汁で手が真っ黒くなるだけでどこがいいんだか理解不能だけど、そのおかげで青大附中に寄付金入学できたんだから、それはありがたいと思ってるんだ」

しゃわりと、木々のこすれる音。前から紡はその辺、知っているのが驚きもしない。隣りの西月さんが口を開けているのは、天羽くんが普通入学したと信じていたからだろう。甘い。

「けど、うちが寄付金どっさり包めたのは、じっちゃんがある宗教団体に関係しててそこで活動してたからなんだ。たぶん俺が入学した時、じっちゃんの名目でたくさん金を包んだんだと思う。俺の親じゃなくて、宗教団体の方が」

「何の宗教なの？」

かすかに尋ねる西月さん。声が震えていた。そりゃそうだろう。ただ、こういうところで聞くところがまず間違っていると、紡は思う。あえて言わなかったのは、ばれるのがいやだったのだろう。

「今時の新興宗教。仏教とキリスト教とヒンズー教が全部交じり合ってる、今思えば変な宗教」  
面倒くさそうだった。さっさと自分の乗りでしゃべりたいのだろう。

「俺も、じっちゃんの命令で去年まで、そこの宗教の少年団みたいなのに参加させられてたんだ。青瀉じゃなくて、別のところに合宿させられてたんだ。一週間 異常に規則正しい生活を送りながら、経典みたいなものを読まされて、自分の目標とか、教義とか、そんなのを二十四時間叩き込まれてたんだ。今思えば、ありゃ地獄だった。けど洗脳って本当にされちまうもんなんだなあ。俺、中学に入った時に本気で、自分の目標立てて守ろうって思ったた」

「なんの目標なの？」

黙ってれば天羽くん、どんどん機嫌よく話してくれるのに、腰を折る非常識な女子だ。いらいらしてくるが、紡はがまんした。

またしかめっ面をして天を仰いだ後、天羽くんは吐き捨てた。

「『嫌いな奴を好きになるよう、努力しましょう』ってな」

大きめの蟻が紡の手の甲によじ登ってきた。好きではないが悲鳴をあげるまでもない。振り払いつつあくびをした。

「俺は小学校の頃から、結構好き嫌いの激しい性格だったんで、周りの先生連中から注意はされてた。卒業する時も、『露骨に好き嫌いを出さないようにするんだよ』とか言われてたしなあ。俺もそれはまずい、やな奴にはなりたくねえ、そう思って、春休みの教義合宿の時に目標にしたんだ。どんなに嫌いな奴がいても、人は人、相手は相手。できるだけ嫌いな人を好きになるよう、努力しようって決めたんだ。だから、青大附中に入ってから、かなりむかつく奴がいても、それはそれ、これはこれって思えるように無理に思ってきた。大っ嫌いだと思う奴にこそ、親切にしてやって、友だちになるようにしてきた。中学二年まで」

背中にも蟻がいるのだろうか。むずむずしてきた。頭の中も一緒にむずむずだ。なのに肝心なところ、鈍感なのが隣の西月さんだ。表情変わらずまたぼけた相槌を打っている。

「でも、そういう努力をするときっと好きになれるものもあると思うし、それが、天羽くんのいいところだから」

「どれだけ大変だったか、想像つくか？」

怒鳴ろうとしたらしい。が、言葉を飲み込み天羽くんは冷静に語りつづけた。

「けど、去年の夏、うちのじっちゃんとその宗教団体とが大喧嘩して、うちの家族と親戚全員脱退したんだ。ああ、もうその団体の出している広報誌みたいなものでは、俺たち『裏切り者ユダ』『地獄に落ちろ』『天誅が下る！』思いっきり叩かれてるぜ。『裏切りもの』とか罵られてるぜ。けどまあそれでよかったと俺は思ってる。あとは青大附高にコネなしで進学できるよう努力するしかねえなどは思ったけど、そのくらいっすな。合宿に追われないですむので俺としてはラッキー。それにな」

言葉を切った。

「もう、無理に、好きでもない奴に好きなふりをしなくてもいいって、思えるようになったのもその時期からだったんだな、実は」

じろっと西月さんを見下ろした。目の色にはちらちらと、天の木漏れ日と同じ優しい光りが漂っているように見え、その一方でもうゆるぎない決意のようなものも見え隠れした。紡にだけは伝わっているけれども、まだぼけっとしている西月さんには一生理解できないものかもしれないなかつた。

「俺、やっぱり、西月……さんに謝らねばなんないんだ。ごめん」

「天羽くん、いいの、私、そんなしかたないこと、怒ってなんてないの。きちんとするから私」

ばらんとスケッチブックと絵の具セットを取り落とし、関係なく近づこうと手を伸ばした西月

さんを、しっかり見据えた天羽くん。静かに言葉を発した。「俺は、出逢った時から、西月さんのことが虫唾が走るくらい、大嫌いだったんだ」

——やっぱり、そういうことか。

立ちすくみ、しばらく口をぽかんと開けたままでいた西月さんはゆっくりと何かを発しようとした。どもりながらもつぶやいた。

「だって、だって、入学した時、最初に話し掛けてくれたの、天羽くんだったよ。ちゃんと私、席がわからないと言ったら、教えてくれたじゃない。それにそれに、一緒に評議に選ばれた時だって、笑顔で『一緒にがんばろうな、おねーさん』とか言ってくれたじゃない。給食の時も、私ひとりで盛り付けてたら、手伝ってくれたじゃない。評議合宿の時だって、私と一緒にいいんだって、バスの中二人で並んでくれたじゃない。私が、『好きな人から薔薇の花を、小野小町みたいに百日間連続で届けてもらいたいなあ』とか『告白される時は、ビーズの指環でいいから、私にプレゼントしてほしいな』って言ったら、『今度俺がやった時には怒るなよ』とか言ってくれたじゃない。冬休みだって『奇岩城』で、天羽くんがルパンになって、私がレイモンドに決まった時、思いっきり喜んでくれたじゃない。あれ、みんな演技だったの?」

いろいろ新たなる発見がある。薔薇の花のことも、ビーズの指環も、すべては西月さん発の要求だったってことだ。相手が違うかわり薔薇の花はちゃんともらえたからいいじゃないかと思う。

紡は何度か足を交代させてふたりを観察した。みっともないくらいわめき散らして、時折鼻をすすっている西月さん、そして顔をそむけて思いっきり顔をしかめている天羽くん。完全に視線は重ならなかった。逃げようと一歩、紡の側に踏み出すとさらにくっついてくる。影のようにひっついてくる。これがふたりの関係そのものだったとするならば、破局は避けられなかっただろう。紡が男だったら、その百倍残酷な言葉を積み上げて、西月さんを追っ払うに違いない。天羽くんの足と一緒に紡の気持ちも動いた。

「だから、今言った通りなんだ」

ほとほと参ったというように、天羽くんは大きく息をついた。紡と目が合い、気を取り直したように腹をへこませ、もう一度西月さんの顔を見据えた。

「嫌いな相手ほど、好きになるよう努力しないと、死んだ後いい生活が出来ないって信じ込んでいたおめでたい俺は、一目見た時から虫の好かないタイプだなって思った西月さんをとことん好きになろうって決めてたんだ。今考えると異常としか思えねえ。なんでそんな無駄なことしたんだろうって思う。たまたま評議で一緒になった時、本音でうえっと思ったけど、そんなことしたらまず西月さんが傷つくだろうし、なにより俺が天国にいけねえしって思って。一年の頃はそれでも、西月さんも周りの奴も、みな仲良くなれるならば、俺がひとりがまんしてもいいしなって思った。クラスもまんざらじゃねえしさ。けど」

まだ首を振ってだだこねようとしている西月さん、その口をふさぐようにきりきりと。

「近江ちゃん見てから、なんか俺のしてること違うって思ったんだ。近江ちゃんは誰にも媚びようとしてないし、自分のやりたいことだけ好きなことだけしている。それでいて成績だっていつ

のまにかいいところ取ってるし、担任が兄貴だったのにぜんぜん裏切り行為なんてしやあしない。こいつ、いい奴って思ううちに二年の夏」

「二年の夏って、宿泊研修の時？」

泣きじゃくっている。どうやってこの修羅場を納めるんだろう天羽くんは。 紡は巻き込まれたくないので、まだまだオンコの木の下でしゃがみこんだままている。ポケットの奥もレコーダーの熱で少し熱い。

「そう、俺のうちの犬スキャンダル大会が行われた頃と一緒に。なんで俺、好きでもないことに一生懸命だったんだらうって思ってさ。天国なんかに行くよりも、今この世で自分の本性に素直に生きるほうがいいんでないかって、ずっと考えてたんだ。近江ちゃんのようにクールに、女子が好きだとか平気で言っちゃって、他人の顔色なんて全然気にしないで生きられるってかっこいいって思って。それで」

——天羽くん、どうしてそうしてこなかったわけ？

いまさらわかりきっていることを聞いている。でも誉められるのは悪くない。西月さんがだんだん錯乱状態に突入しているのを、天羽くんは気付いているのだろうか。もうスケッチどころじゃないぞ、この人は。

「人の受けばかり考えて、誰にでもいい顔して、好きでもない奴にまでおべっかつかって、クラスにいいことばかりしようとして実は自分が可愛くてしかたない、そんな女子と付き合っているんだらうって、まだ付き合ってもいないのに勝手に決め付けて、あれがほしいこうしてほしい薔薇をよこせリングをよこせなんてわめいている女子のどこがいいんだって、ほんとに思ったんだ。俺、ガキの頃から、うるさくてちょっとしたことで正義感ぶって立ち上がって、男子たちを傷つけて、都合の悪い時は泣いて周りの同情を引こうとする女子が、大嫌いだったんだ。結局泣いて周りが助けてくれて、俺が謝る羽目になる、もしくは無理やり悪いことにされる、そういう計算している女子の顔を見ると、ぴんときちまうんだ。そういう女子でもうまくやっていかないと、天国にいけないから頑張ったけど、もう限界だってそう思ったんだ」

——見事、西月さんの特徴をあらわにしているわよね。

ぺたんと座り込んだ西月さん。スカートがめくれて白いレースらしきものがちらちら見え隠れしている。スリッパ端だろう。隠す余裕もないらしい。首を振り続けた。

「私、悪いところあったら直すから。直せないって思ってるところもちゃんと絶対直すから！お願い、天羽くん、何でもします。もう周りにいい顔なんてしないから、おねだりなんてしないから。ちゃんとするから、私うるさくしない。近江さんとの付き合いも邪魔しないから、お願い、嫌いにだけはならないで。これ以上、お願い嫌いにだけはならないで」

見苦しかった。すっかり紡が側にいることすら忘れていたかのようなだった。髪を振り乱し、何度か土下座するようなしぐさで頭を草にすりつける。かと思うと天羽くんの足下に縋りつくしぐさをする。触ると露骨に逃げられるので四つんばいになるのが醜い。顔を擦り付けすぎて泥だらけの顔を数回こすり、さらに唇を尖らせ、制服も何もかもが泥に塗れた。かつての、元気一杯正義感の強い、女子評議委員の姿ではなかった。どこかで見たことのある、欲しいものを要求して卑屈になりつつ、チャンスがあれば奪い取ろうと計算している、どこかの女性を思い出した。

そう、紡の側にいる、あの人を。

——うちの、母さん。

似合わないふりふりの小学生っぽいワンピースを持ち、にやつきながら近づいてきたあの人のことを思い出した。うりふたつ。西月さんと重なり、お姉ちゃんの結婚式関連の話をしていた時の場面と一緒に浮かんできた。

——かの子、ほら、あんたがそんなにブランドのドレスを着たいんだったらいいわよ。それくらいのことは親ですもの、してあげる。でもお願い。お母さんの気持ち、少しでもわかってほしいの。将来あんたの親戚が恥ずかしい思いをしないように、お母さん、かの子のためにきちんとした引き出もの出してあげたいの。いつか何十年か後に、皇人さんとの子がお嫁さんに行った時、「あそこのうちは結婚する時に貧弱な引き出物しか出さなかったのよ。そんなうちの子と結婚したら恥をかくわよ」って言われるのは辛いよ。お願い、お母さんのことを少しでも思ってくれるんだったら、ドレスだけじゃなくて、うちかけと白無垢も着てね。でないと、お母さん、もう、生きていけないかもしれないわ。

それでもお姉ちゃんがドレスのみの披露宴にこだわると、次の日母は、胃痙攣を起こして病院に運ばれた。仮病ではなかった。お姉ちゃんは震え上がって泣く泣くぶたに見える和服と白無垢を着た。母が望むように、お赤飯のださい引き出物をつけた。心臓の調子が悪くなった母は、「一生に一度だけ親孝行してよ」と泣き落とし、花束贈呈を無理やり紡に押し付けた。涙と身体、すべてを動員して、結局母の好き勝手に形を纏め上げられた。

——つぶしてしまえばいい。

——直す？ 大嘘つくのもいいかげんにすれば？

——物をねだらない？ 一番大きいものねだってるじゃないの。

——そう卑屈になってるくせに、陰で舌出して、両手出して欲しがってるくせに。

紡は同情しなかった。

母を叩きのめすことはできなかった。まだ紡は幼かったし、今でも生活の全般を親に頼っている以上、成人するまでは何もできない。

でも、母に似た、あの女子は今のうちに叩きのめしてほしい。天羽くんにもそう願った。

天羽くんは表情をやさしいままに見下ろしていた。不意に紡の視線とかち合い、小さく首を振った。頷いて答えた。

「『奇岩城』の時に、同期の評議連中、俺たちをくっつけようとしてただろ。さっさと知らんぷりして、近江ちゃんにアプローチしようと思ってたけど、奴らがありがた迷惑なことしてくれてさ。一度は卒業まで猫被ろうかと思ったさ。とことん西月さんを騙してしまおうかって思ったさ。けど、嫌いな相手を俺の勝手に拘束するのはよくないって思ったのと、俺、やっぱり嫌われることが怖かったんだ。それでずっと迷ってた。その時にはっきりと、今した話を西月さんに

すればよかったんだ。ちゃんと。けど、そうする勇気がなくて、俺、こんなにひっぱってしまったんだ。最低だよな。人をへどが出るくらい嫌ってるのに、どうしても自分が嫌われるのが怖くてさ」

無理してやさしくしようとしているのが見える。顎のところにゆがませて、何度も顔を引き締めている。

「『奇岩城』が出来上がるまではちゃんと今までの俺でいようと思ってた。クラスでは片岡もあんなのこと好きだってことが見え見えだったし。もし俺に露骨に嫌われたとしても、西月さんも片岡のことまんざら嫌いじゃないみたいだし、代わりに癒してくれるんじゃないかって思ってさ。俺なりに、一番いい時考えたつもりだった。けど」

——ははあ、そういうことか。

片岡くんになぜ薔薇の花を買わせて持たせたのか、なぜ告白させたのか、なぜ「下着ドロ」事件を激白させたのか。樹皮に耳を当て、じじっと鳴る響きに耳を済ませた。答えが織り上がってくる。

「やっぱり片岡の過去を清算しねえと、あんたも付き合う覚悟できないだろうなって思ったんだ。こんなに一途に思ってくれた相手を裏切るんだ。それも、ずたずたにしちゃうんだ。俺だってあんたが嫌いだとはいえ、不幸になって欲しくなかったんだ。きっと片岡は、俺がおえっとくるあんなの性格を、あがめて奉ってくれると思ったし、あいつもそう白状してたんだ。何よりも、『下着ドロ』事件の後、かばってやったのは西月さん、あんなだけだったよな。あれが、あいつ、めちゃくちゃ嬉しかったらしいぞ。死ぬほど嬉しくて、本当だったら転校するつもりだったのを、もう一度生まれ変わった気持ちでここにいるって決めたらしいんだ。片岡、女子が決め付けているよりも、いい男だぞ」

身体の振動が、心と止まった。

「嘘だよ、片岡くんのこと」

しゃくりあげ、もう一度顔を泥でこすり、

「だって天羽くん、前言ってたよ。『片岡みたいな奴、好きになる女いたら俺軽蔑するなあ』とか言ってたじゃない！ そんな相手と私を、くっつけたいほど、私のことが嫌いだったの？ 私のこと、そんなに嫌いだったの？」

——さあ、どう答える天羽くん。

言葉を断って、後。天羽くんは天を見上げた。一秒、二秒、三秒。鳥が飛んでいくのを眺めていた。一羽だけ縁起悪そうに「かあ」と鳴っていた。

「あのさ、西月さん」

ためらいのない涼やかな笑顔で天羽くんの答えがはじけた。「まさかと思うんだけどな、西月さん、片岡のことをかばったのって、実はいい子ちゃんぶりたかったからなのか？ 本当に片岡のことを信じてあぁいったんじゃないのか？本当は、あんな奴頭悪すぎ、とか思って他の女子たちと一緒に軽蔑していたけど、クラスのみんなからいい奴に思われたくて嘘言ってた、なんて言わないよな？」

絶句している。すすり上げることも出来ず硬直している。目の前の西月さんが答えられずにいる。凶星だ。当たり前だろう。

「違うよな」

無言。まだ続く。息を呑んだ。

「もし、そうだったとしたら」

天羽くんはつま先でつんと、小石を蹴った。

「俺、とことん西月さんのことを嫌うことになるけどな」

とうとうつぶして西月さんが意味不明の言葉を発し始めた。胸のブラウスもすべてが泥だらけ。紡からしたら自業自得にしか見えない。天羽くんが言ったことはすべて本当のことだから。白々しいいい子ちゃんぶりたかったから、勝手に嫌いな奴に惚れられて、困ってしまって、結局振ることもできないでいる。その通りのことを突きつけられて、慌てているのだから。嫌いだったら嫌われる覚悟でもって振った天羽くんの方がずっと筋通っている。もうここまで言った以上、嫌われる以外ないだろうとわかっているのに、本当のことを、怒鳴らず冷静に、並べ立てたのだから。もし誰かに会話を聞かれたとしても、天羽くんが演説途中、男子特有の乱暴な口調になってしまったところを除けば、とりわけまずいことを言ったわけではないのだ。大丈夫だ。ひとりで感情的になってしまいパニック起こした西月さんの精神構造に問題があるのだと納得してくれるだろう。

証拠テープの中身は、万全だ。天羽くんにも不利はない。

「西月さん、あんたのことを偉いと思ったことがひとつだけ、あるんだ」

しゃがみこんだ。天羽くんは西月さんの顔が自分の方に向くのを待って、一掴み雑草を千切った。

「俺と近江ちゃんのことがおおっぴらになって、うちの女子たちがわめきだした時、西月さん決して悪口言わないでくれたよな。みんなを押えてくれたよな」

「だって、だって」

「あの時、俺、ぎりぎりのところで、最低ラインの嫌い状態にならないですんだって思ったんだ。もしあの時近江ちゃんを叩きのめしていたら、俺は本当に、西月さんに何をしていたかわからない。ほら、あいつらと同じにはなりたくなかったんだ」

言葉を切り、指を天に差した。

「新井林と、杉本みたいな状態にはなりたくない、嫌いは嫌いでも、あそこまで西月さんを憎みたくなかったんだ。近江ちゃんに手出しをしなかったことだけで、俺の中ではぎりぎり、大丈夫だったんだ。もしこれからも、そうしてくれるんだったら」

——こいつ、怖いかもしれない。

「俺、新井林が杉本を殺したいほど憎むように、西月さんのことを思わないですむ、かも、しれない」

「じゃあ、そろそろ写生しないとまずいから行くな」

だんだんまろやかな光が木々の影から差してきた。汗ばんできた。鳥が複数形で鳴いている。近くにごみ捨て場でもあるのだろうか。たんとんと続いた天羽くんの演説。紡の耳とポケットにしっかりと録音されている。

「それとこれなんだけど、今俺がしゃべったこと、みなテープの中に入ってる。間違いがないようにもう一本、近江ちゃんに録音してもらってるから、その辺、よろしくな」

カセットテープを絵の工具箱の中から取り出し、丁寧にケースに入れたまま西月さんへ渡した。受け取ったけれども何がなんだかわからないらしく、くるくる回していた。

「今のこと、誰にしゃべったっていい。今の会話、俺を叩き落すネタに使ったっていい。とことん悪口言えよ。近江ちゃんに関する事以外だったら、何されても俺は怒らない」

天羽くんは西月さんに手を差し出した。はたくかと思っただけでしっかりつかんで立ち上がった。いい根性だ。別に手を出して欲しくないのだから紡は幹に背をつけ、伸びをした。マイクロレコーダーの熱で腰が熱い。スカートの上からそっと、停止ボタンを探り、押した。



天羽くんという人は底知れない奴だ。

泣きじゃくる西月さんを放り出したまま、天羽くんは大学の中庭にもぐりこみ十分くらいで写生を仕上げた。その後さっさと教室に戻って水彩絵の具で色をつけ、三十分前後で全て完成させた。もともと絵が得意なのは知っていたけれども、きっちりと校舎と藤棚の鮮やかな写生画をこしらえるなんて、尋常じゃない。修羅場後に気持ちが落ち着かないだろうという紡の心配もどこ吹く風。時折、

「しゃーないなあ、俺って才能ありすぎるからなあ。色が決まらないんだわなあ。どう、どの色がいいっすか、近江ちゃん」

と話し掛けられるのには参った。

さすがに紡は、西月さんとのことを心にひっかけたまま、なかなか筆が進まなかった。

天羽くんが釘をさしてくれたとはいえ、西月さんに恨まれない保証はない。

取り巻きのおばかな女子たちがうっとおしい。彼女たちに、正当な理由は通じない。また、西月さんの親友・青湊警察署勤務のお父様をお持ちの彼女に職務質問されるのも疲れるだけだ。別に悪いことをしたわけではないし、いざとなったらちゃんとぺらぺらしゃべって、ぎゃふんと言わせればそれでいいのだが。紡は色鉛筆を握り締め、ところどころぐりぐりと芯を押しつぶすように塗った。

少しずつ、他の連中が三年A組の教室に戻ってきた。グループでまとまって行動するように、という教師サイドの指示は無視されている。それぞれ適当に形だけこしらえた後、さっさと自分たちのおしゃべりタイムに切り替えた奴、公認のデートタイムに設定した奴、さまざまだったらしい。空の水入れとスケッチブックを机に置いて、男子は天羽くんに話し掛け、女子は言いたいことを腹に収めたまま紡をにらみつけてきた。さっきまで紡の悪口大会が行われたのだろう。面と云ってなくても別にかまわない。

「あれ、小春ちゃんは？」

ふけと油が髪に浮いた女子だった。ぼりぼりと頭を搔きながら、教室の中を見回している。

「天羽くん、小春ちゃんどこいったか知らない？」

「林の中に置いてきた。そこで描くってたから」

「ちょっとあんた、そこに置いてきたって、どういうことよ！」

天羽くんの欠点・言葉を軽く使いすぎる。

「ひとりで描いていたかったみたいだから」

「あんたが勝手に連れていったんでしょ！ なにいきなりハブにするわけなの」

「別に、本人が来たって言ったから連れて行っただけだろ。俺たちといたくない、って言ったから置いてきた、ただそれだけシンプルなもんっすよ」

天羽くんの問題点・女子を激昂させやすい言葉は慎むべき。

「まさか近江さんとふたりで、なんかしたんじゃないでしょうね！」

「なんかって、別に、話しただけよ」

嘘ではないのでそれだけ言っておいた。

「話？ まさかまた小春ちゃんにひどいこと言ったんじゃないよね。ちょっと天羽、あんたってば一体何が目的で小春ちゃんをいじめてるわけ？ いじめ反対の立場だったくせに、評議のあんたがいじめてどうするのよ！ いい、ホームルームにかけるよ」

「どうぞご自由に。証拠物件持ってます」

簡単に言っちゃっていいのだろうか。他人事ながらぞくっとする。

「必要だったら、先生に話しくけど、向こうの名誉ってもんもあるからな」

「じゃあ、証拠物件、見せなさいよ」

天羽くんは紡に目配せした。筆でちょん、と紡の描いている画用紙をつついた。赤が一滴ぽつんと筆から落ちた。ポケットからマイクロレコーダーを取り出し、天羽くんに渡した。

「誤解曲解避けるため、話し合いの結果を一応録音しておいたんだ。けどな、あんたらに聞かせるには相手の了解も得ねえとな」

無理やり奪い取ろうと手を伸ばしたところへ、天羽くんはさっと水入れを置いた。ジャストタイミング、彼女の手で勢い良く弾かれ、天羽くんの机および床が水浸し、画用紙もびしょぬれ、大惨事。

「あらら、困ったざんすねえ」

怒りもしないで天羽くんは、机の前にひっかけてある雑巾を取り出し、さっさと床、机を拭いた。

「ご、ごめん」

「別にいいよ。俺、気にしないから」

無理やり会話を終わらせるには、相手に気まずい思いをさせて言葉を断つのが一番だ。マイクロレコーダーを天羽くんはかばんにしまい込み、雑巾を絞りに教室から出て行った。もう半分以上完成しているのでそれほど騒ぐことではなかったらしい。ご苦労様。

西月さんは結局、姿をそれきり見せなかった。

女子たちが授業そっちのけでひそひそ話をしている。心配しているのか好奇心なのか、そこらへんを追及しはしない。しっかしうるさい。先生たちも頭に來たらしい。五人くらいの女子が怒鳴られ、うち三人が廊下に立たされた。無気力A組にしては珍しいことだった。

「どいつもこいつも、夏が近づいたから頭のねじが緩んだのか！ シャベるのやめ！」

理科の先生がいらだって黒板を叩いているのを、紡はノート取るためにだけ眺めた。

いきなり机を雑に鳴らす音が響いた。

「どうした、泉州さん」

「西月さんが戻ってこないんです。先生、私、心配なんで外、見に行っていていいですか？」

西月さんの親友で、かつ不潔極まりない女子だった。

「一、二時間目は来ていたのかい？」

「はい、写生の間はいました。けど、まだ戻ってきてないんです」

「よろしい、それなら狩野先生に知らせておいたほうがいいから、少し待ってなさい。泉州さんは行かなくていいよ」

泉州さんはむすうとした顔で口を尖らせた。しづしづ席についた。先生の言うことはごもつともだ。生徒に呼びに行かせたはいいが、一緒にとんずらされるとも限らない。信用するもんじゃない。よたよたと、教室を出てあの人……狩野先生……に声をかけに行く先生を見送った。扉が閉まったとたん、女子たちのざわめきが破裂した。泉州さんを囲んでバリケードが張り巡らされている。

「小春ちゃん、戻ってこないって変だよな！」

「うん、私も変だと思うんだ。だって小春ちゃん、授業をサボってしまう子じゃないもん。真面目だしね」

紡は天羽くんの入っている男子グループに混ぜてもらった。クラス中、かっこいいと思われているらしいグループである。どこが、というのはあえて言及しない。派手に目立つことは確かだが、紡にとっては同じ感覚でしゃべることのできる、それだけの集団だ。冷やかし声をあしらうのも悪くはない。

「なんかしたんだな、天羽」

天羽くんはにこりともしなかった。

「昼休みに状況説明の集会やるわ」

——状況説明？

「二次災害の恐れもあるんでな」

男子が積極的に西月さんをかばわなかったということからして、早い段階で天羽くんは報告していたのかもしれない。女子たちと、一部の目立たない男子を除いて、天羽くんが西月さんを振ることについては賛成の意を表していたようだ。紡の方にぽんと「なあにさ、あんた」としなしなしてみせた男子が言う。

「あーあ、しかし、お前らってよくわからないなあ。近江は女子専門だってのに、天羽は近江専門だろ、不毛な関係だよなあ」

「別に、あんたたちが思ってるほど不毛じゃないわよ、ねえ、天羽くん」

一緒に落語や漫才聞きにいけるし。たまには解説者になってくれるし。困った顔で天羽くんは頷いた。

「近江ちゃんは手ごわくてねえ」

「けどな、おめえらも気、つけるよ」

声を潜めて、ひとりがささやいた。

「女子が団結した時は怖いものなしだからなあ。間違っていることを、あいつら集団の論理で、無理やり押し付けるからなあ」

「『一途』とか『一生懸命』とかいう言葉でね」

話の腰を折るようだが言わずにはいられなかった。

「『一途』な思いは、暴力と一緒によ」

五人で大受けしてしまったので、「暴力的」女子の視線で背中を貫かれた。怖い怖い。理科の先生が戻ってきてそれ以上はなにごともしこらなかった。

四時間目が始まった。社会・歴史の授業だった。菱本先生が出席を取りながら「か」の行で止まった。

「おい、かたおか一、かたおか、つかさ、いるかあ？ いないのかあ？ めずらしいなあ。また課題どっさり出すぞー！」

片岡くんの姿が席から消えていた。ざわめきが泡立ち消えた。

横目で紡は泉州さんの様子をうかがった。相変わらずべたついた髪の毛が遠くからも目立っていた。

やはり片岡くんの机に視線を流していた。不安そうだった。

——きっと、片岡くんが探しにいったか襲いに行ったかのどちらかだと思ってるわけね。

天羽くんはどうして、修羅場の席にわざわざ紡を連れて行こうとしたのだろう。状況録音テープをダビングなしで二本こしらえたからではないだろう。西月さんとふたりっきりだと手に負えなくなるからだろうか。紡も男だったらそうするだろう。他人に聞かせてちゃんと言いつける内容を話せばこれほど強い味方もない。西月さんひとりがヒステリー起こしただけで、天羽くんはいたって冷静だった。もし西月さんが友だちや先生連中に聞かせて同情を買おうとしても無駄だ。あのテープ内には、みっともないくらい乱れた西月さんの声がありのまま残っている。天羽くんを追い詰めたつもりが西月さん自身の未練と恥をさらすことになる。どちらにしても、天羽くんは紡を選び、守った。西月さんに礼を尽くした。おそらく誰にも話したことの無い秘密を話したというわけだ。それについては紡も納得だった。宗教がらみの理由ならば、「話す必要はない」だろうし、言うのも勇気がいるだろう。

——まあね、宗教がらみだとは思わなかったわ。

理由はすくとんと腹に落ちた。「かの子放送局」で仕入れた情報によると天羽くんのコネは書道家のお爺さんに関係しているらしい。芸術の著名人ということだと宗教団体の広告塔として利用されていた可能性は高い。子どもの頃から特有の神様を拝むなり、団体に参加させられるなりさせられていたのだろう。信じるのも安易といえればそれまでだが、小さい頃から刷り込まれていれば信じてしまうのも無理はないと思う。もっとも「嫌いな人を好きになろう」というのは教義ではないだろう。単なる道徳だ。大人が喜んで押し付けたがる白々しい願望に他ならない。

小学校高学年から中学二年にかけての天羽くんは、そういうことを素直に信じる、おばかな子どもだったと紡は解釈している。

なにかの拍子で「嫌いな奴を無理やり好きになる」なんてことが苦痛以外の何ものでもない、と気付いたとたんさぞや天羽くんは苦しんだだろう。いつか紡が、「親だからがまんしなくてはならない」とばかりに、お姉ちゃんの結婚式で花束贈呈させられた時のように。親の心子知らずとはいうけれど、紡からすれば押し付け以外の何ものでもなかった。

もし西月さんと「付き合い」まで持っていかなければ天羽くんはとことん「人のいいおちゃらけ評議」を演じきって卒業したに違いない。紡もそれには騙されていた。余りにも完璧に「西月さんが大好きな天羽くん」を演じすぎたあまり、立村評議委員長を始めとした評議委員連中が懸命にふたりを公認カップルにしようとしたのも、よけいなお世話とはいえ当然の成り行きだったのかもしれない。「奇岩城」のキャスティングからしてそうだ。ルパンとレイモンドの恋人同士に天羽くんと西月さんをあてがうなんて。清坂さんも後悔していたけれども天羽くんの名演技には誰もが騙されるだろう。自分と西月さんとの間だったら、卒業と一緒に早く縁を切ることができただろう。評議委員会を巻き込んでしまった以上責任は取った。その辺、律儀な奴だ。西月さんのためではなく、周りのためだったのだろう。

しかしなんで西月さんは、天羽くんの真っ黒い嫌悪感に気付かなかったのだろう？二年間もくっついていて、それを肌で感じなかったことがなによりも不思議だ。もちろん周りの友だちを騙すのは簡単だろうが、嫌いというサインはもっとあっさりと感じ取れるはずなのにだ。

——どんなに努力しても、頭の悪い人ってどうしようもないのよ。

紡は西月さんに同情する気などさらさらなかった。

片岡くんは一度昼休みに戻ってきた。給食に配られるコッペパンと紙パックの牛乳だけポケットに押し込み、黙ってかばんを持ち出て行った。直前に泉州さんへ近づき何かを耳打ちした。

「え、それほんとなの！」

たまたま昼休みは男子一同みな、体育館でバレーボールかバスケかのどちらかに燃えているはずだった。一応そういうことになっている。天羽くんが状況説明をしているとは思っていない。教室には女子二、三人しかいなかった。集団で女子たちがざわめいている状況ではなかった。片岡くんだって話し掛けられなかっただろう「下着ドロ菌」がつくとか行って避けられない状態ではなくてよかった。

紡の顔を泉州さんはにらみつけると、つかつか近づいてきて真っ正面に立った。もわっとして臭い。

「聞きたいんだけど」

「何を。西月さんのこと？」

早くけりをつけたかった。紡は机の前でとんとんとカンペンケースを立てた。

「よくわかってるわよね。小春ちゃんを置いて、天羽と何話してたってわけよ」

「だからあのテープに全部録音されているわ。頭の中、演芸と落語のことしかないような天羽くんがね、精一杯話をしていたわけよ。ただ西月さんに日本語は伝わらなかったって、それだけよ」

いきり立った泉州さんに近づいてきてほしくなかった。片手で制止する真似をした。

「天羽くんも話し合いを録音したということは、ばれてもいいと覚悟したってことよ。西月さんにももう一本、あっちはカセットテープの方だけど渡してあるから、それを聞いてもらえば一目瞭然よ。安心して。私は別に、西月さんをいじめたいとなんて思ってないわ」

鐘が鳴るまであと三分ほど。女子たちが廊下を走っているのが聞こえる。教室にもだんだん戻

ってきている。一応は礼儀ということで、聞いてみた。

「さっき片岡くん何か話していたみたいだけど、どうしたの」

「あんたには関係ないわよ！」

完全にぶち切れてしまった泉州さんは、髪からふけをばらばら落としながら……日の光が鮮やか過ぎて、空気の中に飛び散るごみと一緒に見えるのだ……教室から飛び出していった。紡はそっと肩のところをはたいた。ふけなんて落ちてないとわかっていた。

「評議のふたりは、放課後、生徒指導室まで来てください。修学旅行のことで少し、お話したいことがあります」

いつもと変わらない銀縁めがねの「あの人」は、紡と天羽くんを静かに見つめた。

五時間目、六時間目、結局片岡くんと西月さん、それから泉州さんの三人が戻ってこなかった教室の中、ひんやりした空気が漂っていた。だいぶ蒸してきているはずなのだが、女子たちの口から漏れるひそひそ話と、男子たちの重たい沈黙がどこか冷たかった。ターゲットにされているのが自分だと感じている紡と天羽くん。笑顔が戻ってこなかった。

天羽くんに振り返り、もう一度頷いてみせた。天羽くんもじっとにらみすえるようにして親指を立てた。

とりたてて感情が溢れているわけではなさそうだった。どうせ今日、評議委員会もないし、来週から修学旅行の準備をすればいいということで問題はなさそうだった。

——聞かれたら、答えればいい。それだけのことよ。

天羽くんのマイクロレコーダーの中身を思い出した。ほんの少し紡は不安を覚えた。

——聞かせるつもりなのかしら。

女子たちの牽制しあう視線を無視して紡はろうかに出た。天羽くんも男子たちに二言三言、何かを指示した後紡と並んだ。かばんをぶらさげて、鼻をすすった。

「修学旅行の話なわけないよね」

「ああ、そうだな」

すっきりした、という気分ではなさそうだった。少なくとも演じているわけではなさそうだった。

「近江ちゃん、悪かったな。巻き込んじゃって」

「どうせ言わなくちゃいけないことでしょ、当然よ。ただね」

紡は数度、すれ違う他の男子たちに片手を振りながらつぶやいた。

「西月さんをそのまま置きっぱなしにしたのはまずかったかもね。ちゃんと言い含めて教室に戻すところまでした方がよかったかも」

「そうか、そうだよなあ」

「天羽くんは昼休み、ちゃんと男子たちに話したわけ？ 状況説明集会」

理科の授業中に聞いたことを確認してみた。頷いて頭をぼりぼりとかいた。

「一応な。納得はしてもらった。体育館の隅っこで俺なりの理由とこうしたいってことをな」  
「宗教団体の話も、したわけ？」

立ち止まった天羽くんは、下を向いてしばらく片方のこぶしを握りしめたまま見つめた。  
「いろいろ社会問題起こしている団体だからなあ、俺にとってのトップシークレット、だったんだ」

確かに紡もその件は知らなかった。お姉ちゃんもかぎ出すことはできなかったらしい。  
「けど、いつかはばれるもんなんだな。不自然なことしていると、大抵こっちの方からぼろがでるってわけなんだな」

「別に、クリスマスケーキ食べられて、お正月はお年玉もらえればそれでいいじゃないの」  
「近江ちゃんとしゃべっていると、世の中平和だなあって思うぜ」

相変わらず、紡にだけは笑顔を見せてくれた。二時間目以降、初めての笑顔だ。  
「たぶん大丈夫だとは思いますが、近江ちゃんにもしあいつらが、よけいなことしだしたら、その時は俺が近江ちゃんを守る。その点だけは安心してくんろ」

なにが「守る」なのだろう。なんとなく違和感がある言葉だった。「付き合い」は一緒に馬鹿笑いでできる演芸を見に行つて、気軽におしゃべりできればそれで十分。別に「守られる」必要なんてない。

「別に、いいわよ」

と遮ってはおいた。

天羽くんにとって例の宗教問題というのは、どでかい重石だったのだろう。家族で脱退でもしない限りどうしても抜けられない底なし沼のような場所だったのかもしれない。本当だったら卒業まで内緒にしたかっただろうに。けどそのことを話さない限り、西月さん問題を片付けることはできないし、一度口にしてしまったら最後、天羽くんの方が色眼鏡で見られる可能性もある。「宗教団体がらみの献金によってコネ入学した」こともさることながら、「宗教団体がらみの目標でもって、嫌いな女子と付き合うとこまでいった」というのも軽蔑される原因となるだろう。周りの女子たちからは片岡くんと同じ目線で見られるかもしれない。

女子にばれる前に、男子に手を回しておく。片岡くんの下着ドロ告白でもやった手回しのよさ。つくづく、天羽くんというのは頭がいい奴だと思った。

三階の生徒指導室の前にて、天羽くんがノックするのに任せた。

「失礼します、入ります」

返事がないのでさっさとドアを開けた。夏が近いせいか、窓辺にはレースのカーテンで軽く目隠しされていた。聳え立つ大きな木が青々としていてまぶしかった。寒くも暑くもない、ちょうどいい部屋だった。

「返事なくて申しわけないです。こちらに座ってもらえますか」

相変わらず生徒にも敬語を使う「あの人」……狩野先生……は黙ったまま、ソファを指差した。おそろいのソファカバーが整えられていた。飲み物を用意しようとしているらしく、缶ジュースを二本取り出した。自分の分はいらないらしい。

天羽くんを内側に、紡は出口側に腰掛けた。「あの人」は真向かいに白衣のまま座った。表情は一切読み取れなかった。いつも通りとも思えるし、またそうでもないとも感じられた。

「天羽くん、今日どうして来てもらったかは、きっと気付いていると思います」

——何もここで素直にうなだれるのはやめなさいよ。全く根性なし！

「僕の方からは何も言えません」

——だから何のことですかって返事しなさいよ！

紡が隣りの天羽くんを罵っている間、無言となった天羽くんは膝を広げた間に顔を突っ込むようにしてうなづいた。

「聞かせてもらえますか」

——とぼけなさいよ！

西月さんが泣きながら直訴したのだろう。先に帰るかなんかしたのだろう。ついでに泉州さんあたりの援助射撃もあれば完璧だ。

アイスクンデー型の顔をした「あの人」は、鵜呑みにしてしまったのだろう。

少なくとも天羽くんは西月さんをいじめたわけではない。

「ほら、聞かせてあげなさいよ」

ささやいた。「あんたは悪いことをしているわけじゃないんだから」

きっと「あの人」を見つめ返した。全く動じない瞳の「あの人」は、ただ黙っている。こうやって返事させて、反省させて、泣かせようとするのが大人のやり方とするならば、紡は受けて立ちたい。

「先生、天羽くんは決して悪いことをしたわけではないので、理由を聞いても問題はないかと思えます。私も立ち会っていました」

「それは聞いてますよ。でも、第三者からではなく、直接本人から聞いた言葉を信じたいんですよ」

——誰から聞いたんだか。

担任たる「あの人」を信じられるかどうかは別としても、すべてをあっけらかんと話してしまった方があとあと楽なはずだった。紡は天羽くんをもう一度つついた。「かばんからテープ、出さなさいよ。聞かせてやりなさいよ、洗いざらい」

のろのろと天羽くんはかばんに手をかけた。意志も紡に操られるまま、といった風だった。

「先生、すみません」

——だからなんで謝る必要あるのよ！

「俺、近江ちゃんを守り切れなかった」

——だから勘違いするんじゃないわよ！ 誰が守ってほしいなんて思ってるのよ。

天羽くんの紡に対する勘違い、そのものだ。

とうとう、顔をゆがめて天羽くんはマイクロレコーダーを机に置いた。ポケットに納まる程度の細長いレコーダーを受け取り「あの人」はしばらく眺めていた。

「これは？」

「俺、この前付き合いかけた時、ちゃんと西月……さんとけりつけて、近江ちゃんにも迷惑かけ



ねえようにするって約束したはずなんだけど、結局へまやっちゃいました」

——あんたちちょっと、勘違いしているんじゃないの？

だんだんわけがわからなくなってきた。紡が口をあけたまま天羽くんの横顔を見つめている間、ひたすらこぶしを握り締めつつ語り始めるのはなぜなんだろう。しかもなぜ、紡のことを「守れなかった」とか、意味不明なことを言うのだろうか。

「一通りこれをまず聞きます。話はそれから、ゆっくりしましょう」

マイクロレコーダーのスピーカー部分を耳に当てるようにして、「あの人」は窓辺に立った。唇をかみ締めるように、外の木々を眺めながら、じっと遠くを眺めていた。その間天羽くんはじっと紡の方を見つめ、かすかな声でささやいた。

「俺、近江ちゃんがいたから、自分を見失わないですんだんだ」

——だからなんだってのよ。

つつこみを入れるのはあきらめた。なんとなく笑ってみたくなった。

「だから、もし女子たちが近江ちゃんに手出ししたら、その時は容赦なくぶった切る」

「そんなやわじゃなくてよ」

古風な言い方をしてみた。

「あの人」が聞き終えるのはあつという間だった。

すぐに聞き終えたらしい「あの人」は、ぶらんとマイクロレコーダーを持ったまま向かいの席に座り込んだ。大きくため息を吐いた。

「もし、ここで西月さんに謝るチャンスを僕がこしらえたとしたら、天羽くん、あやまりに行きますか」

ぐっと息を呑んだ様子。天羽くんはうつむいたままだった。

「今、西月さんがどんな思いをしているかを、考えてみましたか？」

「けど、俺は、言ったことを後悔してません」

背を伸ばし両手をテーブルについて、天羽くんは前かがみのまま言い切った。

「確かに、すげえきついことを言ってしまったと思うし、向こうを傷つけてしまったのは申しわけないと思うけど、だけど」

「だけど？」 めがね越しのまなざしがちくっと光ったように見えた。

「俺が今言ったことは、みな本当のことだから、消すことはできねえってことです」

「本当のことだから？」

「そう、俺、ずっと西月……さんのことが嫌いだったってことは本当なんだってことです」

「クラスメートとしての付き合いも難しいくらいにですか？」

「もう、限界を超えてしまってるし」

唇をかみ締めるとまたうなだれた。ガラスのテーブルに置かれた缶ジュースを握り締め、  
「言いたいこと言われて、べたべたひつつかれて、裏表あるおしゃべりに付き合わされて、受けもしないギャグを飛ばす羽目になって。評議委員として、一緒にやっていただけなんだから、うまくあわせるつもりでやってきたけど、でも、心底おげつとくるくらい、ああいう女子が嫌いだ

ってことに気付いてから、もう俺は学校辞めたくなるくらい、がまんできなくなっただんです」

「退学ですか」

A組は二年の夏休み後に退学者を出している。。

「西月さんが悪いわけじゃない。俺とたまたま相性が悪かっただけだし、俺がもう少しわかりやすく向こうを遠ざけるかすればよかったと思うけど、もう俺も変になりそうでした。近江ちゃんがいなかったら、ほんと、俺」

じんと、蛍光灯の方から音が響くだけ、あとは天羽くんの言葉だけだった。

「好きと嫌いの概念ってやつ、ぶっ壊れたままだったかもしれないです」

喜怒哀楽の感情を一切見せない目の前の「あの人」は、肩をかすかに落とした。

「天羽くん、明日以降、教室に戻ってきた西月さんにはどう接するつもりでいますか？」

「えっと」

鼻をすすり上げると、天羽くんは天井を見上げ頭を抱えた。

「他の、しゃべらねえ女子と同じようにすればいいかなって思ってます」

「つまり、話し掛けない、何も言わない、ですか」

答えられずに天羽くんはそのまもうつむいた。

「無視は、しません。ってかそうすると、女子たちが片岡に対してやってるのと同じになっちゃうから、話し掛けたらそれだけ返事して、って感じで」

——もう話し掛けないわよ。あれだけ露骨に拒否されたら。それともあの鈍感だから、何やっても無駄かしら。

「だって、うっかりすると、たぶん俺は、クラスのいじめをもっかいやっちゃう可能性あるからです。俺はそんなことするべきじゃねえって思ってるし、やめさせたいけれど、けど、あの女... ..西月さんの顔見ているとどうしようもなくむかつくだけなんで、自分で自分の約束を守れなくなっちゃうから。だからできるだけ接触しないようにしたいんです」

「あの人」は手を組み合わせて、もう一度ため息を吐いた。

何を天羽くんは求めているのだろう。

どうしたいんだろう。

紡はしばらく黙りこくった男ふたりの間を、視線だけうろうろさせた。

答えが出ないのだろうか。「あの人」も教師だ。本音がどこにあるとはいえ、天羽くんのことを素直に認めるわけにはいかないだろう。

「そんなのはお前の身勝手だ！ 天羽、お前がやってることは自分の好みだけで勝手にいじめているだけだ」と怒鳴るかもしれないし、「努力したのは立派だ。なぜそう押し通さない？」と説得するかもしれない。また、「西月さんは傷ついている。謝りにいきなさい」と指導するかもしれない。

どの答えも出そうとはせず、天羽くんの様子をずっと観察しているだけだった。

——表面だけよくして、適当に先生の前だけで謝っておいて、後は無視すればいいのよ。

紡だったらそうするだろう。面倒なことはいやだ。表面上は仮面をかぶればいい。

天羽くんはやはり紡が思った以上に純情だったらしい。林の中での言葉をすべて録音し、担任に聞かせようとするなんてことをするくらいだ。へたしたら揚げ足取られてとことん罵られないとも限らないというのに。紡からしたら甘いとしかいいようない。本当に嫌いな奴から縁を切るのだったら、方法を選んではいられないはずだ。

紳士としてきっちりとけりをつけたい、そう天羽くんは言っていた。

紡にふさわしい男として接したい、そんなことも口にしていたような気がする。

でも、それって不可能なことじゃないだろうか。人間として頭のいい女子相手にだったら、天羽くんのやり方も通用したかもしれない。早い段階で「あ、この人私のこと嫌ってるのね、じゃあ早いうちに普通のお友だちで通しましょ」と割り切ってきれただろう。西月さんは救いようのないバカ女子だった。だから、天羽くんの出した拒絶を一切読み取らずに張り付いてきた。紡からすると自業自得だと思う。頭が悪いということは、それだけで犯罪だ。

男子は幸い、天羽くんがなんとか話をつけたらしいが、女子が問題だ。西月さんが泣けば、それだけでみな同情票を入れるだろう。天羽くんが二年間、理不尽な行動に苦しみ、自分が新興宗教関連に入れられていたこととかを口に出せず悩んでいたなんて、全く考えようとしないうら。片岡くんがあやまったにも関わらず今だ「あの、下着ドロが」と軽蔑しているのと同じように、天羽くんも同じことになるだろう。

「すみません、どうでもいいんですがいいですか」

男子ふたりの間に割り込むのもなにかと思っただがしかたない。紡は少し大人っぽく聞こえるような言い方をしてみた。「あの人」は紡にかすかに笑みを浮かべた。

「どうしたの」

あら、敬語を遣わない。珍しい。思いつつ紡は思いつくまま並べてみることにした。

「私も、天羽くんと西月さんが話をしているところに立ち会ったんです。このテープを聞くだけで、たぶんみな天羽くんが悪いと思うかもしれないので、私なりに補足したいんですけれどもいいですか」

「近江ちゃん！」

素早く膝に手を置いてやった。すぐに手を引いた。黙った。

「この時に初めて私も知ったことですが、天羽くんの場合、昔入っていた宗教の問題がからんでいたらしいですね。天羽くんなりにも悩んでいたようですが、それはどうでもいいんです。私としてはそれ、関係ないです。ただ、問題なのはどうして天羽くんが、そのことを他の男子たちに話せなかったかってことです」

「な、なんだよ」

「あんたは黙ってて」

唇に熱を込めて制止した。

「少し話が飛びますけれど、A組は以前から『縁故入学クラス』と呼ばれてきています。実際私だってそうですし、ほとんどの人がそうだとすることを自覚しているはずですよ。どうしてもそのあたりで引け目を感じている人が多いはずなんです。もちろんべらべら言いふらすことではな

いですし、そのことによって周りからやっかまれることもかなり多いでしょうから、隠すのは仕方ないでしょう。でも、『縁故入学』そのものを神経質に隠したりするのはどうかな、と思います。私からすると『縁故入学』はひとつのきっかけに過ぎなくて、それから先が問題だって気がするんです。一般入学した人たちからすればもちろん『ずる』をした風に見えるだろうし、こういっちゃなんだけど裕福でもあるのは否定できないかなと思います」

お姉ちゃんの旦那さま、大好きなお姉ちゃんを奪った人。

この人が学校で悪いことをしていることがわかれば、お姉ちゃんと別れさせることができる。六年の秋、そう思いついて青大附中を受験したいと言った時のことだった。縁故入学なんて言葉も知らなかった。母が「あの人」に話をしてくれると聞いた時、わざと甘えた風に、

「私、お兄さんのクラスに入りたいなあ。どんな生活しているかわからないもんねえ」とつぶやいた。それが本当になるとは思わなかったし、「あの人」からも直接、

「紡ちゃんは成績だけでもちゃんと青大附属に入ることができるんだから、自信持っていんだよ」

と言われていた。彼なりの思いやりだったのだろう。そんな優男の仮面をひっぺがして、お姉ちゃんに悪口言いつけてやって、できれば生徒に手をつけているというスキャンダルを発見して、離婚まで持って行ってやる、そう決めていた。幼すぎる十二歳の決意だった。

今思えば笑える。紡なりに計画立てて、事細かに「あの人」の行動を観察していたけれども、味もそっけもない地味な教師という以外、非の打ち所がないという現実に打ちのめされていた。もちろん生徒同士での教師批評なども耳にしたけれども、狩野皇人という中学教師がある意味紡と相性の合う担任だったということを知らされていた。

クラスの連中には不必要に干渉しない。そのくせ見るところはしっかり見ている。敬語で話すのは、自分が教師である以上、無意識のうちに見下す態度が出てしまうことを防ぐためだという。片岡くんの事件の時も素早く対処してクラスに情報が漏れないように処理した。クラスから出た退学者にも最後の最後まで面倒を見て、公立中学に転校した後も定期的に連絡を取っているらしいとお姉ちゃんから聞いている。「E組」のことだって、本当は駒方先生だけがひとりで担当するつもりでいたのに、あの人が自分から立候補したらしいということも。傷を上から見下ろすのではなく、同じ位置に立ちたい、そうお姉ちゃんにいつも晩酌の時に語っていることも。

悪いところを見つけたい、そう思いつづけていた二年間なのにな。

結局は、お姉ちゃんが惚れる理由ばかりを発見するだけだった。

「私が提案したいのは、天羽くんのように本当に言いたいことを押えている人が、もっと楽に呼吸できるよう、A組を居心地よくすることです。まず最初に『縁故入学』このことをもっとおっぴらにすることです。せっかく同じクラスに『縁故入学』の生徒が集まっているわけですから、同じような悩みを持っている人もいるでしょうし、もっと気軽に話しができれば、もっと楽な形で片付けることができたと思います。西月さんのことについてもそうです。男子たちがもっと早く気付いて、女子たちの反応をうかがいながら処置をすることもできたでしょう。先生にも

早く情報が届いたでしょう。少なくとも天羽くんがここまで神経ぼろぼろになるくらい傷ついて、周りから反発を食らうこともなかったでしょう」

ここで一息。ジュースを飲む。天羽くんがおそろおそろといった風に自分の分をずらしてよこした。

「今までは西月さんがやたらと、『縁故入学』という言葉に過剰反応してしまい女子を中心に決して言うてはいけないことという意識を植え付けてきました。それが悪いとは言いませんけど、本当のことを言いたくも言えないという息苦しさがあったのは否定できません。それに、片岡くんのことだってそうです。あの事件の時、もっと早く片岡くんを犯人としてあげて謝らせることができれば、二年も引きずることなく済んだはずです。あの問題も結局は噂が噂を読んで、金でけりをつけたんじゃないかという情報が流れて、それでみんなから嫌われてしまったってことです。もったいないことをしたんじゃないでしょうか」

この辺は本当のことだから、たくさん語る必要はない。

「ですので、今後は日常的に『自分らは縁故入学してきたんだ』ということをお話することのできる環境に持っていき、A組の中だけでも一息つける状態にすることが大切なのではないでしょうか。そうすれば天羽くんや片岡くんのようなことは少なくなるでしょうし、これ以上退学者も出てこないでしょう」

気取った言い方だと自分でも思う。

「私もこの二年間、天羽くんと西月さんを見てきましたけれども、天羽くんは必死に妥協しようとしていたのが見え見えでした。別にそんなじろじろ見ていたわけではないですけども、嫌いな相手によくぞあそこまで妥協してきたなあって思いましたし。天羽くんの言うとおりの、これは個人の好みであって西月さん本人が悪いわけではないですけど、いるだけでむかつく相手である以上、できれば遠ざけたいってのも本音です。天羽くんが偉いのは、それでもきちんと人間として付き合っていきたいと言っているところです。西月さんがどう思っているかは正直なところ想像つきませんが、お願いできるならば天羽くんに『嫌う権利』だけ認めてあげてほしいと思います」

「『嫌う権利』とは？」

手元が暗くなってきた。心なしかジュースの味が苦い。

「お互い距離を保つ代わりに、心の中でどう嫌っても文句を言わないでほしいってことです。反対に言えば、西月さんも天羽くんや私を憎んでもいいんです。きっと先生たちは、天羽くん『嫌いになるな！』というでしょうけれど、そんなことをしたらまた天羽くんは不安定な状態になってしまうでしょう。無理に大嫌いな相手に優しくしすぎて、かなり神経にもきちゃってるんじゃないかって思います。これ以上天羽くんが苦しむのを観るのは、こういっちゃなんですけども心苦しいので、そういうことだけを西月さんをお願いしたいと思ってます」

——『嫌う権利』勝手に口から出ちゃった。

思いつくものをすべて言い尽くした。目の前の「あの人」はじっと紡の口元を見つめていた。時折光っていたまなざしは部屋の中が暗くなると同時にすすけて見えなくなってきた。天羽くんだけがすっかり後頭部をかかえるようにしてうつむいている。紡は咽が渴いたので一気にジュース

スを飲み干した。

「では、そのことを他の人たちには言えますか？ 聞く人にとっては抵抗を覚える提案かもしれませんよ」

波のない言葉に、紡は数秒考えた後答えた。

「大丈夫です。クラスの人たちには別のやり方で伝えます」

「どのようにですか？」

「天羽くんにはまず、『縁故入学』に関することの説明と自覚を持ってもらうための演説をしてもらいます。最初のうちは女子たちあたりがぶうぶう言うでしょうけれど、そんなの相手にしたってばかばかしいので無視します。どうせ時間が立てばそれも普通になると思います」

「それから、『嫌う権利』は」

「あまり波風立てるのは私の趣味じゃありませんし、さっきのテープにも録音されていたように天羽くん、すでに西月さんへ何度も『嫌っていい』と言ってます。本人がそれを覚えているようでしたらそれで済んでます。わからない行動を取られたら、天羽くん本人に何度も言ってもらえればいいです。そこんところは私も関知しません。女子たちにはむしろ、片岡くんの問題ということで理解してもらったほうがいいです。片岡くんの『下着ドロ』事件は女子にとってどうしても受け入れられないことです。だからこそ女子にも『嫌う権利』を認めさせてあげることが必要だと思います。その代わりに、露骨に嫌いだというのではなく、表面上はきちんとクラスメートの行動を取ることを約束してもらうんです。何も隣の机になったら露骨に離すとか、給食を運ぶ時に片岡くんの席にだけじゃんけんで決めるとか、そういう行動は一切なくする代わりに、心の中ではいくら毒づいてもいいんだってことを伝えてほしいんです。本当だったら私がするべきところでしょうが、見事に嫌われてますから、別の機会にでも先生が話してくれればいいと思います」

「あの人」……狩野先生はゆっくりと頷いた。

「このことを行うとなると、一日、二日ではすみません。評議委員として時間をかけないといけないですよ。それでもいいですか、紡……近江さん」

迷わず答えた。

「かまいません」

「そうですか」

軽く咳払いをした後、狩野先生はもう一度ふたりの方を見た。かすかにめがねが光っていた。「ひとつだけ忘れないでいてほしいのは、おふたりが思っているより遥かに、傷ついている人がいるということです。わかりますか」

「傷ついている？」

やっぱり西月さんのことを反省させようとしているのだろうか。天羽くんは身動きしなかった。

「さっき、西月さんの様子を確認しました。想像以上に彼女は傷ついています。たぶん、おふたりが考えているよりもはるかに、です」「でもそれ以上に天羽くんは傷つけられてきたのに」

言いかけた紡を遮った。

「人の心の傷は、自分の心では計れないものです。だからひとつだけお願いしたいのは、明日以降西月さんがひと一倍傷ついた状態であることを忘れないでほしいのです」

——またうちの母さんみたく、「私ってかわいそうでしょ！」って泣いた真似するのよしよせん。

「天羽くんがどんなに努力しても、西月さんを好きになれなかったのは仕方ないことでしょう。人間誰しも好き嫌いがあります。あと一年ちょっとだけがまんしていつてくれるのだったら、僕は何も言いません。ただ、これだけは忘れないで下さい」

しつこくて、聞き流したかった。

「西月さんは僕たちが想像している以上に傷ついているということだけ、心に留めておいてください。その傷が癒えることだけを祈ってあげてください。どんな理由があろうとも、天羽くん、君の言葉で確実に西月さんは悲しんだと言うことを忘れないでください」

結局この人も、根は教師だってことらしい。味方じゃない。

帰り際、「あの人」は紡を呼び止めた。「紡ちゃん」と呼んだ。

「今夜、僕は家に帰れそうにないのでうちに泊まっていらっしやい」

「え？」

言っている意味が掴みかねた。かすかに微笑んでいた。「かの子ひとりだと無用心だから、紡ちゃんに居てもらったほうが助かります。かの子も淋しがってますよ。紡ちゃんが最近遊んでくれないとって。ほら、『アルベルチーナ』という喫茶店のケーキをまた食べに行きたいとか言ってますよ」

——お姉ちゃんがそう言ってるんだ！

言いたいことをしゃべり尽くした快感と、明日から続くであろう評議委員としての重たい仕事、天羽くんの落ち込み気分の伝染、などなど混じったへんてこな気分で紡はOKした。

「では、家に連絡しておきますね」

「どこか行くんですか」

——まさか浮気？

「かの子に変なことを言わないでくださいね。あの方は本気で心配しますから」

曖昧は返事をした後、駒方先生の名刺を渡してくれた。

「なにかがありましたら、駒方先生のところに電話を入れてください。すぐに僕に連絡してください」

——浮気だったらラッキーだったのに！

紡はこくっと頭を下げて、先に出た天羽くんを追いかけた。すでに廊下のところで元気回復している様子だった。後ろに手を回し、ピノキオみたいに歩いて見せた。

「近江ちゃん、さっきは、あの……ありがとござんす」

「無理しておちゃらけてても無駄。落ち込む時は落ち込んでれば」

「いやあのう、近江ちゃん、なんであんなこと、いきなり」

ここでうっかり、誤解されるとまずいので釘をさしておいた。

「前から言ってるでしょう。私の好みは女子専門だって。色恋沙汰のお付き合いは一切なし」

一日おいて次の日、紡は義兄が口にした言葉の意味を、初めて知ることになった。

——西月さんは僕たちが想像している以上に傷ついているということだけ、心に留めておいてください。

西月さんは、ものいう言葉を失っていた。



——お姉ちゃんお姉ちゃん、お母さんがおなか痛いって。どうしよう。

——すぐに救急車呼ぶから、ね、お母さん、しっかりして！

——お母さん、死んじゃうなんてやだあ！

——お母さんごめんなさい、私、私、結婚式にあんなわがまま言わなければよかった！

今から四年前の会話だった。

何度、何十回、母の名演技に騙されつづけたことだろう。腹痛もあれば激しい吐き気の時もあり、ふつうこんなところで折れないようなところでの骨折、めまいで病院に担ぎ込まれたこともあり。

紡もお姉ちゃんも何度も両手で手を握り締め叫んでいた。

「絶対いい子になるから、死なないで！」と。

自分たちの夢が費えるか母の欲しがるものを渡した瞬間、病は快方に向かう。

十四年間同じパターンの繰り返しを続けてきて、ようやく母の魂胆をすかして見抜くことができるようになった。似合わないフリルのブラウスも、やたらと子どもっぽいワンピースも、罪悪感なく拒絶するのも慣れた。要領よく必要な部分だけ掠め取るのは母と接する時の常識だった。

母と同じ魂胆を持った女とすれ違うたび、必ず危険信号が点滅する。

紡は席の向こう側にいる信号の発信主を眺め、つぶやいた。

——私は騙されないわよ。

評議委員会には定期的に参加し、清坂さんにいろいろ教えてもらいながらなんとか準備を整えた。いきなりやる気を出し始めた紡に、最初立村委員長も驚いていたらしいが、

「いや助かるよ。近江さんみたいに頭のいい人が手伝ってくれるとき。今日の帰り、よかったら清坂氏と一緒に帰るか？」

と、いとしの清坂さんを貸し出してくれた。やっぱりごほうびに何が欲しいかよくわかっていらっしやる。

せっかくのチャンスだ。逃しはしない。さっそく昨日は清坂さんと一緒に「アルベルチーヌ」まで出かけてきた。お小遣いはたいて特製モンブランと甘いカクテルをご馳走してきた。委員長もこんな甘い午後を清坂さんにプレゼントなんてしたことだろう。清坂さんは大喜びしてくれた。さらに、わらしべ長者のように展開してゆき、

「そういえば近江さん、修学旅行クラスの女子とグループになるのいやだって言ってたでしょ？  
だったら自由行動の時、うちのグループに入りなよ」

もちろん二つ返事でOKしたことは言うまでもない。

もっともふたりで過ごした二時間の間ケーキをぱくつきながら、立村委員長と羽飛くんに関する悩み……というか、のろけというか、三角関係の楽しさというか……を聞かされてひとり淋しさを感じなくもなかったのだが。

班分け、およびバス指定席、しおり作り、レクリエーション。やることは思っていたよりこまごまとしていた。でも三年目評議の天羽くんが手際よく仕切ってくれたのと、自分でもかなりときばき片付けられたこともあり、さほど苦労はしなかったように思う。クラスで紡たちが指示することといえば、健康管理に関する注意と「旅行のしおり」配布、旅行先に関する下調べ程度だった。楽だ、楽。

三泊四日。かなり修学旅行当日が楽しみの紡だった。

天羽くんと西月さんとの修羅場から一週間が経った。西月さんの取り巻き女子にさんざん吊るし上げられたものの、大抵は天羽くんの横入りで難を逃れた。本意ではないけれども、「担任の妹」という立場は生徒たちにとって強力な保護膜だった。コネ組A組だからなおさら、威力が増すというものだろう。とはいえ「あの人」狩野先生の

「評議委員として片をつけるのには、時間がかかりますよ」

と念を押した意味が、今になってずんと肩にのしかかってくる。

まずは「コネ組A組」たる現実をみなさんしっかりと見つめようということで、天羽くんの司会による提案を行い、男子たちからは圧倒的拍手で迎えられた。隠し事なくなって気が楽になるのはいい。みんな同じ悩みを抱えていたのだろう。ここまではよかった。

しかし問題は敵に回した女子たちだった。予想していたこととはいえ理由ひとつまともに受け止めず、「天羽サイテー！」コールには啞然とした。ちゃんと天羽くんなりにけじめをつけて、宗教に関するいろいろな事情を、教壇から告白したというのにだ。あくまでも個人的縁故入学の告白にとどまっているし、A組の連中は多かれ少なかれみな裏事情があるはずだ。人のことなんていえないくせに。天羽くんに発言を許した狩野先生にも、もちろん紡に対しても態度は露骨だった。一切女子たちの多くは……全く口を利かない西月さんは別として……数学の授業をさぼったり、天羽くんが通るとわざとらしくせきと悪口をささやいたりする。「下着ドロ」確定片岡くんと同じ扱いをされている。

修学旅行前にクラスががたがたになるなんて、担任としては心苦しいものがあっただろう。きっと痩せるだろう。お姉ちゃんも心配していた。この前泊りに行った時も、

「胃薬たくさん買わなくちゃ。あの人胃の調子よくないみたいなのよ」

そうぐちっていた。

天羽くんだって本当は毎日ハリネズミにひっつかれているような気持ちなんだろう。紡に見せる表情は明るいけれども、一、二年目の「おちゃらけ評議天羽くん」から、三年目「女子の敵・最低評議の天羽忠文」と罵られるのはかなりきついだろう。男子たちには早めに事情を説明したのでみな、表面上はうまくやっているようすだ。どんなに落ちてても片岡くん以下にはならないという読みもあったのだろう。

天羽くんは女子に対して、露骨に罵ったりはしなかった。紡をリンチにかけようとしている現場にいなければ、大抵の罵詈雑言は笑顔で流す余裕を持っていた。バラエティ番組の最新ネタは適度に使用し、野郎仲間を相手にがははと笑っている。「サイテー男」と聞こえよがしにささや

かれるたび、紡に流し目をやりながら、「ま、俺は女子といえはひとりでもかですたい」と、笑顔で交わしていた。

——意味のない方言使うのはどうかと思うけど。

やる気なしげに窓の外を眺めているのは、やっぱりいつもの紡だった。

もう夏服。襟元のリボンをわざと小さめに結び、パリっ子っぽく着こなしてみたりする。帰りにはさりげなくリボンの色を変えてみたりもする。

「ところで近江ちゃん、今日のところは暇？」

「なによまた寄席？ 出るのが若手の漫才師ばかりだったらやめとくわよ」

「いやそれがさ」

耳もとで、テレビにも良く出ている有名漫才コンビの名前をささやいてきた。

思いっきり大きい声で叫んでしまった。

「うそ、まじで青濁なんかにくるの？」

「チケット、少々お高いけれど、よろすおますか、おねえさん」

「もちろん買いよ。押えといて！」

紡はしっかり公演日時を手帳にメモした。まかり間違ってもこの日に予定を入れることはないようにせねば。最近の紡は、ビデオを駆使して演芸番組および漫才関係の情報を集めることに情熱を燃やしている。天羽くんの友だちたる仲間とも漫才のことで共通の話題ができたし、清坂さんも少しずつ洗脳していくきっかけにもなるし、いいこと尽くめってところだった。

ほっと一息つくと、紡は天羽くんに話し掛けた。髪がだいぶ伸びてきているようだった。そろそろバリカンでさっぱりしたいという。

「丸刈りにすると、運動部ばりって感じね」

「頭突きやりたくなりまーす」

天羽くんは壁に頭を打ち付ける振りをした。

「脳みそこれ以上ぶっこわれたらどうするのよ」

「まあそれはそれでいいっしょお。それよりさ」

傍目からみたら、ふたりとも公認のカップルに見えるのだろう。意識はしていた。天羽くんも麗しき誤解を楽しんでいるようだった。本当だったら紡も笑ってごまかしたいところなのだが。

「試用期間」はまだ延長中ってことだった。

西月さんの声が教室に響く瞬間を聞き逃さないようにしようと決めていた。

あの人がちょっと油断した隙に新たな展開が待っているかもしれないから。

——いつ、演技が乱れるのだろう。

つい半年前までぎんぎんホームルームでくだらない提案をしてしらせさせていた声が響かなくなりはや一ヶ月近く経とうとしていた。

「小春ちゃん、おはよ」

西月さんに対しては温かく包み込もうとしている女子たちの群れ。バリケードだった。自分よ

りも弱い人にはいくらでもやさしくできる、自分たちに得なことをしてくれればいくらでも応援する、そんな子たちばかりだった。

「泉州さん、小春ちゃんに聞いてくれる？ 席なんだけど私たちの後ろでいい？」

珍しく髪の毛を洗ってきたのだろう。前髪の分け目がそれほど目立たなかった。泉州さんが髪の毛をかきながら尋ねる。おかつ髪は西月さんは、小さく泉州さんに口を開けて意志を伝えているようだった。発声はしていなかった。

「小春ちゃん、どんどん楽しんじゃおうね！ 今度の『砂のマレイ』映画版、観に行く？」

母と同じように身体へ呪文をかけ、同情を引こうとする態度が紡には見え見えだった。

西月さんは指で何かを表すように形をこしらえ、泉州さんに見せた。西月さん専属の通訳者となった泉州さんは立ち上がり、何かを他の子に説明している。人気アニメ映画の話題で盛り上がっているらしい。漫才の話ではないので当然、紡にはわからない。

——一週間も、よく演じているわよね。

狩野先生が事情を考慮し、最初の二日間くらいは「E組」もとい、駒方先生の担当する部屋で自習させるようにしていたはずだった。詳しい事情は話さなかったものの、女子を中心にすぐ情報は伝わった。「西月さんが天羽くんと近江さんに嫌がらせをされて、恐怖のあまり口が利けなくなった」と広まり、先生も見過ごすわけにはいかなかったのだろう。すばやく天羽くんも手を打ってあったのでとりわけ何が起こったというわけでもない。紡がたまに嫌味を女子に言われる程度のことだ。「嫌がらせ」ではなく、「交際解消」の話し合いなのだという証拠は、カセットテープにも、マイクロテープにも残っている。堂々と開き直っていればいい。

しかし、西月さんは四日後A組に戻ってきた。たぶん本人の希望なのだろう。授業についていけなくなるのを恐れたのか、たとえ嫌われようとも天羽くんと同じ空間で過ごしたかったのか。その辺は定かではない。西月さんの望みならばということで、仲のよい女子たちおよび、二年の問題児・杉本さんがバリケードになって懸命に守っているようだった。女子の集団が机の周りにごちゃっとたかるたび、男子たちがどれだけ恐怖感を感じているか、知らないふりをしているらしい。特に天羽くんが、何度か近づこうとして話し掛けようとした時も、瞬時に泉州さんの「スキャンク攻撃」……別に屁をこいたわけではないのだけれども、黙っていても漂う独特の体臭はその名にふさわしいと思う……に逆襲され、すごすご退散した。

天羽くんも紡や仲間の男子たちと話す時以外、堂々とおちゃらけることは少なくなった。

いやおうなしに、西月さんの方を目で追い、時たま唇をぎゅっとかみ締める姿を何度か紡は目撃していた。

女子たちに罵られても、何を言われても、あえて言い返さずに通り過ぎる天羽くん。

——「E組」に行きっぱなしでいいのに。

天羽くんのことを本当に思っているならば、それが一番いい解決策なのだと、西月さんはなぜ気付かないのだろう。

——本当に鈍いのよ。最低だわ。

紡は二年の杉本さんという人のことを思い出した。西月さんが面倒を見てあげていたという問題児のことだった。休み時間、ちろちろとA組に顔を出すようになった。たぶん、西月さんを自分が面倒を見る、という意識を持つようになったのだろう。問題児同士、どっちもどっちである。

周りの女子たちに事情知られるのも時間の問題だと思っていた。もっとも本当だと認めたら、かの片岡くん下着ドロ事件と同じことになるだろう。のりりくらしと交わすのが一番。紡も適度にあしらっていた。

「近江さん、小春ちゃんに何を言ったのよ！ あんたって最低よね！」

ただ「サイテー！」と怒鳴るだけだ。もっと語彙を持っていないのか、君たち、もっと読書しなさいよと言いたくなる。返事するのもかったるい。

「私に関わっている証拠あるの？」

大抵天羽くんに割って入られる。ずいぶん目配り気配りしているものだ。ひとりで片づけられるのに。

面倒なことはやらせておいて、肩をすくめて大抵は終りだった。

西月さん本人もいろいろ考えるところがあるらしい。泉州さんたちがエキサイトしそうになると腕をひっぱって止めてくれた。ありがたいが感謝する気はさらさらない。

「小春ちゃんこんなじゃだめだよ！ 言いたいことあるんだっちははっきり言わなくちゃ！」

と泉州さんがわめいても首を振っていた。ただうつむいたまま、女子たちにいじらしげなまなざしを投げていた。ものをもっと言うべき相手の紡や天羽くんには一切目を合わせなかった。何度か苦しげなまなざしの天羽くんが近づいて来た時も、すぐに目をそらしうつむいたまま、顔を上げなかった。顔を見るのが相当、怖いらしい。別に取って食うわけでもないのにだ。

紡からすると、今までずいぶんふんぞり返ってわめきちらしてきた分だけ、ざまあみろというのが正直なところだった。むしろ天羽くんがやたらと自分を責めている様子がいらいらしてならない。天羽くんはちゃんと、言うべきことをちゃんと伝えただけなのだ。もちろんシュチュエーションにはいろいろ問題があったとはいえ、それでも懸命に西月さんを立てるように努力していた。少なくとも紡にはそう見えた。なのに結局は「ひどい振られ方をして傷ついた女子」の顔をして、周りの同情を集めている。二年間、天羽くんに不愉快なことばかり要求して嫌がられていたにもかかわらず、気付かないふりをして押し通していた西月さんである。結局世の中は、西月さんや母のような、「いざとなったら病気で同情を集める」タイプの女子のものなのだろう。狩野先生の言う通り、「人の心は自分の心では計れない」のだろう。狩野先生も天羽くんの心がどれだけ西月さんに踏みにじられていたか、計ることのできない人なのだろう。きっと紡の本心も計れない計りの持ち主なのだ。

——天羽くんには振られてから男子にはもてているからいいじゃないの。

やかましい女子評議から一転、言葉を失った西月さんには「守ってあげたい」と思う奴らが後を絶たない。あまりおおっぴらには聞いてないが、三年に入ってから他クラスからも恋文がじ

やんじゃん届いたとか届かないとか。親友の泉州さんが取り仕切り、さっさと追っ払っている。

まだ天羽くんに未練たらたらだから、せっかくの新しい恋のチャンスを受け取ることすらできないらしい。もったいないことをするものだ。身のほどを知れ、と言いたかった。このままだと、片岡くんの薔薇攻撃にひれ伏すはめになるかもしれないのに。下着ドロの彼女なんてことになったらどうするのだろう。今まで守ってくれた女子たちが、冷たい視線でそっぽを向くのは目に見えている。天羽くん以外にも好いてくれている相手がいるのだから、その辺さっさと妥協したらどうだろうか。

修学旅行準備でふたりっきりだった。放課後それぞれの評議委員が、自分たちの教室に残る時はこっそりとコンビニで買出しに行くのが習慣だった。天羽くんがおごってくれる時があれば、紡が出す時もあった。お互い懐はは淋しい。木戸銭貧乏ともいう。

「さってと、今日は何にするんだ？」

「私ねえ、やっぱり女の子らしく、ストロベリー味にしようかしらん」

「女の子ってだあれがだよ」

紡は自分の鼻を差して見せた。ひょい、と天羽くんがアイスクャンディー一本五十円の奴を摘み上げ、ほっぺたにぴたっと乗せた。

「つ、冷たいぞこれは！」

「これ俺な、これ食えば完璧、間接キスのできあがり！」

何をバカなことを、と突っ込みを入れながら紡は自分のキャンディーを選びレジに持っていきこうとした。聞き覚えのある声と、肩に手を置かれたのが同時だった。

「ちょっと、A組評議のおふたりさん、買い食いはいけないんじゃないですか」

しゃれで言えばたぶん軽く聞こえるだろう。だが、声の響きは重たく、おちゃらけていなかった。女子の声。ふたり同時に振り返った。

「なんか用？」

それしか言いようがなく、紡は手を振り払った。一日たっただいぶ油っぽくなった泉州さんの、ふけだらけの頭が目の前にあった。

「なんっすか、いったい」

泉州さんの前ではおちゃらけないようにしていた天羽くんだけ不意を食らって動揺したのだろう。少しももっていた。

「話があるんだけど」

「これから学校に戻ってしおり作るんだけど。別の場所でなくちゃだめなわけ？」

紡が聞き返すと、泉州さんは当たり前じゃないかとばかりに髪の毛をかき上げた。午後を過ぎると髪に油がじわっと浮いてきている。これは相当なふけ症と見た。

まずはレジで会計を済ませ、その場で大急ぎ、アイスクャンディーをなめた。かじったと言うほうが正しい。天羽くんも焦って飲み込んでいた。頭にきんと音が鳴った。頭痛がした。

先頭を切って歩き出した泉州さんを、適度な距離を置いた格好で追いかけた。これから戻らな

くてはならないことを考えると、あまり校舎から離れてほしくない。でも泉州さんの都合にあわせざるを得ない。無理だろう。本当だったらもっとあっさり振り切ってしまったのだけど、天羽くんは完璧に、言いなり状態だった。弱みを握られている、とでもいうのだろうか。

不安げに天羽くんは小声で耳もとにささやいた。

「近江ちゃん先に帰れよ。用があるのは俺だけだ」

「泉州さんの文句言いたい相手って、たぶん私よ。女子ってね、振った相手よりも、相手の女を恨むもんなんだって。相手じゃないって言ってもわかんないよね」

天羽くんは答えなかった。紡の髪を触れようとした。だいぶ伸びたので「セシルカット」ほどのたわし頭ではなくなった。

思ったよりも遠いところでなくてよかった。たどり着いたのは別のコンビニ前の駐車場だった。小型車が六台駐車できるスペース。三台置かれている。その脇に自転車が一台横付けされていた。天羽くんが「あれ、すげえいい自転車じゃん」とつぶやいた。

脇にひとり、白いワイシャツ姿でネクタイだけちゃんと締めた男子の姿が見えた。見覚えがあるようでない。なんとなくポーズがきざだった。

「片岡だな」

短く答えた天羽くんは、一度立ち止まるとぐいと顎を引いた。

「奴には殴られる義務があるんでな。ごめん、近江ちゃん先に教室に戻ってれ」

「一応私も担任の妹だから暴力沙汰は止める義務があるのよね」

泉州さんも片岡くんらしき男子へ軽く手を振り、顎で紡たちを差した。結局こいつらもグルなのかと納得した。

片岡くんの立ち姿は、見慣れた制服ながら隙が全くなかった。ブレザー制服をきちんと整えて着こなすところはどこか立村評議委員長にも似ている。違うのは顔の彫りが深く、ちょっと見日本人には珍しい雰囲気だろうか。和服よりもタキシードが似合うタイプだ。一見、「下着ドロ」の過去がある相手とは思えなかった。

「なんだよ、片岡かよ、なんか用か」

かすかに天羽くんは頬をほころばせた。少し安心している様子だった。もちろん用心はしているけれども泉州さんよりは親しみの持つことができる相手なのだろう。「下着ドロ告白」のホームルーム前後から、天羽くんは片岡くんを何かと気にかけていた。修学旅行のグループ分けの時も、さすがに自分の仲間内には入れなかったものの、他のクラスのグループに混ぜてもらえるよう口を利いてやっていた。少しでも片岡くんを、A組で居心地よくしてやろうとする行動は実に模範的評議委員のものだった。きっと片岡くん本人も、天羽くんには感謝していることだろう。なにせ、自分が好きで好きでならなかった女子をゆずってくれさえしたのだ。パシリになってもおかしくあるまい。

片岡くんは何も言わなかった。自転車の後ろにくくりつけていたかばんを外すと、何かを探していた。時折天羽くんの方をにらみすえるようにして、また中を漁った。

隣りで棒立ちしているのは泉州さんだった。この人も決して顔立ちが整ってないわけではないと思うのだが、せっかくのよさを不潔感でもって打ち消している。女を捨てた態度がもともと紡は好きになれなかった。

「片岡、あんたもとろいね。もっとてきぱきやないと立派な社長さんになれないよ」  
——いきなり仲良しになっちゃってどうしたってのよ。

泉州さんも告白事件後最初のうちは、西月さんを守るために片岡くんを目の仇にしていたはずだ。例の西月さん行方不明事件をきっかけに急接近し始めた。たぶんあの日の三時間目以降に展開が起こったのではないだろうか。女子たちの前でも平気で泉州さんは、片岡くんと話をするようになり、たまにふたり隅で内緒話をしたりしている。男子連中も片岡くんの事情は理解しているのであまりうるさいこと言わないが、女子はおぞけ立つ思いで見守っていたようだ。

あの日以来片岡くんは休み時間ずっと参考書にかじりつくようになった。昨日の英語抜き打ちテストでも、立村委員長に次ぐ二番の成績を収めたのは記憶に新しい。きっと一学期の通知表「行動記録欄」には「最近みるみる学業態度が変わり、積極的に勉学に励むようになりました」と記入されることだろう。

もっとも、そこで「下着ドロ」の汚名が晴れたわけでもなく、相変わらずみな冷たい態度を取っているのは定めだろう。ひとりでも話してくれる友だちができただけでも喜ばしいことではないか。紡には関係のないことだ。

烏が「かああ」と繰り返し鳴いた。泉州さんが片岡くんの肩ごしに覗き込んだ。

「見つかった？」  
「これ」

低く響く声で一言答え、片岡くんはカセットテープを取り出した。

見覚えのあるケースに入っていた。

隣りで天羽くんが息を呑むのが分かる。

——これって、あの時の、あのテープ？

紡はついと肘で天羽くんをつついた。なんとなく、天羽くんひとりがびびっているように思えた。きっといきなり出されたもんだから焦っているのだろう。でも別にまずくはないはずだ。すでに狩野先生にも聞かせて、さりげない嫌味だけ言われた程度ですんだし、今更片岡くんが持ち出してもどうしようもないはずだ。さらに言うなら、天羽くんは中身について、かなり言葉を選んでしゃべっている。ばれても問題が起こらないように、聞き間違えた西月さんが悪いと判断するはず。どことなくねめっちい。何かたくらんでいるとしか思えない片岡くんの瞳。悪寒を覚えた。

片岡くんは紡と天羽くんを一秒程度じとっと見つめた後、

「天羽、ここに録音されていたことは本当か？」

指でつまんだままずっと差し出した。嘘を言われたら殺す、言いたげだった。ふたりとも中身をしっかりと聞いたらしかった。

度胸ありげに胸を張り、天羽くんは答えた。無理にでもそうしないと、震えかけた肩がごまか



せそうになかったからだろう。隣の紡からは声が上ずっているのがよくわかる。

「ああ本当だよ。俺のうちにもう一本、マイクロテープで同じものを持っているんだ」

「予備にか」

念を押すように、カセットテープをぶらぶらさせた。

「一言も嘘は言っちゃいない」

棒読みの返事だが、かなり焦っていることには違いない。何も心苦しいことがないから、ちゃんと西月さんに渡したつもりだったろうに、天羽くんときたらかなり焦ってしまっている。背中をどんと押してやりたかった。

「開き直るんじゃないよ！ 小春ちゃん、口きけなくなっちゃったんだよ！」

「俺、その日のうちに狩野先生へマイクロテープバージョンを渡して聞いてもらったぜ。なんも問題ないって言われたんだ」

「さすが近江さんのお兄さんだよ。最低な担任だよ」

——ここで嘘を言ってしまったらろくでもないことになるってわかっているでしょ！

どう考えてもここで本音を言うのはいい結果にならないだろう。冗談言ってもかまわない雰囲気だったら思いっきり関西弁のつつこみをいれてやりたかった。

「うっかり聞き間違えられたら近江ちゃんに被害が及ぶと思ってさ」

肩をくいと上げて紡の方を見下ろすのはやめてほしかった。

「近江さんに被害ってどういうことよ！ 小春ちゃんが復讐しようとしているとでも思ったわけ。やっぱり後ろめたいって意識はあるわけね」

次の言葉は平手打ちの音に取って代わられた。

天羽くんが横をちらっと向いた。ひっぱたいたのは泉州さんの、真っ黒い爪の手だった。

「近江さんなんか今ごろ青渦川の中にどぎえもんになっているかもしれないのに、小春ちゃん一生懸命『絶対しないだね』、って筆談で話してるんだよ！」

「もし近江ちゃんに手出ししたら、って俺が口止めしておいたんだ」

——天羽くんってば、いったいなんでここまで墓穴掘るわけ、このぼけ！

ひっぱたかれようが罵られようが、天羽くんの口からは謝り文句が出てこなかった。

「あんた、そこまで根性腐っているんだったら、それなりに覚悟はあるんだろうね」

とうとう泉州さんがまんの緒が切れたらしい。両こぶしを握り締め、ぐいと一歩前に近づいた。臭そうだ。油くさくて吐きそうだ。天羽くんが息を止めているのがわかる。うっすらと夕陽の混ざった風もなかなか匂いを吹き飛ばしてくれなかった。顔を逸らしたまま今度は片岡くんに視線を向けた。天羽くんの眼は泉州さんに対してのみしかめつつらだったけれど、片岡くんには笑顔を向ける余裕があったらしかった。

「片岡、まだ西月をくどききってないんだろ？」

持っているカセットテープのケースを握り締め、片岡くんは三白眼のまなざしをで唇を振るわせた。黙っていれば古風な少年俳優として通用しそうな顔立ちだった。いい表情している。ぼんやり思った。

「最初、天羽、言ってたよな」

もれた言葉も震えていた。怒っているのかどうかも読み取りづらい。

「何をだよ」

「西月さんのためだと言っていただろう。そうじゃなかったのか」

やはり、天羽くんと片岡くんと間に、西月さん譲渡条約のようなものが結ばれたに違いない。そっと聞き耳を立てた。

「わざと冷たい行動を取って、西月さんが振ってもいいように演じて、決して傷つけないようにしたいからって言っていただろう？ 違ったのか」

鼻の下を人差し指でこすると、天羽くんはふっと笑った。

「片岡には嘘ついちゃったようで悪かったな」

「最初から西月さんを痛めつけるためだったのか」

「それだけは言いたくねかったけどな。普通のやり方じゃああきらめてくれねえからさ。最終兵器、使うしかなかったんだ。けど、これで西月もあきらめてくれるだろうなあ」

口をガムテープでふさいでやりたくなってきた。片岡くんと差しで話をするのならば理を尽くすこともできるけれど、目の前には感情生物の泉州さんがいる。

片岡くんは立ち上がった。のどぼとけが何度か上下した。必死に平静を装っている風だった。少し泣きそうになりつつも、何かを飲み下して落ち着かせているようだった。

「最初から嫌いだったって本当なのか」

「初対面からな」

「宗教の修行のためだったってのも、本当か？」

「自分の目標を少しずつ達成していけば、死んでから天国に入ることができるってガキの頃から叩き込まれていたんだ。今じゃあお笑いだけだな」

「近江さんが好きになったから、心変わりした、申しわけないけどって、僕には話してくれただろう」

「一番の理由だ、嘘はついちゃあいない」

照れる場所で言われたら別だけど、こんなところでどきまきしてられない。

——天羽くんとことん墓穴掘りまくってるよ。

「傷つけて平気だったのか。テープではあんなに泣いていたんだらう。天羽に嫌われないためだったらなんでもするって話していたのに、それでも嫌いになるしかできなかったのか」

紡の方を天羽くんはちらっと見た。目の端から涙ではない光りを感じた。

「言葉の綾だ。勘弁な」

「だったらなんで」

静かながらも、震える声で片岡くんはにらみすえた。紡とひとまとめにして、目がぶっこわれるくらいに。咽の奥からは泣いた時に出るような細かい音が何度か聞こえた。

「一年だけだろ、それくらいどうして騙してやれなかったんだよ。二年の半ばって言ってただろう？ 半年間がまんしてたんだったら、どうしてあと一年、夢を見させてあげられなかったんだよ。ひどすぎるよ」

すっかり声変わりしているというのに、言葉の幼さに紡は啞然としつつ片岡くんを眺めていた

。時折涙ぐむしぐさをして、指先のカセットテープを何度も振る。どのくらい聞き返したのだろうか。西月さんの半ばヒステリックな物言いに不快感を感じなかったのだろうか。それでも想いは冷めなかったのだろうか。それが紡には不思議だった。そばでうんうんと頷いている泉州さんも、片岡くんの想いを認めているのだろう。しかしなぜ、そこまで恋しているのだったら、あっさり天羽くんから奪い取ろうとしないのだろうか。やはり頭の悪い人はやることがわからない。

「片岡、お前もわかってないなあ」

陰悪な雰囲気をかもし出しているというのに天羽くんの口調は穏やかだった。

西月さんに関する事だけ容赦なくののしるのは、一滴の希望も断ち切るための意地だろう。一種の思いやりを決まっている。紡には天羽くんがわかる。

「片岡、お前は二年間ずっと西月以外の女子に目なんてくれなかったよなあ。西月もずっと二年間、お前には毎朝挨拶をして手を振ってやってた。そんな中、好きでもねえ俺があいつと付き合うっていうこと自体、不自然なことだったんだぞ」

片岡くんが唇をさらに震わせ、言葉をかみ締めていた。妙にこっけいだった。売れない芸人のしらけたギャグに似たものがあった。

「西月さんに謝ってくれよ、天羽」

う、う、と何度かうめくような声を出し、片岡くんが小さく首を振った。

「僕みたいな奴が近づいたって、西月さんは嫌がるだけだ。天羽でなくちゃだめなんだ」

「俺の言ったことは嘘じゃない。死んだって認めねえよ」

「責任あるだろ！ 口利けなくなったんだ！」

天羽くんの襟元を掴もうとした。全く抵抗しようとはせず、ふら付いて両手を付きかけた天羽くんに驚いたのか、ひょこっと手を引いた。背中で

「片岡、あんたなに引いてるのよ。ばか」

と罵る泉州さんにそのままうなだれた。

——なんであんな優しい目、してるんだろう。天羽くん。

隣りで紡は、天羽くんの言葉を待った。西月さんに対して発した言葉よりもはるかにやわらかく、暖かった。

「片岡、お前は偉えよ。よく言ったな。嘘じゃねえよ。いろいろあったにせよ、俺あん時は感動した。自分のやらかしたことをきちんとけじめつけてから、西月を守りたいってことなんだよな。わかるぜ。お前、ほんとに本気だったんだなって思った。だったらそれでいいじゃねえか。俺にはあいつを嫌いになる権利があるけれどもいじめる権利はない。きちんと、筋は通したってことだ。あとはお前に任せて去るぜ」

違うだろ、と口の中でつぶやいていた。片岡くんは懸命だった。

「それは勝手な言い分だろう。天羽しか西月さんは見てないんだって。僕には何もできないん

だよ。僕とそんなことになったら、西月さんはもう馬鹿にされてしまうって分かっているって、そのくらいわかっている。だから、だから」

「馬鹿野郎！」

天羽くんが思いっきり片岡くんの頭をこづいた。今度は片岡くんがふらつく番だった。やり返してもいいのに片岡くんは目を丸くしたまま動かずにいた。

「お前、西月のことを本気で惚れてるだろ。俺も二年間お前と西月を見てきて、きっとお似合いだろうって思った。ほんとのこと言うと、俺も去年の夏あたりから一刻も早く縁を切ってしまったかったんだ。けど、俺がさんざん気を持たせてきた以上、責任持って西月が惨めにならない形で後釜用意しようと思った。片岡、お前だったらあいつの欲しがる薔薇も毎日持っていける、ビーズの指輪も作ってやれるさ。いつもひっついてつまらんぬいぐるみとか見て喜んでやれるさ。意味不明な言葉をぐちられても優しくしてやれる。なによりも、俺のしゃべったテープの内容と、西月の泣き喚いた様子を聴いても、全然気持ちを変えないでいられるのは、片岡、お前しかいない」

——天羽くんってば、私と同じこと考えている。

だんだん何かが重なってきたのを感じた。天羽くんの言葉はしばしに、紡と重なるものの言い合い。

泉州さんが口をまんまるく開けた。口が臭い。胃が悪いんだろうか。

「嫌う奴なんて、いるのかよ」

片岡くんは首を振った。唇をかみ締めると顔をかすかにゆがめた。いい男風の表情に決まっている。醜くはなかった。

「あんなに精一杯お前のこと好きだって言われて、どうしてあんなひどい言い方できたんだよ。西月さんかわいそうすぎるよ」

「そうだよ、天羽、あんた血が通っていない冷血人間だよ！」

——問題はそれを言って伝わる相手と伝わらない相手がいるってことよ。

肩をすくめて軽蔑のポーズを取るかと思ったが、片岡くんには天羽くん、真面目に話していた。それが紡には意外だった。片岡くんを見上げるようにし、大きく深呼吸をした。

「いいか片岡、西月にお前、なに引け目感じてるんだよ。もうあいつは評議でもないし、E組送りの扱いをされている単なる女子だ。ちゃんとクラスの連中に頭を下げた片岡がびくつく必要なんてないんだ。レベルが合わないとか言って馬鹿にする女子連中の悪口なんて無視しろ。『世界でお前なんかを好きになれるのは俺だけだ』って、俺様気分で奪ってやれ。はっきり言って俺は、西月なんかに片岡はもったいないと思っている。片岡、お前は十分自信持っていていい男なんだ。わかったか」

目の前にいる黒い爪の持ち主、泉州さんの逆襲を待った。始まった。

「筋なんか通してないじゃないのよ！」

わきがなんだろうか。脇の間からすっぱいにおいを漂わせるのは止めて欲しかった。

「小春ちゃん今でも、毎日、奇跡が起こるんじゃないかっておまじないしてるような子なんだよ

。ペアリングの指輪ビーズでこしらえて待っているんだよ。そんな姿見ていたら、いくら片岡が小春ちゃんのこと好きだって、手を出しようないじゃないのさ。小春ちゃんあんなの写真ばかり見ているんだよ。ほら、『奇岩城』の台本を」

「あれ俺、生ごみと一緒に処分した」

汗と油のにおい。目の前にはえたいの知れないまなざしの二人。

吐き気がこみ上げてくる。口を抑えたかった。つばを飲み込みこらえた。ハンカチを取り出し、口を抑え、かすかな石鹼のにおいで正気を保った。

「謝りなさいよ！ 小春ちゃんの前で土下座して謝りなさいよ！」

紡の目の前で天羽くんは襟首を捕まれて突き飛ばされていた。倒れはしなかったがふら付いた。反抗しようとしなかった。

——結局おふたりとも、何をしたいわけ？

紡は天羽くんの側に寄り添った。一步前を出た。懸命に止める片岡くんと、腕をぶんぶん振り回すだけの泉州さんを見下ろした。天羽くんの前に立ちはだかった。

「聞きたいんだけど、結局天羽くんは何をすればいいわけ？ 話聞いている限りだと、片岡くんが言うには西月さんとよりを戻してもらいたいみたいだし。泉州さんは天羽くんに土下座してもらいたいみたいだし。今の見ていたら、ただ単に天羽くんをどつきまわしたいだけみたいだし。支離滅裂で何がなんだかわかんないのよね」

「近江ちゃん」

横目でにらんで黙らせた。

「結局どうしたいかがわからないから、こちらとしても対処のしようがないのよ。天羽くんの言い分は、片岡くんをA組の人間として受け入れてあげたいってことでしょう。西月さんが好きだったらフリーにしてあげて堂々と口説きなさい、ってアドバイスしてあげただけよ。もちろん西月さんはまだ天羽くんに未練あるみたいだからそう簡単にはいかないけど、泉州さん」

できるだけ顔を背けたかった。

「本当は、西月さんと片岡くんを応援していたんじゃないの？ 写生の授業が終わってから二人で探しに行ったんじゃないの。だって天羽くん、このテープに録音されているように、もともと西月さんのことが大嫌いで、これ以上嫌いにならないよう努力している真っ最中なんだから、親友だったらそんな相手と一緒にいて欲しくないでしょう」

「ふざけないでよ！ あんた、人の彼氏取っておいて」

「彼氏だと思い込んでいたのは西月さんひとりだけでしょ」

咽元まででかかった言葉を飲み込んだ。

「天羽くんだって人間だから、どんなに努力したって嫌いって気持ちがあふれ出たこと多いと思うのよ。私、その辺はよくわからないけれど、嫌がられているって気持ちを感じられないほど鈍い西月さんに一番の問題があると思うんだけどどうかしら。西月さんがもし、早い段階で天羽くんのことを見限っているか、同じ評議仲間としてだけ割り切って付き合えればきっと、細く長いお付き合いができたし、天羽くんももしかしたらクラスメートのひとりとして受け入れてあげ

たか もしれないわよ」

「口先だけで言うんじゃない！ 小春ちゃん一生懸命だったのに。天羽のこと一筋に考えて必死に尽くしてきて、それで」

「悪いけど、尽くすとか一生懸命とか、嫌いな相手にとっては拷問なのよ」

紡は見据えた。かすかに漂う臭気の中、汚いエプロン姿の母が浮かんで消えた。

片岡くんだけがうつむいたままこぶしを握り締めている。

「でも、西月さんの鈍感を責めたってどうしようもないわね。それより目的はもう決まっているでしょ。一本に絞ったらいいんじゃないの。天羽くんは西月さんと縁を切りたい、片岡くんは西月さんのことが大好き、ってことは簡単よ。西月さんが片岡くんと付き合う気になるよう、説得すればいいのよ。できるよね、泉州さん」

激昂した泉州さんの手が紡の襟元に飛んだ。真っ黒い爪垢が目の前にちらりと掠めた。さっき食べたアイスクリームが胃から逆流しそうだった。しゃべれば新鮮な空気が入ってきて楽になる。紡は身をかわした。

「あんた何様のつもりよ！ たかが担任の妹だからって。あんただって所詮コネのくせに！」

「恥ずかしいこと？ 天羽くんも話していたでしょ。A組は縁故入学のクラスだって」

冷たく言い返した。すぐに反論が帰ってこない。すかさず突いた。

「泉州さん、もしかしてとっくに試してみたの？ 西月さん、説得できなかったの？」

ビンゴだ。

紡はかすかに唇へ笑みを浮かべてみた。軽蔑しきった、よくフランス映画に登場する男性があきれた表情に浮かべるものと同じ。伝わらなかつたらしく、泉州さんは体臭と熱気をごったまぜにしてさらに接近した。紡は冷静に交わし続けるのみだった。

「私なら簡単に説得する自信、あるわ。ためしてみる？ 修学旅行までにはちゃんと答えを出してあげる」

「あんた、小春ちゃんをここまで馬鹿にして楽しいわけなの？」

「あきれてはいるけれど、楽しくはないわ。でも、できれば修学旅行の前にけりをつけたいのよ。天羽くんもそうだし、片岡くんも、私も、ほら、泉州さんだって本当はそうしたいんですよ。担任の妹としても、やる気なしなしの評議委員としても、やはりこの状況は心苦しいものがあるもの。まかせてもらえる？ 決して悪いようにはしないわ」

もう言葉なんて泉州さんには届かなかった。襟元を捕まれた。天羽くんが、

「やめろ！ 近江ちゃんに手を出すな！」

と怒鳴りながら背中を抱えてくれたが間に合わなかった。爪で頬に、猫のひっかき傷のようなものが残った。ひりひりする痛みよりも、泉州さんの指に頬が触れてしまったことが何よりも気持ち悪かった。片岡くんが泉州さんの肩を両手で押さえて、

「だめだよ、暴力はよくない、泉州さん」

とわめいているのをのを、紡は天羽くんの胸から眺めていた。自然、抱き合うような格好を取ら

ざるを得なかった。白いシャツから伝わってくるものは男子くさかったけれど、泉州さんの体臭にくらべたらはるかにましだった。

「近江ちゃん、もういい、いいよ」

小さな声が、ぴくんと突き出たのどぼとけから聞こえた。男子の生臭さがいっぱいなのに、なぜか落ち着いていく自分がわからなかった。胸の中にもたれたまま少し口を覆い、体勢を立て直した。こくっと頷くだけにとどめた。天羽くんは離してくれなかった。さらに力をこめてくる。ふたり相手の言葉なのだろう。言葉が震えて聞こえた。

「わかった。西月には俺の方からきちんと謝る。けど、ひとつだけ頼むな」

「また条件つけるわけね」

鼻で笑うような口調の泉州さん。声を聞いているだけで、胃がひっくり返りそうだった。

「近江ちゃんにだけは一切、手を出さないでくれ」

——天羽くん、あんた謝る必要なんてないよ。なんでそんなことするわけ！

——ちゃんと西月さんの前で天羽くんは、理由を説明したじゃないの。

——「あの人」だって、テープ聞いて何も言わなかったじゃないの。

——西月さんは逃げてるだけなのよ。天羽くんにふさわしくないレベルの自分だってことを、絶対に認めたくないだけなんだから。だから私たちが嫌いになることすら怖くて、それで同情を引こうとしているだけなんだから。

——わかる？ 天羽くんならわかっているはずよ。

——あんな女に謝るってことはね、お母さんに謝れっていうのと同じことなのよ！

——ああいう人たちってね、自分が欲しいものを手に入れるためには、自分が具合悪くなったりすることくらい、お茶の子さいさいなのよ。私にはわかるもん、お姉ちゃんだってその犠牲になったんだから。西月さんなんかには謝ったら、だめになるよ。なにもかも。

混乱してきた自分のことば。顔を無意識のうちに天羽くんへ押し付けていた。たぶん不自然に甘えて泣いているように思われたかもしれない。そんなのどうでもよかった。天羽くんに言いたいの、言葉が胸の中を駆け巡るだけ。だから必死に顔を押し付けた。そうすればきっと、心臓の音と一緒に紡の言いたいことがみな、伝わりそうな気がしたからだった。お姉ちゃんの腕に抱きしめられて、言葉のない思いをなんど伝えたことだろう。大好きなお姉ちゃんにいつもだったら叫びたい言葉。それを今の紡は、天羽くんには伝えたかった。母に泣き落とされ、いつもあきらめていたお姉ちゃんと同じになってほしくない。

——天羽くんには、西月さんに負けてほしくなんかないんだから！

わめき散らしている泉州さんの声と、懸命になだめている片岡くんの男っぽい声を背中で聞いた。天羽くんがさらに言葉を重ねて、

「実言うと、今度の土曜にな。評議委員会の『弾劾裁判』受けることになってるんだ」

「弾劾？」

片岡くと泉州さんの言葉が同時だった。

「そ。弾劾なんだ。うちの委員長から呼び出しくらった。おまえさんたちが聞いたこのテープ、聞かせて事情を説明したんだけどな。うちの委員長そういうところ潔癖な奴だから、『弾劾』に回すってすげえ激怒しやがったんだ。俺も最初は頭来たけど、そうだよな。当然だよ。俺、西月を人間としてやっちゃいけないところまで傷つけてしまったんだ。どういう結論になるかわかんねえけど、俺は俺なりにきちんとけじめをつける。いつか、西月がふつうにしゃべることができるようになるまで、とことん償いたいと思ってる。許してもらいたいなんて思ってねえよ。お前らも殴りたいとか、文句言いたいっていうならそのまま受けるから」

絶句したのは紡も一緒だった。

そんな話、聞いていなかった。青大附中の制度、「弾劾裁判」に天羽くんがかけられるなんて。

——なんで天羽くん、自分の言いたいことを必死に伝えただけなのに、ああいう同情を買うような女子にさんざん痛めつけられなくちゃいけないわけ？

「ふうん、『弾劾』ね。そんなんで一発殴られて、それで終りなんてことなんて甘いこと考えるんじゃないよ。そんなことで小春ちゃんが許してくれるなんて、勝手な言い分だよ」

「許してくれなんて言わねえよ」

不承不承ながら泉州さんも納得したらしい。両腕を後ろへぐるんぐるんと回した。また悪臭が広がる。紡は顔を上げた。泣いてはいないが、たぶんべそかいている風に見えただろう。片岡くんは嗅覚がもともとおかしい奴らしく、全く平気のへいざで泉州さんへ、

「行こうよ」

とささやいていた。たぶんあいつなら、バキュームカーの汲み取り現場にいても、つらっとした顔しつづけるだろう。

「じゃあ、今言ったこと、天羽、覚えときなよ。忘れたとは言わせないからね！」

思わずふけのドアップを見てしまい、また吐き気がこみ上げてきた。

「ああ、約束する」

じゃあ、と泉州さんは片岡くんに顎で合図をした。行こうか、ってことだろうか。

片岡くんはもう一度紡と天羽くんを眺めた後、

「一度でも、西月さんに、あの、そうしてやったこと、あったのか」

文節を区切り、尋ねてきた。天羽くんはふいっと鼻の穴を天に向けた。

「今度お前がしてやることだろう。がんばれよ、片岡」

二人は遠ざかっていった。自然と汗ばんだ匂いもかすれていったようだった。自転車を押していく羽音めいたものが遠くにひばられ消えていった。

天羽くんは身体から紡の頭を離してくれなかった。指先が汗ばんでいるのか、すべり悪かった。顔を見上げると、ちっちゃめに頬をほころばせた。目が合った後、ごくんとつばを飲み込んだ。



。

「俺、西月にきちんと謝るよ」

「そんなこと、あんたする必要ないって言ってるでしょ。それになによ。『弾劾』って。テープ、委員長に聞かせたらそんな勘違いした返事されたわけ？ それっておかしいわよ。そんなの出る必要なんであるのよ」

恨みがましく言ってしまったのが恥ずかしくて、紡は顔を伏せた。すぐにいつもの調子に戻したかった。また目が合った。

天羽くんには似合わない、俳優めいたしぐさで首を振った。

「わかってもらえねえようだったら何度でも。分かってもらえるまでどこまでも話すから、。まずは『弾劾裁判』だなあ。覚悟はしてたんだ」

「わからない人にわかるように説明しただけなのに、なんでそんなに責められなくちゃいけないのよ！ いつもそうなんだから。やりたいことやろうとするたび、かならずあんなふう泣いて泣いて泣いて、泣き落とすのがあの手の人たちの癖なのよ。天羽くん負けないでよ。あんな人たちに負けたら、許さないから」

傍目から見たらラブロマンスの現場だろうが、今の紡にはそれどころではなかった。明日中にけりをつけるための計画を、天羽くんの白いワイシャツの上で描いていた。

「近江ちゃん俺の胸にどーんと飛び込んできなさい」

知ってか知らずか、天羽くんは脳天気な言葉を口にしながら、また紡の頭に手を当てた。

——「弾劾裁判」なんて、本当の意味と違うのに、いったい立村委員長も何考えているんだろう。

——面倒なのはこれからよ、全く手間のかかる男子なんだから、天羽くんってば。

——西月さんには、ほんの一言言うだけですむのに。なんでこんなに面倒なわけ？

「まだ試用期間中なんだからね」

紡はしばらく天羽くんのしたいようにさせておいた。

「天羽、来ないな。どうしたんだろう」

教卓に片手をつけて、立村評議委員長が何度も廊下側の扉を眺めた。あと一週間で六月だ。そして一週間後は修学旅行だ。だいぶむしむししてきた教室だけど、今日は戸を締め切ったままだった。窓だけが空いているけれども、天羽くんが到着した段階でそっちも締めるだろう。暑くはないけど、汗臭くなりそうだ。

「今日やる、って言うておいたんでしょ」

清坂さんが真向かいの席で小首をかしげて、委員長を見上げた。三年D組の教室にいるのは、立村委員長と清坂さん、そして紡の三人だけだった。土曜の放課後ということもあり、午後から部活の練習がある奴ら、委員会関連で忙しい奴ら、生徒会関連で駆けずり回っている奴ら、それぞれがうろついているはずだった。

「天羽くん、ちゃんと今日来るからって言うてたけど。それにしても清坂さん、今日のブローチ、可愛いわね」

紡は襟元のリボン型ブローチを指差し、触れてみた。いきなりだと怒る子もいるけれど、清坂さんは嬉しそうに笑って肩を近づけてくれた。もっと触っていいよ、の合図らしい。

「これね、この前誕生日に貰ったの」

「委員長に？」

目の前に相手がいるのはまずいかと思ったけれど、言ってしまった。頬を赤らめるかと思いきや、あっさり否定する立村委員長。

「違うよ。清坂氏、これ、確か羽飛と古川さんが一緒に買った奴だろ」

「ど、どうして知ってるのよ！」

「選んだところ、俺、一緒に見ていたから」

何にも考えていない表情の立村委員長。彼氏から貰ったものではないらしい。清坂さんが慌ててブローチを握り締めるしぐさをした。

「あ、あのね、近江さん。ほら、友だち同士でよくプレゼントしあうのよ。男子女子関係なく、ね。こういうのいいな、って何気なく言うておくと、女子の友だちがチェックしてくれるのってあるじゃない。ね、それよそれ」

——私だったら、指輪をあげたいのにな。

心にささやく声を聞きながら、紡は肩をすくめて見せた。

「ちなみに委員長は何くれたの」

「何も、何もくれないよね、というか貰う必要ないよね」

「赤い巾着、あれ、やはり気に入らなかったか？」

——赤い巾着ってなによなに！

全く、青大附中評議委員会のベストカップルにあてられるわが身が呪わしい。本当は今、こんな脳天気な話をしている場合ではない。おふたりさんだってその辺はわかっているだろう。天羽くんが現れるまでの間だけ、おちゃめなおしゃれ話に現を抜かしていられるのだと紡もよく理解

している。でも、一秒でもいいから先に伸ばしたい、というのも本音だ。紡もこれから何が行われるのか分かっている。天羽くんも覚悟しているはずだ。

「近江さん、ねえねえ、天羽くんには何か貰ったことあるの？」

「一応、こういうもの」

かばんにはラピス色のピルケース。交際申し込みの際にいただいたのはビーズの白い指輪。壊れそうなので自分の指にはめた事はない。一応、試用期間中という証でもある。

「うわ、可愛いなあ。ね、立村くんこれこれ」

「こういうのが清坂氏も好きなのか」

清坂さんに尋ねる立村委員長の顔は、少し疑問ありげだった。たぶん立村委員長のことだから、それなりにおしゃれなもの、高級なもの、和風なものを検討し選んだのだろう。でも、本当に女子が喜ぶものってちょっと安っぽいけどきらきらして可愛いものだろう。清坂さんならビーズアクセサリー、きっと好きはずだ。帰りに本屋へ寄って、ビーズアクセサリーの作り方の本を買っていこう。そして、清坂さんとペアリング作ってあげちゃおう。

——天羽くんからもらった、指輪、か。

——覚悟はできてるよね、天羽くん。

延ばしたくても延ばせない現実が近づいてきている。

紡はピルケースをしまい込み、腕時計を覗き込んだ。しぐさに何かを感じてか、立村委員長も清坂さんも黙り、顔を見合わせた。もう一度扉の方を眺めた。

「ほんとに、遅いな天羽。あのさ、近江さん」

思い切ったように、立村評議委員長が紡にかがむような格好で尋ねた。

「A組で天羽、相当立場きついところにきているんだろう。狩野先生どうしてやってるんだろうな」

「別に、私にはあまり関係ないから知らないけど」

そういえば、と思い返してみた。「あの人」もここ二週間ほど、修学旅行準備に重ねて、西月さんの問題であちらこちら走り回っている。お姉ちゃんも口には出さないけれど、ふたりっきりのこともご無沙汰らしい。お姉ちゃんをさっさと離婚させたい紡としては望ましいことだが、いきなり「あの人」に倒れられると評議委員としての自分も困る。お姉ちゃんが「あの人」の看病ごときで老けた顔になられてもいやだ。

「毎日西月さんの家に連絡入れたりしているみたいだけど、天羽くんはひとりでも平気だし、そのまま投げたまんまでもかまわないと思っているんじゃないかしら」

「そうだよな。まずは、西月さんのことが第一だよな」

独り言っぽく立村くんがつぶやいた。

「近江さんにはとぼっちりだったよね」

ちゃんと気を遣ってくれる清坂さん。

「しょうがないわ、もともと、私こういう性格だから敵作らずにはられないみたい」

——いいのよ。清坂さんさえこうしていられば。

せっかく見つめあって微笑みかけたのに、清坂さんの瞳は扉をまた眺めている立村委員長の

元へ向かっていた。いつもそうだ。結局そうだ。悔しい。

——叶わぬ恋、かあ。

紡はため息をついた。きつとこのふたり、紡がふさぎ込みたくなる理由を勘違いしている。天羽くんと西月さんとのことで、心痛めていると思っている。もしかしたら西月さんに対して同情していると思っ込んでいるのかもしれない。違ふ、それだけはない。どんなに西月さんがこれから自分を「悲劇のヒロイン」に仕立て上げようとも、「母」と同じシグナルを点滅させている彼女に同情することなんてない。

——いいかげん、あきらめりゃあいいのよ。

ちょっと寂しげにうつむいて、また委員長に話し掛けようとする清坂さんが妙にいじらしくて、紡はもういちど小さく「ほっ」とつぶやいた。

来ない。あまりにも遅い。清坂さんと二人でいられる分にはかまわないけれども、思いっきり気の進まない予定を消化しないといけない。張本人の天羽くんが現れないと話にならない。十五分も経ってしまった。ふたり、さっき一緒に大学の学食で冷麺を食べてきたらしくその話で時間をつぶしていたけど、腹ごなしが終わったらしくまた扉を眺める。

「天羽、日にち間違えてるなんてことないよな」

「大丈夫。今日確認したもの」

紡は断言した。今日の四時間目が終り、掃除当番だった天羽くんに一言、

「例のことだけど、私、清坂さんと三Dで待ってるから」

と伝えておいたのだ。天羽くんからは無理にからっとした声で、

「近江ちゃんがいるなら百人馬力だあ！　じゃあ俺も用事終わらせてから行くから。立村から彼女取るんじゃねえよ」

非常に鋭い言葉を投げかけられた。さすが、伊達に付き合っているわけじゃない。

立村委員長はもう一度、清坂さんと顔を見合わせてうなづきあった。

「じゃあ、忘れるわけではないしな」

「まさかと思うけど、用事思い出したんじゃないかなあ」

暗に、「逃げたのでは」という意味が籠っている清坂さんの言葉。本当の彼氏に対して言われたことだったら「失礼な！」と言いたくなるのだろうが、「かもね」と思ってしまうのは紡が意識下で天羽くんを信用していないからなのだろうか。

「いや、それはないよ。天羽、約束守る奴だよ。先生に捕まって説教されているのか、かな」

教壇から降りて、もう一度腕時計を覗き込む立村委員長。もう一時四十五分だ。最初の予定は一時半だったはずだ。

「教室間違えたのかもしれないし、ちょっと見てくるよ」

——わあい、清坂さんとふたりきり。

万歳三唱したいところをがまんして見送った。相変わらず、委員長の肩幅は狭く、細い。エビぞりしたら一気にぽきんと折れそうだ、どこかの誰かさんにそっくりだと思った。

「近江さん、今日のこと、心配じゃない？」

ふたりっきりになったところで、清坂さんが紡の方に身体を向けた。ちゃんと足を揃えて、手を膝の上で重ねたままにした。

「別に、私とは直接関係ないし」

「でも、天羽くんのことだから、不安、だよな」

——清坂さんのことだったら心配になるかもしれないけど。

きれいに伸びたおかつ髪が可愛い。修学旅行前にはもう一度美容院でおしゃれに決めてきたいと話してくれていた。修学旅行の自由行動グループには清坂さんと同じところに入れてもらうことになっている。あまり乗り気しなかった修学旅行だけれども、恋する彼女がいればなんてことはなかった。

でも、口には出せない思いなのだとわかっていた。

決してお互い、重なり合えない感情なんだとも。

どんなに紡が求めても、清坂さんの返してくれるものは生身そのものではない。

——やっぱり、私はもう天羽くんと付き合ってるってことなんだろうなあ。

あきらめの気分で紡は答えた。一応、相方ということにしておく。

「委員長は、『弾劾裁判』っていうのをしょっちゅうやっているの？」

一番聞きたかったことはそれだった。青大附中の生徒はみな知っていて、大人には決して話さない秘密の自浄機能。『弾劾裁判』。

『弾劾』を辞書で引くと、「公の責任ある地位にある人の冒した不正の事実を暴露して責任を追及すること」（新明解国語辞典より引用）であって、これから行われるものとはかなりずれているように思う。青大附中における『弾劾』とは、

「クラス・委員会などで委員に属する生徒が不祥事を起こした場合、その生徒が属する委員会の長により詳しい事情聴取を行い、その上で『生徒の行動範囲内』において刑罰を与える」

というものらしい。文書として残っているわけではない。代々の先輩から口伝えだからなおさら解釈が曖昧だ。

「刑罰」って何？

「生徒の行動範囲内」って何？

理解不能だった。要は西月さんを口利けないくらい傷つけた天羽くんを、評議委員長が事情を聞き、その上で何をすればいいかを忠告する、といった程度のものだろうか。西月さんの精神的打撃が目に見える形であらわれた以上、立村委員長も行動を起こさないわけにはいかなかっただろう。なによりも、三年の女子ふたり……清坂さんを除いた三年女子評議……が立村委員長にやいのやいのと突き上げたという事情も絡んでいる。もちろん立村委員長の性格上、西月さんの気持ちを思い遣った拳句の憤りも混じっているかもしれない。その辺は仕方ないことだ。天羽くんも覚悟はしているはずだ。

ただ、天羽くんと委員長との間には食い違いがあるようにも感じる。というのも、天羽くんははっきり「裁判」だと断言していたのに対し、立村委員長は「今日は詳しい話を聞きたいだけ」と認識していたようすだった。裁判となったら、西月さんからも詳しい事情を聞かねばならな

いだろうし、今の状態で冷静に対話が成り立つとも思えない。

なによりも、他の評議委員が誰も来ていないということからしておかしい。

なんで立村委員長、清坂さん、紡、そして天羽くんの四人だけなのか。こんなの裁判でもなんでもない。ただの事情聴取だ。

清坂さんは困った風に唇を尖らせた。キュートだ、いい。

「たぶん、今回が初めてじゃないかなあ。立村くん、あまり人を裁くということ好きじゃないし、ほんとだったらもっとこういうことしてもいいって時だってやらない人なんだよ」

「こういうことしてもいいって時？」

「うん、立村くん、二年の男子から馬鹿にされてること多いでしょ。結構失礼なこと言われて傷ついていること、あるんだけど。でもそういうのは気にしないようにしてるみたい」

そんなこと言われたくらいで傷つくこと自体が驚きだ。清坂さん、やはり委員長のことは考え直したほうがいいよ、と紡は言いたい。

「前の委員長……ほら、今年卒業した本条委員長の頃はしょっちゅうあったみたいよ。殴り合いとか、部活関係の大喧嘩とか、男子の先輩って血の気多い人たくさんだったから。立村くんも一度やられたって言ってたけど」

それは意外。あの温厚そうな立村委員長が男らしくけんかに巻き込まれたことがあるとは。詳しく聞いてみたいけれど、清坂さんはそれ以上話してくれなかった。

「ううん、私もわかんないの。本条先輩の時は怒鳴られて、殴られて、それで終わりだったらしいの。けど、立村くんは一方的に殴ることって好きじゃない、はっきり言ってたの。殴っても傷つけあうだけだから、話し合いにしようよって。だから今日も、たぶん、だけど」

キャットボイス。酔いそうだ。

「立村くん、ちゃんと天羽くんの話、聞いてくれると思うよ。だから、近江さんも安心していいと思うの」

——天羽くん、一発二発殴られるのがまんしてよし。私は満足よ。

すっかり本来の目的を紡は忘れていた。

時計の針が二時五分前を差していた。扉が開いて立村委員長が戻って来た時、清坂さんが後ろの机を思いっきりずらすくらい、勢い良く立ち上がった。

「立村くんどうしたの」

一テンポ遅れて紡も気が付いた。顔が険しい。もともと色白の顔が能面状態のまま立っていた。ドアノブを握り締め、開けたはいいが入ることを忘れていた風だった。

「悪い、近江さん、来てくれないかな」

「私は私は？」

清坂さんが顔を左右に動かし尋ねた。

「来るか？」

少しためらった後、委員長は清坂さんにも許可を出した。紡はのろのろと立ち上がった。

「何かあったの？」

「とにかく、物音立てないでA組に移動しよう。話はそれからだ」

動揺していることはよく伝わってきた。清坂さんの顔も同じく不安の薄化粧状態だった。立村委員長ばかり見つめていた。扉が閉まるのを追いかけて開けた。

「近江さん、行こうよ」

「何か様子、変よね」

紡が尋ねると、清坂さんは大きく頷き、それ以上何も言わなかった。しゃわしゃわと風が廊下で流れているのが気持ちよい反面、なぜかぴんとした空気が張り詰めていた。誰も三年の教室には居ないらしい。静かに歩いていく必要があるのかすら紡にはわからなかった。あとで天羽くんが来た時、どうするんだろう。心配なんじゃないだろうかと思ったりもした。

心配する必要はなかった。

天羽くんはいた。

——どうしてあんた、床にそんな格好してひっくり返っているわけ？

椅子が二脚ひっくりがえり、机が勢い良く曲がった三Aの教室内で、天羽くんは床にぺたんと腰を落としていた。背に回した手は、しばられていた。

隣りで清坂さんが、

「うそ、天羽くん、どうしたのよ！」

と駆け寄りしゃがみこんだ。首をかしげて天羽くんの顔を覗き込んだ。紡も続いた。立村委員長が乱れた机を直していた。掃除の終わった土曜の午後とは思えない机のずれのように、何かが起こったことを読み取った。修羅場だきつと。

「今、後ろ手外すから、待っているよ」

立村委員長は教室の戸をしっかりと閉めた後、天羽くんの手首を締め付けている色つきの紐を解こうとした。うまくいかない。思ったよりもこの人不器用だ。見かねた清坂さんがスカートのひだをぽんと叩き、

「私がやるから」

と器用に結び目を解いていった。

「そんなにきつくなかったじゃない。天羽くん、自分で外せたでしょこのくらい」

紡は顔を見上げて尋ねようとした。頬のところを見て息を呑んだ。

「ちょっと、あんた、どうしたのこれ。猫にでもやられたわけ？」

浅黒い天羽くんの左頬には、ついさっきできたばかりであろう細い糸が赤く伸びていた。血がにじむ程ではないけれども、明らかに、何かで、誰かによって、ひっかかれた傷だ。

「いいんだ、これで」

足は自分で外したらしい。丸く結んだ、ハンカチ落としの時に使うようなものが落ちていた。というより、これはハンカチそのものだった。女子の使うような、青い華やかな花柄ハンカチだった。男子がこんなの使っていたら、趣味を疑う。

紡は拾い上げた。

「天羽くん、あんた演芸および落語、漫才が趣味だったことは知っていたけど、まさか、『し  
ばり』も趣味ってことないよね」

「痛いのは、やだ」

こういう時でもおふざけが好きなのが天羽くんだった。にかっと笑った。無理している。右の  
頬の様子も、わずかに赤く腫れているようだった。

「痛いことされてたくせに、何よいったい」

「これでいいんだ。近江ちゃん、ここにちょっと、してくれないかな」

「なによ、してくれないかなって」

「わかってるっしょお」

——ウインクするんじゃないわよ。日本人は顔の筋肉の関係で、うまく決まらないのよ。

紡はほっぺたを両方、ぴたっと音立てて張ってやった。手のひらでくるむようにしたのは思い  
やりだ。

「あいったあ。もう、やだあ、もう」

「ふざけあうのはいいかげんにして、何があったのか言いなさいよ。全く、私には関係ないのに  
なんでこんなことに巻き込まれるわけ？」

ふざけたかったのは紡自身だった。

遠慮したのか……別に側に居てもいいのに……清坂さんが立村委員長の側でなにやらささや  
きあっていた。遠慮がちに話し掛けてきた。

「あのね、近江さん」

思い切った風に、息を吸い込んだ。

「天羽くん、A組で手と足縛られて、こうしていたの。あんまりいいことじゃないよね」

続けて立村委員長も天羽くんにかがみこみ、手を縛っていた色つきの紐……こちらもハンカ  
チだった。ピンク色……を片手に持った。

「正直に言えよ天羽。誰かに、絞められてたな」

一瞬こいつ誰、とあたりを見渡したくなるような、凄みのある声だった。いつもの立村委員  
長じゃないようだった。天羽くんは答えずにうつむいた。おなかのベルトを外してぶらぶらとも  
てあそんだ。

「しょうがねえだろ。俺の自業自得だ」

「だからって、一方的に絞められていってことにはならないだろ。相手、誰なんだ？」

天羽くんは答えずに、委員長の持っているハンカチを取り替えそうとした。そうはさせじと背  
中に隠す立村委員長。紡が受け取りしっかとポケットにしまい込んだ。

「証拠物件、捨てるわけにはいかないわよ。委員長、ほら、足下のも拾って」

抜けている。天羽くんが四つんばいになって奪おうとしたのを紡は掠め取った。

「何するんだよ、何されてたって俺の勝手だろ！」

「暴力はよくないよ。何があったって。特に今のは一方的過ぎる」

「お前だってさ、新井林と決闘やっただろ。水鳥中でも」



「すねには傷あるけどさ。けど、天羽、お前のは正々堂々ってやり方じゃないよ。相手を縛り付けて、反抗もできないようにしてさ」

天羽くんはどんと足を踏み鳴らした。

「違うっつうの。立村、これはお互い了解の上でやったおあそびなの。だから心配せんでもよろしいの。ったく、大げさなんだからなあ」

わざと大声で平気なふりをする天羽くん。そんな奴を紡は、「うそつき」とつぶやきながら見つめていた。何かがある。絶対ある。

「じゃあなんで、今日すぐにD組に来なかった」

同じことを考えていたのは、委員長も同じだったようだ。

一切感情を交えず、どこかの誰かさんのように静かに、しかし有無を言わせぬ口調だった。もし立村委員長の顔が見えなければ、たぶん逃げたくなる。

「天羽、昨日言ってただろ。きちんとけじめつけるってさ。今のこれも、お前にとっては『けじめ』なのか」

ふくれっつらしていた天羽くんは、しばらくどうすればいいかわからないという風にきょろきょろした。話を逸らしたくてならないらしい。でも紡も、そうさせる気はない。

「このハンカチ、柄からして女子のだよね」

広げたハンカチには、四方に細かなしわが絞り風に残っていた。

「別に私はどうでもいいんだけど、西月さん関連のこと？」

委員長と清坂さんが顔を見合わせた。

「呼び出されたんだな」

天羽くんは何度かごまかそうとした。同じ言葉ばかり重ねるというのは、やはり知られたくないことの現れなのかもしれない。あまりしつこく追わない立村委員長も、今日はずいぶんねちっこかった。言葉を変え、品を変えた。

「殴られる方が最優先だったんだろう」

ゆっくりと委員長が天羽くんのネクタイを持ち上げ、ぱたっと落とした。

「隠したいなら言わないでいい。天羽が納得しているんだったらもう俺は何も言わない。けどさ、天羽」

頬のひっかき傷だけをじっと見据えた。

「集団だよな。一对一の勝負だったら俺も文句言わないけどさ、お前されたことは一種のリンチだよ。西月さんの件も絡んでいるんだったら、一方的に文句は言えないけれど、少なくともひとりを集団で殴りつけるなんてことは、あっていいと思わない。この件は、俺の判断で狩野先生に持っていく」

「やめろ、てめえ！ お前、おきてを忘れたのかよ」

男子の世界はよくわからない。おきてだとか闘いだとか、みそぎだとか理解できないやり方で処理をしようとする。女子としては見守るだけ。清坂さんも同じく両手を握り締めていた。

「天羽、お前は告げ口なんてしなかった」

立村委員長の目は穏やかだったけれども、口答えを許さないどこかの先生に似ていた。

「俺はただこの状況を発見し、集団リンチだと判断した。だから担任の狩野先生に報告に行った。それだけだって。裁判については後でまた話そう。とにかく俺は先に先生のところに行って来る」

「狩野先生、あの人とっくに帰ったんじゃ」

言いかけた天羽くんを遮り、かすかに笑みを浮かべた。とっくに知ってたよ、といわんばかりに。

「『E組』は土曜五時まで教室空いているんだよ」

清坂さんにちらっと目で合図をすると、立村委員長はさっさと教室を出て行った。清坂さんも慌ててついていった。扉が閉まる寸前まで紡に手を振ってくれた。思わず振り返し、天羽くんにならまれた。

追いかけてようとした天羽くんを紡はしっかりと押えた。紡も力いっぱいつかんだつもりではなかったのだけど、素直に動かなくなったところを見ると、無理に行こうとしたわけではないのだろう。もう一度がくっと頭を下げてしゃがみこんだ。

「畜生、立村の野郎、なに考えてるんだよ」

「悪いけどあの人も、ずいぶん頭いいわね。ほとんど状況把握してるみたいよ」

「知ったことかよ。単なる女王様と奴隷ごっこだったのに」

「あら、女王様は私でないといやなんじゃないですか？」

少し刺激的な言葉を投げかけてみた。一歩ずれた行動を少し直したかった。

「それにね、天羽くん。いいかったんだけど、立村委員長、ハンカチの柄もかなりまじまじと見ていたわよ。もっというならほっぺたの傷、猫でしょ。雌でしょ」

かなりねちっこく言ってみた。ちっと舌打ちをした。

「奴が狩野先生連れてきたら、ちゃんと言うよ。んなわけねえっしょ。俺、Mかもしれないし」

紡は笑わず、しばらく天羽くんの瞳を見つめた。じっと、そらされてもそらされても繰り返した。

立村委員長を先頭に、狩野先生が息を切らせて天羽くんの側に向けよった。やっぱり『E組』に待機していたらしい。いったい何を考えているのだろう。紡は何も言わずに一歩、天羽くんから離れた。第三者の立場ということで、立村委員長の隣りに立ち見下ろした。

やはり同じくしゃがみこみ「あの人」は、天羽くんの顔を両手で抑え、じっくりと頬を観察している。ひっかき傷に気付いたらしい。その体勢のまま振り返ると紡よりも立村委員長に頷いてみせた。

「近江さんは先に帰ってください。それと、立村くんも今日は連絡してくれてありがとう。いつもの補習のことですが来週の月曜に延期させてください」

口早に立村委員長に話し掛け、めがねの奥からきりりと天羽くんを見つめた。

「今日は天羽くん最優先です。話が終わるまでは帰れないのだと、今日は覚悟してください」

——なにを覚悟するのよ。受け取り方によってはこの人、危ないこと言ってるかもよ。

当然、といった風に立村委員長は頷いた。場慣れしているという感じだった。廊下で顔を覗か

せている清坂さんがちらちらしている。

紡もこれ以上は言い返せなかった。何も言えずに教室を出るしかなかった。

気を遣ってくれなくてもいいのに、D組評議ふたりは何も言わないで紡を見送ってくれた。軽く手を振って自転車置き場へ向かった。

こう言う時は、お姉ちゃんと「アルベルチーナ」で紅茶を飲むのが一番なのだけど。

——別に人のことなんだから、どうだっていいでしょ。

何も言ってくれなかった天羽くんに、紡はいつのまにか恨み言を並べていた。

聞こえないように、空に向かってぶつぶつと。

——男子にやられたんだったら、ほっぺたがもっとはれ上がっていたはずよ。あんなゆるい結び方して、あんな証拠ばればれのハンカチ落として行って、何がランチよ。ばっかみたい。頭悪すぎるわ。天羽くん、覚悟の上でA組にいき、そこで殴られるかなんかしたのかしら。

おそらくA組の女子がたくらんだことには違いないだろう。可能性としては泉州さんが女子をけしかけたのか、もしくは当事者としてたくらんだのか、その辺はわからない。天羽くんも白状するつもりはなさそうだし、うやむやにせざるを得ないだろう。ただ、「あの人」もそれなりに色々追い詰めたりするだろうから、事情はすぐに判明してしまいそうな気がする。この前泉州さんにひっかかれた傷は、もうだいぶ薄くなってきたけれども、爪の黒い赤が血に染み込んでいたのではというのが気持ち悪くて何度も顔を洗った。

もう、天羽くんは覚悟をしていたのだろう。

なんとなく、この二週間で紡も気付いていた。

天羽くんは西月さんが口を利けなくなってしまったことに、責任を感じているに違いない。すべての原因が自分なんだと思い込んでいるに違いない。本当のことを言ってしまい、自分に嘘がつけなくなってしまう、不安定になった自分が悪いんだと思っているに違いない。そんなことない。本当は違う、違うのに。天羽くんが悪かったのは、ただ早い段階で西月さんに、「お前のことが嫌いだ」と言ってあげられなかったこと、それだけだ。

——そうよ。天羽くん。

願っていることが、空の白い月と一緒に重なって映った。

——天羽くんには、あのことを謝ってほしくない。

許せなかった。同情を買おうとして自分を傷つける振りをするあの女子を紡は、とことんぶったいてやりたかった。気が狂うほど殴りつけてやりたかった。母と同じやり方をして、欲しいものをどんなことしても手に入れようとする、あの女子を紡は憎んだ。天羽くんの心を無意識かわざとか知らないけれど引っかけ、自分はいいことしているんだと思い込んでいるあの女子を嫌悪した。少しずつ譲歩しようとして、自分の取り分を増やしていこうとするあの女子を蹴落としてやりたかった。自分でやったのか、それとも人がやってくれたのかはわからないけれど、ごたごたとなった理由はあの女子ひとりにある。そっと頬を撫でる風が、熱気をかすか

に帯びている。天羽くんは打たれた頬に何を感じたんだろう。紡は学校へきびすを返して駅に向かった。

一日おいて、「弾劾裁判」の仕切り直しが伝えられたのは、清坂さんの電話からだった。

よりによって修学旅行二日前になんで、「弾劾裁判」を設定するのだろうか。立村評議委員長もやはり同学年、「修学旅行が始まる前にすっきりさせたい」という気持ちもわからなくはないのだけれども、準備が間に合わないなんてこと、考えてないだろうか。

清坂さんから電話連絡をもらい、紡はポストンバックに着替えを詰め込む手をぶらんとさせた。ただでさえ旅行中、生理日にぶつかるであってうんざりしているっていうのに。

「この前も話したけど、大丈夫よ。『裁判』なんて建前よ。やっぱり、あの、いろいろあったじゃない？ その残務処理をしようってことみたいなの。だから近江さんも安心して来てね」

「どこに行くの？」

「放課後にカラオケボックスにしようって話になっているみたいよ」

——カラオケボックス？

信じられない。どの面下げて立村委員長、「カラオケボックス」なんてうるさそうなところ選んだのだろうか。天羽くんから聞いたところによると、委員長の趣味は「和風の落ち着いた感じの喫茶店」がメインだという。明らかに制服で騒ぐのは場違い、と言える場所を選んで、いつも堅苦しい思いをさせられるとかなんとか。「アルベルチーナ」にある意味似ているような気もするし、男女差別するつもりはないけれど、男子がそういう場所に平気で出入りするというのがどうかと思う。

「そうよ。立村くん、歌も嫌いだしね。でも、できるだけ気付かれない場所で話をしたいし、学校の中だと揉め事起こりそうだし、それに、ね」

甘いささやきに紡は、受話器から耳を離さずにいた。

「天羽くんの事件、やはり、大騒ぎになっちゃったしね」

天羽くんが両手両足しばられてA組の女子たちから制裁を加えられた事件。紡たちが帰った後、「あの人」……狩野先生はひたすら生徒たちの家を臨時訪問するため車を乗り回していたという。すっかり全身精力を搾り取られた状態でご帰還した後は、ぐったりと眠り続け、目が覚めるやいなやまた学校と生徒宅を走り回る。お姉ちゃんもその状況に仰天して実家へ電話をかけてくる始末だった。土日を含んでいた。

「セシル、いったい学校で何があったわけ？ あのままだと皇人さん、過労死するわ」

——お姉ちゃんを未亡人にはしたくないわね。

しかたなく紡は、話して問題ないであろうことを話した。手元に証拠のハンカチが残っていることとか、相方の修羅場に巻き込まれたとか、そんなことだった。別にまずいことは言わなかったと思う。しかし、口の軽いお姉ちゃんを信じるべきではなかったと反省したのは月曜のこと。女子五人がなぜか、欠席していたのには驚いた。意外だったのは、おそらく裏で糸を引いているのではとらんでいた泉州さんが全く平気な顔をしていたことだ。泉州さんが親友の恨みを晴ら

すためでもなく、西月さんが元彼氏に友だちを使って復讐したわけでもなさそうだった。

詳しい話はその後、お姉ちゃんから聞きだしたけれども、途中で口げんかしてしまって電話を一方的に切ってしまったので、よくわからない。

知っているのは、天羽くんを集団リンチにかけた女子五人が、狩野先生の判断により二日間の自宅謹慎処分を受けたこと。そしてそのうちの一日、狩野先生の家につれてきて、お姉ちゃんによって「アルベルチーナ」ばりにもてなし、いろいろお話をしたという。きつい処分をしたくせに、結局女子受けのいいお姉ちゃんを使って女子たちの心を開こうとするそのやりかた、汚い。でも頭いいやり方だ。

いや、それはいいのだ。お姉ちゃんはもともと女子が大好きだ。こんなおしゃべり女だとは思わないだろうし、紡の姉だとも認識していなかっただろう。一応は用心していたようだが、すぐにお姉ちゃんのペースに持っていかれ、女子五人は言いたい放題紡の悪口を言い放ち、すっきりして帰っていったようだ。

彼女たちがすっきりしたってことは、お姉ちゃんも話をあわせて紡のことを着にしたってことだろう。それがまず許せない。頭の悪い女子たちをよりによって。これも許せない。なによりも紡が激怒したのは次の一点だ。

「私はね、セシルに幸せな恋をしてもらいたいなって思うから言うけど、なんだかセシルのしていることって、その西月さんとおんなじことのように思えてならないのよ」

「どういうことよ！お姉ちゃん、言っちゃいけないことってあると思うんだけど。私あんな頭の悪い女子と一緒にされたくない！」

「ううんそういう意味じゃなくて。セシルって、いつも、手に入らないものばかり追いかけて、本当に大切にしてくれそうな人を見ていないっていうのかな」

いいたいことはよくわかった。要するに、いいかげん女子好みの性格を改めて、天羽くんでも妥協しろってことだろう。最近天羽くんに影響されて、漫才・落語・演芸ものの話題ばかりが増えている。テレビをつければバラエティー物ばかり観てがはがは笑い転げている始末だ。お姉ちゃんから見たら、天羽くんは旦那様公認の、素敵な彼氏に映るのだろう。顔を見たことあるかどうかはわからんが。

——お姉ちゃんならわかってくれるって思ったのに！

——手に入らないもので悪かったわね！

お姉ちゃんのように、やわらかでふわふわしていて、ちょっとお馬鹿だけでもきれいな人ならいいけれど、男子にそんなもの求めたって意味がない。どうせ、清坂さんのことばかり追いかけている暇あったら、いいかげん天羽くんとかくっついてしまえって言いたいのだろう。それはわかる。よくわかる。しかしお姉ちゃんには言われなくなかった。

「もういい、ほっといて！」

がっちゃりと切ったのはいいが、後で反省した。

——修学旅行のおせんべつ、くれるって言ってたのにな。受け取ってからけんかすればよかったな。

それ以来、お姉ちゃんとは連絡を取っていない。

ゆえに、狩野先生および三Aがらみの最新情報もまだつかめていない。

「そうなんだあ、お姉ちゃんってうるさいよね！ わかるなあうん」

清坂さんが電話の向こうで共感してくれている。あのあどけない顔でうんうん、と頷いてくれているに違いない。今すぐ電話線伝って抱きしめたくなくなってしまった。

「でも意外だったよねえ。天羽くんをいじめた犯人、結局どういう人たちだったの？」

「本当は片岡さんと泉州さんがふたりで天羽くんを捕まえて、吊るし上げるつもりだったらしいんだけど、何かの拍子で他の女子たちに知れ渡ってってことみたい。よくわかんないわ。私には関係なかったからいいけど」

「でも、天羽くんと一緒に行動しているなら、巻き添えになっちゃうかもしれないよ」

心配してくれているのだろう。ずっと顔がほころんでしまう。

たぶん紡と天羽くんを狙っていたのは、泉州さんと片岡くんのふたりだっただろう。

思いっきりぼこぼこに天羽くんを殴りたかったに違いない。

でもあえて手を出さなかった理由はどこにあるのだろう。紡としてはもうひとつ、西月さんが影で手を回していた可能性も捨てていない。一方的に振られ逆恨みした西月さんが、クラスの女子たちのもたらす同情を一まとめ利用して、自分の手を汚さず復讐したのではという点だ。一部の男子たち、関係ない女子たちの数人も疑っていた人がいたらしく、直接西月さんの目の前で詰問したという。ところが、西月さんは聞くや否や、顔を覆って首を振り、激しく泣きじゃくったという。言葉がもれなかったところみると、たぶん芝居なんじゃないかなと思っているけれど。

この三人ではなく、他の女子たちだったことが意外すぎて、正直なところ紡は答えが見つけれずにいる。混乱した、と言った方が正しい。

学校側としてもなにせ「縁故クラス」ゆえに外部にもれるような騒ぎにはしたくなかったらしい。

狩野先生の過労・心労をのぞいては無事、穏やかに片がついたらしい。いいとこのお嬢さんたちばかりなので、へたしたらスキャンダルになるかもしれない。そのことも考慮したのだろう。

「とにかく、天羽くんと小春ちゃんをもう一度、きちんと話し合わせた方がいいっていうのが、立村くんの意見なのよ。もうあの人、裁判って意識ないと思うな。ただ、天羽くんにきちんと、小春ちゃんにごめんなさいしてもらって、お互いすっきりした方がいいんじゃないかってことなの」

「なんで謝る必要があるの？」

紡は言いたかった。清坂さんだからなおさら言いたかった。

「私も西月さんに言い渡した現場見ていたけど、天羽くんは何度も頭下げてたわよ。立村委員長、現場の録音テープ、聞かせてもらってないのかしら」

「聞いている。絶対。その上で、立村くん、『弾劾裁判』にかけるって言ったもの」

——やっぱりよくわからないわあの人。

とにかく、修学旅行二日前に天羽くんと西月さんを招いての「弾劾裁判」が行われることは決定した。早めに準備しておこう。生理日一週間前特有の眠気といらいらを、飲み物たくさん飲むことにより紛らわせ、紡は大きくため息を吐いた。

今まで西月さんを守るようにバリケードをこしらえていた女子の集団。しかし、五人が抜けて、わきがのすっぱい匂い溢れる泉州さんしか守り神がいなくなると、声もかけやすくなる。今までは紡も、そして天羽くんもきっかけをなかなかつかめずにいたのだが。天羽くんも、チャンスがあればきちんと西月さんに話し掛けようと思っていたらしい。寡黙になってしまった西月さんに、一言、あやまらないと自分が不安になりそうで怖いのだそうだ。紡が何度、「あんた謝る必要ないわよ」と言い聞かせても無駄だった。男子は自分でやりたいことしかしない、って本当だとつくづく思った。

青湯には梅雨がないと言われている。でも雨の降る日は比較的多かった。今も昼休みが終わった直後から、雲が薄黒く固まりを作り、一気に音を立てて窓ガラスを叩いた。先生が廊下側の生徒に指示して、蛍光灯を全部つけさせた。

「今日は修学旅行の心得、ということで女子のみなさんは体育館に集まってください。男子のみなさんは教室で改めて、確認事項を行います」

修学旅行前になると、事前学習の時間が設けられる。大抵、観光予定の地域に関する資料集めなどが中心だが、ほとんどは百科事典の丸写しをすれば時間がつぶれるのでそれだけにしていた。男子のほとんどがまだ、その仕事を終わらせていないと聞いていたので、たぶんその時間に当てられるのだろう。女子だけ集められるということに、一部の男子が、

「大人の時間だったりする？」

とささやく。紡はちらっと声の主に笑って見せた。小学校の時と同じだ。保健指導はみな興味しんしんに決まっている。仲のいいグループの奴らだったのでその点は平気だった。天羽くんにも意味ありげな言葉をささやいてやりたかったけれども、とつてもだがそんな気分ではないらしい。

——これから「弾劾」だもんね。カラオケボックスっていうのが、なんだかまぬけ。

紡は女子たちを二列に整列したことを振り返り確認すると、「あの人」に顎で頷いた後体育館へ向かった。評議委員の場合ひとりで真っ正面、座っていられるのでよけいなおしゃべりをしないですむ。どうせ話すことったら、

「男子の部屋に用もないのに入らないでください」

「生理になってしまった人、布団を汚してしまった人は先生に言ってくださいね」

などなど、そんないまさらな話なんてどうでもいい、というような内容に決まっている。

——それだったら生理日をずらす方法を教えてよね。安全性の高い医療用ピルを配るとか。

よりによって真っ最中に当たっちゃうとは。頼りのお姉ちゃんともただ今険悪。どうしようもない。

振り返った。後ろには西月さんが黙ってつきしたがっていた。背が低いこともあって、前の方にいつも並んでいたのは知っていた。今日に限って紡の真後ろにいる理由がわからず背中がむず

むずした。すぐに気付いた。抜けていた五人の女子中、三人は西月さんよりも背が低かったのだ。前三人が抜けたから、押し出される格好で西月さんが前に来たというわけだ。

みな、全員整列したままあんざするように指示された。先頭評議委員を含めて二列に分かれる、ということで西月さんは隣りに入った。言葉が出てこないのは二週間以上同じ状況だけれども、紡の顔を見るのが恐ろしいらしい。そりゃああんな見苦しいところを思い出されるのはいやだろう。紡も最初は無視して、D組の清坂さんを探した。やはり先頭のところにいて、他の女子たちとはしゃいでいる。

「これから、修学旅行に向けて、女子のみなさんが気をつけなくてはならないことを説明しますね。では先に質問です。この中で、まだ、生理が始まっていない人はどのくらいいますか？女子だけだから安心して手を挙げてください」

——経験したことある人って聞いた方がいいんじゃないの？

紡はうんざりして養護教師……保健室の先生……がマイクで呼びかけるのを聞き流していた。たかが三日間出かけるだけだろうに。いざとなったら近くのコンビニで生理用品買ってくるって方法もあるのに。なんだか先生たちはみな、紡を始めとして生徒を子ども扱いしているように思えてならなかった。別に反抗する気もないので流している。手を挙げたのは全クラス併せて二十名くらいだった。中には清坂さんも混じっていたのが意外だった。恥らうという感じではなく、きよときよとと周りを見て、隣りの子になにか話し掛けていた。自分の生理用品、少し大目に持って行った方がいいかもしれないと思った紡である。

「手を下ろしていいです。では、みなさんは小学校の頃、および中学以降の保健体育の授業で習っていることとは思いますが、あらためて復習しておきましょう。これからスライドを二十分間見ることにしましょう。電気を消しますね」

——だからこんな子ども騙しなもの押し付けてどうするっていうのよ。

紡だけではなかった。他の女子たちも隣りの人としゃべっては先生たちに注意されている。わざわざ暗幕をかけて上映するようなものでもないのに。白い幕に映し出される古臭いドラマは修学旅行中、初潮を迎えた女子が戸惑う姿と、周りの先生たちがわざとらしく説明をつけて生理用品をドアップにするという、センスの悪い代物だった。紡は両足を伸ばし、居眠りしようとした。

ふと、一案が思いついた。隣りの西月さんにささやきかけた。

「西月さん、今日の放課後、駅前に行くでしょう？」

はっとした風に、西月さんは横顔を紡に向けた。暗闇だけど肌がべたべた油浮いているのは良く見えた。

「委員長が、天羽くんと一緒に『弾劾』やるって言ってたでしょう」

清坂さんがすでに連絡を入れたと話していた。事件の張本人なんだから出ないわけではない。答えは返って来ないが、その代わりに小さく首を下げた。

「返事なくていいから。天羽くんのこと、知っているでしょう。西月さんの知り合いによって



リンチされたってこと、よくわかっているわよね」

隣りにしか聞こえないように、ひそひそささやいた。まだ雨が激しく天井を鳴らしている。下手したら声が聞こえないかもしれない。紡もあえて声を太くして続けた。目の前のスライドで、野暮ったい制服姿の女子が泣き顔を見せてパニックになっていた。きっとあれになっちゃったんだろう。

「あれ、西月さんがさせたことなんではないか、ってみな言っているんだけど、それ本当かしら」

——声が出るなら答えなさいよ。

かぶりをふって何か口を動かしている。はあはあとだけ息音が聞こえる。でも意味ある言葉ではない。否定しているというだけだ。

「別にそれならそれでいいんだけど。私には関係ないし。それに復讐したい気持ちもわかるわ。でもなんでなのかなと思ったの。ひとつ聞きたいんだけど」

そっと肩を寄せて耳元に吹きかけた。

「なんで、天羽くんがあなたを嫌っていること、気付かなかったの？」

打ち付ける雨音にまぎれて、小さな悲鳴のようなものが西月さんの口から洩れた。

——凶星だったわけね。

背中を突き刺すような雷雨に、女子の一部が「きゃあ、怖い」とささめき合っている。紡は曇み掛けた。たっぷりと。

「私も知ったことじゃないけれど、天羽くんがあれだけ悩んでいたことをどうして、いつも一緒にいたあなたが気付かなかったのか、それが私にはどうしてもわからなかったのよ。一応、自分では彼女のつもりだったのでしょうか？ 相手が少しでも様子おかしかったら、すぐに肌で感じると思うわ。私もそんなに天羽くんと付き合ったわけじゃないけれど、なにかおかしいな、とは思っていたしね」

うつむいた。膝を抱えて、スカートで足首まで隠すようにしていた。

「こちらでいろいろ話し掛けたりすると、肝心要なことはごまかすし。聞かれないことをつっこまれたら、ギャグネタをやたらと飛ばす。何を考えているんだらうって思うわ。あまり聞かれないことなんだらうってこちらでは判断して、それ以上はつっこまない。それは私の判断よ」

白い画面には、女子たちに囲まれて主人公の少女が、ナプキンの使い方について指導を受けている。こんなことみんな分かっているっていうのに。ばかみたいだ。

「天羽くんがリンチされる前にね、泉州さんと片岡くんが私たちに言いがかり付けてきたの。言いがかりじゃないわね。西月さんにもう一度お付き合いしてもらえないかってことを頼み込みにきたのよ。何考えてるんだらうって私は思ったけれども、ふたりは本気だったみたいよ。特に片岡くんの眼は怖かったわよ。西月さんがかわいそうだらう、って何度も何度も」 闇の中で西月さんの肩が四角くこわばったように映った。

「知っているんでしょう。片岡くんが西月さんのことを本気で好きだって、薔薇の花を捧げたこと。本当だったら天羽くんから奪いたいんだらうなってその時思ったわ。でもね、片岡くん。

言ったの。自分じゃだめなんだ、天羽くんではなくちゃいけないんだってね。どういうことかわかる？」

紡の言葉に神が降りて来た。

「片岡くんはね、自分の気持ちよりも、西月さんの気持ちを最優先したってことなのよ」

そうだった。あらためて思う。どうして片岡くんは西月さんをあきらめて、無理を承知で天羽くんに頭を下げたのだろうと。テープの内容をどのようなシュチュエーションで聴いたのかはわからないが、たぶんその段階で、片岡くんは理解したに違いない。自分への優しさが所詮「いい子ちゃん」の偽善、同情であることと、天羽くんをしつこく追いかけて続ける非常識な女子であることを。紡だったらその段階で愛想を尽かすだろう。

しかし片岡くんはそうしなかった。大好きな人の願いを叶えたい一心だったのだろう。自分が西月さんに近づけばきっと、「下着ドロの彼女」ということで嫌がられるだろうし、西月さんも物笑いの種になるだろう。少なくともクラス内でのランクは一気に下がるに決まっている。でも天羽くんとよりを戻せば、まだプライドは守られるはず。

しかし、そんなことは紡の知ったことではない。

本当の目的は、これから告げる。

映像の中では少女がクラスの男子にいきなり肩を触れられて困惑している様子だった。これくらいのことで不安がっている女子だけとは限らないというのに。女子同士でもいろいろ考えることはあるのに。一瞥した後、ささやきつづけた。

「そういうことなのよ。片岡くんはね、西月さんのことを本気で思っていたってことよ。好きな相手のためだったら、自分の本心を押し殺して幸せを祈ることのできる奴だってことがわかったわよ。でも、西月さん、あなたはいつまでたっても自分の我を曲げなかったらしいわね。あきれても何も言えないわ。だってあなた、天羽くんが、嫌われることを覚悟してあなたの嫌いな理由を話した時、何したっていうの。嫌いにならないでってそればかりわめいていたわよね」  
耳をふさごうとするのを軽く抑え、聞き逃しできないように口を近づけた。暴れることはできない。だって先生がたくさんいる。何よりも「いい子」には重たい鎖だった。「もし、天羽くんのことを本当に好きだったら、その場できれいにあきらめてくれたはずよ。それくらいできたでしょ。天羽くんのためにだったらなんでもする、ってことだったら、彼が一番望んでいることをしてあげるべきでしょう」

学ランの男子、白いスカーフをにセーラー服の女子。闇の中でいちゃつこうとしているのに、教育的指導で白衣の女教師に割り込まれている。どうせそんなことしたらいけないとか言って、妊娠の恐れありとかそういう話題が出てくるんだろう。一部の空気が妙に真剣なのは、興味ありげな部分だからだろう。西月さんがそれどころじゃないのはわかっている。だから紡も無視して話し続ける。波打つような激しい雷雨と指で天井を穴開けようとするようなぼこぼこした音。響き渡る。

「天羽くん、西月さんに」

言葉を切り、耳たぶのところにささやいた。

「片岡くんと一緒にいてもらって幸せになってほしいって思っているのよ。これ、ほんとよ」

西月さんの顔が紡に向いた。闇の中でも目、鼻、口が醜くゆがんでいるのが浮かんで見える。目から涙は流れているだろうか。わからない。ただ、林の中でひたすら泣きじゃくり土下座して愛を乞う姿に似ていた。

「この前も天羽くん話していたわ。西月さんのことを本当は二年の夏休みに振るつもりだったけど、いきなりそんなひどいことはできなかったって。そしたら、片岡くんがずっと西月さんを追いかけていることに気付いたんだって。それも、本当に、本気だったってわかったんだって。もしやらしいことを考えていたとか、また下着ドロしそうになったとか、そういうことを狙っていたのだったら、いくら嫌いな西月さんにもそんなことをさせはしないはず。本当に、純粹に思ってくれていたんだと分かったからよ。だから、あえてきつい言い方であなたを引き離そうとしたわけよ。片岡くんだったら、きっとあなたを大切にしてくれると信じていたからよ」

自分のことばにどすが利いてきた。なんどか震える西月さんの肩をにらみつけた。

「西月さん、あなたできる？ 大嫌いな人に、そこまで親切にしてあげること。嫌いな気持ちを隠して騙すことだって天羽くんはできたはずなのに、あえてきちんと筋を通して、さらにあなたがうまくいくようになって気を遣ってくれたのよ。それをなに？ 悪いけど西月さんのしたことって、天羽くんの気持ちを無視して、ただ自分がそうしてほしい、ああしてほしい、指輪がほしい、花よこせ、そればかり要求してただけじゃないの。それって本当に好きってことじゃないんじゃないの？ 私が天羽くんだったら、その場で一切無視したけれどね」

もう止まらなかった。壇上のスライドも終盤にさしかかっている。どうやら物語の展開からして、女子に好意を持った男子がしつこくせまり、結局先生に「男子と女子の違い」などを説教されて終りだった。こんなことをするために一時間もつぶすなんて勘違いもいいとこだ。でも、別の意味で今日は有意義だったのも確か。紡ももういちど、とどめをさして終りにした。

「もし、片岡くんを選んであげたら、天羽くんはこれ以上他の女子たちから嫌がらせされることもないんじゃないかしら。西月さんもあえて『下着ドロ』の片岡くんを勇気をもって選んだとしたら、男子たちもきっと見直してくれるわ。もちろん天羽くんだって、これ以上西月さんを嫌いになることはないと思う。だって、天羽くん必死だもの。これ以上西月さんを嫌いにならないようにするにはどうすればいいか、真剣に悩んでいたのだもの」

——たぶん、ね。

紡は口を閉じた。天井のライトがようやくついた。だいぶ湿ってきた空気の中、西月さんの顔は見苦しかった。震えていた。紡がすぐに離れて立ち上がりスカートの埃をはたいている間、西月さんは膝をかかえたまま動かずにいた。お尻が痛くて動けないのではと周りの子たちは思っただらしい。近くの女子が手を差し伸べて立ち上がらせていた。

——切り札よ。

勝算はある。泉州さんたちの前で言い放つにはこのくらいの勝負ができなければ。

西月さんが今、一番望んでいるものを紡は知っている。

修学旅行前の準備はほとんど終わっていた。社会の授業では旅行先の歴史や郷土芸能について菱本先生がビデオを見せてくれた。理科では名産品の海産物に関する説明で時間がつぶれた。

紡が体育館で西月さんにささやいた言葉の効果を確認するには十分な時間だった。彼女が理解していたとしたら決して友達には言わないだろうし、言ったとしても自分の恥を晒すだけのことだ。泉州さんあたりがかみついてくるだろうがそんなこと知ったことではない。

少し風が吹いたのをこめかみで感じた。行きの連絡船は揺れるだろう。体調悪い人は酔ってしまうかもしれない。立村委員長は大変だろうなとふと思った。多分世話をするのは清坂さんだろう。

天羽くんがなんで方向変換したのか紡には不愉快だったが別に関係ないことだ。紡はただ、西月さんの策略にひっかかるような相手を相方を選びたくない。

天羽くんが同じ空気を憎み続ける奴だとしたら、紡は相方として手伝いするだろう。数少ない人だから、お姉ちゃん以上に大切にしようから。お姉ちゃん言うようなつき合いではない。一幕の舞台上で演じてつき合っていけそうな相方として。天羽くんの求めているものとは異なる事かもしれない。相方以上のものを求められなければ紡はいくらでも天羽くんのそばで語り続けるだろう。

アルベルチーナのケーキは買ってあげるけれども中には入らない、そんな関係ならば。

「健康管理には気をつけてください。修学旅行まであと二日間ですからね」

——それを心がけるべきはあなたでしょうが。

狩野先生が紙色の顔で帰りの会を締めくくった。ただでさえA組内の雰囲気は最悪だ。へたしたら男女憎しみ合いの系図が色濃くなりそうなこの頃。天羽くんは女子に目を向けず他の事情を心得ている男性にだけ頭をかくしぐさをした。紡にも笑みをこぼした。

——まあ、なんとかなるとは思うけど。

何を考えているのか、紡にも読み取れないところがあるけれども、それはそれでいい。紡には関係ない。

帰りの会が終りさっさと教室を出た。できるだけさりげなく、気付かれないようにしなくてはならない。教師にこれから行くことを知られたら、たぶん邪魔されるだろう。放課後にカラオケボックスに出かけるなんて、まず「寄り道はよくない」ということに繋がる。さらに「弾劾裁判」なんて言おうものなら大変なことになる。名前は違えども、今回は天羽くんを叩きのめす「リンチ」のようなものだ。立村委員長は天羽くんが縛り上げられていた件についてはっきり「リンチ」と口にしていたけれども、とんでもないことだ。非公認の制裁「弾劾裁判」なんてどうなるっていうのだろう。言い訳できない。

天羽くんは出てこなかった。

なにやら、狩野先生に呼び出しを食らったらしい。二言、三言、静かに会話を交わした後、ま

たどこぞへ呼び出されたようだ。声をかけると怪しまれるし女子たちにもまたダブルリンチされる恐れがあるのでこの辺は触れないでおいた。かわりに西月さんの様子をちらりと見た。泉州さんたちに頷いてみせた後、伏せ目勝ちに教室の戸口まで歩いていった。紡の方も、行った天羽くんの背も追いはしなかった。

傘を片手でさし、バランスを崩さぬように駅前まで自転車を走らせた。危険だと学校側は騒ぐけれどもしかたない。自転車で来ちゃったんだから。紡はその点慣れている。途中までは自転車をひっぱり、車道に出たからは一気にペダルを漕いだ。途中、すれ違いで立村委員長が何も被らずに反対側の歩道をつっきっているのが見えた。清坂さんがいないのは、きっとバスで向かったからだろう。

すっかりずぶぬれのスカートを絞り、紡は約束していたカラオケボックスに向かった。駅前のカラオケビルと呼ばれている。かなり部屋は広い。一時間五百円ですむ。ただしカラオケを一曲歌うごとに百円玉の投入が必要だ。予定の人数が五人ということだから、一時間一人百円あれば十分。もし話が長引いて延長となった時もせいぜい二百円で片がつくというわけだ。さすが委員長、抜け目ない。

「ひどい雨だよな」

一步遅く入ってきた立村委員長も、全身ぬれねずみだった。ひたいにべったりと前髪がくっつき、一段と幼い顔に映った。輪郭が丸い。

「風邪ひくよね。清坂さんはまだ？」

最重要事項を尋ねる。立村委員長は首を振った。髪の毛の先から雫がまたぽたっと落ちて、広がった。

「今日は来ないんだ。代わりに」

思っきり落ち込んだ瞬間を見られないよう紡は背中を向けた。ハンカチでスカートを拭いた。

「今日さ、二年生は実力試験で早く帰っただろ。それで一人手伝ってもらうことにしたんだ」

「二年とどう関係あるの」

返事をせずに立村委員長は、一階のカウンターで部屋番号を確認した。

「杉本さまの御名前で」

かすれた声で立村委員長がつぶやくのを紡は聞き取ろうとしていた。

「はい、あの、そうです」

「二階の211号室です」

いきなり鍵を渡されていた。落ち着いて受け取っているところみると、慣れているのだろう。

「じゃあ先に、部屋に行ってください」

——委員長なんかと行ったってねえ。

「天羽も今度こそきちんとくると言っていたし」

「さっきうちの担任に呼び出しくらっていたわよ」

さらりと答えてやると、

「そうか。でも今日こそきちんと来ると話していたからさ」

なぜか自信まんまんな態度だった。少しかちんときた。こういう時は少し噛み付いてやりたい。

「そうなの、天羽くんとはあれから話したの」

返事をやはりせず、数回くしゃみをしながら立村委員長はエレベーターのボタンを押した。レディーファーストを仕込まれているのか、紡を先に乗せてくれた。

二階には先客がいないようだった。平日の三時過ぎというのは、まだ人が集まりづらい時間帯なのかもしれない。数回紡も小学校時代の友だちとカラオケボックスに集まったことがあるけれど、とにかくうるさいだけだった。ミラーボールが意味もなく回っていて、うっとおしいことこの上なかった。

「なんだかラブホテルみたいよね」

眉をしかめて委員長は紡を見た。

「あ、まだ委員長、行ったことなかったの」

ここであっさりと「いや、あるよ」なんて答えられたら清坂さんへのジェラシー爆発でその場でひっぱたいて帰るだろう。紡の態度にはもう慣れっこなのか、立村委員長は黙って鍵を差し入れ、開けた。だいたい十畳くらいの暗い部屋の中、ソファーがくの字型に設置されていた。やはりミラーボールも輝いていた。真中にはガラスのテーブルが置かれている。リモコンと曲番号の一覧本が積み重ねられている。委員長はそれを取り去り、ソファーにのけた。戸口側に腰を下ろした。ソファーではなく、テーブルの脇にだった。紡は遠慮なくソファーに座らせてもらった、

「あと、誰が来るといわけ」

「天羽だろ、西月さんだろ、今、近江さんがいて、もうひとり二年の杉本を呼んでいるんだ。計、五人」

なんで清坂さんではなく、杉本さんなのだろう。もともと「巨乳好み」の立村委員長だけでも、なぜ「弾劾裁判」に杉本さんなのだろう。なんで二年を引きずりこむのだろう。疑問を露骨にぶつきたい顔をしてみせたのか、立村委員長は片膝立てて振り返り、すぐに答えた。

「清坂氏だとさやっぱりまずいだろ。ほら、近江さんと仲いいし、どうころんでも西月さんサイドの人がいないとバランス悪いしさ」

——どういふことか。

彼氏からみても、彼女と仲いいのは紡の方だと宣言してくれたようなもの。

嬉しいのと、すぐに手が届かないという現実とでごっちゃになりそうだった。

「なにか飲み物くらいは注文できないの」

「できるけど、自分負担になるけどいいかな」

五百円くらいはかかるだろう。紡はオレンジジュースを注文することにした。さすが立村委員長は手馴れている。すぐにドアそばの電話に手をかけていた。自分の分は注文しなかった。

——灯りをつければいいのに。

立村委員長は薄暗いなかぼつぼつと話をしはじめた。もしこれが天羽くんだったら、もっと妙な雰囲気になっていただろうし、清坂さんとだったら紡ももう少しきゃびきゃび盛り上がっていただろう。紡も合わせているうちに、室内へ電子音が響き渡った。フロントから来客のお知らせ電話らしい。

「今、西月さんと杉本が来たって」

「天羽くんじゃないんだ」

すぐにエレベーターが動いたらしく、ドアをロックなしに開く気配がした。

「雨の中、すまなかった」

思ったよりもぬれていないのは西月さんだった。制服姿で、ブレザーを羽織っている。その後ろには襟の丸いレインコートを羽織った、ちょっと見太った感じの女子がいる。身体に肉がついているわけではない。ただ胸元がやたらと突き出ているだけだと、中に入ったところで気が付いた。

「E組」にいた杉本さんだ。

「杉本、ありがとうな」

「当たり前でしょう。本当は立村先輩が西月先輩を迎えに行くべきなんです」

相変わらず、きついお言葉をぶつけるお嬢さんだ。

下に着ているのは水色のレースが施された、お人形さん風の服だった。紡の母が良く着せたがるタイプのものだった。

「雨、そうとうひどかったもんな。杉本は家から来たのか？」

穏やかに返す立村委員長に、杉本さんはさらに言葉を突き立てた。古臭いお嬢さん服を着て現れたところ見たら、一発で気付くだらうに。

「そうです。西月先輩をお連れするんですから」

——よく意味がかみ合っていない。

杉本さんにとっての「先輩」は西月さんだけであって、紡は含まれていないらしい。あまりよけいなことを言わずに、立村委員長は杉本さんを隣りに呼び、かばんを拭いている西月さんをその隣りに座るよう、じゅうたんを叩いた。ちょうど紡と向かい合う格好になる。目と目が合ったが、すぐに西月さんの方が逸らした。じっとうつむく表情には、相変わらずおびえしか見受けられない。体育館で十分言って聞かせたことがそうとう効いているらしい。

「あとは、天羽だな」

時計を覗き込み、立村委員長は修学旅行のお土産について話を持ち出した。すぐに杉本さんが噛み付いてきた……買ってくれるものと思っているのかどうか分からないが……なので、ふたりの世界をかもし出している。みな無言でいるよりはましだった。とりあえず紡はさりげなく西月さんを威圧しておこうと決めた。

天羽くんさえボケをやらかさなければあっさり終わる。

オレンジジュースが運ばれてきて、紡が口をつけると同時にドアが開いた。



すっかり雨が染み込んでグレーなのに黒く染まったブレザーを小脇にかかえた天羽くんだった。

西月さんが息を呑んだように顔を上げた。

杉本さんがじっとねめつけた。

立村委員長がわざとらしく、「天羽、待ってた。空いてるとこ座れよ」と声をかけた。

紡はただ冷静に天羽くんの顔を眺めていた。なんとなくだけど、教室にいた時よりも唇をかみ締めているように見えた。たぶん紡しか気付いていないかもしれない。紡と目が合って、ほんの少しだけそのまなざしがやさしげに見えた。でもすぐに、部屋の暗がり重なっていった。

「委員長、ミラーボールつけてもいい？ 暗いといやでしょう」

返事を待たずに紡はリモコンを手を取った。歌詞が映るはずのブラウン管に白いひし形の光が無数に散った。

靴がぐしゅぐしゅ言うのが丸聞こえ。脱いで正座した天羽くんは委員長は、

「とりあえず全員揃った。前もって言うけど、今日は『弾劾裁判』じゃないから。弾劾というよりも、天羽の言い分を先に聞いて、その上でこれからどうすればうまくいくかを判断すればいいって思うんだ。というかさ、俺の代ではできたら『弾劾裁判』なんて偉そうなことやりたくないんだ。だから、天羽、言いたいことあるなら、言えよ」

——事情聴取よね。

天羽くんと紡の位置はガラステーブルを挟んで直角だった。と同時に西月さんとも同じ位置で、三角関係の頂点が少し低めに出来上がった格好だった。真ん中で向かい合うのは立村委員長。天羽くんはぬれた指を何度かガラスのテーブルに押し当てた。何度か呼吸を整えていた。紡、西月さん、どちらの方も見なかった。唇が震えているような気がしたけれども、紡の見間違えかもしれない。

鈍感な西月さんは気付いていない。ただ、近くにいることに震えているだけだろう。

気付いていたらこんなことにはなっていないはずである。

「あの、じゃあ、言わせてもらっていいか」

こっくりと立村委員長が頷く。

「じゃあ、言うな」

次の言葉は紡の予想から大きく反していた。

たぶん、西月さんも。立村委員長だけは眉ひとつ動かさなかった。

「小春ちゃん、ごめん。本当に俺が悪かった」

信じがたいくらいしおらしい。紡ぎ出される天羽くんの言葉に、紡はだんだん首を締め付けられる思いでいた。隣の西月さんも、自分の名前を呼ばれたことには明らかに反応したらしい。顔を上げた。視線を絡ませた。

「本当は、一年の頃から小春ちゃんにいろいろ手伝ってもらったりしてさ。俺、すっげえ嬉しか

ったんだ。あんなひでえこと言っちゃった後に何言ったって信じてもらえねえけどさ。A組はそれこそ『コネクラス』ってことで他の連中にはすげえ悪口言われてた。その時に、A組に誇りを持って主張していた小春ちゃんって偉いなあって思ってたんだ。結局A組は俺も含めて、みんなコネ持っていることは分かりきってることだけど、でも他の奴らと同等に扱ってほしいっていう願望は通じたよな。小春ちゃんがいたから、たぶんA組は二年の間男女それなりに仲良くできたんだと思うんだ。ほんと、それは言えてるって思う」

——あんだ雨で狂ってしまったんでないの。

ここでは突っ込みを行わない。委員長が何かをたくらんでいるのだから。

「ほら、二年の夏休み明けに退学した女子いたけどな、あれも小春ちゃんが面倒見てやったんだよな。俺そこまで細かいことできねえし、偉いなあって思ってたぜ。本当だって。だから、できたら小春ちゃんの気持ちに答えたかったんだ。ほんと、だからさ、自分でもわけわかんないことするまでは、小春ちゃんのことを大切にしようって思ってた」

——うそつきは泥棒の始まりなんだけどな。

紡の嘘発見器レーダーにはびんびんと響いている。

「けどさ、俺、やっぱり最低だなんて思う。女子でやっぱ、近江ちゃんの方がどうしても、こう、なんってつか、ああなってるっていうかな。理屈じゃないんだ。本当に小春ちゃんには申し訳ないって思うし、あれだけ一生懸命俺のことを想ってくれたのに、俺の本音がこんなもんだなんて、口には出せねえよ。うちの宗教団体の話も確かにいろいろあったし、本当だったら小春ちゃんの純粋な気持ちにこたえてやりたいって気持ちもあったけど。けど俺、やっぱりそれは違うって感じるようになったんだ。ほら、片岡の様子みてからな」

——ああ、このあたりは本物ね。

片岡くんが西月さんに仕える姿は本物だろう。

そっと立ち上がって立村委員長が受話器を取った。

「ウーロン茶二杯ととレモンスカッシュとサイダーをお願いします」

どうやら天羽くんへのサービスらしい。目配せして天羽くんに合図したけれども、しゃべるのに夢中なのか気付きもしない様子だった。

「小春ちゃんはたぶん、あいつに親切にしてやっただけなんだと思うんだ。下着ドロ事件のことだってそうだけど、証拠がないのに、いやあったとしても、クラスメイトを仲間はずれにするのはよくないって主張したかったのはわかるような気がするんだ。正しいと思うんだ。で、本当のことだったって片岡が白状したのはきっと、そんな小春ちゃんの思いやりが通じたんだと思うんだ。この前、俺、偽善者だとかわざとらしいとか言っちゃったけど、それは嘘だよな。なにげない親切で救われる奴だっているんだよな。片岡、きっと小春ちゃんに変な下心持っていたなんて考えたことないだろうし、むしろ何でもないって思っていたんだと思う。でも、だからこそ嬉しかったんだろうな。だから、あいつ、いつのまにか小春ちゃんのこと、好きになってたみたいだ。男子たちもみんな、あいつの視線が小春ちゃんに向かっていたこと気づいていたし。ただ片岡がきちんとけじめをつけたらどうするか、ってことが条件だと思ってた。それをしないで

俺は、小春ちゃんみたいないい子が、片岡の告白を受け入れられるとは思ってなかった」

——美辞麗句ここまでくれば、ご立派。

本来ならば付き合っている立場上怒るところなのだろうが、笑いが止まらなくなりそうだ。恐ろしいのはここにいる連中みな、大真面目に聞き入っているってことだ。目の前にいる西月さんときたら、闇の中で目がうるうるしてきているではないか。天羽くんがとうとう自分のもとに戻ってきてくれたって信じているの だろう。勘違いもいいとこだ。肝心の天羽くんは、届いたレモンスカッシュを一気に飲み干した。炭酸で咳き込んだ。アホである。

「だから、俺が今まで俺に尽くしてくれた小春ちゃんにしてあげられることは、本当の想いを抱えている片岡を助けてやることなんだってわかったんだ。しつこいようだけど、俺は本当に小春ちゃんに感謝してるんだ。俺みたいな宗教かぶれの性格悪い男を真剣に想ってくれたことや、実際評議委員会で助けてくれた時の こととか思い出すと、俺、恥ずかしいくらいになっちゃう。けど、その一方で」

紡を見た。冷たく見返した。

「男としては、近江ちゃんの方がばっか見てしまうんだ」

ひくっと西月さんが何かを飲み込んだ。

「最低野郎だよ、俺。だけど、結局俺ができることったら、小春ちゃんにひどい言い方で愛想つかしてもらおうとするだけだったんだ。小春ちゃん、俺が言ったこと、許せないと思うだろ。俺も言われたらそう思う。けど、そう言わなくちゃ決して俺のこと嫌いになれないだろ。そういう子だよな。普通の女子だったら、近江ちゃんのことをリンチしようとするだろうし、この前泉州……いや、なんてっか、他の女子たちに文句言われた時もみんな口々に言ったぜ。『西月さんは関係ないんだ』ってな。きっと、小春ちゃんは他の女子たちが暴れそうなのを抑えていたんだなって、その時思った。本気でこんな性格のいい子に俺、なんてことしてしまったんだろうって後悔しちまった」

——舌何枚あるんだか。

紡はストローでオレンジジュースを吸いながら天羽くんのお言葉を分析していた。

なんのことはない。美術の授業の日に天羽くんがオンコの木の下で言い放った言葉を、プラス思考に置き換えてみただけのものだ。どんなに本音を伝えようとしても気付かない鈍感女に愛想が尽きて、何度も冷たく振ろうとしたけれど気付かない。リンチにかけられた時に西月さんが絡んでいないことをみな強調するのは不自然だ、どこまでいい子ぶりっ子しているんだかお前な。片岡に優しくしたのは所詮お前の偽善だろ。そんな言葉をいためて揚げてマヨネーズかけて、食べやすくしたのが今の言葉てんぷらだ。

——まさか、立村委員長がたくらんだ？

可能性は高い。もっと仰天してもいいはずなのに。立村委員長のお隣りでおそろいのウーロン茶をすすっている杉本さんは、何度も尋ねているのにだ。

「だから、小春ちゃん。俺は嫌われた方がいい奴だし、その覚悟もしてるんだ。こんなに傷つけちまって、俺もどう償えばいいかわからねえ。けど、ここでまた俺が小春ちゃんを傷つけるような付き合いをするのは間違ってると思う。それはわかってほしいんだ。なんとかして俺、小春ちゃんが言葉取り戻せるようにしたいけど、俺が近づくときっとまた小春ちゃんのこと、傷つけちまう。だから、俺のできることは、片岡みたいな性格のいい奴を近づけてやることだけだったんだ。あいつ、本気なんだ。本気で小春ちゃんを守りたいって思ってるんだ。下着ドロやかしたのはずだったけど、それ以外はいつ男としてしっかりした奴だって思う。けど」

言葉を切った。膝で両手を握り締め、またテーブルに載せた。

「それは俺が決めることじゃないよな。俺は男として、片岡がいい奴だと思えるけど、今の小春ちゃんにそれを言うのはひどいよな。だから、俺のことを嫌いになって、無視してくれればそれでいいんだ。俺、小春ちゃんのことを嫌いにはならないからさ。ただ、小春ちゃんが一生懸命俺によくしようとしてくれると、もう辛くなっちまう。だからお互い離れて静かになって、ただ遠くで小春ちゃんが幸せになってくれるよう、祈るだけでいいかなって思ってるんだ」

あまりにもしらせ鳥が飛んでいる天羽くんの「大演説」。

まさに「演説」だ。即興だとは思えない。前もって台本をこしらえて読み上げた、もしくは暗誦したのだろう。聞いていてあきれ果てるくらいだった。天羽くんも大演説が終わってから少し気が抜けたのだろう。立村委員長に目で「もう一杯」飲み物がほしい旨合図した。承知してまた手を伸ばす立村委員長。天井には紡の回したミラーボールがてらてら光っていた。いんちきの天国だと証明するかのように光が天井へ広がっていた。

——最低よ。

西月さんの目が潤んだのは気が付いていた。目をぬぐうところまでいくとは思わなかった。天羽くんのお言葉を信じきったなんてことないだろう。と紡は予想していたのだが、想像以上に西月さんはセンチメンタルな性格だったらしい。唇を引き締めると、もう一度、こくんとつばを飲み込んだ。隣りの杉本さんに顔を向けた。

「何でしょうか西月先輩」

答えずに……紡はまだ西月さんの態度を自分の意志だと思っているのだが……かばんを開けて正方形の薄いものを取り出した。ピンク色のメモ帳らしい。ペラッとめくって、一枚はがれるというあれだ。筆談の時に重宝しているようだ。そして胸ポケットからシャープペンシルを取り出した。握るように持って、何かを書いた。杉本さんに渡した。

受け取った杉本さんはミラーボールを見上げるようにして紙をすかした。文字を読み取った後、にこりともしないで頷き、立ち上がった。

「じゃあ行ってきます」

立村委員長も杉本さんに何かを尋ねたそうだったが、その辺は無視した。清坂さんという彼女がいながらこの態度、いったいなんだろう。すぐに外へ出た。

「何か、杉本に頼んだのか？」

落ち着いた風を装っているのが分かる。西月さんに尋ねる立村委員長は小声だった。小声だと動揺するのを隠すことができる。紡のように気付く奴は少ない。

西月さんは答えなかった。しばらく気まずい沈黙が続いた。紡も底に溜まった氷をストローでつついていた。

「近江さん、何か飲む？」

「そうね、今度はアップルフィズね」

紡が答えようとした時だった。

杉本さんが戻ってきた。ドアを開けっ放しにしたので、もう一人の姿が丸見えだった。振り返る格好の天羽くんが大声をあげた。

「おい、片岡、お前」

片岡くんが全くぬれていない格好のまま立っていた。立村委員長もこの時ばかりは驚きを隠せなかったらしい。腰を上げて、何かを発しようとした。ができなかった。

どこか人をにらみつけているようなまなざしと、くっきりしすぎた顔立ち。

決して醜いわけではないけれども、教室の空気の中では違和感がある。

できれば映画のスクリーン内でとどまっていたほしい雰囲気の彼だ。

みんなが揃っている部屋へ入ってこないのは正解だろう。

杉本さんは片岡くんをおっぼり出したまま、西月さんの側に駆け寄った。そっと手を引いた。スカートを押えるようにして西月さんも立ち上がった。かばんを抱えたのは立村委員長だった。状況を察知してすぐに彼らしい行動を取ったのだろう。

戸口は開けっ放しだった。西月さんは靴を履かずにただまっすぐと、片岡くんのくどい顔を見つめていた。あの涙が乾いているのかどうかは知らない。背中しか見えない。

人工的に明るい廊下へ立ち尽くした片岡くんが、右手を西月さんへ差し出したのだけはわかった。その手を受け取らずに振り返り、西月さんは天羽くんだけを静かに見た。もう一度、目をわざとらしくうるうるさせそうだった。

—ど私は騙されない。

紡だけは目をそらさないつもりでいた。どうしようもなく身体の奥からねちねちした嫌悪感が湧き出るのを押えられなかった。炎のように燃え広がるのではなく、じわっと湿気のように感じる、バスの中のすえた匂いに近いものだった。吐き気がする。その場で秒殺してやりたかった。

西月さんはかばんを立村委員長から受け取った。丁寧にちいさなお辞儀をした。もう一度天羽くんの方をじっとうるうる瞳で見つめた後、靴を履いて外に出た。振り返らなかった。片岡くんの表情に驚きはなかった。たんたんと西月さんだけを追っていた。杉本さんが戸を閉めた。

四人の空気が、ほわっと崩れる気配がした。立村委員長は自分の席に戻ると腕時計をちらっと

眺めて、

「まだ、三十分近くあるけど、あとは二人で話をしていくか？ 今日の料金、俺が立て替えておくよ」

千円札を自分の財布から抜き取り、天羽くんに渡した。

「たぶんジュース代、これで足りるだろ」

——修学旅行のお小遣い、たぶんたくさん持っていくつもりなんだわ、この人。

「あのな、立村」

一呼吸おいて受け取り、天羽くんは真面目な顔してささやいた。

「お前、今のこと仕組んだのか」

「そんなことはないよ。単なるハプニング」

「まあいいさ、これで、終わったんだよな」

ひとりごちた天羽くんに頷き、真向かいの紡にも、

「ということで、今回は和議が成立ってことでどうかな」

——この人、和議の意味もわかってないかもなあ。

紡もあまり細かい突っ込みをするのは面倒なので、黙って笑っておいた。立村委員長にはとにかく「頷く」これだけしておけば丸く納まる。

杉本さんにも軽く目線で合図をした後、

「じゃあ、また明日な」

出掛けに杉本さんが紡を殺したような視線で見据えたのは気のせいだろうか。

常識世界を壊したような視線だった。

——これで終わったんだよなあ。

言いたいことはわかる。天羽くんがあんな白々しい嘘を並べ立てた理由も、なんとなく伝わらないことはない。西月さんを説得するに置いて、「本当」のことを「誠実」に伝えることが果たして効果的なのかどうか。そう考えるならば、嘘でもいいから耳障りのいい言葉を使うのがベストだと判断したのかもしれない。

西月さんという人の性格を考えるならば。

なにせ、下着ドロの証拠がたんまりある男子を、いい子ちゃんぶってかばおうとしたあの性格からしてそうだ。自分がいい子であればそれでいい、本当は大嫌いな男子をかばってあげる自分に酔うあの性格。紡をかばう振りして、実は暗に天羽くんをリンチさせてしまう。いや、たぶん、西月さんは一言だって天羽くんを叩くよう頼んだことはないだろう。それどころかかばおうとしたのだろうと紡は読んでいる。そのくらいははっきりと復讐できる女子だったら、まだ紡は一目置いている。

——結局、あの人の望みは一つだけよ。

——天羽くんに嫌われたくない、それだけよ。

片岡くと付き合うことによって西月さんが得られるメリットは数少ない。

なにせ一年当時の「下着ドロ事件」を起こした張本人だと、片岡くん自身が認めてしまって

いる。青大附属は一貫校だから卒業するまでえんえんと言われつづけることだろう。女子の敵として軽蔑されても当然だ。そんな相手と西月さんが付き合ったとしたらどうなるだろう？

まず片岡くんは「あんな奴でも彼女が出来たのだ」と一目置かれるだろう。女子たちからも「あの、小春ちゃんが付き合ってあげたのだから」と同情してもらえるだろう。片岡くんの丸儲けだ。西月さんの立場は違う。評議委員の立場から引きずり降ろされ、自分を好いてくれているという相手からはとことん嫌われ、それでもしつこく付きまとう始末。結局寂しさに耐えかねて下着ドロでも金持ちのぼんぼんとならということできつついた、そういう目で見られるだろう。残酷なようだが、女子はそんなものだ。A組での立場も、もう最低とまでは行かないが女子の中では哀れまれる存在として扱われることだろう。仮にも評議委員を務めていた西月さんがそんな自分になることを好き好んで選ぶとは思えない。選ぶとすればたった一つのメリット。

——天羽くんには嫌われないですむ。

紡が嵐の中でささやいた一言。最初の段階で天羽くんは、これ以上嫌われないですむ条件として

——片岡くんと付き合うこと。

——近江紡をこれ以上いやがらせしないこと。

を挙げていた。藁をも掴む思いの西月さんは、自分のプライドを捨てたのだ。

「天羽くん、せっかく二人きりになったことだし、いくつか質問していい？」

せっかくソファーもあることだし。紡は自分でアップルフィズを注文し、受話器を置いた、座ったまま足を組んだ。座り込んだまま気力を無くした天羽くんは小さく、「ああ」と答えた。

「あの猿芝居、立村委員長に仕込まれたってわけ？」

答えはなかった。ぼりぼりと足の裏をかいている天羽くん。質問はたくさんあるのでさらに続ける。

「天羽くんって、私の知っている限り、嘘はこれ以上言いたくないと思っていると信じていたんだけど、違ったみたいね。もしあの言葉を全部信じれば、の話だけど」

一口林檎味の液体を舌で転がした。ふうっと息を吐いた。

「確かにあの言葉は効果的だったわね。結局あの人、片岡くんとくつつくこと選んだわけだし。天羽くんもすっきりしたと思っているんでしょ。委員長もほっとしたんじゃないの。これでひとまず安心したってことよ。修学旅行前に意地汚いやり方で弾劾裁判なんてしなくてすんだし、天羽くんも言いたいことを言ってすっきりしたし。西月さんには彼氏が出来たし。めでたしめでたしだと思っているんでしょ」

やっぱり答えはなかった。ほんの少し、紡の口元でぴちぴち鳴る炭酸の音を楽しんだ。

「勘違いしないでよね。別に私はどうでもいいのよ。ただ、もしあの中に出てくるお言葉一覧が本音だったとしたら、私はこの場でさっさと契約を取り消すわ。いきなり今まで言ってきた言葉を裏返しにして、いかにも西月さんのことを大切に思っていたようなこと口走り始めて。別に私はいいのよ。西月さんを選ぶならそれでもいいし、私とは一緒に漫才観にいくだけでも悪くないしね。ただ、西月さんがあれであきらめると思ったら大間違いよ」

さっき西月さんが片岡くんを追う前に見せた、いじらしげな瞳が蘇った。けつとつばを吐きたかった。

「そうよ。天羽くんだって気付いているはずでしょう」

「近江ちゃん」

静かに、今までになく覇気のない口調で天羽くんは首を振った。

「俺のこと、軽蔑してるだろうな」

「別に、そこまで深いこと考えてないけどね」

紡はゆっくりと告げた。

「本当のこと言い過ぎて効果なかったから、嘘で試してみたってことかな、そうだったらしょうがないわって思うけどね」

不意に、天羽くんの口からぐおっと言葉が洩れた。吐いたのかと思ってぎょっとしたけれどそうではなかった。肩を震わせ、両手を床についた。

「ちくしょう！」

小さい声で、さらに続けた。

「ちくしょう、なんでだよ。なんでみんな、嘘っぱちでうまく世の中回るって言うんだよ！」

何度か同じ言葉を繰り返し慟哭していた。男子が泣き叫ぶ姿を見たのはそんなにない。片岡くんが教室でざんげした時の涙、も入るだろうか。天羽くんの声は尋常じゃなかった、こぶしで何度も床を叩き、転げまわりそうなほどだった。紡もしばらくは様子を見守るだけだった。

「同じこと言うならもっとまろやかな言葉使えって、先生言ったからさ。先生も全部言い方レクチャーしてくれちまってさあ、立村も別の方から同じこと言いやがるしさ。要するに俺の言い方がきつすぎたってみな言いたいみたいでさあ。冗談じゃねえよ。俺が、あの女に本音言うのに、どれだけ悩んだか誰も知らねえくせにさ。そうさ、正真正銘本音は、写生会の時に言い放ったもんな。だからテープだって残したんだ。恥ずかしくねえようにな。けど、それじゃどういったってあの女通用しねえ。じゃあどうするってな。別にリンチされたってかまわねえよ。女子が殴るなんて可愛いもんだもんな。けど、俺が嘘を吐き続けていけば、向こうも大人しく受け入れてくれるなんて大嘘、どこで仕入れてきやがったんだよ！ 本当のことを誠実に言えば、かならず伝わるって信じてたんだって。なのに、あの女が受け入れたのは俺の心にもない大嘘ばかりだ！ ちくしょう。みんなそうだ。俺が本音言ったらみんな逃げるくせに、嘘でごまかしたらラッキーが大喜びで寄ってくるって奴だ。ちくしょう。欲しいものはみんな嘘で手に入れろってか、で本当に欲しいものは逃げられるってか、なあ、近江ちゃん」

まだ回っているミラーボール。静かにくるくる光りをちりばめ吹き飛ばしている。

紡は片手にグラスを持ち、もう一度天羽くんを見下ろした。

——やはり、あの二人のたくらみなんだ。

女子たちからの集団リンチ後、「あの女」……狩野先生は天羽くん「西月さんから縁を切る方法」の秘伝を伝授したらしい。利口なやり方だとは思ふ。西月さんの面子を保ちながら、きつ



ぱり譲れないところは譲れないと言い、自分の本心とはうらはらな美辞麗句を連ねていい気持ちにさせる。さすが、お姉ちゃんを扱うのに慣れているだけある。天羽くんの言葉によると、「あの人」のひそかなる弟子である立村委員長も、「弾劾裁判」の前に同じことを繰り返したらしい。

——西月さんをおだてあげることか。

天羽くんの状態を見ると、それに百パーセント納得したわけではなさそうだ。今だに納得いかないとわめいて涙に暮れている。自分をコントロールできないくらい泣いている。

どういう宗教団体の教義かはわからないけれども、「自分に嘘をつく」それだけが耐えられなくなった天羽くん。さらに担任や友だちからも「願いをかなえるためには妥協しろ」と言い含められたわけだ。懸命に「本当の言葉」を口にしようとして、どんなに傷つけられてもかまわないと覚悟したにも関わらずだ。

心、揺れないわけがない。

「けどさ、見事に結果オーライ、だもんな。驚いちまったよ。狩野先生や立村の言う通りだぜ。あんな心のこもらない白々しい台詞を、鵜呑みにしちまう奴がいるなんて俺だって信じられねえ。どんなに俺が本当のことを訴えたって、どんなに伝えようとしたって、理解してくれなかったのにさ。西月の奴、あっさり、ほんとあっさり片岡とくつついちまいやがった。今まで俺がしてきたことってなんだったんだよ。誠実ってなんなんだよ。あんな嘘ばかりついて受け入れられようとする事なのか？ 白々しい友情ごっこして、好き合える事なのか？ 優等生ぶりっこする態度がいい事なのか？ 俺にはわからねえよ。どうすればいいんだよ、ちくしょう、ちくしょう」

——別に、私には関係ないけど。

紡は慰めの言葉を搜してみたが、口にすることをやめた。

きっと天羽くんはそんなこと求めていないだろう。仮にも、紡のことを想っていたとするならば、こんなみっともない顔なんてさらけ出したくはないだろうから。かえって気が楽だった。落語演芸友だちとして割り切るならば、天羽くんの気持ちは伝わってきて痛くなる。

——天羽くん、別に恥じることはないわよ。

——だって、西月さんも片岡くんも、にせものの想いで満足できる人だもの。

紡からすると、片岡くんへ親切にしてあげた西月さんは、自分の行為に酔いたくてしていたそれだけの人だ。いざ、片岡くんに懐かれると本当は逃げたくてならないくせに、いい子の仮面を外せずにおろおろするだけだ。もしかしたら本当の王子さまかもしれない天羽くんが戻ってきてくれる、そう信じていたからだろう。

その「偽善の親切」を丸ごと鵜呑みにして満足している片岡くんだって同罪だ。そりゃあどうしようもなく同情が欲しかっただろうし、惜しみなく与えてくれる西月さんには感謝しても感謝しきれなかっただろう。それが恋に変わったとしてもおかしくはないだろう。たとえ同情だとわかったとしても、「偽善」であったとしても。片岡くんという人は、本物の想いじゃなくても

十分おなかいっぱいになることのできる人なのだ。

天羽くんや紡とは違う次元の人たちだ。

「偽善尽くし」の想いで慰めあえる人々とは、つながりたくない。

天羽くんが懸命に、嘘偽りのない言葉をぶつけても、西月さんに伝わらなかったのは、西月さんが嘘いつわりのたっぷり混じった食べ物しか受け付けられない人だからだろう。紡にはその人工着色料たっぷりの味わいに吐き気がするのに、彼女はそれでないと味覚が反応しないのだ。

別にそれはそれでいい。人の自由だ。

ただ、紡はそういうもので満足したくはない。

嘘、いつわり、全くない、そんな感情で想われない。

「私、西月さんみたいな人嫌いよ」

天羽くんのしゃくり声が落ち着いたところで、紡はストローをくわえたまま言った。

「だって、むかつくじゃないの。片岡くんにくっついて行こうとした時、天羽くんを何度も見ていたでしょ？ あれはあきらめていないってサインよ。私はあきらめません、好きになってもらえるためならば、なんでもしますって人だわ」

吐き出すように続けた。

「でもね、それは西月さんの勝手よ。どんなに西月さんが努力しても、周りの女子たちがヨイショしてくれても、結局天羽くんは西月さんを好きになることができなかつたというそれだけのことよ。でしょ。その気持ちだけは、誰にも変えることができないわ。私にもね」

最後の「私」というところに強くアクセントをつけた。

「委員長や、うちの担任はそれをうまくごまかして、ご機嫌取る術を知っていたようね。別に私もそれが悪いとは思わないわ。そうしないと西月さんは消えてくれなかったもの。でも、天羽くんはそのやり方が嫌いだった。それも本当よね」

「近江ちゃん」

「だったらそれでいいのよ。あの種の人物には、偽善や嘘のてんこもりでお付き合いしないと言葉が通じないだけだもの。だから私も猫をかぶってできるだけ女子たちと交流しないようにしているし、天羽くんも美辞麗句を浴びせてごまかしたってことだけよ」

無言で天羽くんが決まり悪そうに足をもじもじさせている。

「私は別にいいのよ。私が天羽くんに、そういう人であってほしいと押し付けているだけだから。甘ちゃんよね」

ふふ、と笑って見せた。

「近江ちゃん、あの、俺、契約期間切れても当然のことしちまったけど」

「契約？ そんなの最初っから切れているって言ったでしょ。切れていてこういう風にしゃべっているのなら、別にいいじゃないの」

紡は部屋の明かりをリモコンでつけた。ずっと光っていたミラーボールが一気に力を失い、昼間に近い光をきらめかせるだけになった。

「とりあえずなんだけど、天羽くん。ここはカラオケボックスなのよ」

涙の跡が臭そうだ。天羽くんがごくりと咽を鳴らした。

「あの種の人たちはカラオケボックスを密談の場所に使うんだらうけど、私たちはむしろ歌う方に利用したいと思うんだけど、どうかしら。一時間五百円だったら延長料金払ってもいいわ」

その後で、と付け加えた。

「帰りにケーキ買って帰りましょう。『アルベルチーナ』ってところよ。おいしいわよ」

紡は一人でマイクを握り締めている天羽くん黙って部屋を出た。時間延長と飲み物の注文を改めてするつもりだった。一階の部屋をたまたま通った時、さっきまで一緒の部屋にいたある人を見た。

おっぱ髪に前髪をすくったような、古臭い髪型の女子だった。

もちろん誰も歌ってはいない。もちろんミラーボールも回っていない。薄闇の中、三人の人影がテーブルを囲んでいた。歌詞を映すブラウン管が揺れていた。

背を向けているのは男子ひとりで、紡や天羽くんと同じチェックのブレザーを着ている様子だった。

延長を申し込むためにカウンターに寄り、部屋の予約氏名を確認めた。

「杉本」と書いてあるその下に「泉州」と続いていた。

——そういうことか。

納得した。

部屋の中はさぞわきが臭いだろう。紡はそっと肩をすくめた。

誰が計画したのかは問わないで置こうと思う。あの、天羽くんリンチ事件も、今回の片岡くん登場事件も、西月さんの親友である泉州さんがたくらんだものと考えれば話は通じる。決して西月さんは文句を言わなかつたらうけれども、黙って親友たちが行かうのを追っているのだったら同じ罪だ。紡の言葉もかなり、片岡くんを選ぶのには効果があつたらうけれど。結局は西月さんが、自分をいい子ちゃんの立場に置きたくて最後まで演じただけのことだ。吐き気がする。

でも、紡はこれ以上関わる気もなかつた。

——偽善で満足できる奴には、なりたくないわ。

廊下に汗臭い匂いが漂つたような気がした。紡は足音を立てぬようにエレベーターに向かつた。ドア越しに響く天羽くんのかなり声がなぜか、心地よかつた。

——終——

## アルベルチーヌの春愁

<http://p.booklog.jp/book/77997>

著者：舞夜じょんぬ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/maiyouaogata/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/77997>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/77997>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ